

山梨県笛吹市

今宮遺跡・車居遺跡

— 県道市之蔵山梨線バイパス道路建設工事に伴う発掘調査報告書 —

2007

山梨県峡東建設事務所

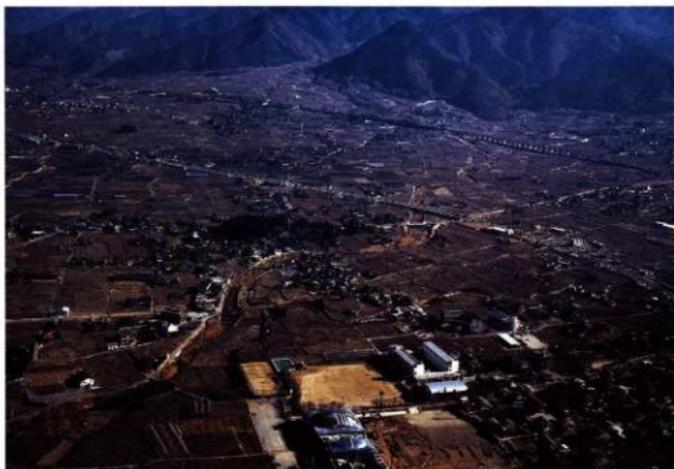
笛吹市教育委員会



今宮遺跡調査区 (西から)



車居遺跡 (1次) 調査区 (北から)



調査区遠景（北西から京戸川扇状地を望む）



調査区遠景（北から大石川扇状地を望む）



調査区遠景（南東から春日居方面を望む）



調査区遠景（北東から）

序

笛吹市は平成16年10月に、石和町、御坂町、一宮町、八代町、境川村、春日居町が合併し、さらに平成18年8月に芦川村を編入合併して誕生しました。

この調査報告書は、平成6年度から、旧一宮町教育委員会が試掘調査を行い、住居跡などが確認されたことから本調査を実施した県道市之蔵山梨線のバイパス道路（通称みゆきバイパス）建設に伴う発掘調査の結果を記したものです。

予定路線内には伊勢田遺跡、今宮遺跡、車居遺跡が含まれており、県の試掘調査区域を除いて調査を実施し、住居跡や水出跡が確認されましたが、用地買収が思うに任せず、約10年間調査を中断しなければなりません。平成17年3月に住宅の移転が完了し、笛吹市教育委員会が調査を再開し、このほど発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

調査の結果、古墳時代から奈良・平安時代の住居跡46軒や水田跡を始め、多数の遺構や遺物を発見することができました。一宮町は、国史跡の甲斐国分寺・国分尼寺を始めとして、遺跡が濃密に分布する地域として知られております。現在、市が進めております国分寺の整備事業と併せて、本報告書が当地域の歴史解明の一助となれば、幸いであります。

本事業は昭和63年に町費事業として始めてから17年の歳月が経過しましたが、この間粘り強く用地交渉などに当たっていただいた関係者やご指導・ご協力を頂いた関係機関、作業に従事された皆様に敬意を表します。

平成19年1月

笛吹市教育委員会

教育長 芦原正純

例 言

1. 本書は山梨県笛吹市一宮町地内に所在する今宮遺跡と車居遺跡及び伊勢田遺跡に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は県道市之蔵山梨線バイパス建設工事に伴うもので、一宮町教育委員会及び笛吹市教育委員会が現在の山梨県峡東建設事務所から委託されて実施した。調査費用はすべて事業者負担によるものである。
3. 発掘調査は平成6・7年及び17年に実施した。調査体制は右記の通りである。
4. 整理・報告書作成作業は平成7・8・17・18年度に実施した。調査の遺物や記録類は笛吹市教育委員会が保管している。
5. 平成17年度以降の整理作業は、スペースの関係上、2箇所で野崎と望月が分担して実施した。執筆は2人が分担し、各報文末に担当を明記してある。編集は野崎がおこなった。ただし、種子・骨の同定・執筆は植月学氏（山梨県立博物館）に、SUMMARYは阿部嘉子氏にお願いした。
6. 本書に使用した地図は、一宮町役場発行の「都市計画基本図」、国土地理院発行「甲府」1/50,000・「甲府」1/200,000、ゼンリン発行「住宅地図 200501 笛吹市」、明治32年陸地測量部発行「甲府市」を加筆・加工して作成した。
7. 空中写真は（株）東京航業研究所に、自然科学分析は（株）古環境研究所に、鉄製品の保存処理は（財）帝京大学山梨文化財研究所に、それぞれ委託した。
8. 発掘調査から報告書作成にあたり、以下の方々・機関からご指導・ご協力をいただいた。記して感謝申し上げるしだいである。

阿部 嘉子 稲垣 自由 今福 利恵 植月 学 小野 正文 藤原 功一 坂本 美夫
佐々木 満 塩谷 風季 末木 健 保坂 和博 中山 誠二 野代 幸和 平川 南
平野 修

（財）帝京大学山梨文化財研究所 山梨県教育委員会学術文化財課 山梨県立考古博物館
山梨県立博物館 山梨県埋蔵文化財センター （敬称略）

〈調査体制〉

平成6～8年度

調査機関	一宮町教育委員会						
教育長	小林 弘樹						
社会教育課長	上屋 和昭						
調査担当	瀬田 正明						
調査員	津田 元栄						
調査作業員	雨宮 健上	雨宮よし子	市川 喜博	今泉ちか子	岩間 泉	榎原千代子	
	大森 善貴	奥村 澄江	奥山美美子	桶山 順一	風間美智子	金子 美枝	
	川井 博子	梶 美代子	久保 建司	窪田道太郎	河野 茂	小林 健展	
	近藤 真治	近藤 義夫	斎藤 美樹	斎藤 由美	三枝多恵子	佐野 香織	
	佐野 政照	佐野 博基	佐野由美子	須田 重則	田口 雅子	橋 ゆき子	
	富田美也子	富永 茂樹	永井由美子	野澤 浩明	萩原 絹子	早川きくえ	
	平山登志子	広瀬久美子	藤本 裕士	古屋 克美	古屋たか子	古屋 珠記	
	古屋美智子	古屋 良子	保坂 文子	松岡美恵子	松本 隆	馬淵 松子	
	馬淵 康至	向山 達子	若林 顕雄	渡辺 久光	渡辺 弥生		
整理作業員	雨宮 照子	飯島キク子	内田 貴子	榎原千代子	奥村 澄江	金子 美枝	
	梶 美代子	栗田かず子	河野 茂	斎藤 春美	佐野 香織	佐野 政照	
	佐野山美子	須田 重則	竜沢まさじ	竜沢みち子	名取もと子	長谷川紀子	
	深山久美子	藤本 幸子	前島 峰子	松岡美恵子	馬淵 康至	若林 顕雄	
	吉岡 歌子	渡辺 久光					

平成17・18年度

調査機関	笛吹市教育委員会						
教育長	芦原 正純						
社会教育課長	風間喜久雄 (17年度)						
文化財課長	小川 勝明 (18年度)						
調査担当	野崎 進・望月 秀和						
調査員	津田 元栄						
調査作業員	榎原千代子	大久保一吉	奥村 澄江	久保田明義	上原 常子	中込 紳	
	萩原 忠	藤原さつき	馬淵 松子	山口 英雄			
	野沢あやの (都留文科大)						
整理作業員	雨宮 ゆり	大久保房子	梶 美代子	澤登 出美	宮川 菊江	吉岡 歌子	
	野沢あやの (都留文科大)						

凡 例

1. 遺構については、以下のような記号を使用した。
住居跡-SI 土坑-SK 溝-SD 井戸跡-SE 不明遺構-SX ビット-Pit
トレンチ-Tr テストビット-TP
2. 遺構・遺物図版の縮尺は、原則は下記の通りだが、各図版中のスケールを参照されたい。
住居跡-1/60 カマド-1/30 溝-1/60・80 土器-1/4 土器片-1/3
3. 遺構図版中の方位は、国家座標(旧測地系)を示し、標高は海拔高で表している。
4. 遺構番号については、調査時に付したものをそのまま使用した。なお、調査や整理時に欠番となったものがある。
5. 調査時の情報欠落により、一部不備な点があるが、そのまま掲載している。
6. 本書における時期については、『山梨県史資料編2 原始・古代』掲載の編年(弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代編年。本文中では弥生〇期、古墳〇期、奈・平〇期と表記。)によって比定している。
7. 石材については、『標準原色図鑑全集6 岩石鉱物』保育社を参照した。

今宮・車居遺跡(1次)

・遺構図作成にはAdobe社のIllustratorを使用しており、図中に使用した濃いトーンは炭化物、薄いトーンは焼土の分布範囲を示している。

車居遺跡(2次)

・住居跡の図版中に、床面からのビットの深さ(単位cm)を記した。
・遺構図版の土層図中の「S」は石を、「K」は攪乱を表す。土層観察表の繕りや混入物の記号は、次の通りである。

繕り ○非常に繕りあり ○繕りあり △やや繕りに欠ける

混入物 ◎多量に含む ○含む △少量含む □微量含む

・カマド図版のスクリーントーンは、下記の通りである。



遺物図版

スス・黒変: やや薄い黒塗り 施釉ライン: 一点破線 擦痕(転用等)範囲: 破線



【断面】

須恵器: 黒塗り 陶器(灰釉・緑釉・天目等): 薄い網目 磁器(青磁・白磁・染付等): 点網

土器観察表(胎土)

赤: 赤色粒子(スコリア等)、白: 白色粒子(長石・石英等)、金: 金雲母、黒: 黒色粒子(角閃石等)。

目 次

序

例 言

凡 例

日 次

I. 序章	1
1. 調査に至る経緯と調査経過	1
2. 地理的環境と周辺の遺跡	3
3. 歴史的環境	8
4. グリッドの設定と座標	10
II. 伊勢田遺跡の調査	11
III. 今宮遺跡の調査	12
1. 遺構	14
2. 遺物	45
IV. 車居遺跡（1次）の調査	82
1. 遺構	82
2. 遺物	94
V. 車居遺跡（2次）の調査	120
1. 遺構	120
2. 遺物	142
VI. まとめと今後の課題	183
1. 集落変遷と土器の再加工について	183
2. 今宮遺跡の水田跡について	187
3. 墨書土器について	189
4. 車居遺跡（2次）のSX1（敷石遺構）について	193
5. 今後の課題	194
引用・参考文献	195
附編 1. 今宮・伊勢田遺跡における自然科学分析	198
附編 2. 車居遺跡第2次調査出土の動植物遺体	216
SUMMARY	219
報告書抄録	220
写真図版 (Plate)	

挿 図 目 次

第1図 笛吹市の位置……………2	第35図 遺物(4) S I 6②・7……………51
第2図 遺跡周辺字名図……………2	第36図 遺物(5) S I 8・11①……………52
第3図 調査区位置図……………2	第37図 遺物(6) S I 11②・12……………53
第4図 笛吹市範囲図……………4	第38図 遺物(7) S I 13……………54
第5図 扇状地位置図……………5	第39図 遺物(8) S I 14・15・16……………55
第6図 周辺遺跡位置図……………7	第40図 遺物(9) S I 17・18・19・20……………56
第7図 土層図・写真……………11	第41図 遺物(0) S I 21……………57
第8図 トレンチ土層図……………12	第42図 遺物(1) S I 22・23・24①……………58
第9図 遺構分布図……………13	第43図 遺物(2) S I 24②・25・26・27・ 28①……………59
第10図 S I 1・2(1)……………15	第44図 遺物(3) S I 28②……………60
第11図 S I 2(2)……………16	第45図 遺物(4) S I 29、集石遺構、 S D 1・9……………61
第12図 S I 3・4……………17	第46図 遺物(5) S D 10・15、S K 1、 Pit 7、埋没谷①……………62
第13図 S I 5……………19	第47図 遺物(6) 埋没谷②……………63
第14図 S I 6……………20	第48図 遺物(7) 埋没谷③、遺構外①……………64
第15図 S I 7・8……………22	第49図 遺物(8) 遺構外②、2・4 Tr……………65
第16図 S I 10・11(1)……………23	第50図 遺物(9) 編物石①……………67
第17図 S I 11(2)・12……………24	第51図 遺物(0) 編物石②、砥石……………68
第18図 S I 13・14(1)……………26	第52図 遺物(2) 鉄製品……………69
第19図 S I 14(2)・15……………27	第53図 トレンチ配置図……………83
第20図 S I 16・17……………29	第54図 基本層序柱状図……………83
第21図 S I 18・19……………30	第55図 遺構分布図……………83
第22図 S I 20・21……………31	第56図 S I 1……………84
第23図 S I 22・23……………33	第57図 S I 2・3……………85
第24図 S I 24……………34	第58図 S I 4……………86
第25図 S I 25・26・27・28(1)……………36	第59図 S I 5・6(1)……………88
第26図 S I 28(2)・29……………37	第60図 S I 6(2)・7……………89
第27図 S D 1・2・8・9……………39	第61図 S I 8・9・10(1)……………91
第28図 S D 10・11・12・13・14……………40	第62図 S I 10(2)、堅穴状遺構、S D 1……………92
第29図 S K 1・2・3、集石遺構……………42	第63図 1・2・3号炉……………93
第30図 水田跡、埋没谷……………43	第64図 遺物(1) S I 1・2①……………95
第31図 道路跡……………44	第65図 遺物(2) S I 2②・3……………96
第32図 遺物(1) S I 1・2①……………46	
第33図 遺物(2) S I 2②・3・4・5①……………47	
第34図 遺物(3) S I 5②・6①……………50	

第66図	遺物(3)	SI 4	97	第93図	SX 1 (1)	140	
第67図	遺物(4)	SI 5・6	98	第94図	SX 1 (2)	141	
第68図	遺物(5)	SI 7・8①	99	第95図	遺物(1)	SI 1・2①	143
第69図	遺物(6)	SI 8②	100	第96図	遺物(2)	SI 2②	144
第70図	遺物(7)	SI 9・10、 竖穴状遺構	101	第97図	遺物(3)	SI 4	145
第71図	遺物(8)	SD 1①	102	第98図	遺物(4)	SI 5	147
第72図	遺物(9)	SD 1②	103	第99図	遺物(5)	SI 7	148
第73図	遺物(10)	SD 1③	104	第100図	遺物(6)	SI 8、SD 1	149
第74図	遺物(11)	3号炉、遺構外①	105	第101図	遺物(7)	SD 3①	151
第75図	遺物(12)	遺構外②、1・2・3 Tr	106	第102図	遺物(8)	SD 3②	152
第76図	遺物(13)	編物石	108	第103図	遺物(9)	SD 3③	153
第77図	遺物(14)	石製品・土製品	109	第104図	遺物(10)	SD 3④	154
第78図	遺構分布図		121	第105図	遺物(11)	SD 3⑤	155
第79図	攪乱、暗渠分布図		122	第106図	遺物(12)	SD 3⑥	156
第80図	SI 1・2、SD 1		123	第107図	遺物(13)	SD 3⑦	157
第81図	SI 2カマド		124	第108図	遺物(14)	SD 3⑧	158
第82図	SI 4		126	第109図	遺物(15)	SD 3⑨	159
第83図	SI 6		127	第110図	遺物(16)	SD 3⑩	160
第84図	SI 7		128	第111図	遺物(17)	SD 3⑪	161
第85図	SI 4カマド		129	第112図	遺物(18)	SD 4・5・6・9、 SK 1・2、遺構外	162
第86図	SI 6・7カマド		130	第113図	遺物(19)	SX 1	163
第87図	SI 5		131	第114図	遺物(20)	縄文・弥生土器	164
第88図	SI 8		133	第115図	遺物(21)	漆器土器、土製品、 石製品①	167
第89図	SD 2・7・8・9		134	第116図	遺物(22)	石製品②、金属製品	168
第90図	SD 3		135	第117図	遺跡と周辺の古道		191
第91図	SD 4・5・6、SX 1		137				
第92図	SK 1・2・3、SE 1		138				

表 目 次

表1 周辺山地一覽……………	5	表8 編物石観察表……………	119
表2 山梨県内における主な扇状地の特性値…	5	表9 石器観察表……………	119
表3 土器観察表……………	70	表10 土錘観察表……………	119
表4 編物石観察表……………	81	表11 土器観察表……………	169
表5 砥石観察表……………	81	表12 土製品観察表……………	182
表6 鉄製品観察表……………	81	表13 石器観察表……………	182
表7 土器観察表……………	110	表14 金属製品観察表……………	182

写 真 目 次

巻頭写真

- 写真1 今宮遺跡、車居遺跡（1次）調査区
写真2 調査区遠景
写真3 調査区遠景

今宮遺跡

- PL1 調査区近景
PL2 SI1～SI4
PL3 SI5～SI6
PL4 SI7・8・10・11
PL5 SI12～SI15
PL6 SI17～SI19
PL7 SI20～SI24
PL8 SI25～SI28
PL9 SI29、SD1～SD4・8・9
PL10 SD10～SD14、ピット
PL11 調査区近景、水田跡、道路跡

- PL12 SK1・2、調査区近景、集石遺構
PL13 調査区近景、埋没谷、試掘調査

車居遺跡（1次）

- PL14 調査区近景、SI1・2
PL15 SI3～SI6
PL16 SI7～SI10
PL17 竪穴状遺構、SD1、1号集石

車居遺跡（2次）

- PL18 調査区近景、SI1・2
PL19 SI4～SI7
PL20 SI8、SD1・3
PL21 SD8・9 SK1～SK3、SE1
PL22 SX1
PL23 SX1

I. 序 章

1. 調査に至る経緯と調査経過

県道市之蔵山梨線のバイパス道路（通称みゆきバイパス）は、一宮町一ノ宮に所在する衣料の西村前を起点に、一宮町中尾の県道田中勝沼線までの延長約1kmの南北に走る道路で、現道のほは西430mに新設されたものである。このうち北側の220m分については、町営住宅いちのみや桃の里団地（当時）のための進入路として、昭和63年に町費事業として完成している。

本事業の主体者は山梨県石和土木事務所（当時）で、埋蔵文化財の調査に着手したのは平成5年度からであった。5年度については、用地買収が終わった箇所のみ着手し、11月15・16日に、山梨県埋蔵文化財センターの山本・野代が試掘調査を担当した。3箇所、183㎡のトレンチ調査で、20数点の摩滅した弥生土器などが出土したが、流れ込みと判断し、本調査は行われなかった。

平成6年度から県道事業の調査が市町村へ移管されたため、予定路線地内における周知の埋蔵文化財の包蔵地である伊勢田遺跡と今宮遺跡について、一宮町教育委員会が試掘調査の依頼を受けた。さらに予定地内の南端は周知の埋蔵文化財の包蔵地ではなかったが、事前踏査をしたところ多くの遺物が採集できたため、併せて試掘調査を実施することとなった。

平成6年12月12日から1月13日まで試掘調査に入り、今宮遺跡では4本のトレンチを調査したところ、対象地域の北側で住居跡と水田を、中央部（工場移転先を含む）で住居跡群を確認した。そのため、2月8日から5月2日まで、1～3トレンチ設定箇所の住居跡群の本調査を実施した。860㎡を調査した結果、古墳時代後期から奈良・平安時代の住居跡27軒、溝状遺構2、土坑2、近現代の道路跡を確認し、コンテナ18箱分の遺物が出土した（1次）。南端部の遺物が採集できた地点については、1月17日～27日まで3本のトレンチ調査（180㎡）を実施した。その結果、多量の遺物が出土し、住居跡も確認されたことから、車居遺跡と名付け、平成7年度に本調査を実施することとした。

一方、今宮遺跡の北側の伊勢田遺跡は、1月27日～2月15日まで、2本のトレンチ調査（120㎡）をしたところ、溝状遺構2、土坑2を確認したが、遺物がほとんど出土しないため、時期は不明であり、試掘調査のみで終了した。

平成7年度は、今宮遺跡の1次調査終了後、引き続き北側の調査区に移り（2次）、9月6日までに古代の住居跡1軒、古代と思われる水田跡、溝状遺構6、土坑1、集石遺構1、ピット13、埋没谷などを確認し、コンテナ4箱分の遺物が出土した。調査面積は440㎡であった。その後、車居遺跡（1次）の発掘調査を9月5日～12月27日まで行い、540㎡を調査し、古墳時代後期・平安時代の住居跡9軒、溝状遺構1を確認した。遺物は、コンテナ11箱分が出土した。

この結果、調査が必要な箇所は、本事業の南端箇所のみとなったが、用地買収の遅れから、試掘調査ができない状況が続いた。その後、10年程の年月が過ぎ、平成17年3月末までに住宅が移転したため、4月に山梨県東地域振興局石和建設部（当時）より、笛吹市教育委員会に調査の依頼があった。平成7年に調査した車居遺跡1次調査の南側隣接地であることから、本調査を意識しながら、5月17日に試掘調査に着手した。試掘調査の結果、住居跡が確認されたため、引き続き本調査

に移行し、古墳時代後期～平安時代の住居跡8軒、土坑3、溝状遺構9、敷石遺構1、井戸跡1などを確認し、10月6日に調査を終了した。コンテナ25箱分の遺物が出土し、調査面積は430㎡であった。

尚、調査は廃土置き場の確保が難しいこと、農繁期で隣接地の畑への出入りを確保するため、便宜的に調査区を東西に分けて実施したが、前半は梅雨による降雨が比較的多く、調査区が冠水することがしばしばあり、排水に時間を要す日々が少なくなかった。

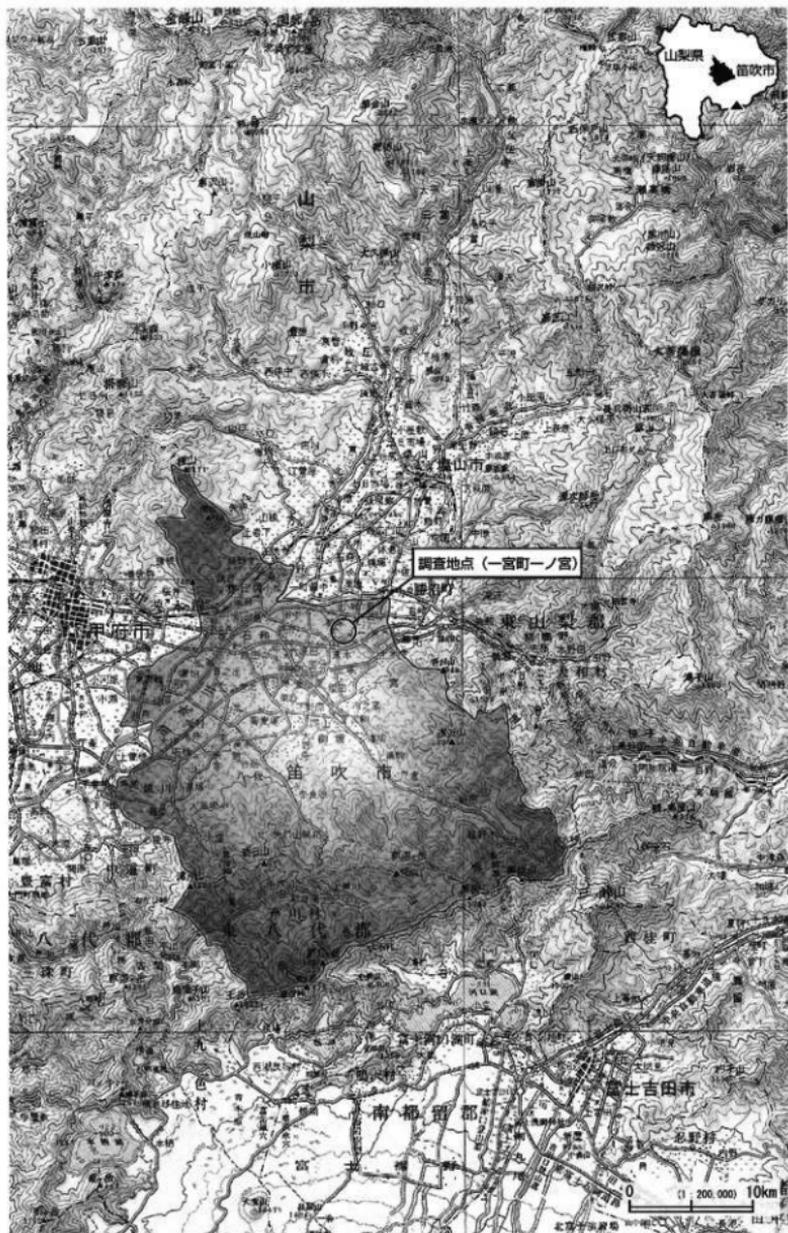
本事業は17年度末で終了であったが、年度内に17年度調査分を含めて報告書にまとめることは難しい状況であったため、協議の結果、印刷製本費のみを18年度に計上することになった。

整理作業は、一宮町教育委員会が調査した今宮遺跡、車居遺跡（1次）を平成7・8年度に実施し、遺物の洗浄・注記・接合・実測をある程度終了し、中断していた。平成17年度から笛吹市教育委員会が整理作業を再開し、車居遺跡（2次）分を合わせて17年度末までに作業を終え、18年度に報告書作成を行い、本報告書を刊行するに至っている。（野崎）

2. 地理的環境と周辺の遺跡

(1) 笛吹市の地理 山梨県笛吹市は、甲府盆地の中央部やや東寄りに位置する。本市は平成16年10月12日に、東八代郡の石和町・御坂町・宮町・八代町・境川村と東山梨郡の春日居町が合併により発足し、平成18年8月1日に東八代郡芦川村が編入した。平成19年現在の総面積は、201.92km²（山梨県の面積の約4.5%）であり、秩父山地へ続く山々（本書では、秩父山系と称する）及び東南部の御坂山塊に連なる丘陵山岳地帯と、笛吹川とその支流に形成された扇状地及び沖積平地帯で構成される。標高の最高値は黒岳（御坂黒岳）で1,793m、最低値は笛吹川流域の沖積平地部（石和町井戸周辺）で約256mを測る。本市域を最も特徴づけるのが、扇状地帯に広がる果樹栽培地帯である。扇状地帯では扇頂・扇尖部で水が伏流してしまうため、農作地帯では昔から隣接する村や部落間で水に係る騒動・訴訟等が絶えなかった。本市においても同様であったが、昭和30年代頃になると徐々に水田・養蚕から桃・ブドウを中心とした果樹栽培へ移行し始め、今日に至っては国内有数の果樹生産地帯となった。また、急峻な山々を背にした扇状地の伸びやかな地形に加え、春には桃の花で彩られる美しい景観を誇る地域となっている。尚、本市における平成18年の土地利用状況は、宅地14.9km²（7.4%）、農用地41.6km²（20.6%）、森林等118.1km²（58.5%）である。

(2) 丘陵山岳地帯 先述の通り、本市域は北部に秩父山系、東南部に御坂山塊が連なる。西方には甲府盆地の平坦面が開け、遠方に南アルプスの山々を望むことができる。秩父山系の大蔵経寺山・兜山・棚山の山頂は市域内に位置し、棚山の山頂は市域のほぼ北限にあたる。それより北方には帯名山・水ヶ森・中津森・倉沢山を経て、標高2,000mを超える剣ヶ峰・四郎ヶ岳・金峰山・瑞籬山等の秩父山地の険しい山々が連なっている。御坂山塊では、黒岳（御坂黒岳）や節刀ヶ岳といった標高1,700mを超える山々が連なる。御坂山塊の主軸山系は、大月市初狩町を東端に西方に向かって、鶴ヶ鳥屋山・御坂山・黒岳（御坂黒岳）・節刀ヶ岳・十二ヶ岳・鬼ヶ岳・玉岳・釈迦ヶ岳（市川三郷町）・三方分山・烏帽子ヶ岳（富士河口湖町）・雨ヶ岳を経て、南南西に転じて天子山地へと続く。これに対して黒岳より西に、釈迦ヶ岳（御坂町）・烏坂峠・黒坂峠・春日山・鶯宿峠・滝戸山・



第4図 福岡市範囲図 (1/200,000)

【郡坂山系】

山名	標高(m)	山頂位置
霧ヶ島山(ワルガトヤケン)	1,374	大月市・磐前町
霧ヶ島山(ミヤカヤマ)	1,506	磐前町・富士河口湖町
黒岳(クロダケ)	1,700	芦川町・富士河口湖町
那珂方岳(セツトウガタケ)	1,736	芦川町
十二ヶ岳(ジュウニガタケ)	1,961	富士河口湖町
霧ヶ岳(オニガタケ)	1,738	芦川町・富士河口湖町
三岳(オウダケ)	1,923	富士河口湖町
駒形ヶ岳(シヤカガタケ)	1,371	赤川三郷町
三方山(サンボウヤケン)	1,422	本郷町・富士河口湖町・(富士宮市)
高嶺ヶ岳(タカノガタケ)	1,287	本郷町・富士河口湖町・(富士宮市)
四ヶ岳(ヤマガタケ)	1,778	本郷町・富士宮市
駒形ヶ岳(シヤカガタケ)	1,911	磐前町・芦川町
馬庭峠(ウマノエトウガ)	1,065	八代町・芦川町
馬庭峠(ウマノエトウガ)	1,400	磐前町・芦川町
寿日山(カサガヤマ)	1,158	磐前町・芦川町
霧ヶ岳(オオシノトウガ)	1,045	磐前町・芦川町
奥山(オキヤマ)	1,221	芦川町・甲府市
石井峠(イシイダトウガ)	808	甲府市・市川三郷町
濃沢山(ノウサワヤマ)	1,358	一宮町・磐前町
大野山(オオノチヤマ)	1,415	磐前町
峰崎山(ハナシヨウケン)	726	一宮町
大久保山(オオクボケン)	664	一宮町
大新山(オオニシヤマ)	760	磐前町

【秩父山系】

山名	標高(m)	山頂位置
伊山(カブトヤマ)	913	春日彦町
御山(タナヤマ)	1,171	春日彦町・山梨市
帯名山(オビナヤマ)	1,422	平谷市・山梨市
永ヶ森(ミズノモリ)	1,593	平谷市・山梨市
中津森(ナカツモリ)	1,475	平谷市
新西山(アラウヤマ)	1,782	平谷市・山梨市
新ヶ峰(ケンガタミス)	2,263	山梨市
四郎ヶ岳(コナシガタケ)	2,309	山梨市(川上村)
金峰山(キンゲン)	2,599	平谷市(川上村)
種彦山(シノダケヤマ)	2,230	山梨市

(太字は新火山)

【南アルプス山系】

山名	標高(m)	山頂位置
海蔵ヶ岳(ジノウガタケ)	2,764	北杜市・御坂町・南アルプス市
数津岳(カシノガタケ)	2,840	韮崎市・南アルプス市
赤峰岳(アカシダケ)	2,780	韮崎市・南アルプス市
御形山(タシダケヤマ)	2,022	南アルプス市
北岳(キタダケ)	3,199	南アルプス市
男ノ岳(オノダケ)	3,180	南アルプス市(伊那市)・(静岡県)
鳥島岳(ノウトリダケ)	3,026	南アルプス市・(静岡市)
御岳(ノコギリダケ)	2,695	北杜市(伊那市)
新ヶ岳(ニウガタケ)	2,966	北杜市(伊那市)
新ヶ岳(センシヨウガタケ)	3,033	南アルプス市(伊那市)

表1 周辺山地一覽

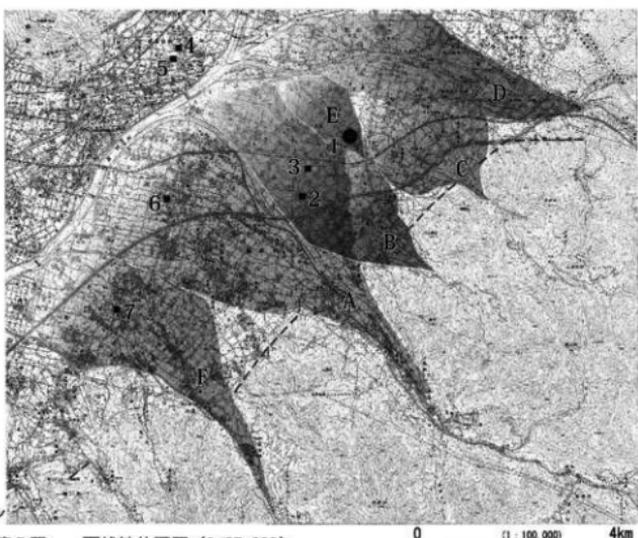
【扇状地名】

- A. 金川扇状地
B. 大石川扇状地
C. 京戸川扇状地
D. 日川扇状地
E. 御手洗川扇状地
F. 浅川扇状地

【遺跡名】

1. 今宮遺跡
車居遺跡
2. 甲斐国分僧寺跡
3. 甲斐国分尼寺跡
4. 寺本鹿寺
5. 国府遺跡
6. 国衛推定地
7. 堀ノ内遺跡

--- 国衛推定ライン



第5図 扇状地位置図(1/25,000)

扇状地名	L	W	Af	An	Sen	Sh	Sr	Sg	R	D	R1	T	V	Vg	第5図
御手洗	13.9	5.9	23.9	71	21.9	32.6	1.49	0.56	-4.9	1.21	0.81	147.0*	4.98*	30.0	1.19
大石川	2.4	8.8	27.7	81	5.0	8.4	1.28	0.23	0.8	1.83	0.55	-	-	8.2	0.31
京戸川	4.6	2.5	7.9	60	15.6	20.9	1.31	0.77	6.1	1.46	0.89	86.0*	0.35*	10.0	0.07
日川	3.3	1.8	2.9	40	42.6	53.5	1.43	1.20	7.1	1.46	1.25	52.0*	2.57*	5.5	0.09
数津川	11.2	3.2	21.9	23	19.2	25.6	1.23	0.92	15.9	1.21	1.09	42.3	1.31	11.7	0.25
赤峰川	4.5	1.3	3.1	25	22.6	42.9	1.48	0.64	8.4	1.44	1.21	52.0*	0.25*	14.5	0.05
新ヶ岳川	3.2	1.6	2.8	85	38.8	71.6	1.85	1.53	7.5	1.53	0.58	105.0*	0.25*	18.0	0.06
日川	5.5	1.8	7.3	80	22.4	27.8	1.19	1.52	13.2	1.25	0.29	-	-	-	D
大石川	3.9	2.4	4.2	75	65.8	107.3	1.82	1.01	4.3	1.40	1.19	46.0*	0.20*	7.0	0.03
京戸川	7.6	4.9	18.6	50	32.7	41.6	1.27	0.54	6.8	1.24	0.49	51.7	1.70	16.7	0.31
浅川	5.9	2.6	8.0	34	43.8	87.5	1.58	0.32	8.6	1.34	0.87	100.0*	0.80*	18.0	0.14
御手洗	2.3	2.5	2.1	61	36.6	44.4	1.22	1.28	4.8	1.33	0.87	6.0*	0.13*	-	-
宮崎川	7.3	5.3	13.0	27	12.0	14.0	1.08	0.49	9.8	1.84	1.19	6.9	0.09	8.3	0.07
宮土形	6.2	5.8	18.4	61	4.2	6.0	1.44	0.55	6.8	1.45	0.88	103.0*	1.69	12.5	0.21

特性値は(L=長さ・W=最大幅、Af=扇面積、An=扇尖角座(扇状地頂の尖りの位置)、Sen=平均勾配、Sh=扇頂勾配、Sr=扇頂傾、Sg=勾配比(扇状地の中心から離れた位置)、R=扇頂傾(扇状地の中心から離れた位置)、D=河川傾斜(河川の中心から離れた位置)、R1=河川傾斜(河川の中心から離れた位置)、T=扇頂傾、V=扇頂傾の体積、Vg=扇頂傾の体積)を示している。尚、扇状地名の太字は、扇状地及びその尖りに形成された扇状地を示す。

表2 山梨県における主な扇状地の特性値(斎藤亨治「日本の扇状地」表から抜粋、加筆。)

右左口峠を経て市川大門に至る支脈があり、甲府盆地の南壁を成している。山梨県では御坂山塊を境に、甲府盆地側を「国中」、富士五湖側・都留・大月を「郡内」と呼称している。また、古代の山梨（甲斐国）は、和名類聚抄の記載から4郡（巨摩郡・山梨郡・八代郡・都留郡）に分けられ、本市域は八代郡及び山梨郡に含まれていた。甲斐国では古くから御坂山塊を越え、国中と郡内を結んで駿河へと続く古道が整備されていたため、古道を通る標高700~1,000mに位置する芦川や御坂の山間地帯においても集落が形成された。なかでも平安時代の遺跡分布が確認されている芦川地域は、鳥坂峠・大石峠から古代の官道であった若彦路が開けており、国中地域と郡内地域を繋ぎ、東海道へと続く要衝地であったと推測されている。

(3) 笛吹川流域の地形 笛吹川は延長46.5km、流域面積1,040km²を測る。秩父山地に発し、富士川の支流のひとつであり、甲府盆地東部の水系を集めながら本市域を西流している。笛吹川流域は、支流である徳和川・琴川・鼓川・兄川・重川・日川・金川等が山地から盆地へと大量の土砂を排出し、盆地特有の扇状地及び沖積平地を形成している。とくに金川・大石川・京戸川・日川等が流れる笛吹川以南の地域では、各支流によって形成された大小の扇状地が重なり合い、重合扇状地帯が発達している。扇状地の特性値（表2）をみると、最大幅・扇面面積・扇状角度（扇状地面の広がり具合）は比較的に小さい。しかし、扇頂侵食量（扇頂洗掘の程度）・下刻量（扇状地面と河床との標高差）・河道偏倚度（河道が扇状地面の中心から離れる割合）は大きく、大量の土砂が排出され、堆積と下刻、及び河川流路の変移が繰り返してきた地域であったことが推測できる。また沖積平地帯では、石和・春日居を中心に開発・宅地化が進んでいる。この一帯では、度重なる水害により2mを越える厚い堆積層を確認している。本市域は甲斐国分僧寺・尼寺（一宮町、以下、国分二寺と称す）、国府（春日居町）、国衙（御坂町）といった古代甲斐国の中枢機関が置かれた地域であり、甲斐と官道（都）を結ぶ要衝地であったことがわかる。しかしながら本地域の地理的変動が要因となり、山地から盆地へ下ってからの郡・国衙・寺院を繋ぐ古代のルートは、未だ確定できていない。本市において道路遺構を発見することは、古代甲斐国を解明していく上で重要な命題となっている。

尚、市域を抜けて平地部にいたる笛吹川は南西方向に流路を転じ、南巨摩郡坂沢町で甲府盆地西部の水系を集めてきた釜無川と合流して富士川となる。全長128km（日本第32位）の富士川は、泉域を南下して静岡県に至り、最後は駿河湾へと注いでいる。また、球磨川・最上川とともに日本三大急流と称されており、甲府盆地南端部の山間地帯から流出する際の急峻な流れの様は、駿河の地名の語源となったと言われていた。

(4) 調査地点と周辺遺跡の様相 伊勢田遺跡・今宮遺跡・車居遺跡は、山梨県笛吹市一宮町北都塚字伊勢田、一宮宮字今宮、同字車居に所在する。一宮町は笛吹市の北東端に位置し、面積は30.62km²を測る。町域の大半は先述した金川・金川・大石川・京戸川・日川等によって形成された重合扇状地帯にあたり、主に標高約290m~500mにかけて集落が展開している地域である。

今回調査した3遺跡は、御手洗川の流域に分布する遺跡であり、伊勢田遺跡・今宮遺跡は右岸（北側）、車居遺跡は左岸（南側）に位置する。御手洗川は、御坂山塊より発する京戸川と大石川が合流（一宮字桜町付近）して始まり、金川扇状地と京戸川・大石川扇状地の境を北西方向へと流



遺跡名	遺跡種別	時期	調査地区名
亀沢遺跡	縄文・生業	弥生・古墳・奈良・平安	a コープ山脚・田村遺地区, b 真立ニコー1次地区, c 真立ニコー2次地区
前河原遺跡	縄文期	弥生・古墳・奈良・平安	a 中村アパート地区(中尾条集落跡), b テイクス地区
山本遺跡	集落跡	縄文・古墳	a スポーツ公園地区(豊後清水遺跡)
経塚遺跡	集落跡	弥生・古墳・奈良・平安	a スポーツ公園地区, b 中学校体育館地区, c 文化館地区, d 中学校運動場地区, e 中学校プール地区, f 甲府備金地区, g Y.L.O前地区, h ガソリンスタンド地区, i 笠間医架地区
河ノ木神社遺跡	高野跡	奈良・平安	a 87年調査地区(農教育委員会が調査実施)
當地埋藏跡	高野跡	奈良・平安	a ケーヨー1次・2次地区
熊鷹寺北遺跡	集落跡	古墳・平安	
東御堂遺跡	防具庫	奈良・平安・中世	
中尾条里遺跡	集落	奈良・平安	
本郡塚条里遺跡	集落	奈良・平安	

下して、一宮町田中・下欠作の境付近で日川へ注いでいる。また京戸川・大石川合流地点の北約300mの位置には、甲斐・宮浅間神社が鎮座している。車居遺跡の西側では、田垂川が北流しており、御手洗川へ注いでいる。田垂川は、金川扇状地と大石川扇状地の間を流れ、末木地区と一ノ宮地区の境界を成している。古来より農業用水に利用されてきた河川であり、人為的に流路変更されてきた可能性がある。現在も慈眼寺（一宮町末木336所在）を廻り、車居遺跡調査区の西側でコの字状に流曲した特徴的な地形がみられる。

調査遺跡周辺の遺跡分布については第6図に示したが、本市には、旧石器時代から中世・近世までの遺跡・遺構が分布する、県内有数の埋蔵文化財包蔵地である。先述した通り、古代には甲斐国分二寺が置かれ、国史跡として大正12年に指定を受けている。国分・東原地域に造営された国分二寺周辺には、関連する遺構・遺物が濃密に分布している。兩ノ木神社遺跡・車地藏遺跡は、国分二寺の創建と時期を同じくして出現した集落跡である。これらは国分二寺の造営・維持を目的として形成された新興集落として、「国分寺集落」または「国分寺関連遺跡群」と呼称されている。今回の調査遺跡は、甲斐国分僧寺から北東へ約1km離れており、古墳時代後期～平安時代を中心とした集落跡として周知している。さらに御手洗川の北側では、亀沢遺跡及び今宮遺跡（本報告）で水田跡を検出しており、生産域としても認識している。また金川や京戸川等の流域においては、古墳時代後期の小規模古墳が集中し、国分築地古墳群・四ツ塚古墳群・千米寺古墳群などの群集墳を成している。これらの造営に関しては未だ検討の域をでないものの、鞍掛遺跡や今回の調査成果から、本地域が造営に係った集団の居住域のひとつであった可能性が考えられる。

また扇状地扇端部の沖積地では、条里型土地区画が認められる。金川以西では、永井・増田条里（八代町）・埋没条里（御坂町）等があり、金川以東では、坪井条里・中尾条里・金田本都塚条里などの表層条里がみられる。国府（春日居町）や国分二寺周辺においても条里型土地区画がみられる。尚、国分二寺周辺の方形区画は、南北軸の傾きが国分二寺の主軸と一致していることから、造営時に計画的に配置された可能性が指摘されている。また、中尾条里や今宮遺跡の調査成果等から、これら条里の施工時期は9世紀前半と推定されている。（望月）

3. 歴史的環境

今回報告する今宮遺跡・車居遺跡（1次）の発掘調査に着手した段階では、東八代郡一宮町であったが、車居遺跡（2次）の調査の段階では町村合併により笛吹市となっており、調査開始から報告までの足掛け10年程の間に、歴史的転換期の1つが起こったことになる。

一宮町内には甲斐国分僧寺と国分尼寺の二寺が存在し、笛吹市内には国府・国衙推定地が存在し、古代甲斐国の中心地域であったことは言うまでもない。東海道横定駅（御殿場市）から分岐した官道である甲斐路は、甲斐国府まで至っていたが、国府の位置や笛吹市内にあったとされる1つの駅について、はっきりしていない。甲斐路ルート上の黒駒付近（笛吹市御坂町）から、国分二寺付近を通り鞍掛遺跡の西方を北上する道は、富士山と金峰山を結ぶ修験者の通用道路であることから道者街道と呼ばれ、山岳信仰の盛行に伴い、重要度を増したと思われる。

古代において本遺跡付近は、山梨郡の東部に位置していたと推定される。郷の比定は推定の域を

出ないものもあるが、『山梨県史』などの記載から推測すると、能呂郷（一宮町北野呂・南野呂付近）と林部郷（一宮町東原付近）のどちらかに属していたことになる。また、在庁官人だった豪族三枝氏はこの地域に拠点を置き、南野呂の大宮神社付近に館があったと伝えられている。さらに、塩田には飛鳥時代創建と言われる楽音寺や、橋立には甲斐国の惣社とも言われる甲斐奈神社が残る。

中世には、当地域は一宮庄に属していたと推定される。一宮庄は、末木にある長昌寺所蔵の大般若経の奥書で、明応5（1497）年書写のものに「山梨郡一宮庄傘木村瑞光山長昌禪寺」（傘木は末木の当て字）とあるのが初見である。尚、当地域が山梨郡から八代郡になるのは、慶長年間以降とする説もある。

本報告書に所収した今宮遺跡、車居遺跡のいずれも、一宮町一ノ宮に位置する。この一ノ宮とは、車居遺跡の東方400mに位置する甲斐国一之宮である浅間神社のことである。浅間神社についてはいろいろ書かれているが、今回の調査にも関連すると思われるため、簡単に記しておきたい。

浅間神社は、摂社である山宮神社（伝垂仁天皇8年建立）から遷宮されたと言われている。この契機が貞観6（864）年の富士山の噴火とされ、暴風雨や大地震も重なったこともあり、甲斐国に浅間神社が建立されることになったという。ここで問題になるのが、『日本三大実録』の貞観7（865）年12月9日の勅に「甲斐国八代郡立浅間明神祠列於官社。（中略）郡家以南作建神宮。」とあり、同12月20日の条に「甲斐国於山梨郡致祭浅間明神。一八代郡。」と記されていることである。この中で、特に八代郡家の南という記載と関連し、八代郡の浅間明神の比定地を多くの研究者が検討してきたが、結論を見ていない。八代郡と山梨郡の浅間神社が貞観7年12月に建立されたことは史実であり、現在の一宮浅間神社がこの時期に建立されたとするのが、ほぼ定説になっている。

この浅間神社の祭祀で最も重要な神事が、御幸祭である。この祭礼は、一宮浅間神社、二宮美和神社（笛吹市御坂町）、三宮玉諸神社（甲府市）の三社合同で行われる夏・冬2回の公祭である。この御幸祭が通る道が御幸道と呼ばれ（一道とも言う）、かつては浅間神社から国分尼寺付近を通り、そのまま西側の金川に向かったと言われている。

ところで当地域には、浅間神社に関する地名が多く残る。例えば車居遺跡の西側に展開する末木地区の鞍掛という小字は、浅間神社を出発した御幸祭の神輿の一行が、かつてあった鞍掛社の前で、官司や総代など乗馬する人が馬に鞍を掛けたことに由来するという。そのことから判断すると、車居遺跡がある一ノ宮地区も察することができよう。また、京戸川と大石川が浅間神社の南側で合流し、御手洗川（みたらしがわ）と名前が変わるのも、浅間神社に由来するのであろう。一方、北側（右岸）の一ノ宮地区今宮については、この地域に神社は確認できない。神社ではないが、今宮と浅間神社の間に、かつて神宮寺があったことは伝えられている。ただし、江戸時代の一之宮村絵図によれば、車居側（左岸）に大神宮が存在しており、何度も川の位置が移動していることを考慮すると、かつてこの大神宮が右岸に存在し地名の由来になった可能性も考えられる。さらに、北側の伊勢山遺跡は北都塚字伊勢田にあり、大神社が伊勢神社とも呼ばれていることに由来するのであろう。

車居遺跡の西側をコの字状に屈折して流れる田垂川（ただれがわ）は、旭山山麓から発している

が、黒駒から金川の水を引いた宮渠と合流し、本遺跡の北側で御手洗川に合流している。この田垂川は、もともと多々禮川と称されていたらしく、その名前はタクラに由来すると指摘されている。それを裏付けるかのように、塩田地区の北中原遺跡周辺では鉄滓が採集され、3次調査では鋳鉄製品の鋳型が出土している。このことが中世に鎌倉街道の玄関口として栄えた塩田郷における塩田長者の伝説や、文化8(1811)年に伊能忠教が甲州街道を測量した時に、助手として仕えた鍛冶屋孫兵衛と関連してくるのかもしれない。

尚、この地域はしばしば洪水が起きているが、明治以降では明治40年8月の水害で、京戸川と大石川の合流地点から下流(御手洗川沿岸)では、大規模な氾濫に見舞われている。『一宮町誌』に掲載された浅間神社罹災状況の写真からこの惨状が窺え、今宮遺跡も泥流に覆われたと推測される。

4. グリッドの設定と座標

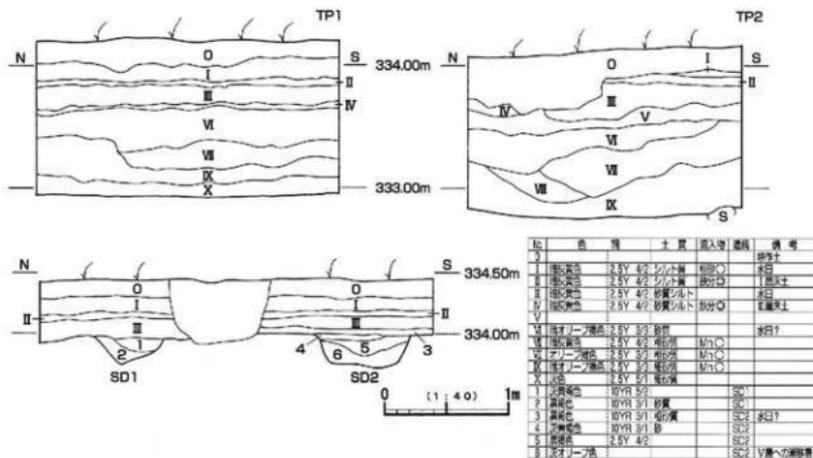
田一宮町では、甲斐国分寺・尼寺の周辺の調査に対応するため、国家座標でグリッドを設定している。そのため、町内の他の調査でも、同様のグリッドを設定するようにしており、基本的には町内を国家座標(旧日本測地系)による網をかけていると言えよう。2000年より、世界測地系(日本測地系2000)で表示するようになったが、甲斐国分二寺周辺はまだ世界測地系に対応していない。また、最初に調査した平成6年の今宮・車居遺跡(1次)が旧測地系でグリッドを設定しているため、昨年度実施した車居遺跡2次調査では、工事用の測量データを世界測地系から旧測地系に戻してグリッドを設定し、整合させている。ただし、個々の調査区は国家座標に準じてグリッドを設定しているものの、グリッドの名称は任意に付しているため、注意されたい。(野崎)

参考文献

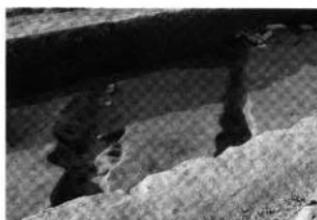
- 浅間神社 2005 『甲斐国一之宮 浅間神社誌』
芦川村村誌編纂委員会 1992 『芦川村誌』上巻
一宮町 1965 『一宮町誌』
一宮町教育委員会 1996 『一宮町埋蔵文化財発掘調査概要報告書—平成6年度—』
猪股喜彦 1996 「金川扇状地の土地開発—甲斐国分寺周辺の集落—」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第7集
猪股喜彦 2002 「甲斐国分寺地域における集落構造と展開に関する若干の考察」『山梨県考古学協会誌』第13号
春日居町誌編纂委員会 1988 『春日居町誌』
角川書店 1984 『角川日本地名大辞典 19 山梨県』
弦間耕一 2002 「笛吹川の砂鉄と武藤半三郎」『甲斐路』100
齊藤享治 1998 『大学テキスト 日本の扇状地』古今書院
平凡社 1995 『山梨県の地名』
山梨県 1984 『土地分類基本調査 甲府 5万分の1』
山梨県教育委員会 1973 『甲斐国埋没条里遺構等の調査』
山梨県埋蔵文化財センター 1994 『年報』10

II. 伊勢田遺跡の調査

平成7年1月17日～27日まで、トレンチ2本による試掘調査を実施した。この結果、時期不明の土坑2基と溝2条、トレンチ内で遺物が若干出土しただけであったため、本調査に至っていない。2箇所のテストピット（TP）と溝の土壌分析を、今宮遺跡と併せて実施したため、土層を提示しておく。（野崎）



1Tr 全景 南から



SD1・2 東から



2Tr 全景 北から

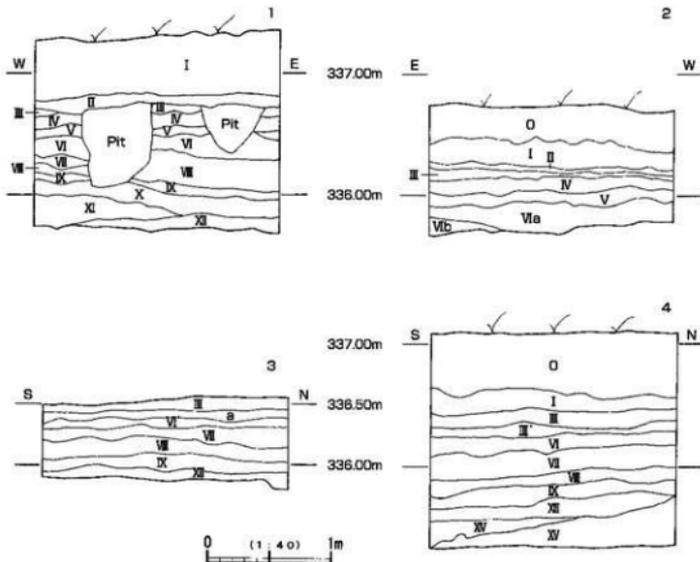


SK 北西から

第7図 土層図・写真

Ⅲ. 今宮遺跡の調査

本地点は御手洗川の右岸に位置する。流路に沿ってやや北西方向へ傾斜する約1,300㎡を調査し、
 竪穴住居跡28軒、溝跡8条、土坑3基、水田跡、埋没谷、近世・近代の道路跡などの遺構を発見し
 た。調査以前は耕作地であり、表層から遺構確認面までの深さは約50cmを測る。地山は砂質の河岸
 堆積土であり、遺構プランの検出及び遺存状況の判断が非常に困難であった。本調査区では水田跡
 と埋没谷を検出しており、土層観察から自然堤防状の高まりを境に、居住域と生産域に分かれてい
 る状況が窺えた。尚、基本層序は、科学分析との関連から試掘調査時のトレンチ土層図を使用し
 ており、分析結果については附編Ⅰを参照されたい。



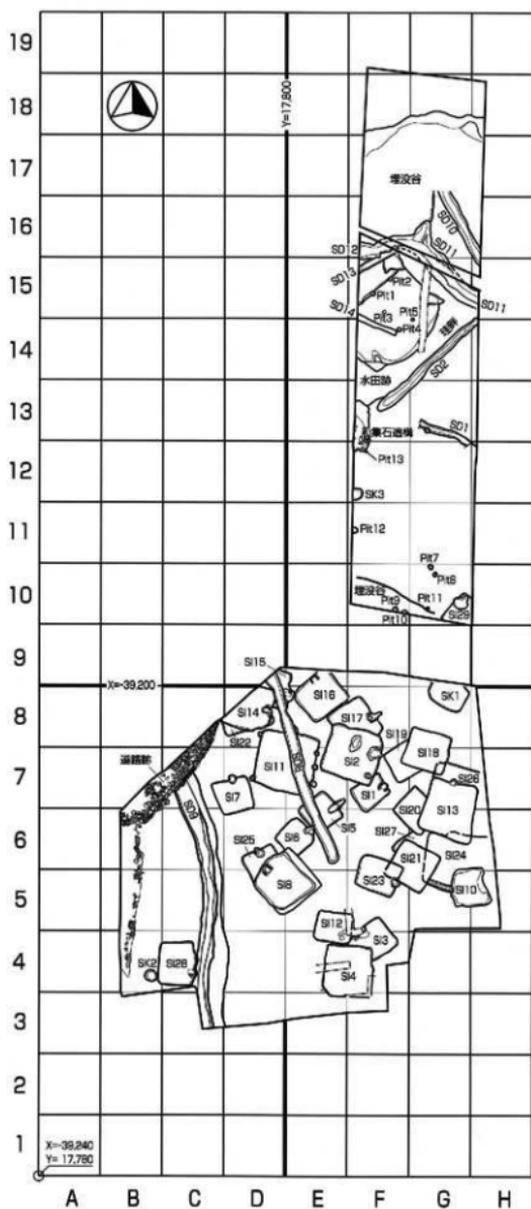
3Tr	層	土質	埋入物	遺構	備考
I	埋没谷	30/19 4/3 シル-	シル-	溝跡	埋没
II	埋没谷	30/19 4/4 シル-	シル-	溝跡	埋没
III	埋没谷	30/19 3/4 シル-	シル-	溝跡	埋没
IV	埋没谷	30/19 2/3 赤土	赤土	溝跡	埋没
V	埋没谷	30/19 2/2 赤土	赤土	溝跡	埋没
VI	埋没谷	30/19 2/1 赤土	赤土	溝跡	埋没
VII	埋没谷	30/19 2/0 赤土	赤土	溝跡	埋没
VIII	埋没谷	30/19 1/3 赤土	赤土	溝跡	埋没
IX	埋没谷	30/19 1/2 赤土	赤土	溝跡	埋没
X	埋没谷	30/19 1/1 赤土	赤土	溝跡	埋没
XI	埋没谷	30/19 0/3 赤土	赤土	溝跡	埋没
XII	埋没谷	30/19 0/2 赤土	赤土	溝跡	埋没

4bTr	層	土質	埋入物	遺構	備考
I	埋没谷	30/19 4/3 シル-	シル-	溝跡	埋没
II	埋没谷	30/19 4/4 シル-	シル-	溝跡	埋没
III	埋没谷	30/19 3/4 シル-	シル-	溝跡	埋没
IV	埋没谷	30/19 2/3 赤土	赤土	溝跡	埋没
V	埋没谷	30/19 2/2 赤土	赤土	溝跡	埋没
VI	埋没谷	30/19 2/1 赤土	赤土	溝跡	埋没
VII	埋没谷	30/19 2/0 赤土	赤土	溝跡	埋没
VIII	埋没谷	30/19 1/3 赤土	赤土	溝跡	埋没
IX	埋没谷	30/19 1/2 赤土	赤土	溝跡	埋没
X	埋没谷	30/19 1/1 赤土	赤土	溝跡	埋没
XI	埋没谷	30/19 0/3 赤土	赤土	溝跡	埋没
XII	埋没谷	30/19 0/2 赤土	赤土	溝跡	埋没

4aTr	層	土質	埋入物	遺構	備考
I	埋没谷	30/19 4/3 シル-	シル-	溝跡	埋没
II	埋没谷	30/19 4/4 シル-	シル-	溝跡	埋没
III	埋没谷	30/19 3/4 シル-	シル-	溝跡	埋没
IV	埋没谷	30/19 2/3 赤土	赤土	溝跡	埋没
V	埋没谷	30/19 2/2 赤土	赤土	溝跡	埋没
VI	埋没谷	30/19 2/1 赤土	赤土	溝跡	埋没
VII	埋没谷	30/19 2/0 赤土	赤土	溝跡	埋没
VIII	埋没谷	30/19 1/3 赤土	赤土	溝跡	埋没
IX	埋没谷	30/19 1/2 赤土	赤土	溝跡	埋没
X	埋没谷	30/19 1/1 赤土	赤土	溝跡	埋没
XI	埋没谷	30/19 0/3 赤土	赤土	溝跡	埋没
XII	埋没谷	30/19 0/2 赤土	赤土	溝跡	埋没

4gTr	層	土質	埋入物	遺構	備考
I	埋没谷	30/19 4/3 シル-	シル-	溝跡	埋没
II	埋没谷	30/19 4/4 シル-	シル-	溝跡	埋没
III	埋没谷	30/19 3/4 シル-	シル-	溝跡	埋没
IV	埋没谷	30/19 2/3 赤土	赤土	溝跡	埋没
V	埋没谷	30/19 2/2 赤土	赤土	溝跡	埋没
VI	埋没谷	30/19 2/1 赤土	赤土	溝跡	埋没
VII	埋没谷	30/19 2/0 赤土	赤土	溝跡	埋没
VIII	埋没谷	30/19 1/3 赤土	赤土	溝跡	埋没
IX	埋没谷	30/19 1/2 赤土	赤土	溝跡	埋没
X	埋没谷	30/19 1/1 赤土	赤土	溝跡	埋没
XI	埋没谷	30/19 0/3 赤土	赤土	溝跡	埋没
XII	埋没谷	30/19 0/2 赤土	赤土	溝跡	埋没

第8図 トレンチ土層図



第9図 遺構分布図 (1/400)

1. 遺構

SI1 (第10図、PL2)

F-7グリッドで確認した。約2.6×2.2mの長方形を呈し、主軸方向はN-55°-Eである。重複するSI2(9世紀前半頃)に北西壁を壊されていた。カマドは北東壁(短辺)の中央やや南東寄りに位置する。焚き口は南西向きで、燃焼部が壁内に収まる形態であったと推測される。袖部はやや粘質で、袖石の有無は不明であるが、右袖から前庭部にかけて礫物石と思われる棒状の礫が配されていた。遺構廃絶時に一括廃棄された、祭祀的行為の痕跡と推測される。遺物は土師器杯・皿・甕が出土している。遺物の時期は、山梨県史編年の奈良・平安Ⅱ期頃(以下、古墳~期又は奈・平~期と表す)に比定した。出土遺物は少ないものの、遺構年代はカマドに伴う遺物の時期から、およそ8世紀前半頃としておきたい。

SI2 (第10・11図、PL2)

E・F-7・8グリッドで確認した。4.1×4.3mの方形を呈し、主軸方向はE-17°-S、確認面から床面までの深さは40cmである。重複するSI1(8世紀前半頃)の北西壁を壊していた。カマドは東辺の中央からやや左の位置と、東辺右端からやや中央寄りの位置で焼土を確認し、それぞれカマド1、カマド2とした。いずれも焚き口は西向きで、燃焼部が壁内に収まる形態であったと推測される。カマド1は焼土粒・炭化物を確認できたものの、使用痕跡や遺物の出土が少なく、カマド2構築後、片付けられたものと推測した。カマド2周辺では礫を検出したが、覆土中からの出土であり、カマドの構築材として使用されたものかは不明である。遺物は土師器皿・杯・甕・埴、須恵器杯・壺、棒状の鉄製品、砥石等が出土した。特徴的な遺物としては、墨書土器があり、土師器杯(10)は底部に「路」、土師器杯(11)にも判読不明であるが墨書がみられる。遺物の時期は、奈・平Ⅳ期に比定した。遺構年代はカマド2付近出土遺物の時期から、9世紀前半頃と推定した。

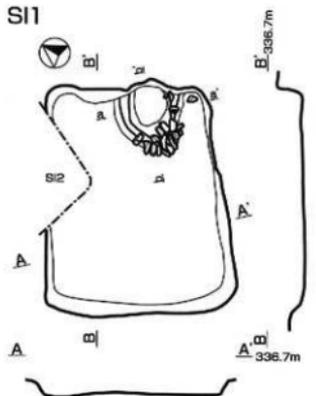
SI2炉

SI2の中央やや北寄りに位置し、焼土の堆積を確認した。長径約140cm、短径80cmの不整形円形を呈し、SI2床面からの深さは約6cmを測る。SI2との重複関係を示す記録図面はなく、調査時の所見ではSI2廃絶後の覆土中に構築された遺構と見做している。出土遺物は、炉内の石へ被せてあった土師器杯(12)がある。SI2カマド付近出土の遺物よりも底径が小さく、内面の暗文が消失していることから、若干の差異が認められる。また炉とカマド1との間から出土した土師器埴(19)は、覆土中から出土しており、炉に伴う遺物であった可能性がある。但し、検出状況は明確でなく、遺構年代については、SI2廃絶後といった段階的な位置付けに留めておきたい。

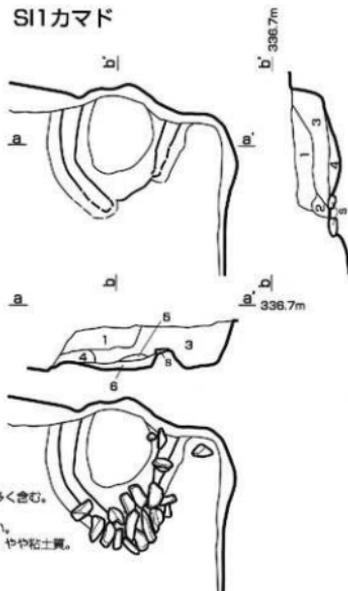
SI3 (第12図、PL2)

F-4・5グリッドで確認した。北西辺は2.7m、確認面から床面までの深さは約25cmを測り、長方形を呈していたと推測される。重複するSI4(9世紀後半~10世紀前半頃)に南西壁及び南東壁の一部を壊されていた。カマドは北西壁の中央で焼土を確認したが、攪乱によって大半が壊されており、形態は不明である。カマド前庭部から住居中央に向け、複数の礫を検出した。構築材が含まれていたかは不明であるが、遺構廃絶により廃棄されたものと推測される。遺物は土師器杯片1点を図化し、奈・平Ⅰ期に比定した。遺構年代は明確ではないが、遺物の時期と遺構の重複関係

SI1

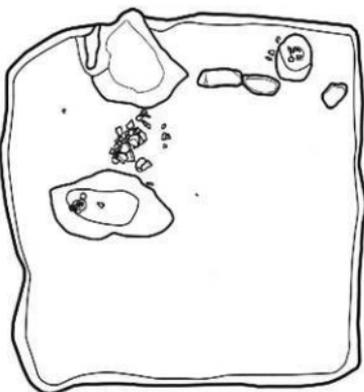
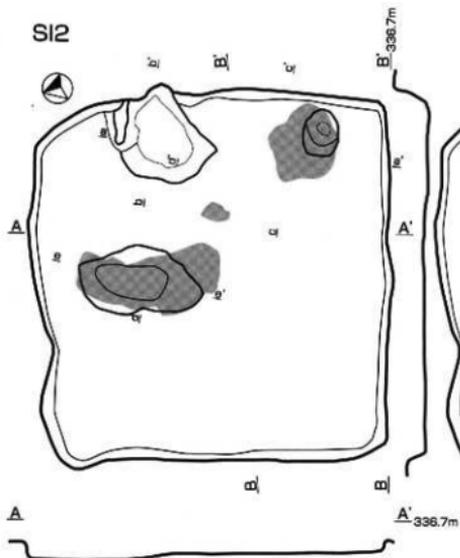


SI1カマド



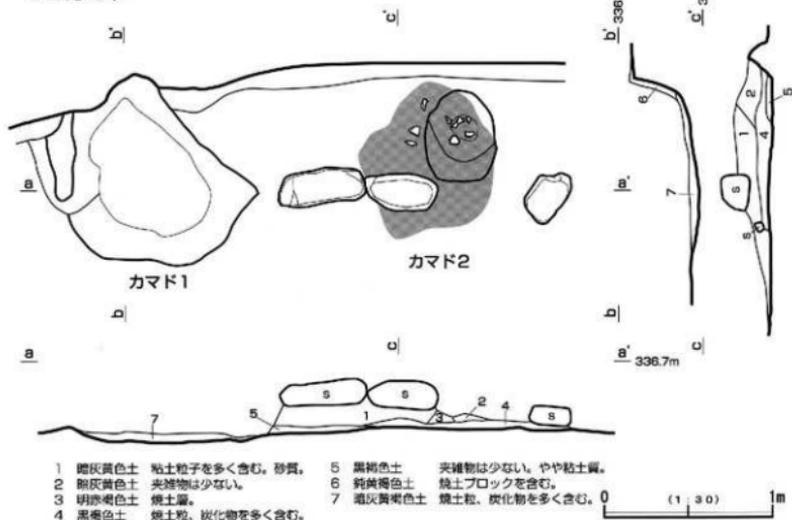
- | | | |
|---|-------|------------------|
| 1 | 灰褐色土 | 灰褐色土・炭化物粒を多く含む。 |
| 2 | 赤褐色土 | 砂質、焼土層。 |
| 3 | 褐灰色土 | 砂質、夾雑物は少ない。 |
| 4 | 褐灰色土 | 焼土、炭化物を含む。やや粘土質。 |
| 5 | 明赤褐色土 | 焼土層。 |
| 6 | 暗赤褐色土 | 炭化物多く含む。 |

SI2

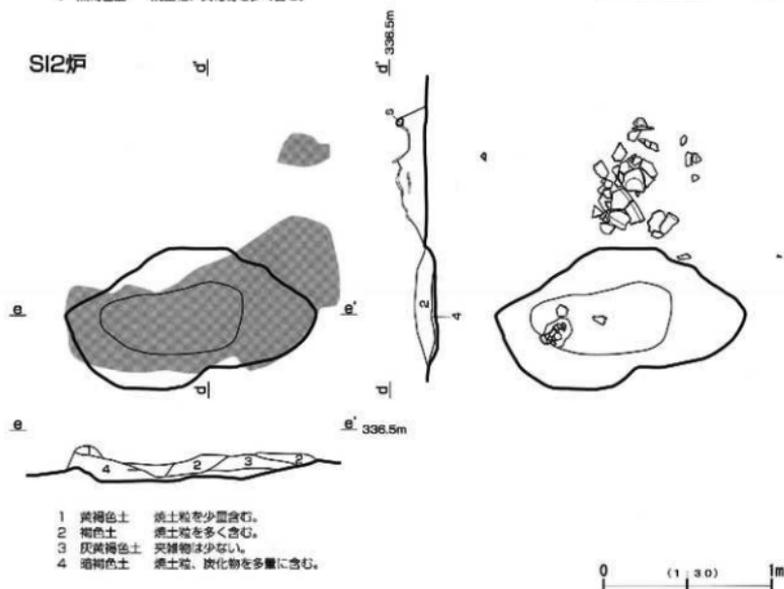


第10図 SI1・2(1)

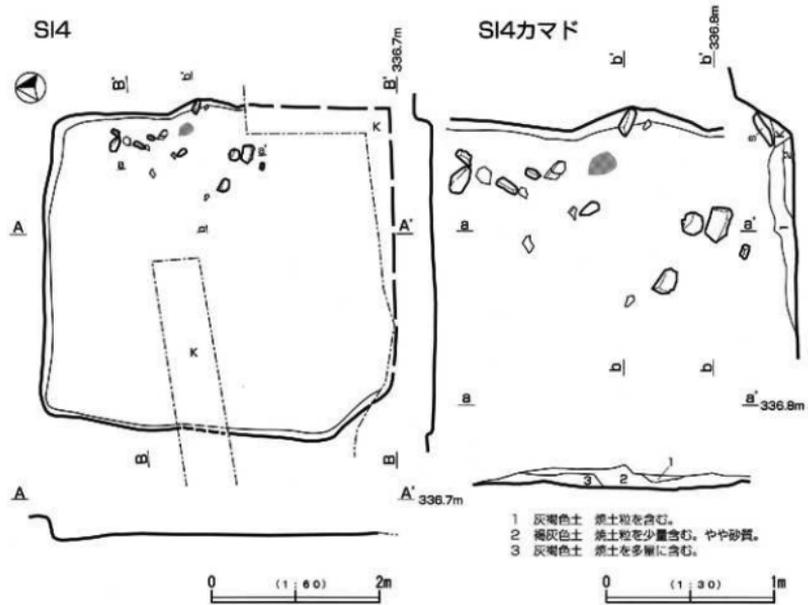
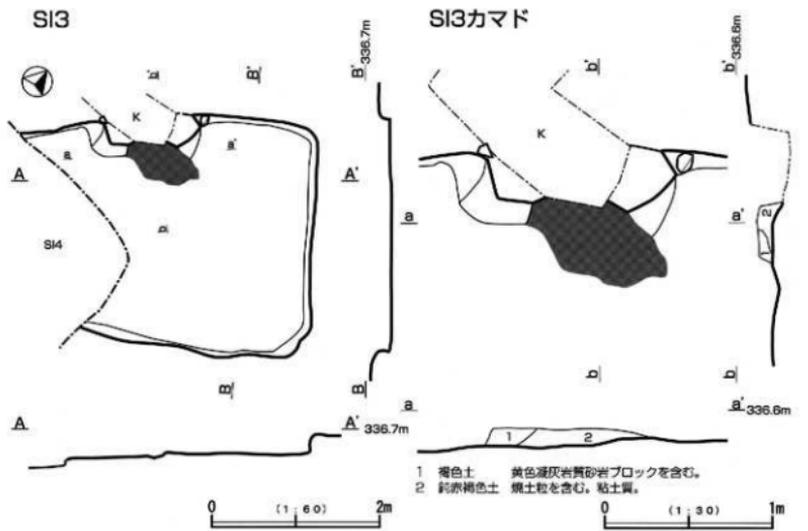
SI2カマド



SI2炉



第11図 SI2(2)



第12図 SI3・4

から、7世紀末～8世紀初頭頃としておきたい。

SI 4 (第12図、PL 2)

E・F-4グリッドで確認した。北壁の長さは3.5m、確認面から床面までの深さは約25cmを測る。掘乱により東壁の南半分と南壁が掘削されているが、ほぼ方形を呈していたと推測される。重複によりSI 3(7世紀末～8世紀初頭頃)の南西壁、南東壁の一部を壊していた。カマドは北辺中央で、焼土と礫が散在していた。遺存状況は悪く、カマドの形態は不明である。遺物は少なく、土師器坏・皿・甕等が出土した。他、凶化していないが須恵器甍片が出土している。遺物の時期は、奈・平V期頃に比定した。遺構年代は明確ではないが、カマド出土の遺物の時期から、9世紀後半としておきたい。

SI 5 (第13図、PL 3)

E-6・7グリッドで確認した。2.7×2.6mのほぼ方形を呈す。確認面から床面までの深さは約45cm、主軸方向はN-52°-Eを測る。重複するSI 6(8世紀前半)の煙道部に南西壁の一部が壊されていた。カマドは、北東辺の中央からやや右寄りに位置する。焚き口は南西向きで、燃焼部が壁内にほぼ収まる形態であったと推測される。構築材には粘土と礫を用いており、袖石と煙道の側壁に礫が使われていた。燃焼部からは小型甍(34)が倒位で出土し、加えて被熱による劣化した状態であったことから、支脚に用いられたものと推測される。またカマド右脇の東隅部分でも、集中した遺物の出土が確認されている。遺物は、土師器坏・甕・埴、鉄製品(U字形鉄・鋤先、鎌)等が出土した。尚、先述した小型甍(34)は、特異な器形をしており、底部を成形時に指頭で端部をつまみあげ、短い脚状になっている。遺物の時期はやや幅があり、古墳Ⅲ期～奈・平I期頃に比定した。遺構年代は、カマド内部出土遺物の時期から、7世紀後半から8世紀初頭頃と推定した。また、近接するSI 6とは、遺構の規模・規格が類似し、遺物の時期が継続している。明確に建替えを示すものではないが、SI 5 廃絶から比較的短期のうちに変遷したことが窺える。

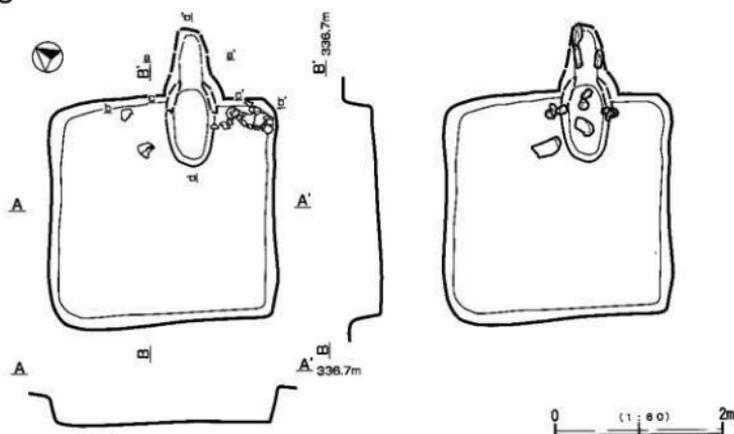
SI 6 (第14図、PL 3)

D・E-6グリッドで確認した。約2.4mの方形を呈し、確認面から床面までの深さは約30cm、主軸方向はN-46°-Eを測る。重複するSI 5(7世紀末から8世紀初頭頃)の南西壁の一部を壊し、SI 8(8世紀前半頃)に南隅を壊されている。カマドは北東辺の中央からやや右側に位置する。焚き口は南西向きで、燃焼部をほぼ壁ラインの位置に構築した形態であったと推測される。構築材には粘土と礫を用いており、袖石や支脚石はなかったが、煙道部では側壁を並べ、それに架ける天井石を検出した。また、カマド前庭部から遺構中央部にかけては土坑状の掘り込みがあり、炭化物や礫とともに遺物が混在していた。遺物は土師器坏・盤・鉢・甍・カマド形土器、須恵器坏等が出土している。遺物の時期は、奈・平I・II期に比定した。遺構年代はカマド部分から出土した遺物の時期から、8世紀前半と推定した。尚、SI 5との関係性は先述のとおりであるが、SI 8との重複関係についても、SI 6の廃絶から比較的短期のうちに変遷したことが窺える。

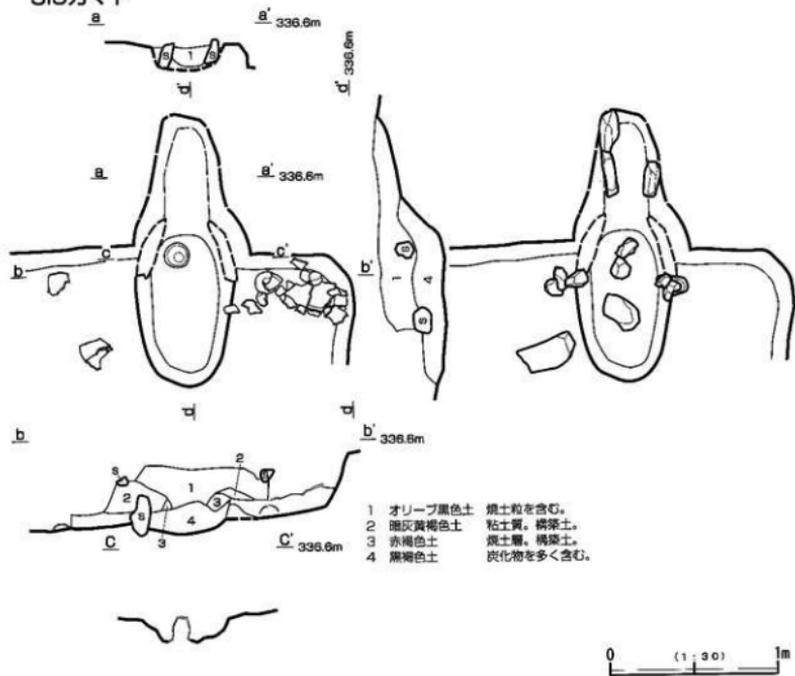
SI 7 (第15図、PL 4)

C-7、D-6・7グリッドで確認した。やや歪みはあるが、2.6×2.8mの方形を呈す。確認面から床面までの深さは約1.0m、主軸方向はE-18°-Nを測る。カマドは北辺のほぼ中央に位置す

S15



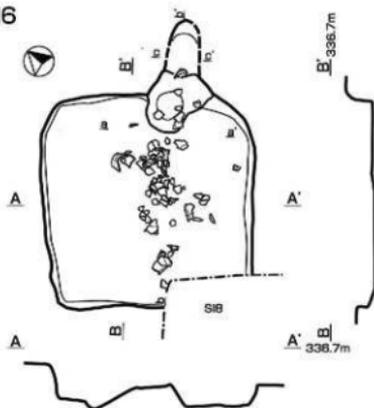
S15カマド



- | | | |
|---|---------|-----------|
| 1 | オリーブ黒色土 | 埴土粉を含む。 |
| 2 | 暗灰黄褐色土 | 粘土質。礫炭土。 |
| 3 | 赤褐色土 | 埴土層。礫炭土。 |
| 4 | 黒褐色土 | 炭化物を多く含む。 |

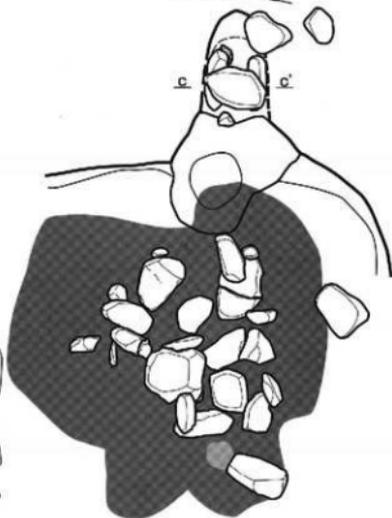
第13図 S15

SI6



0 (1:60) 2m

SI6カマド



0 (1:30) 1m

- 1 灰黄褐色土 小礫、焼土粒を少量含む。
- 2 灰黄褐色土 夾雑物は少ない、やや粘土。
- 3 灰黄褐色土 夾雑物は少ない、砂質。
- 4 明赤褐色土 焼土多く含む。
- 5 掘り混雑土。

第14図 SI6

る。焚き口はほぼ南東向きで、燃焼部を壁ラインの位置に構築した形態であったと推測される。左袖と支脚には礫が用いられていた。尚、カマド前底部付近から対辺（東辺）のやや南側にかけては、礫が散在していた。遺物は土師器杯・甕、手づくね土器等が出土している。遺物の時期は、奈・平Ⅰ期に比定した。遺物が少なく、遺構年代は明確ではないが、カマドの出土遺物の時期から、7世紀末～8世紀初頭にしておきたい。

SI 8 (第15図、PL 4)

D・E-5・6グリッドで確認した。約4.0mの方形を呈し、確認面から床面までの深さは約50cm、主軸方向はW-39°-Nを測る。重複によりSI 6（8世紀前半）の南隅と、SI 25（古墳時代後期）の南側を壊している。北東壁際から中央へ約60cm、南東壁際から同じく約30cmのところから床面から約30cmの段差が確認できた。当初は重複する別遺構として、SI 9と遺構番号を付したが、調査の進展により、SI 8の拡張部もしくは棚状施設と断定した。カマドは北東辺の中央からやや左寄りに位置する。焚き口は南東向きで、燃焼部が壁内に収まる形態であったと推測される。砂質土で遺存状況は悪かったが、袖部と支脚石を確認した。袖部には構築材に平石を用いており、左袖に1つ、右袖に2つの平石が使用されていた。遺物は土師器盤・甕、須恵器高台付杯・甕片、刀子、砥石等が出土している。遺物の時期は、奈・平Ⅱ期に比定した。遺構年代は、カマド部分から出土した遺物の時期から、8世紀前半頃と推定しておく。

(SI 9)

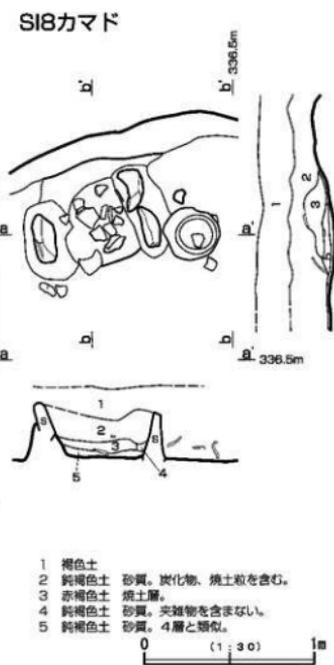
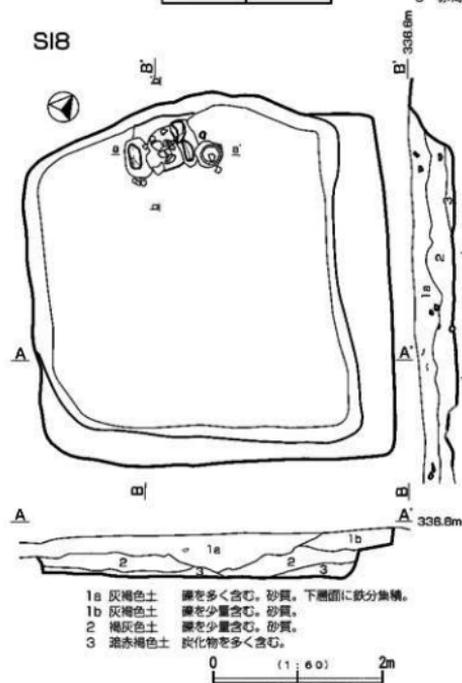
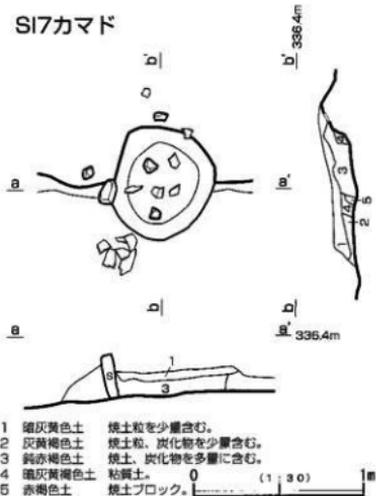
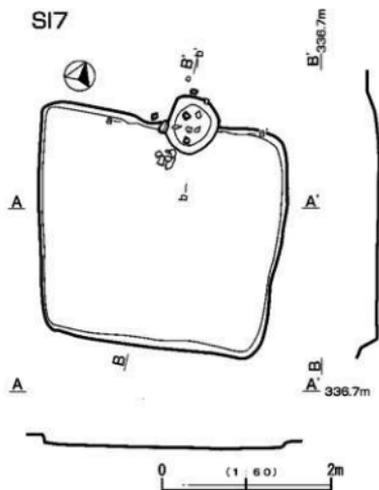
前述の通り、SI 8に重複する遺構として番号を付したが、調査の進展によりSI 8の拡張部または棚状施設部分であると判断し、欠番とした。

SI 10 (第16図、PL 4)

G・H-5グリッドで確認した。3.0×2.9mを測る不整形方形を呈す。確認面から床面までの深さは約30cmを測る。SI 24（9世紀後半）を壊している。住居跡としているがカマドの痕跡は確認できず、土坑であった可能性も窺える。遺物は覆土中から、土師器杯・甕片が少量出土しているが、小片のため図化しなかった。覆土中の遺物の時期は、奈・平Ⅳ期頃に想定できるが、遺構年代については重複関係から9世紀後半以降と思われる。

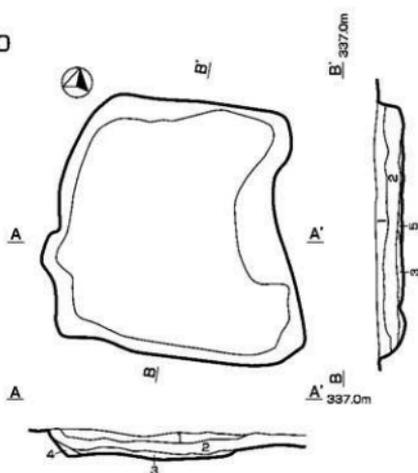
SI 11 (第16・17図、PL 4)

D・E-7・8グリッドで確認した。4.7×4.6mの方形を呈す。確認面から床面までの深さは約50cm、主軸方向はN-10°-Eを測る。平面的にはSD 8（近世）が重複するが、掘り込みが浅いため、重複による影響はほぼなかったといえる。カマドは北壁の中央に位置する。焚き口はほぼ南向きで、燃焼部が壁外へ突出する形態であったと推察される。遺存状況は悪かったものの、袖石は、ほぼ壁ラインの両端に据えられていた。その他、壁にかかる小ビット5基を確認しており、東辺に3基、北西・南西隅に1基ずつ検出した。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯等があり、カマド右脇で集中していた。特徴的な遺物としては、75が出土している。小片で器形や用途は不明であるが、甲斐型甕と同様の胎土・整形技法がみられるものの、甕類とは異なる角型の意匠が観察できる。他、鉄製品（釘）等も出土している。遺物の時期は、土師器杯類は古墳ⅩⅩ期と奈・平Ⅳ期頃、甕類は主に奈・平Ⅳ期頃に比定した。別時期の遺物が混在するが、遺構年代はカマド右脇から出土した土師



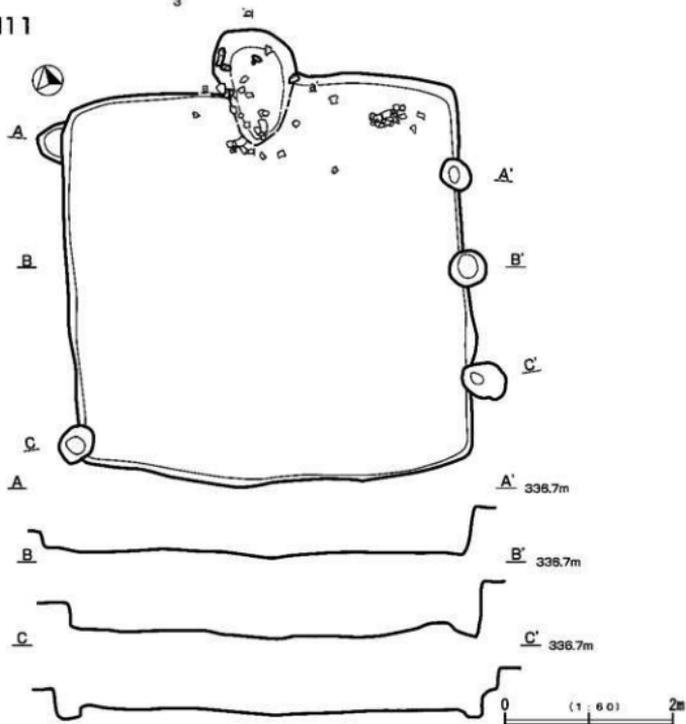
第15図 SI7・8

SI10



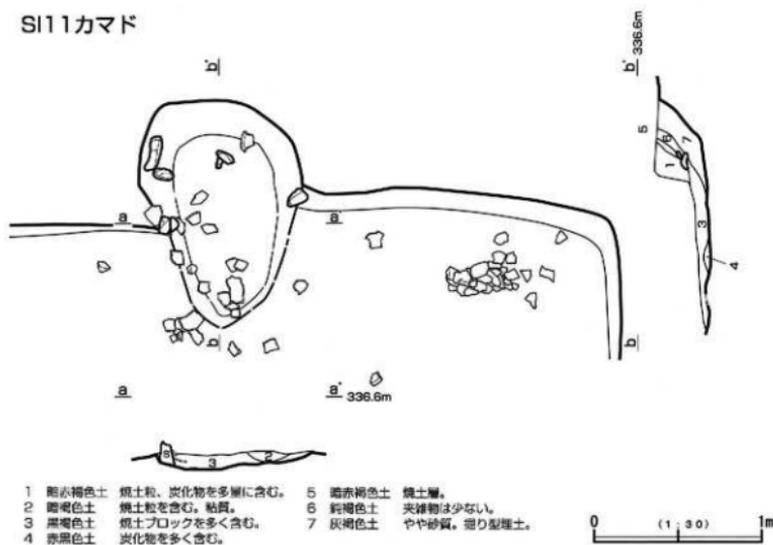
- 1 褐色土 焼土粒を少量含む。
- 2 黒褐色土 焼土粒、炭を少量含む。
- 3 黒褐色土 炭化物粒子を少量含む。
- 4 黒色土 焼土粒を少量含む。
- 5 暗褐色土 灰塵、焼土粒を少量含む。

SI11

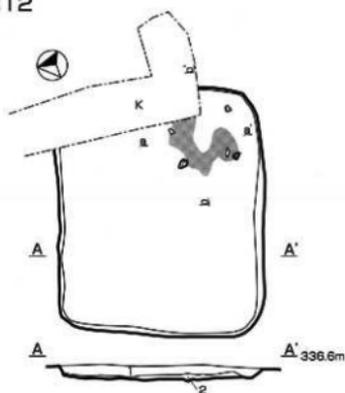


第16図 SI10・11(1)

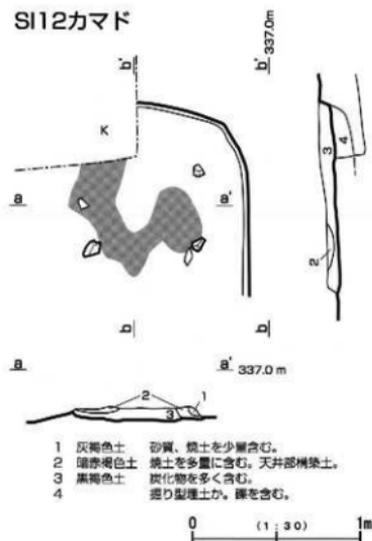
SI11カマド



SI12



SI12カマド



第17図 SI11(2)・12

器裏の時期から、9世紀前半頃と推定した。

SI 12 (第17図、PL 5)

E・F-4・5グリッドで確認した。北東隅から東壁の中央あたりまで攪乱を受けているが、 2.9×2.4 mの長方形を呈したと推測される。確認面から床面までの深さは約20cm、主軸方向は $E-12^\circ-S$ を測る。カマドは攪乱を受けており、南東辺の中央からやや右の位置で若干の焼土が確認できたが、形態については不明である。遺物は土師器杯・甕等が出土している。遺物の時期は、奈・平IV期に比定した。遺物が少なく、遺構年代は明確ではないが、カマド周辺の出土遺物の時期から、9世紀前半頃としておきたい。

SI 13 (第18図、PL 5)

G-6・7グリッドで確認した。縦4.5m、上辺3.7m、下辺4.4mのほぼ台形状を呈す。確認面から床面までの深さは約10cm、主軸方向は $N-12^\circ-E$ を測る。重複するSI 20(8世紀前半)、SI 24(9世紀後半)、SI 26・27(古墳時代後期頃)を壊している。カマドは北辺の中央に位置する。焚き口はほぼ南向きで、燃焼部をほぼ壁ラインの位置に構築した形態であったと推測される。遺存状況が悪く、粘質土は確認できるものの、袖部や煙道部は明確でない。カマド前庭部では焼土・炭化物とともに、遺物が出土している。遺物は土師器皿・杯・甕・カマド形土器、須恵器甕、刀子等が出土した。特徴的な遺物としては墨書土器があり、土師器皿(79)と土師器杯(87)の底部に「石」と書かれている。遺物の時期は、奈・平V・VI期頃に比定した。遺構年代はカマド部から出土した遺物の時期から、9世紀後半頃と推定した。

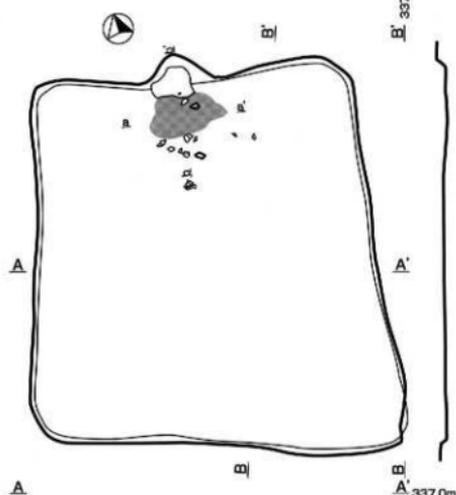
SI 14 (第18・19図、PL 5)

D-8グリッドで確認した。調査区内では東壁と北壁・南壁の一部を検出し、南北の長さ3.5m、確認面から床面までの深さは約30cmを測る。本来は長方形を呈したものと推測される。重複するSI 22(7世紀末頃)を壊し、SI 15(9世紀後半頃)に壊されている。カマドは東辺(短辺)中央に位置する。焚き口は西向きで、遺存状況は悪かったものの、燃焼部が壁内に収まる形態であったと考えられる。構築材には粘土が用いられており、左袖と若干の右袖が確認できた。袖石はなく、右袖の外側で礫を検出したが、遺構廃絶により廃棄されたものと推測される。尚、カマド周りの床面では硬化面を確認した。遺物は土師器蓋・杯が出土した。遺物の時期は、奈・平IV期に比定した。出土遺物が少なく、遺構年代は明確ではないが、9世紀前半頃としておきたい。

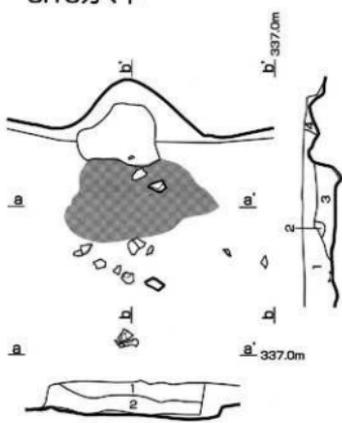
SI 15 (第19図、PL 5)

D-8・9グリッドで確認した。重複するSI 14(9世紀前半)を壊し、東側は調査区外となっている。南北の最大長は3.0m、確認面から床面までの深さは約30cmを測る。遺構範囲は調査区外に至るが、長方形を呈すと推測される。カマドは北辺中央に位置する。焚き口は西向きで、燃焼部を壁ラインの位置に構築した形態であったと推測される。明確な袖や袖石はなかったが、袖石を据えた跡のような凹みを確認している。尚、カマド前庭部にかかる床下土坑を検出している。遺物は、土坑上面で出土した土師器皿を図化した。その他、土師器壺片、須恵器甕片等が出土している。遺物の時期は、奈・平V期に比定した。遺構年代は明確ではないが、出土遺物の時期から、9世紀後半頃としておきたい。

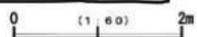
SI13



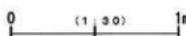
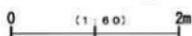
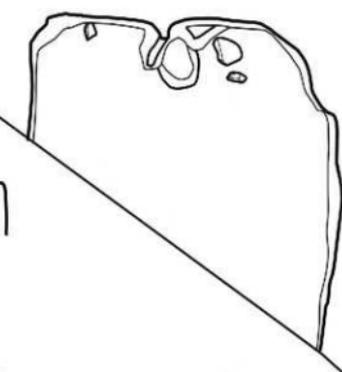
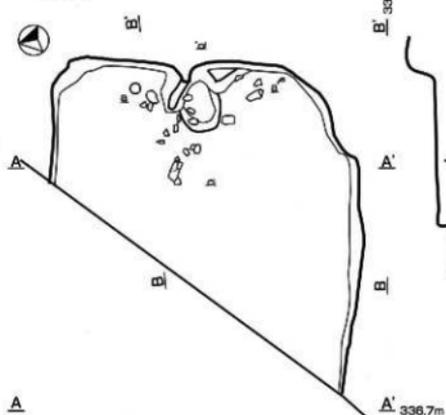
SI13カマド



- 1 灰褐色土 焼土粒、炭化物を含む。
- 2 黒褐色土 焼土粒、炭化物を多く含む。
- 3 褐色土 やや粘土質、焼土粒を含む。
- 4 灰黄褐色土 夾雑物は少ない。

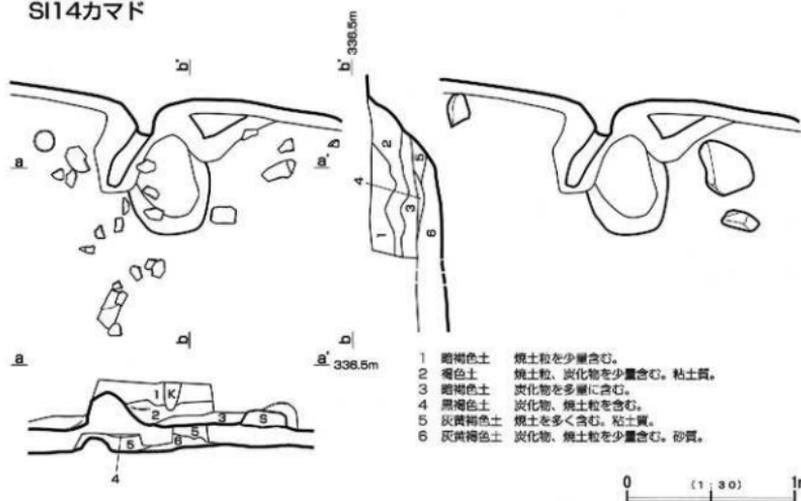


SI14

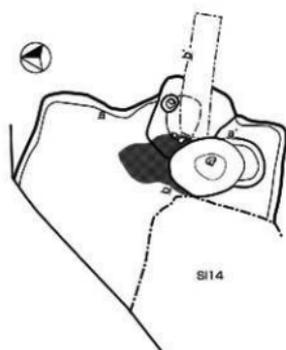


第18図 SI13・14(1)

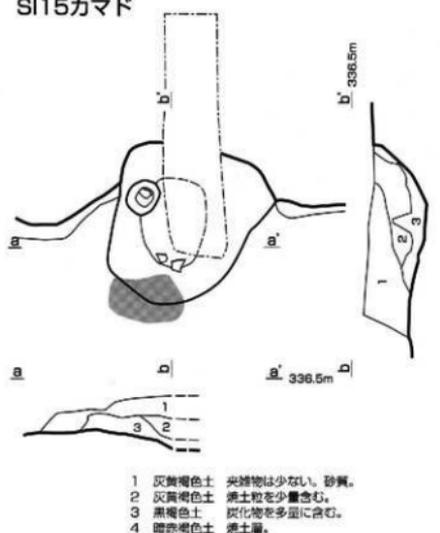
SI14カマド



SI15



SI15カマド



SI 16 (第20図)

E-8・9グリッドで確認した。やや不整であるが、縦3.1×3.9mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約30cm、主軸方向はW-41°-Nを測る。別遺構との重複はなかった。カマドは北西壁の中央からやや右寄りに位置する。焚き口は南東向きで、燃焼部が壁内に収まる形態であったといえる。明確な袖はなかったが、支脚石を確認している。なお、カマド部分では複数の礫を検出した。小片遺物が多く混在しており、遺構廃絶後に廃棄されたものと推測される。遺物は土師器坏・甕、須恵器坏、鉄製品の鎌が出土している。遺物の時期は、奈・平I期に比定した。遺構年代は、カマド出土の土師器甕から、7世紀末～8世紀初頭頃と推定した。

SI 17 (第20図、PL 6)

E・F-8グリッドで確認した。3.1×3.7mのやや台形状の方形を呈す。確認面から床面までの深さは約20cmを測る。重複するSI 2(9世紀前半頃)に上面を壊されているが、SI 2の床面からの深さは約10cmを測る。主軸方向はN-50°-Eである。カマドは北西辺のほぼ中央に位置する。焚き口は西北西向きで、燃焼部が壁内に収まる形態であったと考える。拍石はなく、一部地山を掘り残して袖状とし、焼けた状態で確認した。煙道部は攪乱を受けているが、やや右斜め方向へ約60cm延び、側壁に平石を用いていた。カマド前庭部から中央にかけて礫の集積がみられ、小片遺物が多く混在していた。遺構廃絶後に廃棄されたものと推測される。遺物は、土師器坏・甕、鉄製品(刀子か)等が出土した。遺物の時期は、奈・平I期に比定した。遺構年代を明確に示す遺物は少なかったが、7世紀末～8世紀初頭頃としておきたい。

SI 18 (第21図、PL 6)

F-7、G-7・8グリッドで確認した。3.2×3.0mのほぼ方形を呈す。確認面から床面までの深さは約15cm、主軸方向はE-15°-Sを測る。重複するSI 19(8世紀後半～9世紀前半頃)を壊している。カマドは北西辺の中央に位置したと推測されるが、焼土と礫が確認できたのみで形態は不明である。床下は礫を多量に含み、SI 19との重複部分以外の隅部分は若干低くなっていた。遺物は土師器蓋・坏・甕等が出土している。遺物の時期は、奈・平IV期に比定した。遺物が少なく、遺構年代は明確ではないが、カマドの出土遺物から、9世紀前半頃にしておきたい。

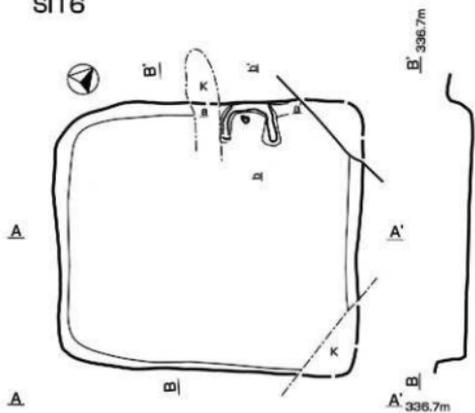
SI 19 (第21図、PL 6)

F・G-7・8グリッドで確認した。3.0×2.6mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約2.0m、主軸方向はN-57°-Eを測る。ほぼ同じ様相であるSI 18(9世紀前半)と重複しており、北東壁から中央にかけて壊されている。床面はSI 18よりも若干低く、明確ではないものの、かろうじて遺存していた。カマドは北西辺の中央に位置したと推測されるが、焼土と礫を確認したのみであった。遺物の出土は少なく、奈・平II期頃に比定した土師器坏1点を図化した。遺構年代は、明確ではないがSI 18よりも先行するといった段階的位置付けとしておきたい。

SI 20 (第22図、PL 7)

F・G-6・7グリッドで確認した。2.7×2.9mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約20cm、主軸方向はN-38°-Eを測る。重複するSI 13(9世紀後半頃)に、遺構東側の上面を壊されている。カマドは北西辺の中央に位置したと推測されるが、焼土と炭化物を確認したのみであっ

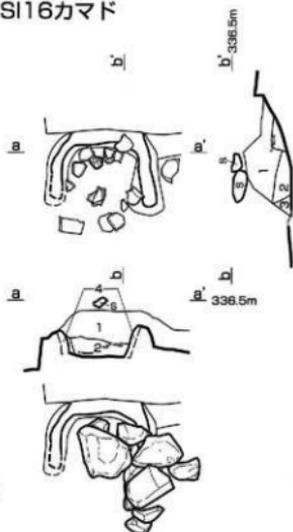
SI16



- | | | |
|---|----------|---------------|
| 1 | 暗灰黄色土 | 焼土粒、炭化物を少量含む。 |
| 2 | 暗オリーブ褐色土 | 焼土粒、炭化物を多く含む。 |
| 3 | 赤褐色土 | 焼土層。 |
| 4 | 赤褐色土 | 焼土ブロック、構築土。 |

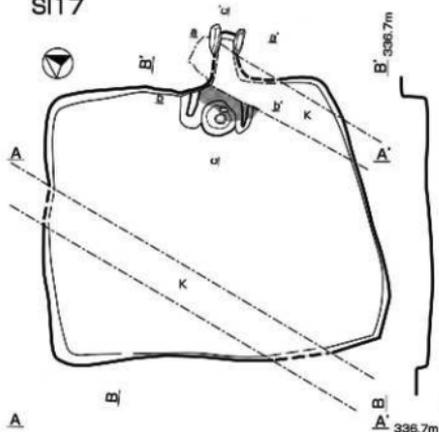
0 (1:50) 2m

SI16カマド



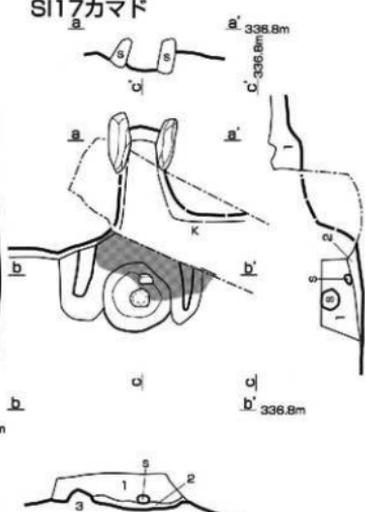
0 (1:30) 1m

SI17



0 (1:50) 2m

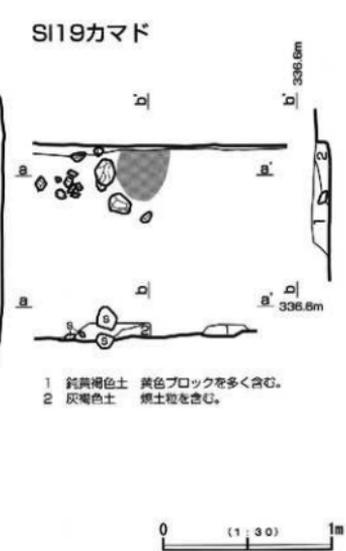
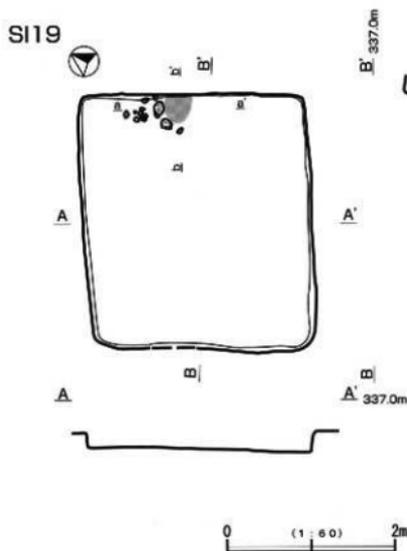
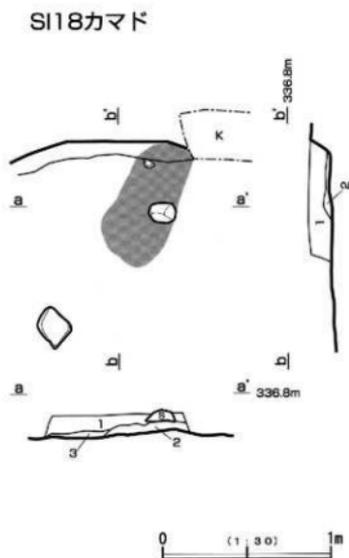
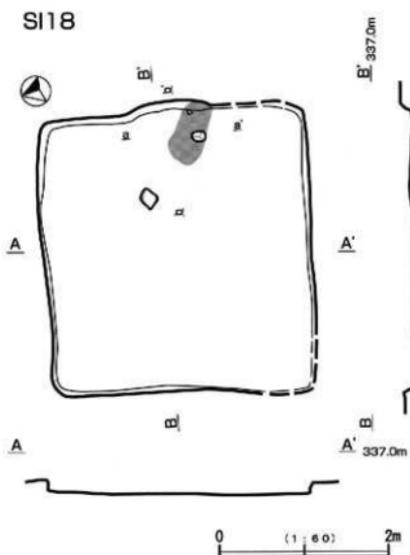
SI17カマド



0 (1:30) 1m

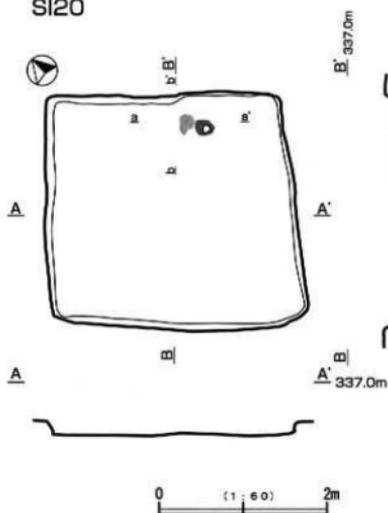
- | | | |
|---|-------|--------------------|
| 1 | 反黄褐色土 | 夾雑物は少ない。砂質。 |
| 2 | 鈍黄褐色土 | 焼土、炭化物を多く含む。やや粘土質。 |
| 3 | 黒褐色土 | 炭化物を多く含む。焼土化。 |

第20図 SI16・17

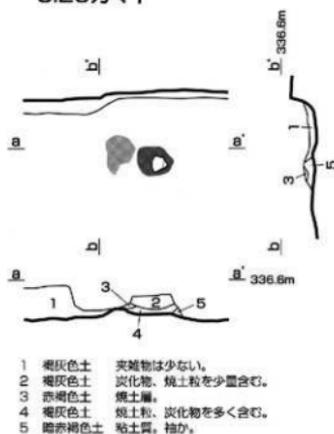


- 1 鈍黄褐色土 黄色ブロックを多く含む。
2 灰褐色土 燧土粒を含む。

SI20

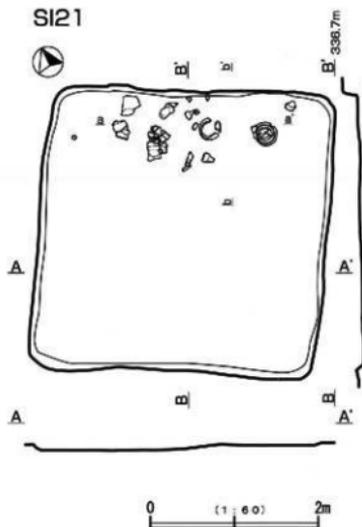


SI20カマド



- 1 褐色土 夾雑物は少ない。
- 2 褐色土 炭化物、焼土粒を少量含む。
- 3 赤褐色土 焼土層。
- 4 褐色土 焼土粒、炭化物を多く含む。
- 5 暗赤褐色土 粘土質、袖か。

SI21



SI21カマド



- 1 褐色土 砂質、焼土粒を少量含む。
- 2 褐色土 砂質、焼土粒・炭化物を多く含む。
- 3 明褐色土 シルト質、焼土粒を含む。

た。遺物は、土師器坏・甕・甗・手づくね土器、須恵器甕片等が出土した。遺物の時期は、奈・平Ⅱ期に比定した。遺構年代については、8世紀前半頃にしておきたい。

SI 21 (第22図、PL 7)

F・G-5・6グリッドで確認した。3.3×3.2mのほぼ方形を呈すと推測される。確認面からの深さは約10cm、主軸方向はN-31°-Eを測る。重複によりSI 27(古墳時代後期)を壊し、SI 23(9世紀後半)に西隅、SI 24(9世紀後半)に東側上面を壊されている。カマドは北西辺の中央からやや右に位置したと推測される。焼土を確認したが、カマドの形態は不明である。甕2個体(135・136)が伏せられた状態で出土しており、被熱の状況から、構築材とされていた可能性も考えられる。遺物は土師器甕・坏・甕・手づくね土器、鉄製品(棒状と鉄鏝か)等が出土した。遺物の時期は、奈・平Ⅱ期に比定した。遺構年代は出土遺物から、8世紀前半と推定した。

SI 22 (第23図、PL 7)

D-8グリッドで確認した。遺構プランは調査区外まで及ぶが、方形または長方形を呈すと推測される。調査区内で南辺及び西辺と東辺の一部を検出し、東西4.0m、確認面から床面までの深さは約30cmを測る。重複するSI 14(9世紀前半)の構築面は本遺構の覆土内に留まったため、床面が確認できる状況であった。カマドは北西辺の中央よりやや右に位置する。SI 14カマドとの重複で明確ではないものの、焚き口はほぼ南西向きで、燃焼部が壁内に収まる形態であったと推察される。遺物は、土師器坏・甕・小型甕、須恵器蓋が出土している。その他、遺構中央部付近から炭化材を検出している。遺物の時期は、奈・平Ⅰ期に比定する坏(145)が出土したものの、別時期の遺物も混在しており、明確な遺構年代は不明である。ここでは重複関係を考慮して、8世紀代と位置付けておきたい。

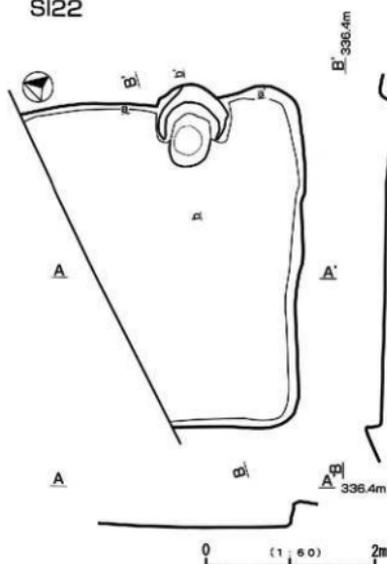
SI 23 (第23図、PL 7)

F-5・6グリッドで確認した。3.3×2.6mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約10cm、主軸方向はE-10°-Sを測る。重複するSI 21(8世紀前半)の西隅を壊している。カマドは北辺の中央に位置する。焚き口はほぼ西向きで、燃焼部をほぼ壁ラインの位置に構築した形態であったと推測される。構築材には粘土を用いており、若干数の礫を検出したが、構築材が遺構廃絶による廃棄なのかは不明である。遺物は少なく、土師器甕・手づくね土器を図化した。土師器甕はカマド内、手づくね土器はカマド対面の壁際から出土した。遺物の時期は奈・平Ⅴ期に比定した。遺構年代はカマド内出土の遺物から、9世紀後半と推定した。

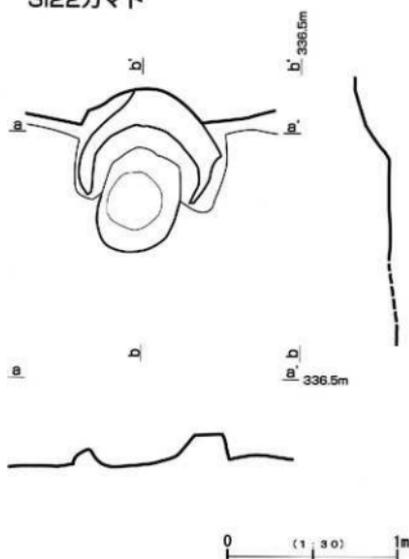
SI 24 (第24図、PL 7)

G・H-5・6グリッドで確認した。カマド部と若干の床面が遺存するのみで、床面と遺物の分布範囲から遺構範囲を推定した。重複するSI 27(古墳時代後期)、SI 21(8世紀前半)の上部を壊している。SI 10(時期不明、9世紀後半以降)には南東隅付近を壊され、SI 13(9世紀後半)にカマド上部を壊されている。カマドは北辺部分で焼土と炭化物を確認したが、遺存状況が悪く、形態は不明である。遺物は土師器皿・坏・甕、須恵器甕片、灰釉陶器碗が出土している。灰釉陶器は転用硯として利用した痕跡があり、底部高台内に擦痕と墨痕がみられる。遺物の時期は奈・平Ⅴ期に比定した。遺構年代は、出土状況が明確ではないものの、カマド周辺出土の遺物から、9

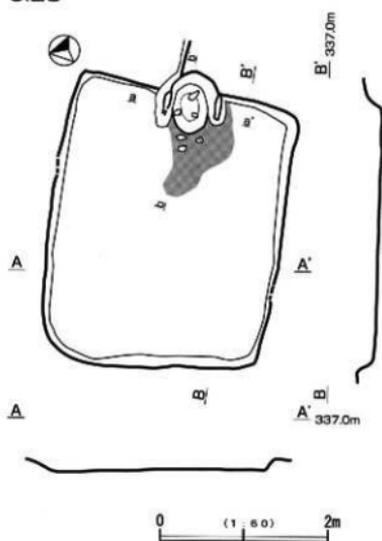
SI22



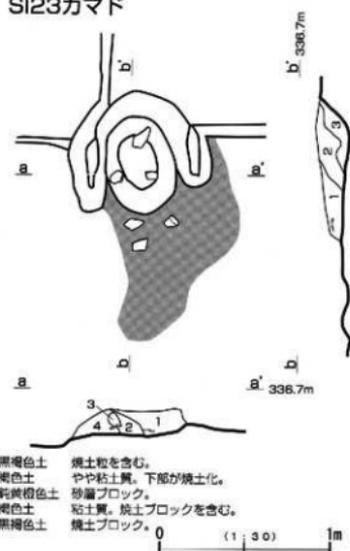
SI22カマド



SI23



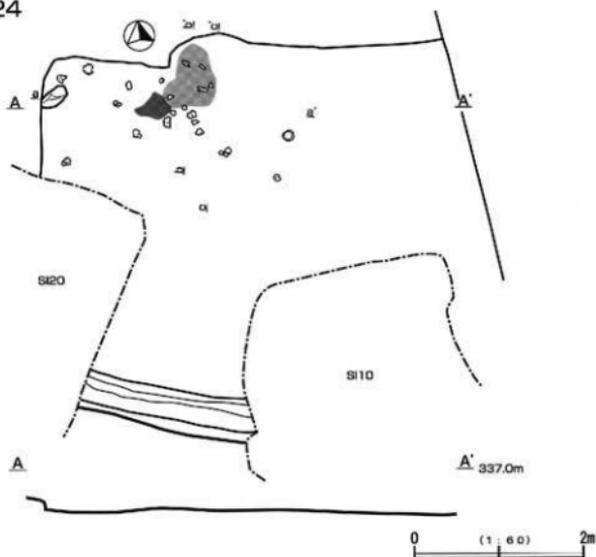
SI23カマド



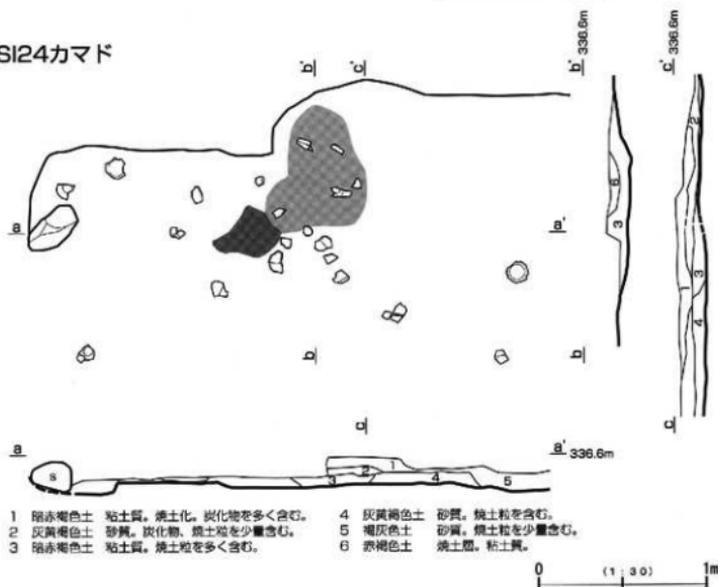
- | | | |
|---|-------|----------------|
| 1 | 黒褐色土 | 焼土粒を含む。 |
| 2 | 褐色土 | やや粘土質。下部が焼土化。 |
| 3 | 鈍黄褐色土 | 砂層ブロック。 |
| 4 | 褐色土 | 粘土質。灰土ブロックを含む。 |
| 5 | 黒褐色土 | 焼土ブロック。 |

第23図 SI22・23

SI24



SI24カマド



- | | |
|---------------------------|--------------------|
| 1 暗赤褐色土 粘土質。焼土化。炭化物を多く含む。 | 4 灰黄褐色土 砂質。焼土粒を含む。 |
| 2 灰黄褐色土 砂質。炭化物、焼土粒を少量含む。 | 5 褐色土 砂質。焼土粒を少量含む。 |
| 3 暗赤褐色土 粘土質。焼土粒を多く含む。 | 6 赤褐色土 焼土層。粘土質。 |

第24図 SI24

世紀後半にしておく。

SI25 (第25図、PL8)

D-5・6グリッドで確認した。東西2.7m、確認面から床面までの深さはおよそ10～30cmを測る。重複するSI8(8世紀前半)に壊されている。カマドは北辺のほぼ中央に位置する。焚き口はほぼ南向きで、燃焼部が壁内に収まる形態であったといえる。構築材には粘土と礫を用いており、僅かであるが袖部分を検出した。カマドの前庭部では複数の礫を検出したが、重複するSI8のカマドの構築材であった可能性も考えられる。遺物は少なく、須恵器坏を図化した。遺構年代の推定は難しいが、SI8との重複関係を考慮し、ここでは古墳時代後期としておきたい。

SI26 (第25図、PL8)

G・H-7グリッドで床面と北西辺・南西辺を確認した。確認面から床面までの深さは約10cmを測る。重複によりSI13(9世紀後半頃)に半分を壊され、SI18(9世紀前半頃)に北西隅を壊されていた。遺物は、10世紀前葉頃の灰釉陶器片1点を図化した。重複により混入した可能性が高い。重複関係から9世紀前半より遡ると推測される。

SI27 (第25図、PL8)

F・G-6グリッドで確認した。方形または長方形を呈すと推測されるが、西壁・北壁の一部を検出したのみであり、規模は不明である。確認面から床面までの深さは約15cmを測る。重複によりSI13(9世紀後半頃)、SI20(8世紀前半頃)、SI21(8世紀前半)、SI24(9世紀後半)に壊されている。重複が著しく、南西辺と南隅のみが残存していた。カマドは確認できなかった。遺物は壁際から集中して出土したが、小片が多く、円筒形土器と推測される土器片1点を図化した。遺構年代は、出土遺物と重複関係から、古墳時代後期としておきたい。

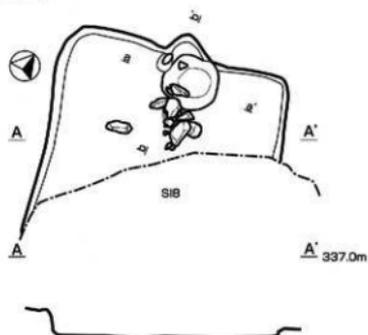
SI28 (第25・26図、PL8)

B・C-4グリッドで確認した。2.9×3.45mの長方形を呈す。確認面から床面までの深さは約15cm、主軸方向はN-90°-Eを測る。SD9がわずかに重複しており、東辺の上部が壊されている。カマドは北の中央と北東隅の中間に位置する。焚き口は西向きで、燃焼部が壁内には収まる形態であったと推測される。構築材には粘土と礫を用いており、粘土と礫で構築した袖部を検出した。また、カマドを覆うように中央にかけて複数の礫が堆積しており、カマド廃棄に伴う祭祀の痕跡と推測される。また、北辺壁際の床面直上からカマド形土器(173)が出土した。散在する炭化物の状況から、住居内で使用したものと推測される。その他、土師器皿・坏・甕・台付甕・埴等が出土している。遺物の時期は奈・平V期と比定した。カマド形土器と埴は若干新しく位置付けられる可能性が考えられるものの、明確に施設の変遷や時期差を示すものではない。遺構年代は出土遺物から、9世紀後半としておきたい。

SI29 (第26図、PL9)

G-10グリッドで確認した。調査区内は、北西辺と北東隅のみの検出であった。カマドは北西辺の北隅寄りに位置する。焚き口は南東向きで、燃焼部がほぼ壁内に収まる形態であったと推測される。袖部ははっきりせず、カマド両脇で礫を検出したが、構築材であったものかは不明である。下層は粘質の埋没谷堆積土であったため、掘り型には工具痕がはっきりみられた。とくにカマド周辺

SI25



SI25カマド

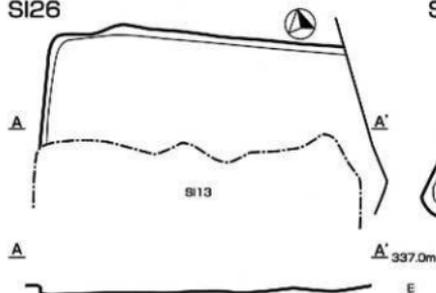


0 (1 60) 2m

0 (1 30) 1m

- 1 黒褐色土 焼土粒若干含む、炭化物少量含む。
- 2 赤褐色土 焼土粒、炭化物含む。
- 3 灰黄褐色土 焼土ブロック多く含む。
- 4 灰黄褐色土 粘土質。

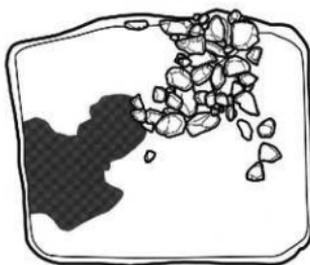
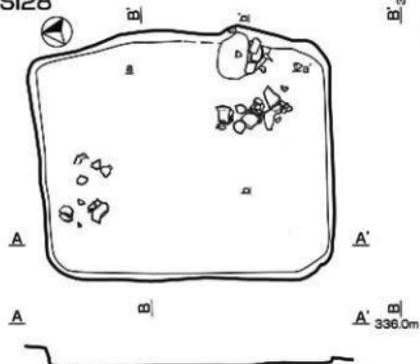
SI26



SI27



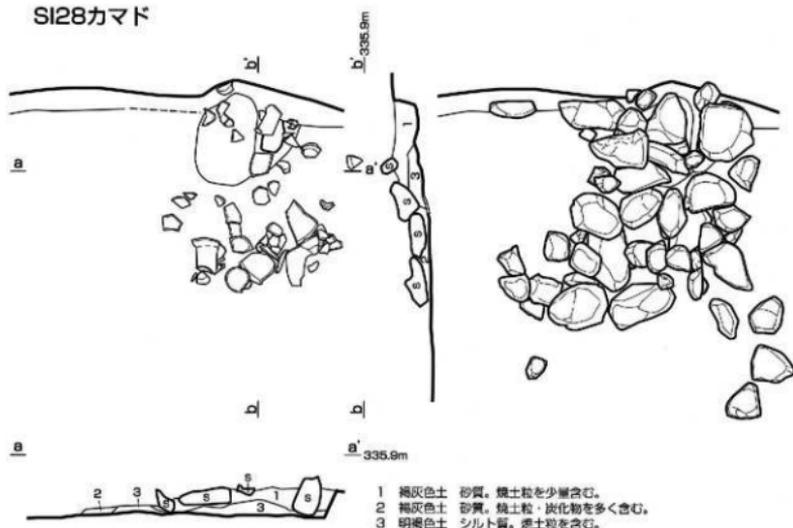
SI28



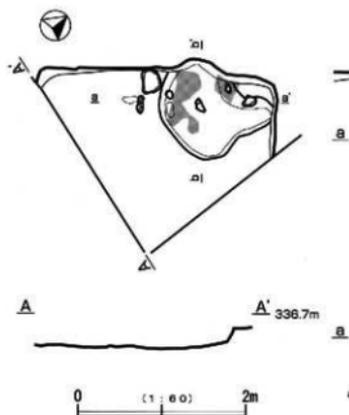
0 (1 60) 2m

第25圖 SI25・26・27・28(1)

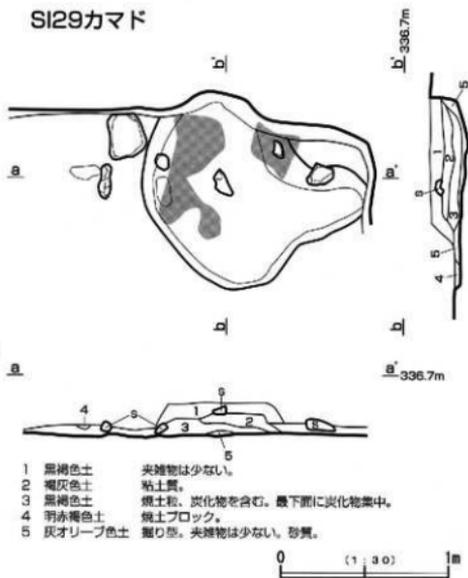
SI28カマド



SI29



SI29カマド



では、著しい凹凸が確認できた。遺物は、土師器甕片等が出土した。遺構年代は、出土遺物が少なく、明確ではないが、古墳時代後期としておきたい。

SD1 (第27図、PL9)

G-13グリッドで確認した。調査区内における規模は、長さ約3.0m、最大幅40cm、確認面からの深さはおよそ10cmを測る。やや蛇行しながらも主軸方向はW-68°-Nを測る。遺物の出土はわずかなのであるが、白磁片と手づくね土器が出土している。遺物の年代は不明である。

SD2 (第27図、PL9)

F-13~G-14グリッドで確認した。調査区内における規模は、長さ約9.9m、最大幅90cm、確認面からの深さはおよそ20cmを測る。ほぼ直線に延びており、主軸方向は、N-48°-Eを測る。出土遺物はなく、時期は明確ではない。

SD3~7 欠番 (調査時の遺構観察により、近代の耕作に伴う溝と断定したため。)

SD8 (第27図、PL9)

D-9~E-6グリッドで確認した。調査区内における規模は、長さ約9.2m、最大幅約60cm、確認面からの深さは約10cmを測る。若干の蛇行がみられるものの、ほぼ直線方向に延びており、主軸方向はW-20°-Nを測る。出土遺物はなく、遺構年代は明確ではないが、近世頃と位置付けておきたい。

SD9 (第27図、PL9)

C-3~7グリッドで確認した。調査区内における規模は、長さ約9.3m、最大幅1.2m、確認面からの深さはおよそ10cmを測る。緩やかに左へ湾曲しており、調査区内ではW-7°-Nの方向へ延びている。遺物は須恵器蓋、土師器坏・甕・手づくね土器が出土した。遺物の時期は、奈・平V期に比定し、遺構年代は、9世紀後半と推定しておく。

SD10 (第28図、PL10)

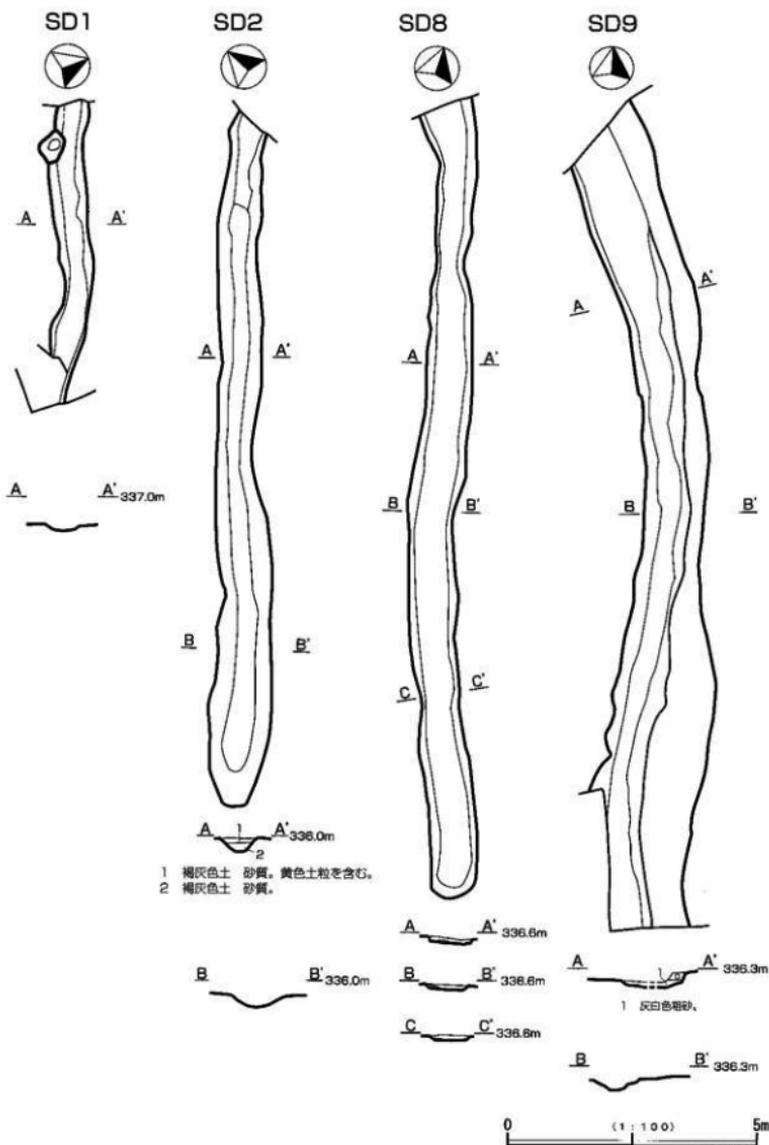
G-16グリッドで確認した。調査区内における規模は、長さ約7.0m、最大幅55cm図る。調査区内ではW-28°-Nの方向へ延びていた。埋没谷の上面を掘削しており、遺物は、古墳時代前期の台付甕1点が出土した。遺物が少なく、遺構の年代は明確ではないが、古墳時代前期と位置付けておきたい。

SD11 (第28図、PL10)

F-15・16~G-15グリッドで確認した。直線部はW-47°-N方向へ延び、確認面からの深さは38cmを測る。埋没谷上層を掘削してへの字状に屈曲している。SD12とは同一遺構であるが、調査区を分けて段階的に検出したため、遺構番号を分けている。出土遺物はなく、遺構年代は明確ではないが、水田跡の一部と推測される。

SD12 (第28図、PL10)

F-16グリッドで確認した。確認範囲では長さ約2.3m、最大幅約1.4m、確認面からの深さは約20cmを測る。SD11と同一遺構であり、主軸方向はN-82°-Eを測る。埋没谷上層を掘削して構築されている。出土遺物はなく、遺構年代は明確ではないが、水田跡の一部と推測される。

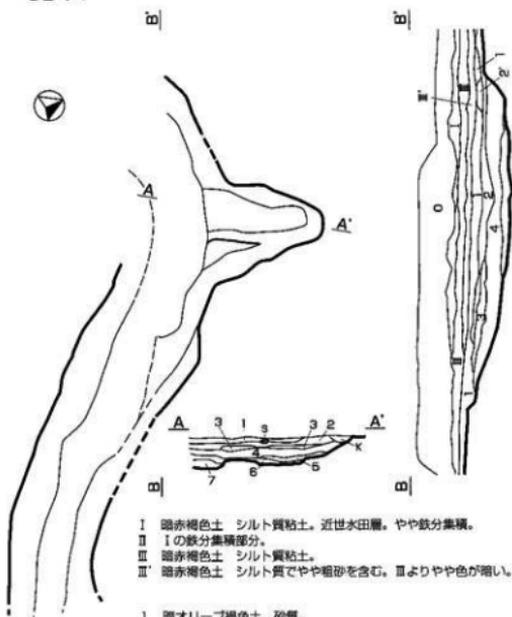


第27図 SD1・2・8・9

SD10



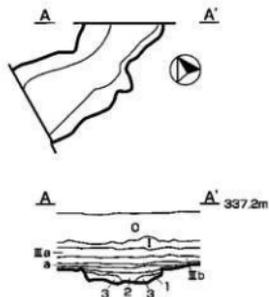
SD11



- I 暗赤褐色土 シルト質粘土。近世水田層。やや鉄分集積。
 II Iの鉄分集積部分。
 III 暗赤褐色土 シルト質粘土。
 III' 暗赤褐色土 シルト質でやや粗砂を含む。IIIよりやや色が暗い。

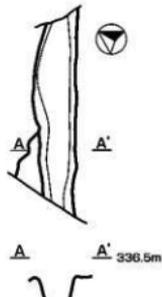
- 1 暗オリーブ褐色土 砂質。
 2 黒褐色土 シルト質。水田層か。
 2' 黒褐色土 シルト質。畦畔状の高まり。
 3 オリーブ褐色土 粗砂。
 4 暗オリーブ褐色土 粗砂。

SD12

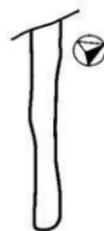


- 1 灰オリーブ色土 粗砂質。
 2 黄灰色土 シルト質粘土。
 3 暗灰黄色土 砂質。

SD13



SD14



0 (1:80) 4m

第28図 SD10・11・12・13・14

SD13 (第28図、PL10)

F-15・16グリッドで確認した。調査区内における規模は、長さ約3.3m、最大幅約60cm、確認面からの深さは約40cmを測る。主軸方向はW-27°-Nを測る。埋没谷上層を掘削して構築されている。出土遺物はなく、遺構年代は明確ではないが、水田跡の一部と推測される。

SD14 (第28図、PL10)

F-14・15グリッドで確認した。調査区内における規模は、長さ約2.2m、最大幅約45cm、確認面からの深さは約10cm、主軸方向はW-25°-Nを測る。出土遺物はなく、遺構年代については不明である。

SD15

遺構図はないが、埋没谷の堆積の一部で、古墳時代前期の遺物を検出している。

SK1 (第29図、PL12)

G-8・9グリッドで確認した。北西・北東壁が調査区外にかかるが、遺構プランは、やや隅丸となる不整形長方形を呈すと推測される。検出範囲での規模は約3.0×2.2m、確認面からの深さは約35cmを測る。底面はやや固くしまり、住居跡である可能性も窺えるが、カマドは確認していない。遺物は少なく、覆土中から土師器皿・壺が出土した。遺物の時期は奈・平V期に比定した。遺構年代は、出土遺物から、9世紀後半としておきたい。

SK2 (第29図、PL12)

B-4グリッドで確認した。長径1.9m、短径1.7mのやや楕円形で、確認面からの深さは約15cmを測る。出土遺物はなく、遺構年代は不明である。

SK3 (第29図)

F-12グリッドで確認した。壁際で検出し、調査区外へ展開する。楕円形を呈すと思われ、確認範囲では、幅約1.0m、確認面からの深さは約15cmを測る。出土遺物はなく、遺構年代は不明である。

集石遺構 (第29図、PL12)

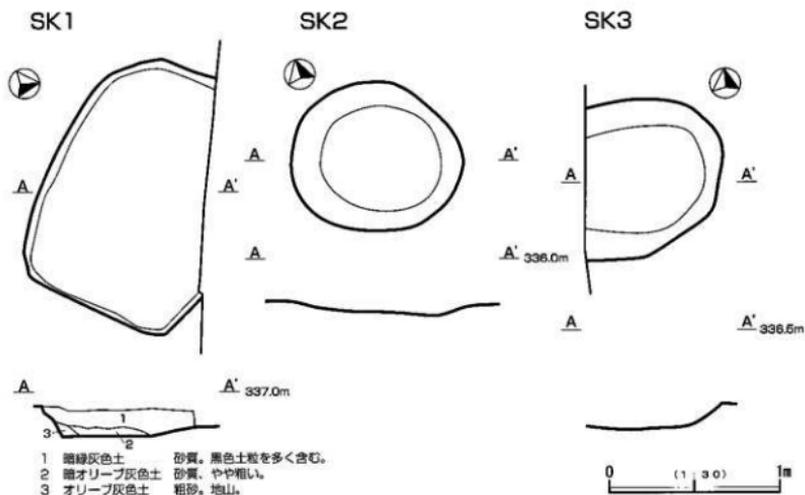
F-12・13グリッドで確認した。形状は不整形で、大量の礫が集積していた。手づくね土器6点が混在しており、何らかの祭祀行為の痕跡であったと推測される。その他、遺物は土師器杯、須恵器高杯が出土した。遺物の時期は、奈・平IV期に比定した。遺構年代は、出土遺物から9世紀前半と推定しておく。なお、調査区西壁の断面図では、水田跡の畦畔に伴う溝（SD2の延長部か）と重複する位置に相当する。水田跡との重複関係から、水田の年代を古墳中期以降〜9世紀前半頃と推定できるが、検出状況が明確ではないため、可能性を示すまでに留めておきたい。

ビット (第30図、PL10)

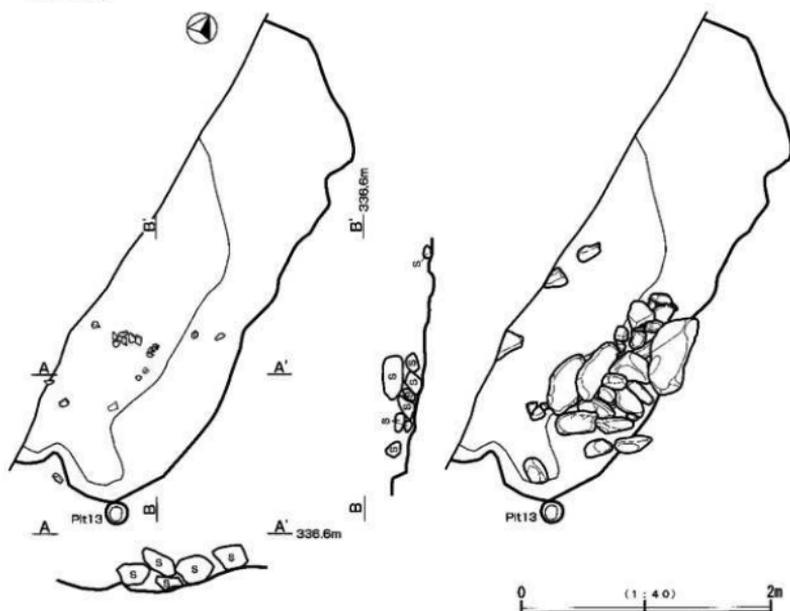
F・G-10~15において、ビット13基を確認した。遺物は、Pit 7でカマド形土器の小片が出土したのみであった。遺構年代は明確ではなく、Pit 7は9世紀後半頃とし、それ以外は不明である。

埋没谷 (第30図、PL13)

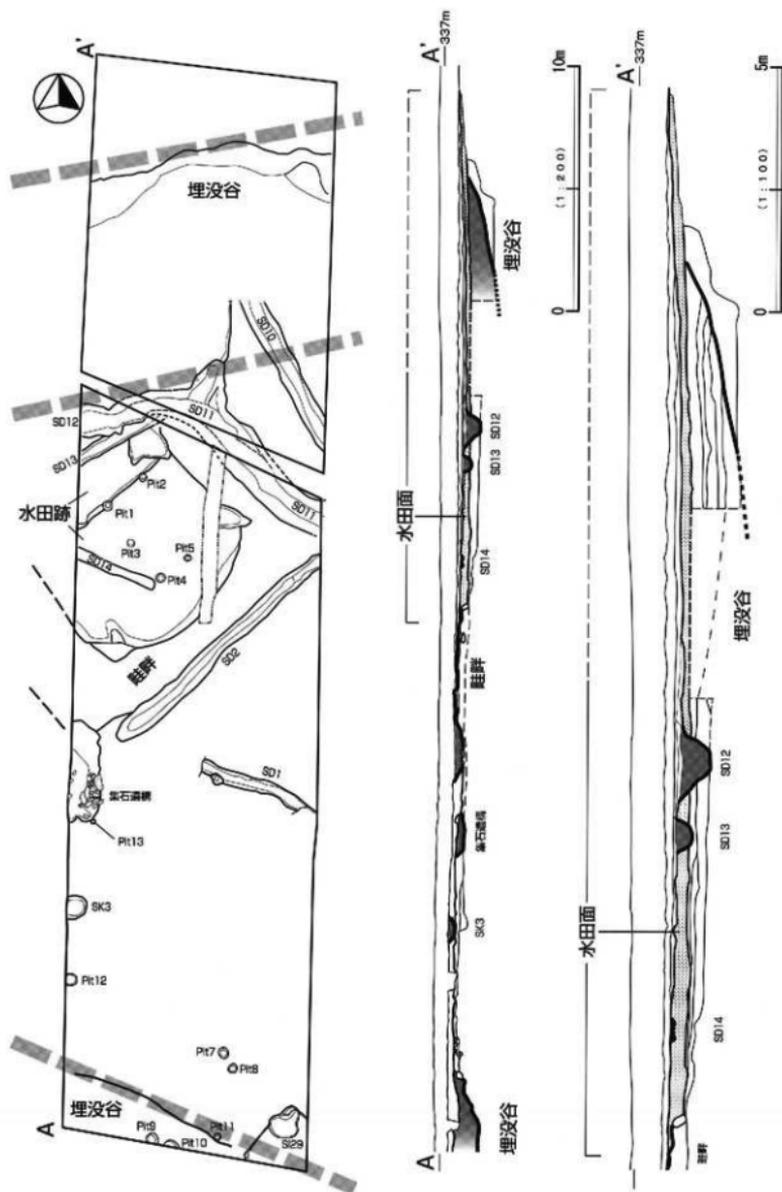
F・G-10とF・G-16~18で埋没谷の落ち込みを確認した。遺物は、土師器高杯・壺・壺・台付壺などが出土した。遺物の時期は、弥生時代後期から古墳時代中期にかけての所産である。埋没時期については、数段階の堆積と浸食を経て、古墳時代中期には埋没していたと推測される。



集石遺構

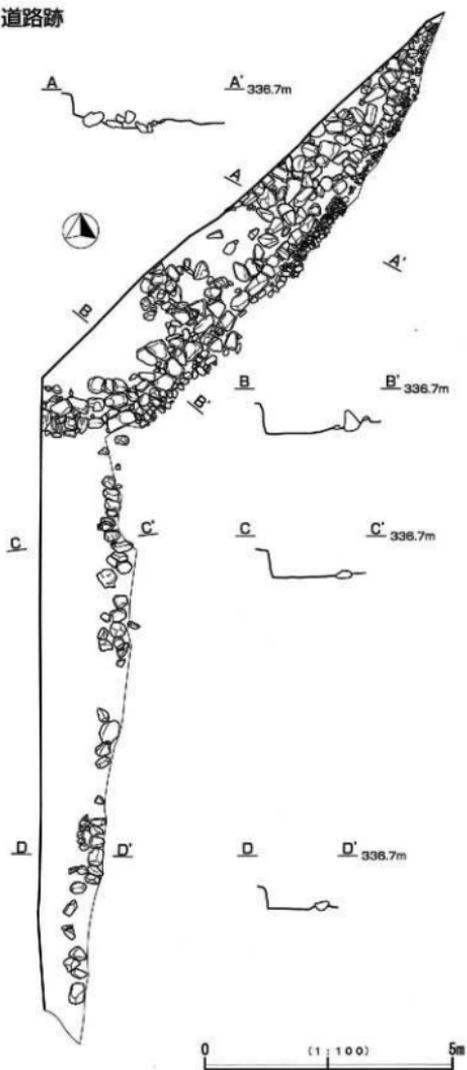


第29図 SK 1・2・3、集石遺構



第30図 水田跡、埋没谷

道路跡



第31圖 道路跡

水田跡 (第30図、PL11)

F・G-13で確認した。土壌分析によってイネのプラントオパールを検出したことから、水田跡と断定した。畦畔と溝 (SD2・11・12・13) で囲まれており、確認範囲では約20㎡を測る。軸方向は北西向きであり、SD2はN-48°-E、SD11はW-47°-Nを測る。内部は小さな段差で2枚に区画されており、さらに断面観察から北西側へ展開していたと推測される。遺構年代は明確ではないが、埋没谷の堆積土を掘削していることから、古墳時代中期以降に構築されたとしておく。

道路跡 (第31図、PL11)

調査区西端で確認した。調査地点の地形に沿うように屈曲しており、調査範囲内では、最大幅約2.0m、南から北へ約12m、北東方向へ転じて10.5mを測る。土固めのためか、礫を敷き詰め、端部は礫の面を揃えていた。遺物の出土はなかった。構築年代は不明であるが、おそらく近世の道路跡であり、耕作地の拡大によって埋没したものと推測される。

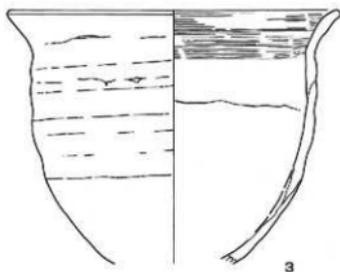
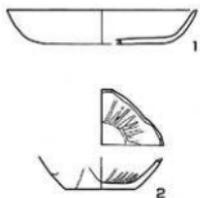
2. 遺物

本調査区の出土遺物は、弥生時代～中世にかけての所産である。土師器を主体としており、弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代末～8世紀前半、9世紀代を画期として、断続的な変遷をみることができる。ここでは土器 (土師器の什器を中心に) を時期ごとにまとめ、各段階で伴出する特徴的な遺物について触れておく。尚、遺構及び遺物の時期変遷については、第Ⅶ章で考察する。

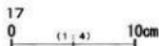
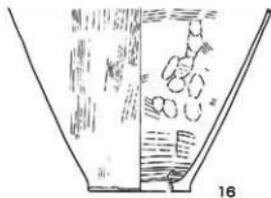
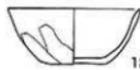
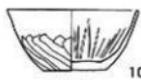
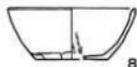
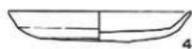
〔弥生時代後半〕 断片であるが、壺・壺などが、埋没谷・4Trから出土している。編年では弥生5期に比定した。甕類では刻み目口縁があり、頸部がゆるやかに外反するもの (213・214) と、小型で内外ハケメ調整されているもの (250) がみられる。また胴部の断片であるが、外面に櫛描波状文があるもの (208)、刺突文があるもの (256) などがみられる。壺類では、折返し口縁 (207・218)、やや受け口状の口縁をなすもの (216)、さらに外面に円形浮文、内面にハケメと櫛描波状文の整形がある土器 (255) などがみられる。他、甌または瓶形土器と思われる底部を穿孔したものの (230) も出土している。

〔古墳時代前期後半～中期初頭〕 高坏・S字状口縁台付甕 (S字甕)・球胴壺・直口壺 (埴)・鉢などがあり、埋没谷 (SD15を含む)、4Trから出土している。編年では古墳Ⅲ～Ⅴ期、4世紀後葉～5世紀前半頃の所産と推定している。高坏は甕壺と同様の胎土であり、脚部の穿孔は3つのものと、4つあったと推察されるのがみられる (209～211)。甕類では、S字甕の口縁部 (197)、台付甕の台部 (196・198・226・227・238)、がある。S字甕口縁外面には刺突はみられず、台部の縁端部には内側に折返しが見られる。他、単純口縁で胴部が球胴を呈し、外面に横位のハケメ調整を施したものの (220)、小型で口縁がややS字状を呈し、胴部はハケメ調整されているもの (206) などがみられる。壺類は球胴を呈し、口縁が直線的に開く単純口縁壺と、口縁部がやや外反しながら開く二重口縁壺がみられる。単純口縁壺では口縁が短いもの (204) と、長いもの (217) がある。二重口縁壺では外面だけが有段のもの (202) と、段が弱いもの (203) があり、成形技法の簡略化、粗雑化が窺える。また加飾口縁壺 (215) についても同様で、断片であるが、口縁部を縄文施文して棒状浮文の代わりに沈線をかいて簡略化しており、両器種が本段階で退化・減少していく傾向が

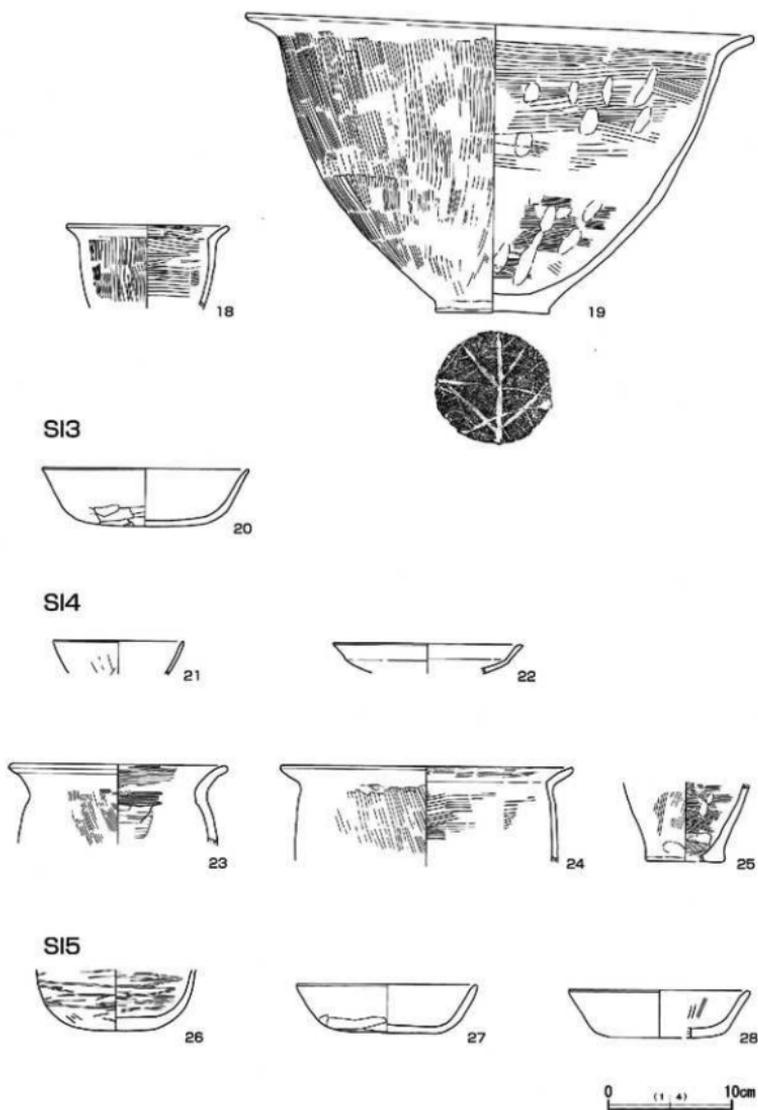
SI1



SI2



第32図 遺物(1) SI1・2⊙



第33圖 遺物(2) S12②・3・4・5①

表れている。その他、口縁部が僅かに外反し、底部に凹みがある直口壺(埴、205)が出土した。

【古墳時代後期】 坏・甕があり、SI11・27から出土している。編年では、古墳Ⅲ期、7世紀末頃の所産と推定している。古墳坏は胎土が厚く若干内湾しながら立ち上がり、端部が外反するもの(62)がある。甕類では、長胴甕で口縁部が短く、歪みが大きいもの(29)、口縁部内側に稜が明確ではなく、緩やかに外反するもの(30)、小型甕で、底部に指頭によってやや脚状に成形されたもの(34)等がある。その他、断片であるが、口縁部が長く鳩状に開く器形のもの(35)や円筒形土器(164)、須恵器蓋(189)・坏(162)・横瓶(245)・長頸壺(246)などが伴出している。

【奈・平Ⅰ期】 坏・甕があり、SI3・5・6・7・8・11・17から出土している。時期的には編年から7世紀末～8世紀初頭頃の所産と推定しているが、前段階及び次段階との連続性がみられ、編年設定時期も重複するため、年代決定が困難な段階である。坏は、半球形の坏と盤状の坏がある。半球形の坏では、仏鉢状で底部が丸底に近く、胎土が緻密で内外面にミガキ調整されるもの(26)、粗製で内外面にヘラ削り・ナデ調整がみられるもの(49・61・145)がある。尚、希少であるが、手づくねで底部に木葉痕がみられるもの(117)も伴出している。盤状の坏では、底面形状が弧状のものと平底のものがあり、前者では体部の端部がやや外反するもの(20・63・105～107)と、体部が外反しながら開いて端部が内湾し、緻密なミガキ調整されたもの(114)がみられる。後者では、胎土がやや粗く、底部から体部がほぼ同じ厚みで直線的に立ち上がるもの(27・28・144)がみられる。その他、高台貼付後に底面を回転ヘラ削りして調整している高台付坏(115)等もみられる。甕は、胴部が直線的に延びる長胴甕(116)と、底部から胴部下半までが開く鉢状の甕(40・41)がある。また、口縁が外反する球胴甕(109・110)等もこの段階に位置付けておく。本段階の伴出遺物としては、須恵器蓋(142・143)・坏(68・104・108)・甕(59・126)、手づくね土器(50)がある。

【奈・平Ⅱ期】 坏・盤・甕・壺などが、SI1・6・11・16・20・21から出土している。時期については前述のとおりであるが、本段階は編年から、8世紀前半の所産と推定している。坏は、盤状の坏が主体となる段階である。底部は平底になって内外面がヘラ削り・ナデ調整が施されるもので、体部がやや内湾しながら立ち上がるもの(36・124・125)や、全面にヘラミガキ調整を施したもの(130)等がみられる。甕は、長胴甕が主体となる段階で、前段階よりも口縁がやや長くなり、直線的若しくはやや外反すること、頸部内面の稜が明確なること、底部内面が平坦を成すことなどが特徴としてみられる。さらに口縁の厚みが不均等で、内外面をナデ調整したもの(135)と、ほぼ均等な厚さで端部が角型もしくは丸くなるもの(54・55・112)などがみられる。また、やや球胴を呈し、輪積痕がみられ、外面をナデ調整されている甕(3)、口縁が短く、口径が胴部最大径よりも小さくなる球胴甕(53)がある。これらの器形は、郡内地方で出土するものと類似している。本段階の伴出遺物としては、甕類と同様の胎土で弧状の底部を成す鉢(39)や、破片であるが、盤(38・60)、須恵器坏(52)・甕(59)、手づくね土器(128・141)がある。

【奈・平Ⅲ期】 甲斐型坏・甕の成立時期とされるが、本調査区では同時期に比定する遺物はほとんど出土していない。尚、時期的には編年から8世紀後半に推定しているが、同地域の空白期間となっている。

〔奈・平Ⅳ期〕 蓋・皿・坏・甕・壺などが、SI 2・10・11・12・14・18・19・集石遺構から出土している。編年から9世紀前半の所産と推定している。蓋は、ツマミの断面が方形に近いもの(100)がみられる。皿は、底部と体部下半を回転ヘラ削りされ、内面みこみ部と体部の境目が明確なもの(4)がみられる。坏は、体部内面に暗文があり、底部および体部下半に横位のヘラ削りが施されるもの(7・8・64・85)と、斜位のヘラ削りが施されるもの(10・11・12・101)がみられる。特徴としては底部ヘラ削り後も糸切痕を残すものが多くみられる。またほぼ前段階の傾きのまま、法量が縮小化したもの(7・8・64・65)と、底径が縮小して底部からの立ち上がりやや曲線的になったもの、若しくは稜がみられるもの(102・176・177)等がある。甕は、長胴甕(69・72・77)が出土した。外面を縦方向、内面を横方向にハケメ調整する典型的な甲斐型甕の技法がみられるようになり、口縁部が短く、全体的に器厚が薄いことが観察できる。本段階の伴出遺物としては、須恵器蓋(15・118)・坏(14)、灰釉陶器椀(163)がある。また、墨書土器「路」(10)が出土している。

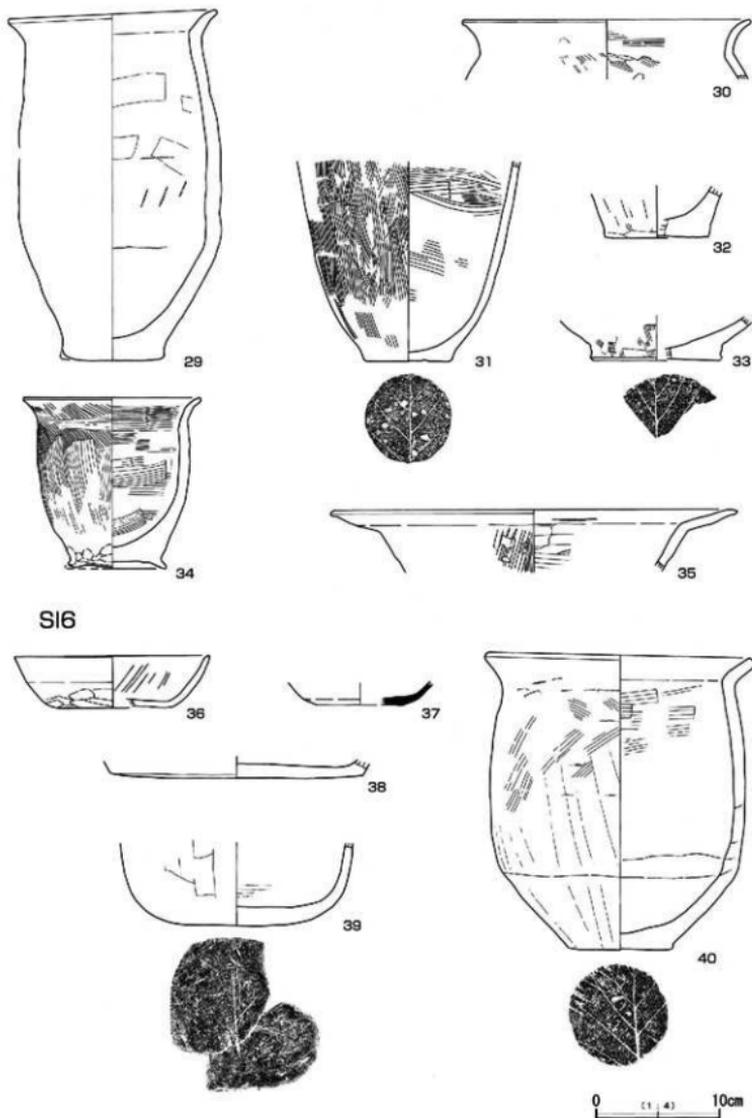
〔奈・平Ⅴ期〕 皿・壺・坏・甕などが、SI 4・13・15・23・24・28から出土している。編年から9世紀後半の所産と推定している。皿は、内面みこみ部と体部の境目が曖昧なものが多くなる段階で、内面の暗文の主体となる同心円状暗文のあるもの(79・103・151・165)と、放射状暗文が残るもの(166)がみられる。また暗文がなく、底部に手持ちヘラ削りが施されたもの(81)もある。坏は、さらに底径が小さくなり、体部内面の暗文の衰退とともに、やや粗い成形となる。体部外面のヘラ削りが底部から上半まで至るもの(152・155)が多くなり、口縁部が玉縁化する兆しもみられる。また、削り出し高台坏(156・234～236)があり、底部及び体部外面下半に回転ヘラ削りが施され、内面に暗文がみられる。甕は、口縁部が肥厚し、やや外反するもの(149・160)、小型で口縁部が肥厚していないもの(93・171)がみられる。本段階の伴出遺物としては、須恵器甕(96・161)、灰釉陶器椀(158)、手づくね土器(150)がある。

〔奈・平Ⅵ期〕 甕・埴・台付甕・カマド型土器などがあり、SI 13・28から出土している。編年から10世紀前半の所産と推定している。坏等の什器類は、本段階に比定するものはみられなかった。甕では、断片であるが口縁部が肥厚して面をなすもの(90)があり、その他は、台付甕(170)・埴(172)、カマド型土器(97・98・173)等が本段階に属する可能性がある。本調査区ではこの段階の遺物は比較的出土量が少なく、遺構の主体的時期を示す遺物はないといえる。

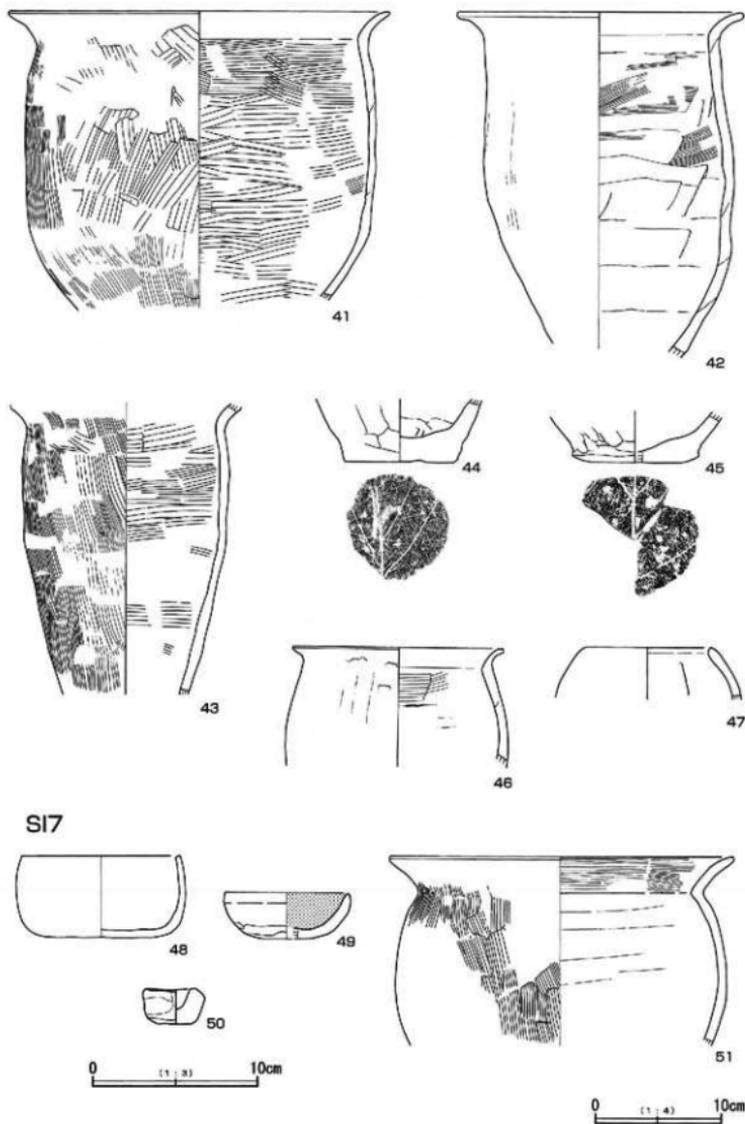
以下、上記で示した伴出遺物、及び特徴的な遺物について触れておく。

墨書土器・線刻土器 墨書土器のうち、判読できる文字としては「路」・「石」がある。「路」はSI 2から1点(10)、「石」はSI 13から2点と遺構外から1点(79・87・244)が出土した。他、判読不明なものでは、SI 2で1点(11)、遺構外で1点(242)あり、計6点が出土している。墨書はいずれも土師器坏の底部に書かれたもので、時期については奈・平Ⅳ・Ⅴ期(9世紀代)の所産である。

線刻土器は、土師器では、SI 13・18、SD 24、遺構外から各1点ずつ(99・120・157・243)、須恵器ではSD 9から1点(189)が出土している。文字はなく、「×」や「φ」のような記号状の



第34圖 遺物(3) SI5②・6①

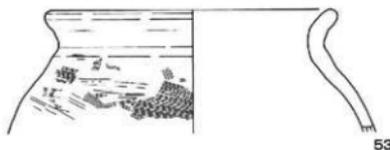


第35圖 遺物(4) SI6②・7

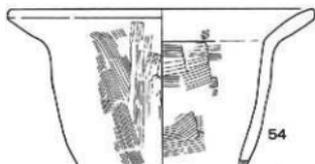
S18



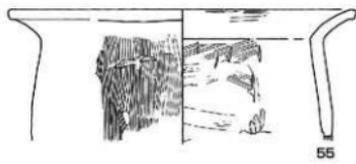
52



53



54



55



56



57



58



59



60

0 (1:3) 10cm

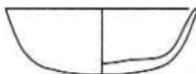
S11



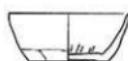
61



62



63



64



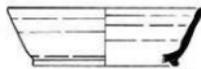
65



66



67

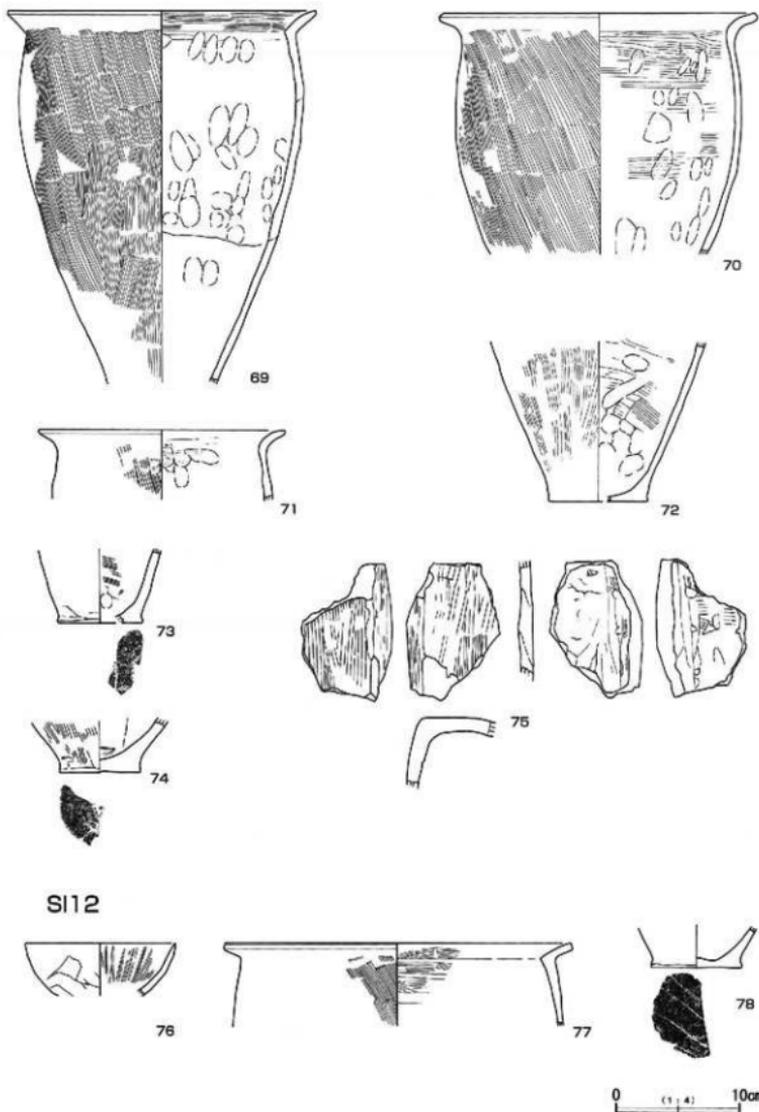


68



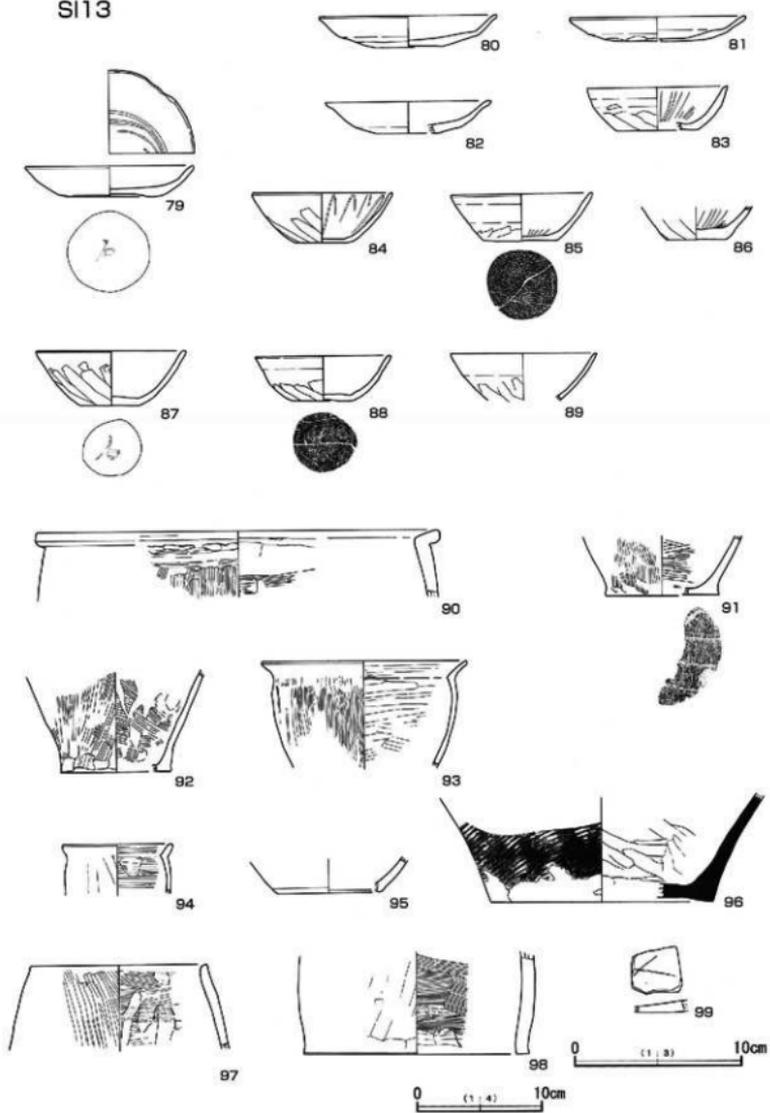
0 (1:3) 10cm

第36図 遺物(5) S18・11①



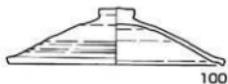
第37圖 遺物(6) SI11②・12

SI13



第38圖 遺物(7) SI13

SI14



100



102



101



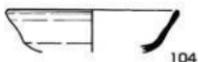
SI15



103



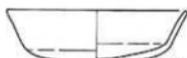
SI16



104



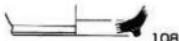
105



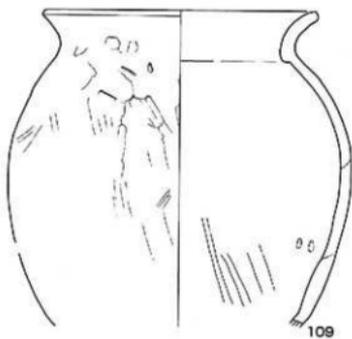
106



107



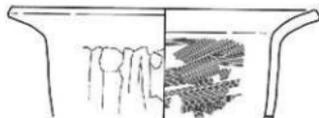
108



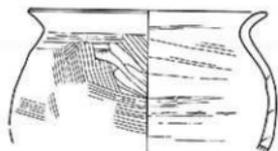
109



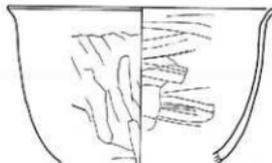
111



112



110

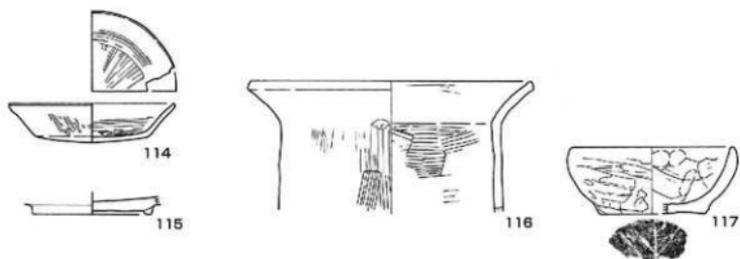


113

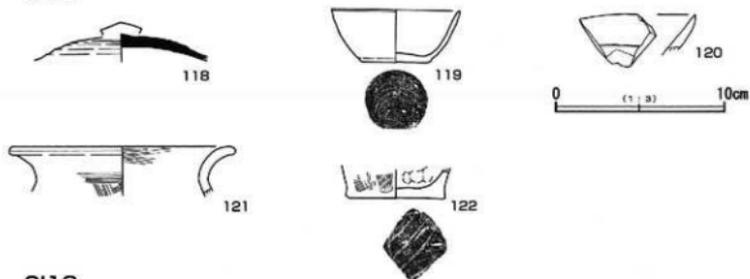


第39図 遺物(8) SI14・15・16

SI17



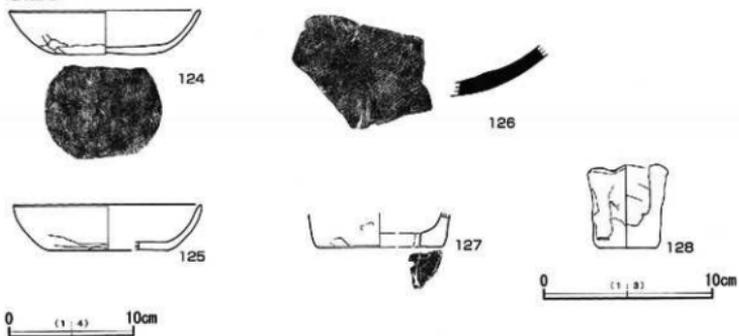
SI18



SI19

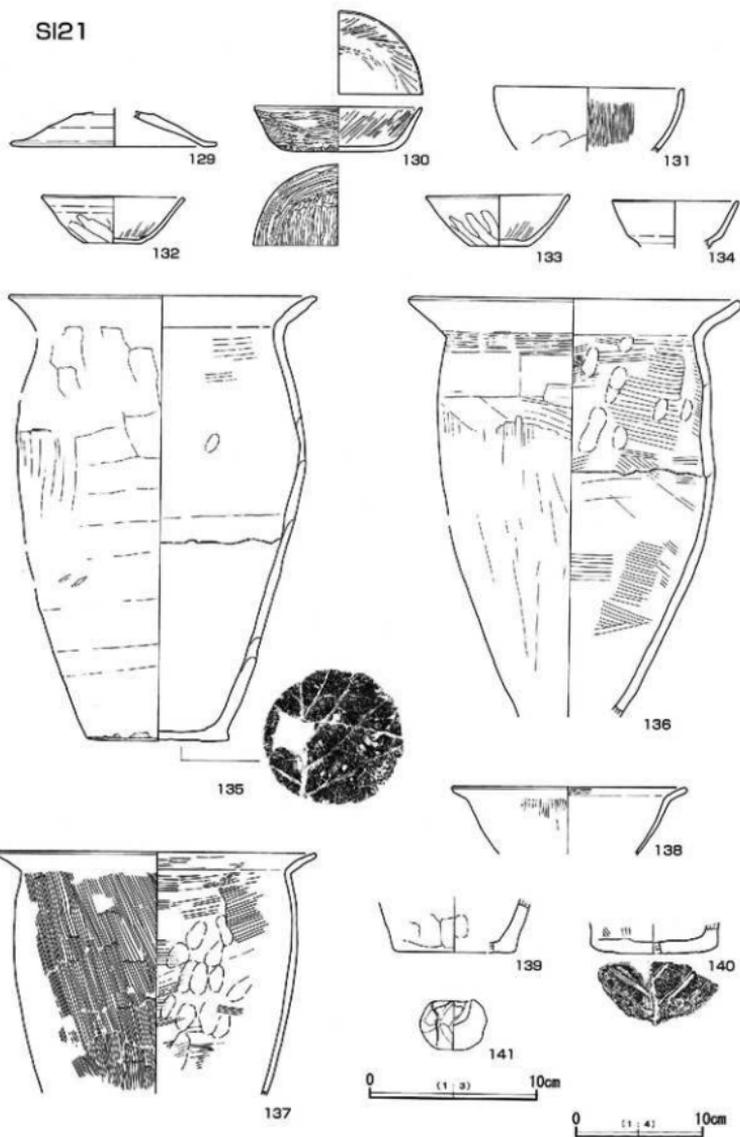


SI20

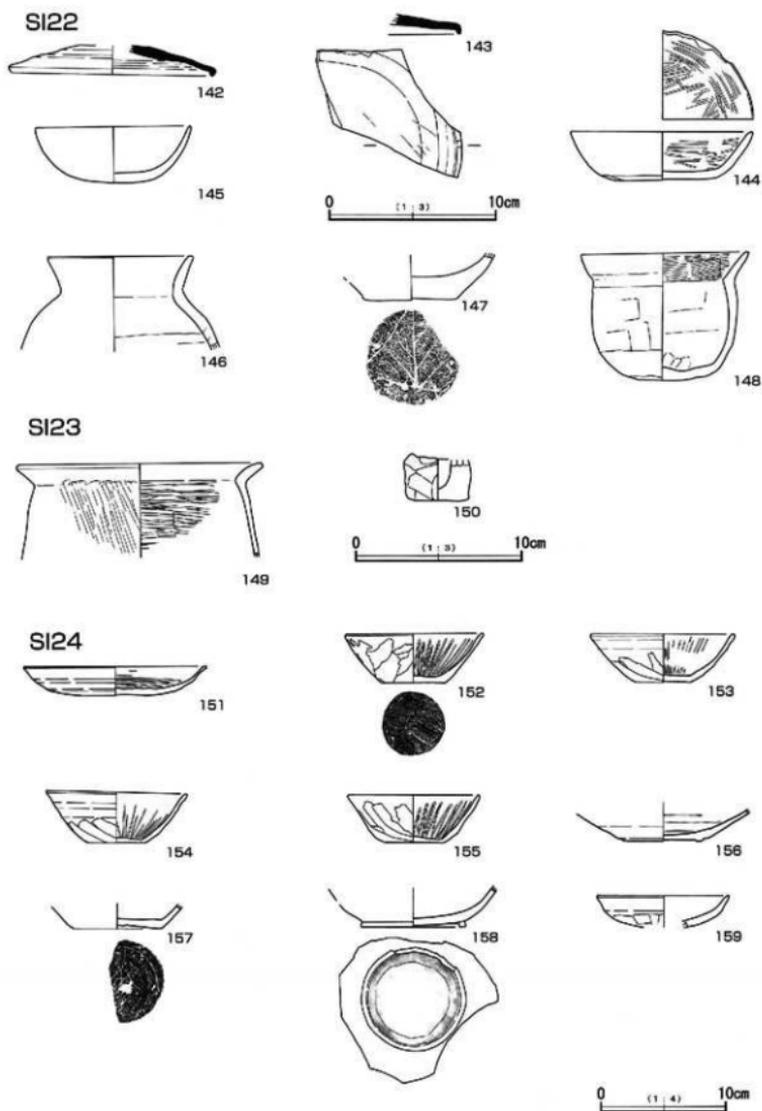


第40図 遺物(9) SI17・18・19・20

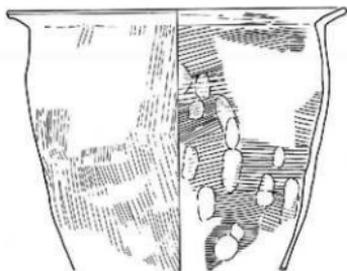
SI21



第41図 遺物(10) SI21



第42図 遺物(1) SI 22・23・24 ①

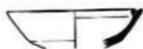


160



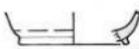
161

SI25



162

SI26



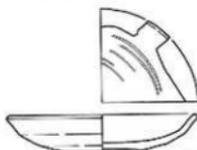
163

SI27



164

SI28



165



166



167



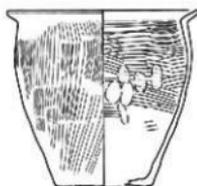
168



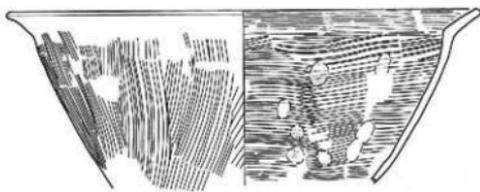
169



170



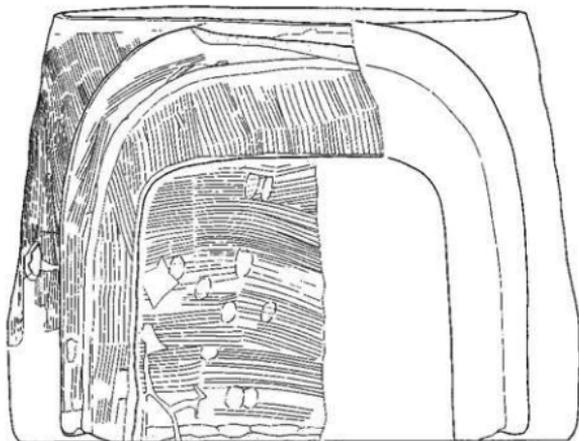
171



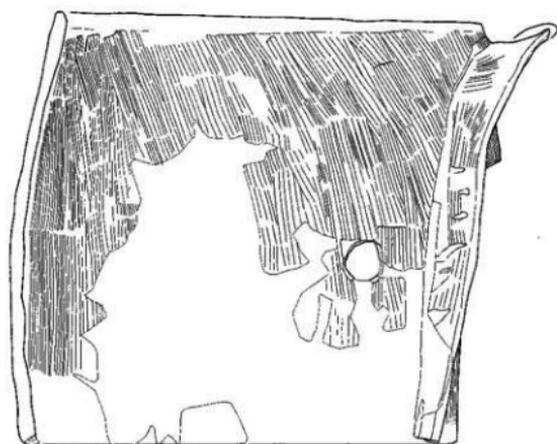
172



第43図 遺物(2) SI 24②・25・26・27・28①



173



0 (1:4) 10cm

第44図 遺物(3) S128②

SI29



174



175

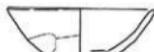
集石遺構



176



177



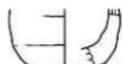
178



179



180



181



182



183



184



185



186

SD1



187



188



SD9



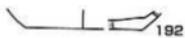
189



190



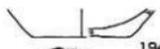
191



192



193



194



195



第45図 遺物(4) SI29、集石遺構、SD1・9

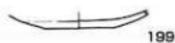
SD10



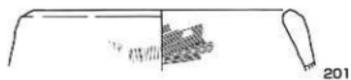
SD15



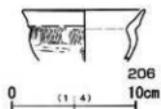
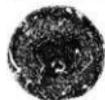
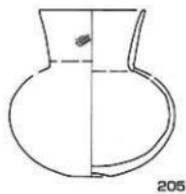
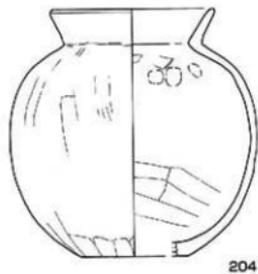
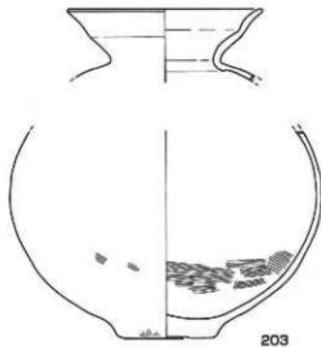
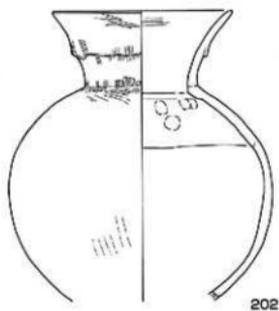
SK1



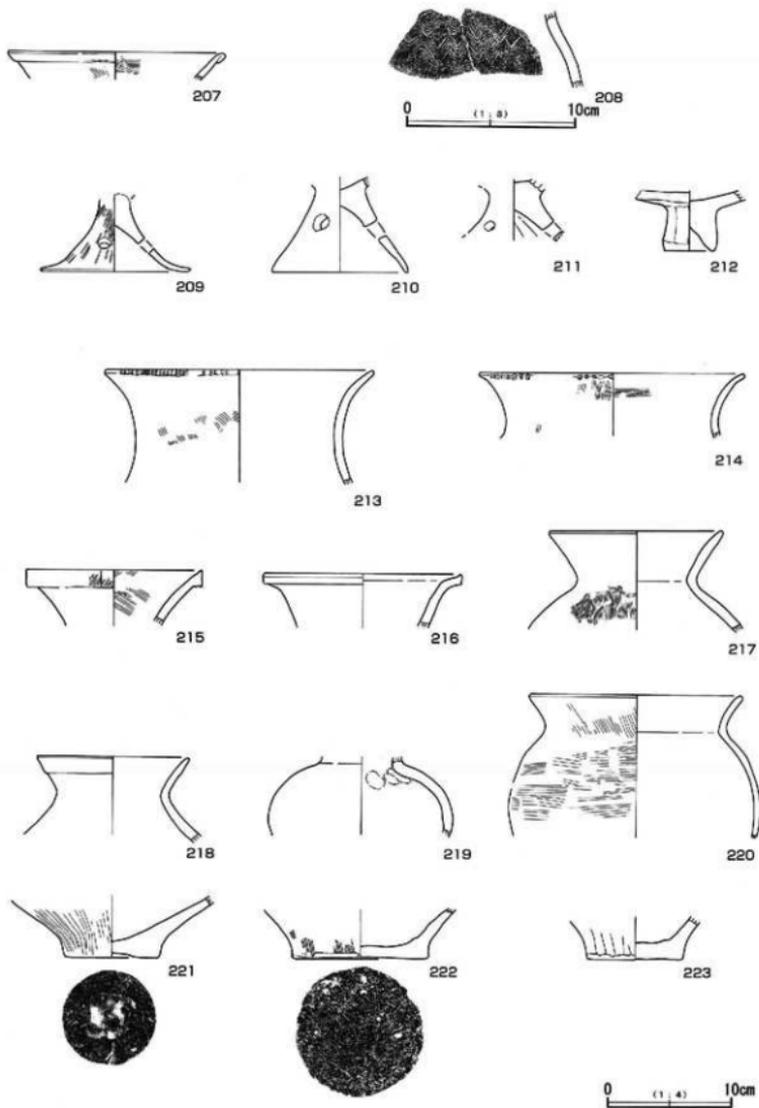
Pit7



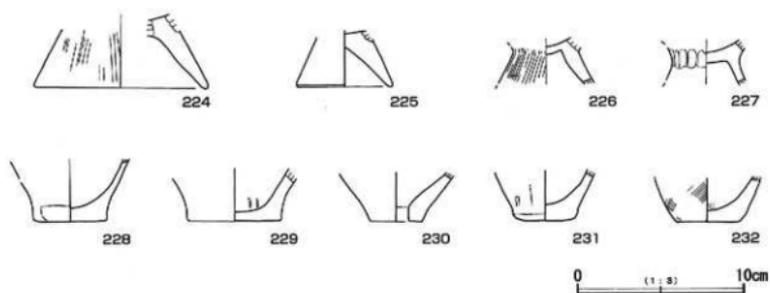
埋没谷



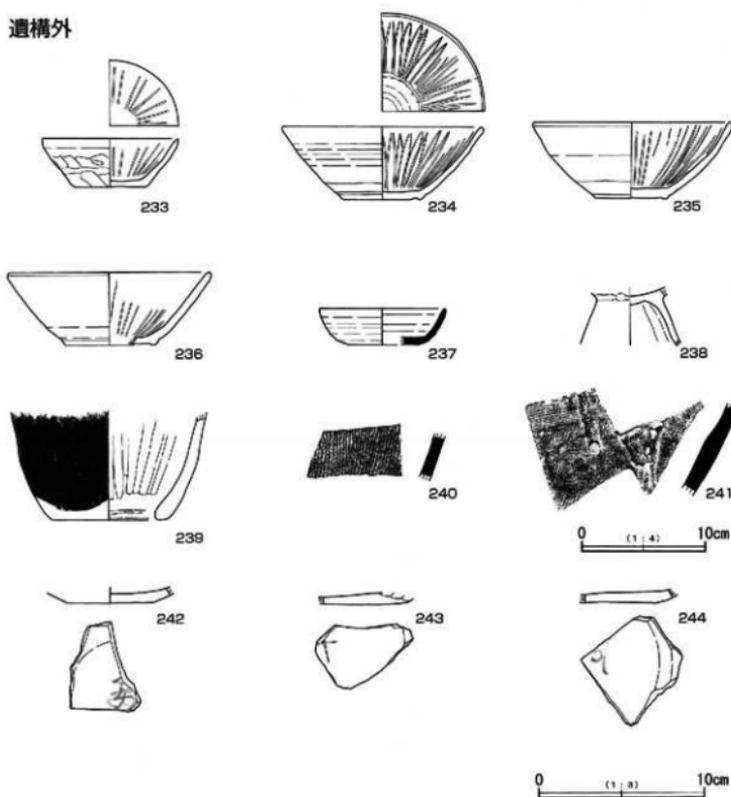
第46図 遺物(5) SD10・15、SK1、Pit7、埋没谷①



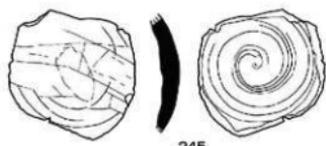
第47図 遺物(6) 埋没谷②



遺構外



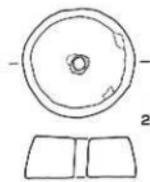
第48図 遺物(17)埋没谷③、遺構外①



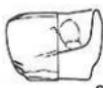
245



246



247

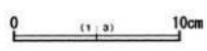


248

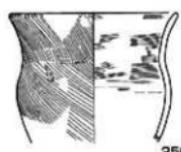
2Tr



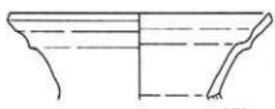
249



4Tr



250



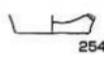
251



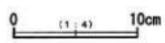
252



253



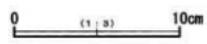
254



255



256



第49図 遺物(14) 遺構外②、2・4Tr

線刻がみられた。

須恵器 いずれも断片であるが、蓋・坏・高坏・横瓶・壺・壺があり、SI2・6・8・11・13・16・18・20・22・24・25・28・集石遺構・SD9及び遺構外から出土した。県内で出土する須恵器は、所産地及び所産時期が明確ではないため、土師器に伴出する時期に位置付けている。尚、坏・壺には転用・加工の痕跡がみられるものがあり、これについては第VI章で後述する。

灰軸陶器 少量かつ断片であったが、SI24・26から出土した。奈・平V期の遺物に伴出しており、短い角高台で内面は全面施軸され、トチン痕がみられるもの(158)と、外面に回転ヘラ削り調整が施され、三日月高台で高台外面下方の稜が明確なもの(163)がみられる。産地及び時期については明確ではない。また所産時期との時期差があることが推察されるもの、前者は黒笹14号窯式期、後者は大原2号窯式期に比定しておきたい。尚、158は転用硬で、内面及び底部に擦痕、底面に墨痕がみられる。

白磁 188は碗の断片であり、小片1点がSD1で出土した。小片のため産地及び時期は明確ではないが、13世紀頃の所産と推察される。

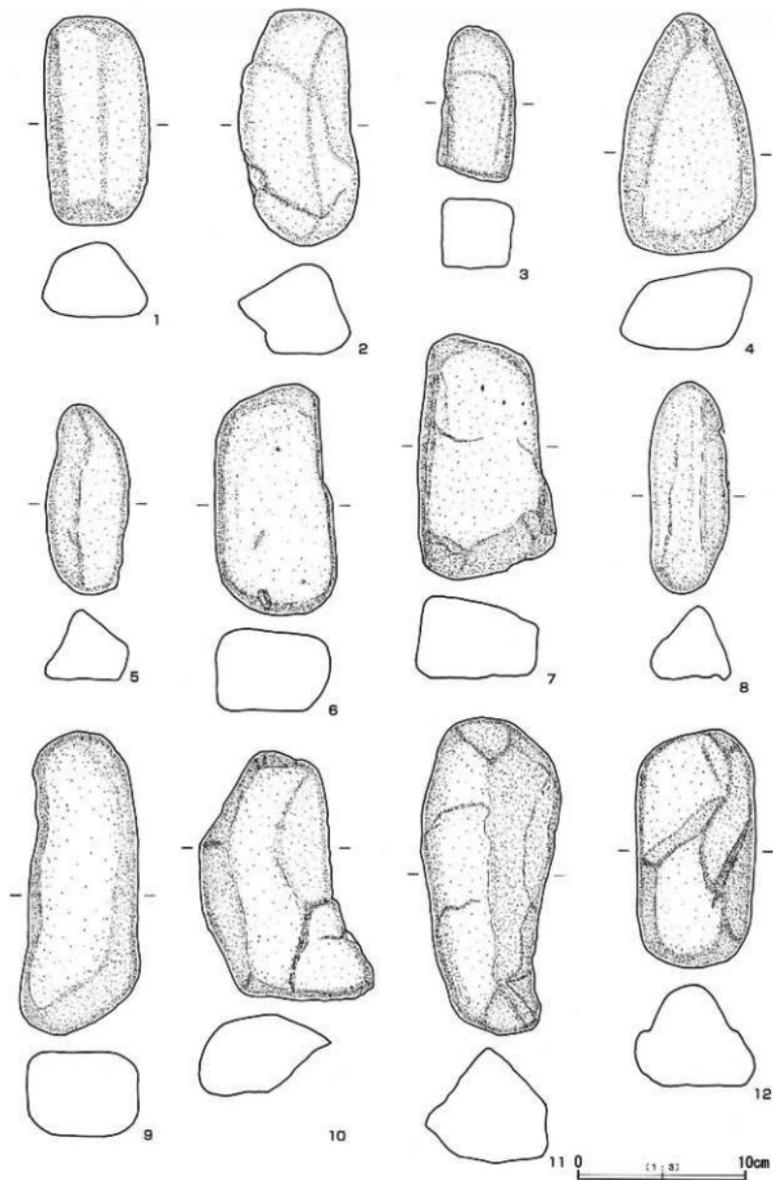
手づくね土器 SI7・17・20・21・23、集石遺構、SD1・9及び遺構外から出土している。伴出時期は、奈・平I期、V期であるが、時期による器形の変化は明確ではない。器形の特徴としては、器高が3cm前後で、底部の厚さと器高の割合が、ほぼ1:1となるもの(141・183~186)とほぼ1:2と器高がやや低いもの(187)、体部が長く筒状を呈すもの(128)、底径より口径が大きく、体部がやや内湾するもの(182)、底部に木葉痕があるもの(117・248)などがみられる。また、手づくねでつくられ、外面をヘラ状工具によりナデ状に調整されているもの(50・184)もみられる。

土製品 遺構外であるが、紡錘具が1点出土している(247)。断面形はやや台形を呈し、大きさは6.7×5.6cm、厚さ2.4cm、穿孔径7mm、重さ143.4gを測る。胎土は明赤褐色で、ヘラ状工具による整形痕がみられる。

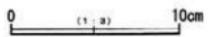
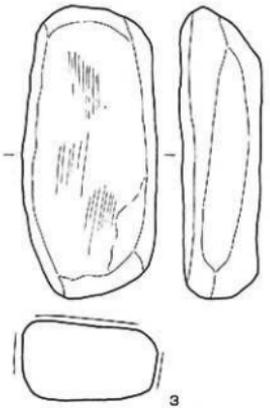
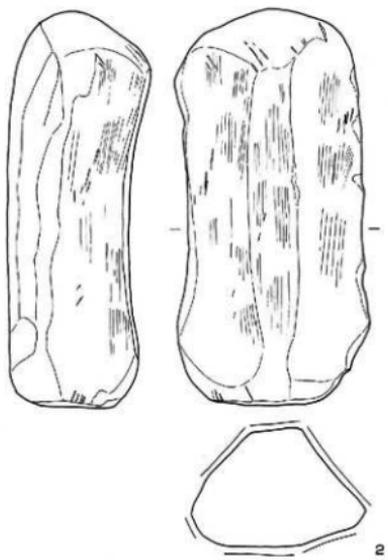
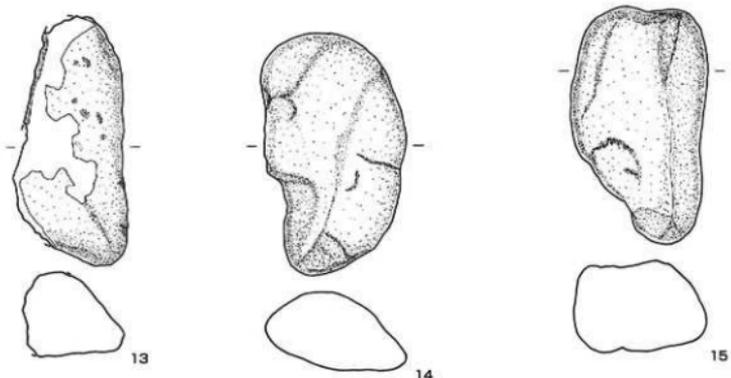
円筒形土器 SI27から出土しており、断片であるが、径は約13.6cmを測る。輪積痕とヘラ削りがみられる。164は古墳時代後期の所産で、県内では鞍掛遺跡と甲府市榎田遺跡から出土している。両例ともにカマドからの出土が確認されており、検出状況からカマドの構築材として焚き口上部に横に渡していたものであった可能性が示唆されている。(望月)

縄物石 『山梨県史』で縄物用石錘とされているものである。この石は、ほとんど加工の痕跡がなく、使用痕の認められない棒状礫で、出土状況が特徴的なものである。すなわち、住居跡の床面から複数枚が集中あるいは散乱する状況で出土して初めて認識できる石であって、遺構外や住居覆土から出土しても、また床面であっても単独で出土する場合は、まったく省みられない石である。よって、今回その条件に当てはまった1軒の住居跡出土の15点だけを報告する。

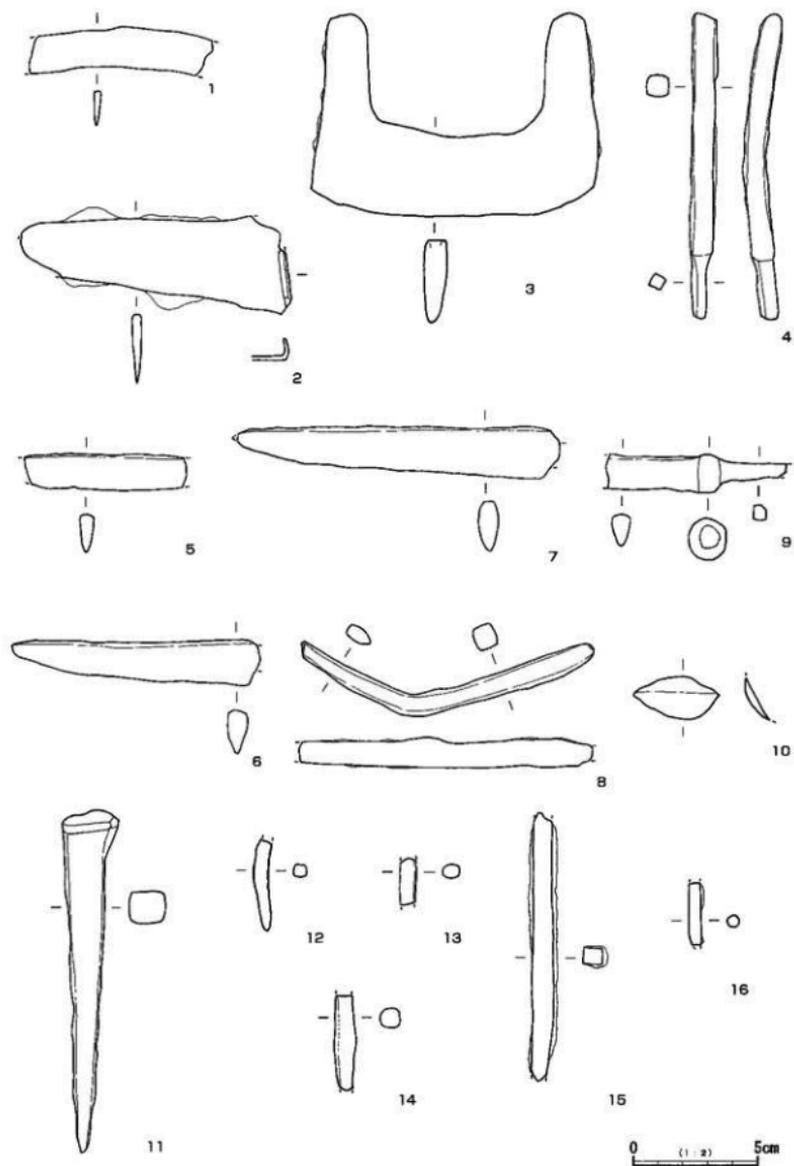
SI1での出土状況は、カマド周辺に集中している。これらが仮に縄物石だとすると、カマド廃絶時にカマドを破壊した後、置かれたことになる。一般的に縄物石は、カマド周辺部からあまり出土せず、カマドの反対側から出土することが多いと言われる。果たして、これらの石が縄物石であ



第50圖 遺物(9) 編物石①



第51図 遺物(2) 編物石②、砥石



第52図 遺物(2) 鉄製品

るかはここでは議論できる情報はないが、編物石として報告しなければ、図示する機会さえ奪われる自然であり、今後の検討を要することは言うまでもない。

磁石 3点が出土している。2・3は置砥として使用されたものであろう。特に2のような大型で泥岩製のものは、奈良・平安時代には少なく、古墳時代的な様相と思われる。

鉄製品 車居遺跡では鉄製品が1点しか確認できなかったが、今宮遺跡では16点が出土している。これは、車居遺跡は古墳時代後期が主体であるのに対し、今宮遺跡は奈良・平安時代が主体であることと関連するであろう。今宮遺跡は砂質土壌であるため、鉄製品が土中にある状態ではかなり水の影響を受けたと推測され、銹化が著しく、かなり肥大した状態であった。大半の鉄製品が保存処理を施した後実測したため、断面の観察をすることができず、実測図はやや大きめの傾向にあるかもしれない。

1・2は鎌であり、1は刃部が弧状を描く曲刃鎌、2は直刃鎌で先端が丸みを帯びるタイプで、基部を手前に（基部を右側にみた場合）、かつ直角に折り返す直角鎌である。通常、2のような直刃鎌は古墳時代後期の前半で消滅すると言われており、住居跡の年代観より古相を示している。3はU字形鋏・鋏先である。刃先部が直線状を呈すタイプで、古墳時代後期に主体となる形態である。U字形鋏・鋏先は、県内での出土例が少なく、本例を含め9例が知られるだけである。その中で古墳時代の所産のものとなると、笛吹市春日居町の狐塚古墳、御坂町二之宮遺跡148号住居跡ぐらいである。尚、古相のものほど、完存の状態出土する傾向にあると考えている。4は鉄鏝と思われる。刀子は5点出土しており、古代では多く出土する鉄製品であるが、刀子は刃部や胴部などで欠損する状態で出土することが多く、実用品として使用されたことを窺わせる。11は大形の釘で、集落遺跡から出土することは珍しく、注目される。棒状の鉄製品は5点出土しており、このうち3点は、紡錘具の軸の可能性が高い。（野崎）

表3 土器観察表

周	%	出土位置	建別	器種	部位	残存率 %	数量	口縁 輪郭 形状	外面	内面	底・脚内面	胎 色	土 成 色	備 考
32	1	S11	土師器	蓋状坏	口~底	30	有	(15.4) — (3.8)	ヘラ刷り	ロクロナガ	ヘラ刷り	赤、赤・白・金・ 黒 褐色	—	—
32	2	S11	土師器	坏	作~底	40	有	— 5.7 —	ロクロナガ、 ヘラ刷り	ロクロナガ、 —	—	やや暗、赤・白・金・黒 不具 褐色	—	内裏面底、コゲが
32	3	S11	土師器	罎	口~胴	25	有	(27.0) — —	ナガ、輪襷痕	横ハケメ、ナ ア、輪襷痕	—	赤、赤・白・金 具 赤褐色	—	被煎、外面面底、 内裏面底 S117 片と整合
32	4	S12	土師器	罎	口~底	85	有	14.8 — 3.5	ロクロナガ、 回転ヘラ刷り	ロクロナガ	回転ヘラケズリ	赤、赤・白・金 具 褐色	—	打ち欠き
32	5	S12	土師器	蓋状坏	作~底	小片	有	— (9.8) —	ロクロナガ	ロクロナガ	回転ヘラケズリ	赤、赤・白・金 具 褐色	—	—
32	6	S12	土師器	坏	作~底	小片	有	— 4.8 —	ロクロナガ、 ヘラ刷りか	ロクロナガ	ヘラ刷り	赤、赤・白・金 具 褐色	—	赤化著しい
32	7	S11-1	土師器	坏	口~底	40	有	11.0 8.2 (4.5)	ロクロナガ、 ヘラ刷り	ロクロナガ	ヘラ刷り	赤、赤・白・金 具 褐色	—	一器面底
32	8	S12	土師器	坏	口~底	30	有	(10.4) (5.8) (4.2)	ロクロナガ、 ヘラ刷り	ロクロナガ	回転糸切痕、ヘラ 刷り	赤、赤・白・金 具 褐色	—	—

No	出土位置	種別	器種	部位	残存率 %	状態	口縁 底径 径 cm	外 装	内 面	意・器内面	地 肌 色	上 成 期	備 考
32 9	S12	土師器	杯	脣～底	30	有	— (6.3)	—	ロクロナデ、 ヘウ割り	ロクロナデ、 短文	節輪赤切痕、ヘウ 割り	密、白・金 黄褐色	
32 10	S12	土師器	杯	11～底	80		10.6 5.0 5.0	—	ロクロナデ、 ヘウ割り	ナデ、或短状 短文	節輪赤切痕、ヘウ 割り、墨書「加」	密、赤・白・金 黄褐色	打ち欠
32 11	S12	土師器	杯	口～底	80	有	(11.0) 5.3 4.2	—	ロクロナデ、 ヘウ割り	ロクロナデ	ヘウ割り、墨書 「加」	密、赤・白・金・黒 黄褐色	
32 12	S12	土師器	杯	口～底	70		10.8 5.3 4.9	—	ロクロナデ	ロクロナデ	節輪赤切痕、ヘウ 割り	密、赤・白・金 やや粗 褐色	一部破
32 13	S12	土師器	黄白付杯	底	小片	有	— (7.0)	—	ロクロナデ	ロクロナデ	節輪赤切痕、ヘウ 割り	密、赤・金 黄褐色	一部面欠、やや劣 化している
32 14	S12	築地器	杯	口～脣	小片	有	— (14.1)	—	ロクロナデ	ロクロナデ	—	密、白 黄褐色	
32 15	S12	築地器	盃	腰口縁	小片		— —	—	ロクロナデ	ロクロナデ	—	密、白 黄褐色	
32 16	S12	土師器	長脚甕	脣～底	20	有	— (8.3)	ハケメ、節輪 痕	ハケメ、節輪 痕	木炭痕、節輪仕成 か	やや粗、白・金・黒 黄褐色	破損、黒変	
32 17	S12	土師器	壺	脣～底	小片	有	— (9.6)	ハケメ、節輪 痕	ハケメ、節輪 痕	木炭痕	やや粗、白・金・黒 黄褐色	破損、黒変	
32 18	S12	土師器	小型壺	口～脣	20	有	— (13.2)	—	ハケメ	ハケメ	—	やや粗、白・金・黒 黄褐色	破損、黒変
32 19	S12	土師器	瓶	口～底	80		41.3 9.3 24.2	ハケメ、節輪 痕、ナデ	ハケメ、節輪 痕	木炭痕二重、節輪 仕成か	やや粗、白・金・黒 黄褐色	破損、黒変	
32 20	S13・4	土師器	黄白付杯	11～底	40	有	(16.8) — (4.8)	—	ロクロナデ、 ヘウ割り	ロクロナデ	ヘウ割り、ミガキ	密、赤・白・金 黄褐色	やや劣化している 内面スリ付
32 21	S14	土師器	杯	口～脣	小片	有	— (10.6)	—	ロクロナデ	ロクロナデ	—	密、赤・白・金 黄褐色	外周破損か
32 22	S14	土師器	壺	口～脣	小片	有	— (15.4)	—	ロクロナデ	ロクロナデ	—	密、赤・白・金・黒 黄褐色	スリ付
32 23	S14	土師器	壺	口～脣	小片	有	— (17.7)	—	ハケメ、ナデ	ハケメ	—	密、白・金 黄褐色	内面黒変
32 24	S14	土師器	長脚壺	口～脣	小片	有	— (23.7)	—	ハケメ、ナデ 痕	ハケメ、節輪 痕	—	やや粗、白・金・黒 黄褐色	
32 25	S14	土師器	小型壺	脣～底	小片	有	— (6.5)	—	ハケメ、節輪 痕	ハケメ、節輪 痕	木炭痕	密、白・金・黒 黄褐色	外周コグ付
32 26	S15	土師器	杯	11～底	90		13.0 — 5.2	—	ナデ、ミガキ	ナデ・ミガキ	ナデ	密、赤・白・金・黒 黄褐色	破損、黒変
32 27	S15	土師器	黄白付杯	11～底	80		14.7 8.0 4.0	—	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘウ割り	やや粗、赤・白・金・黒 黄褐色	破損、劣化率しい 器
32 28	S15	土師器	黄白付杯	11～底	60	有	(14.8) 10.4 (4.0)	—	ロクロナデ	ロクロナデ、 短文	ヘウ割り	密、白・金・黒 黄褐色	一部黒変、内外面 劣化している
32 29	S15	土師器	長脚壺	11～底	35		16.9 (8.4) 26.7	—	ハケメ、ナデ、 節輪痕	ハケメ、節輪 痕	木炭痕	やや粗、赤・白・金・黒 黄褐色	破損、黒変
32 30	S15	土師器	壺	11～脣	小片	有	— (25.4)	—	ハケメ	ハケメ	—	密、赤・白・黒 黄褐色	一部黒変
32 31	S15	土師器	長脚壺	脣～底	30	有	— 7.2	—	ハケメ	ハケメ	木炭痕、節輪仕成 か	密、白・黒 黄褐色	一部黒変
32 32	S15	土師器	長脚壺	脣～底	小片	有	— (8.4)	—	ナデ、ヘウ割 り	ナデ	木炭痕	密、赤・白・金 黄褐色	
32 33	S15	土師器	黄白付壺	底～底	小片	有	— 10.6	—	ハケメ、ナデ	ナデ	木炭痕	密、赤・白・金 黄褐色	一部黒変

四	No	出土状況	種類	器種	部位	保存率 %	反照	口縁 底径 器高 (mm)	外 形	内 容	産・製内訳	胎 色	上 成 色	備 考
34	34	S15	土師器	小皿	口~底	100	有	14.4 (8.8) 14.0	ハケメ、ナデ、 西瀬灰	ハケメ、ナデ	西瀬灰	赤、赤・白・金・黒 良 赤褐色		被熱、黒変、底部 内与ふカマド内 で使用
34	35	S15	土師器	盥	口~胴	小片	有	(33.0)	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	—	赤、赤・白・金・黒 良 赤褐色		一部黒変、釉か
34	36	S16	土師器	盥状の杯	口~底	30	有	(15.8) (9.7) 14.2	ロクロナデ、 ヘリ削り	ナデ、編文	ヘリ削り	赤、赤・白・金 良 明赤褐色		
34	37	S16	灰土器	杯	胴~底	小片	有	7.0	ロクロナデ、 ヘリ削り	ロクロナデ	ヘリ削り	白、 白 土 灰色		
34	38	S16	土師器	盥	底	20	有	(20.4)	ヘリ削り	ナデ、ミガキ	ヘリ削り	やや紅、赤・白・金・黒 良 明赤褐色		
34	39	S16	土師器	盥	底	20	有	—	ヘリ削り	ナデ	木炭灰二重	赤、赤・白・金・黒 良 赤褐色		一部黒変
34	40	S16	土師器	鉢状の盥	口~胴	85	有	22.0 8.4 30.2	ハケメ、ナデ、 西瀬灰	ハケメ、ナデ、 西瀬灰	—	赤、赤・白・金 良 明赤褐色		被熱、黒変、黒変
35	41	S16・ S13	土師器	鉢状の盥	口~胴	70	一部	—	肥ハケメ	肥ハケメ	—	やや紅、白・黒 土 明褐色		
35	42	S16	土師器	盥	口~底	60	一部	(23.0)	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	—	赤、白・金・黒 良 明赤褐色		被熱、黒変
35	43	S16	土師器	盥	口~底	50	有	(16.6)	ハケメ	ハケメ、指環 痕	—	赤、赤・白・金 土 明赤褐色		一部黒変、割傷、 やや変化している
35	44	S16	土師器	盥	胴~底	小片	一部	5.8	ナデ	指ナデ	木炭灰	赤、赤・白・金 土 灰褐色		被熱、黒変、劣化 著しい
35	45	S16	土師器	盥	胴~底	小片	有	(10.0)	ハケメ、ヘリ 削り、ナデ	ハケメ	木炭灰、粉砕生灰 か	やや赤、赤・白・金 良 赤褐色		
35	46	S16	土師器	小皿	口~胴	小片	有	(17.0)	ハケメ、ヘリ 削り、ナデ	ナデ、ハケメ	—	赤、赤・白・金・黒 良 明赤褐色		内面黒色化
35	47	S16	土師器	カマド形土師	口~底	小片	有	(10.0)	ヘリ削り、ナ デ	ナデ	—	赤、赤・白・金 良 明赤褐色		
35	48	S17	土師器	盥・鉢	口~底	60	有	(12.8) 8.0 (6.6)	ナデ、ヘリ削 り	ナデ	ヘリ削り、ナデ	赤、赤・赤・白・金 良 赤褐色		一部黒変
35	49	S17	土師器	平浅形の杯	口~底	40	有	(9.9)	ナデ	内面黒色、ナ デ、編文	木炭灰	やや紅、赤・白・金 土 灰褐色		
35	50	S17	土師器	手づくね土師	口~底	60	有	3.8 2.9 2.1	ナデ、西瀬灰	ナデ	ナデ	赤、赤・白・金 良 明赤褐色		ミニチュアか
35	51	S17	土師器	球状盥	口~胴	15	有	(97.8)	ハケメ	ハケメ、ナデ	—	赤、白・金 良 明赤褐色		内側・黒変、ス スカ
36	52	S18	灰土器	杯	胴~底	小片	有	9.0	ロクロナデ	ロクロナデ、 指環	互転(ヘリ削り、付 け台)	赤、黒 やや紅 灰白色		打ち欠け、軽用 破か
36	53	S18	土師器	球状盥	口~胴	小片	有	(23.5)	ナデ、ハケメ	ナデ	—	赤、赤・白・金・金 良 赤褐色		被熱、割傷著しい (加修か)
36	54	S18	土師器	盥	口~胴	小片	有	(24.7)	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	—	赤、赤・白・金 良 明赤褐色		一部黒変
36	55	S18	土師器	盥	口~胴	小片	有	(28.0)	ハケメ	ハケメ	—	赤、赤・白・金・黒 良 明赤褐色		一部黒変
36	56	S18	土師器	盥	胴~底	小片	有	(8.7)	ナデ	ナデ	木炭灰	赤、白・金 良 明赤褐色		一部黒変
36	57	S18	土師器	盥	胴~底	小片	有	(9.3)	ハケメ、ナデ	ナデ	木炭灰、粉砕生灰 か	やや紅、赤・白・金 土 明赤褐色		
36	58	S18	土師器	小皿	胴~底	80	有	5.6	西瀬灰、ナデ	西ナデ	木炭灰	やや紅、赤・白・金 良 明赤褐色		一部黒変

氏名	地上位置	種別	形種	部位	残存率 %	反照 %	口径 cm	外面	内面	底・脚内面	施 色	上 装 色	備 考
36 59	S18	土師器	壺	肩	小片	—	—	キキ目、クダキ目、自然釉	当て具痕、指痕	—	赤・赤・白・黒 灰褐色	—	—
36 60	S18	土師器	壺	肩	小片	—	—	ヘラ取り、ナデ	ナデ	ヘラ取り、ナデ	赤・赤・白・黒・黄 赤褐色	—	内面に輪痕あり
36 61	S111	土師器	半球形の環	口～底	20	有	(13.6) 6.5 —	ナデ	ナデ	—	赤・赤・白・金 やや不具 赤褐色	—	—
36 62	S111	土師器	環	口～底	小片	有	(11.4) (7.6) (4.3)	ナデ	ナデ、ミガキ、赤褐色	—	赤・赤・白・金 赤褐色	—	—
36 63	S111	土師器	半球形の環	口～底	30	有	(15.4) — (5.4)	ヘラ取り、ナデ	ナデ	—	やや黄・赤・白・金・黒 赤褐色	—	—
36 64	S111	土師器	環	口～底	50	有	(9.9) 6.5 (4.0)	ロクロナデ、ヘラ取り	ロクロナデ、縄文	赤褐色か	赤・赤・白・金 赤褐色	—	やや変色している
36 65	S111	土師器	環	口～底	45	有	(11.4) (6.6) (4.1)	ロクロナデ、ヘラ取り	ロクロナデ、縄文	黒鉄赤切痕	赤・赤・白・金 赤褐色	—	—
36 66	S111	土師器	半球形の環	体～底	小片	有	— (7.2) —	ロクロナデ	ロクロナデ	黒鉄赤切痕	赤・白・金 灰白色	—	変色している
36 67	S111	土師器	環	口～底	15	有	(12.3) (5.2) (3.9)	ロクロナデ、ヘラ取り	ロクロナデ	ヘラ取り	赤・赤・白・金 赤褐色	—	—
36 68	S111	土師器	環	口～底	20	有	(10.9) (11.9) (4.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	付け高台	赤・黒 灰白色	—	—
37 69	S111	土師器	長胴壺	口～底	40	有	(24.8) — —	ハケメ、指痕	ナデ	—	赤・赤・白・金 赤褐色	—	—
37 70	S111	土師器	長胴壺	口～底	25	有	(10.6) — —	ハケメ、指痕	ハケメ、指ナデ	—	赤・赤・白・金 赤褐色	—	—
37 71	S111	土師器	長胴壺	口～底	小片	有	(19.8) — —	ハケメ、ナデ	ナデ	—	赤・白・金・黒 赤褐色	—	金雲母多
37 72	S111	土師器	長胴壺	口～底	30	有	(8.0) — —	ハケメ	ハケメ、指痕	木炭痕	赤・赤・白・金・黒 赤褐色	—	—
37 73	S111	土師器	長胴壺小	口～底	小片	有	— 6.9 —	指痕	ハケメ、ナデ	木炭痕	赤・赤・白・金 赤褐色	—	緑釉、劣化等しい
37 74	S111	土師器	壺	口～底	小片	有	— (5.6) —	ハケメ、ナデ	ヘラ取り、ナデ	木炭痕	赤・白・金 灰白色	—	外面黒化
37 75	S111	土師器	不詳	—	—	—	—	ハケメ	ナデ、ハケメ	—	赤・赤・白・金・黒 赤褐色	—	—
37 76	S112	土師器	環	口～底	小片	有	(12.1) — —	ロクロナデ	ロクロナデ、縄文	—	赤・赤・白・金 赤褐色	—	—
37 77	S112	土師器	長胴壺小	口～底	小片	有	(28.2) — —	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	—	赤・赤・白・金・黒 赤褐色	—	口縁ハケメに外面ハケメと同一具
37 78	S112	土師器	壺	口～底	小片	有	7.4 — —	ナデ	ナデ	木炭痕	赤・赤・白・金 赤褐色	—	外面黒化、劣化している
38 79	S113	土師器	壺	口～底	80	有	13.5 6.7 2.6	ロクロナデ	ロクロナデ、同心円状縄文	黒鉄赤切痕、ヘラ取り、指痕 [G]	赤・赤・白・金 赤褐色	—	一部黒化
38 80	S113	土師器	壺	口～底	60	有	(14.2) 5.2 (2.6)	ロクロナデ、ヘラ取り	ロクロナデ	ヘラ取り	赤・赤・金 赤褐色	—	一部黒化
38 81	S113	土師器	壺	口～底	40	有	(14.2) — (2.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ取り	赤・赤・白・金 赤褐色	—	—
38 82	S113	土師器	壺	口～底	20	有	(13.2) (5.3) (2.6)	ロクロナデ、ヘラ取り	ロクロナデ	—	赤・赤・白・金・黒 赤褐色	—	—
38 83	S113	土師器	環	口～底	小片	有	(11.4) (6.6) (3.6)	ロクロナデ、ヘラ取り	ロクロナデ、縄文	ヘラ取り	赤・赤・白・金 赤褐色	—	—

西	No	出土位置	種別	器種	部位	残存率	反照	口縁 底径 高さ → cm	外 面	内 面	底・脚内面	胎 色	土 質	備 考
38	84	SI13	土師器	杯	口～底	50	青	(11.4) 4.4 4.1	ロクロナデ、 ヘラ刷り	ロクロナデ、 刷文	回転糸切痕	昏、赤・白・金 良 褐色		SI21出土片と接合
38	85	SI13	土師器	杯	口～底	70		11.4 5.9 5.9	ロクロナデ、 ヘラ刷り	ロクロナデ、 刷文	回転糸切痕、ヘラ 刷り	昏、赤・白・金 良 褐色		片面コゲ
38	86	SI13	土師器	杯	体～底	小片	有	(4.8)	ロクロナデ、 ヘラ刷り	ロクロナデ、 刷文	ヘラ刷り	昏、赤・金 良 褐色		内面劣化、割壊し ている
38	87	SI13	土師器	杯	口～底	100		12.0 4.8 4.5	ロクロナデ、 ヘラ刷り	ロクロナデ	ヘラ刷り、墨書 「ム」	昏、赤・白・金 良 褐色		内面焼成後キズ
38	88	SI13	土師器	杯	口～底	70		11.0 5.0 5.6	ロクロナデ、 ヘラ刷り	ロクロナデ	回転糸切痕、ヘラ 刷り	昏、赤・白・金 良 褐色		
38	89	SI13	土師器	杯	口～底	小片	有	(11.8)	ロクロナデ、 ヘラ刷り	ロクロナデ		昏、赤・白・金 良 褐色		
38	90	SI13	土師器	長頸壺	口～胴	小片	有	(10.5)	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ		昏、赤・白・金・黒 良 明赤褐色		
38	91	SI13	土師器	長頸壺	胴～底	小片	有	(9.2)	ハケメ	ハケメ、指板 痕	木炭痕	昏、赤・金 良 褐色		
38	92	SI13	土師器	長頸壺	胴～底	小片	有	(8.8)	ハケメ、指板 痕	ハケメ、指板 痕	木炭痕	昏、赤・金・黒 良 褐色		
38	93	SI13	土師器	小瓶	口～胴	小片	有	(16.6)	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ		昏、赤・白・金 良 褐色		
38	94	SI13	土師器	ミニチュア	口～作	小片	有	(8.8)	ハケメ	ハケメ		昏や紅、白・金・黒 良 褐色		焼熱、全体のニス 剥離
38	95	SI13	土師器	高台付杯	体～底	小片	有	(8.4)	ナデ	ナデ	刷り跡し黒色	昏、赤・白・金 良 褐色		
38	96	SI13	土師器	壺	胴～底	小片	有	(18.0)	タタキ目、ナ デ	ナデ	ヘラ刷り	昏、黒 良 灰ネグリーブ色		
38	97	SI13	土師器	カマド形土器	口～体	小片	有	(14.2)	ハケメ、指板 痕	ハケメ		昏や紅、赤・白・金・黒 良 明赤褐色		
38	98	SI13	土師器	カマド形土器	体～底	小片	有	(18.2)	ハケメ	ハケメ、ナデ		昏や紅、赤・白・金・黒 良 褐色		
38	99	SI13	土師器	杯	底	小片	有	—	ヘラ刷り、瀬 期「X」	ナデ		昏、赤・白・金 良 褐色		
38	100	SI14	土師器	壺	口～底	75	青	(17.4) — (4.6)	ナデ、ヘラ刷 り	ナデ		昏、赤・白・金 良 明赤褐色		内面や外黒変
38	101	SI14	土師器	杯	口～底	100		12.0 6.1 4.5	ロクロナデ、 ヘラ刷り	ロクロナデ、 刷文	回転糸切痕、ヘラ 刷り	昏、赤・金 良 褐色		一部黒変、灯明ス ズカ
38	102	SI14	土師器	杯	口～底	45	青	(12.4) (6.0) (4.3)	ロクロナデ、 ヘラ刷り	ロクロナデ、 刷文	ヘラ刷り	昏、赤・白・金 良 褐色		黒変か
38	103	SI15	土師器	皿	口～法	85		13.4 6.0 2.6	ロクロナデ、 ヘラ刷り	ロクロナデ、 同心円状刷文	回転糸切痕、ヘラ 刷り	昏、赤・白・金 良 褐色		一部黒変
38	104	SI16	土師器	杯	口～体	小片	有	(13.8)	ロクロナデ	ロクロナデ		昏、黒 良 灰白色		SI2カマド形土片 と接合
38	105	SI16	土師器	盤状杯	口～底	小片	有	(16.4)	ロクロナデ	ロクロナデ		昏、赤・金 良 褐色		部分的に黒変
38	106	SI16	土師器	盤状杯	口～底	70	有	(14.6)	ナデ	ナデ	ヘラ刷り	昏、白・黒 良 褐色		内面劣化、焼熱か ら
38	107	SI16	土師器	盤状杯	口～底	30	有	(15.6) — (4.0)	ナデ	ロクロナデ	ヘラ刷り、穿孔	昏、赤・白・金・黒 良 褐色		黒変か
38	108	SI16	土師器	杯	底	小片	有	(10.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	付け点白	昏、黒 良 灰白色		劣化している

図	No	出土位置	種類	器種	部位	発見年	反映	口径 口径 高さ	外面	内面	底・脚内底	胎 色	土 質	備 考
39	109	S116	土師器	埴師埴	口~胴	30	一部	(22.2) — —	ナア	ナア、埴師灰	—	白、赤、黒 具 明赤褐色	黒土	被熱、一部黒炭
39	110	S116	土師器	埴師埴	口~胴	30	—	19.2 — —	ハケメ、ナア	ハケメ、ナア	—	やや緑、赤、白、金・黒 具 明赤褐色	黒土	被熱、やや劣化して いる
39	111	S116	土師器	長瀬赤	口~胴	小片	有	(22.4) — —	ハケメ、ナア	ハケメ、ナア	—	赤、白、赤、黒 具 明赤褐色	黒土	
39	112	S116	土師器	長瀬赤	口~胴	小片	有	(25.2) — —	ハケメ、ナア	ハケメ	—	赤、白、赤、黒 具 明赤褐色	黒土	
39	113	S116	土師器	飯か	口~胴	25	有	(21.6) — —	ナア、ヘウ割 り	ナア	—	赤、赤、白、金・黒 具 褐色	黒土	
40	114	S117・ S12	土師器	埴	口~底	70	有	13.3 9.0 3.3	ロクロナア、 ミガキ	ロクロナア、 ミガキ	ヘウ割り、ミガキ	赤、赤、白、金 具 褐色	黒土	赤彩か
40	116	S117	土師器	寄台付埴	底	20	有	9.5 — —	—	ナア	同底ヘウ割り、付 け具合	赤、赤、白、金 具 褐色	黒土	
40	116	S117	土師器	長瀬赤	口~胴	小片	有	(23.0) — —	ハケメ、ナア	ハケメ、ナア	—	やや緑、赤、白、金・黒 具 明赤褐色	黒土	やや劣化している
40	117	S117	土師器	手づくね土師	口~底	40	有	(12.7) (8.4) (6.8)	ナア、ハケメ ナア	ナア、長瀬赤、 ハケメナア	木炭灰	やや緑、白、赤 具 明赤褐色	黒土	
40	118	S118	土師器	埴	口~底	20	有	— — —	ロクロナア、 ヘウ割り	ロクロナア	—	赤、白、黒 具 褐色	黒土	
40	119	S118	土師器	埴	口~底	50	有	(10.2) (5.4) (4.3)	ロクロナア	ロクロナア	同底赤彩、ヘウ 割り	赤、赤、白、金 具 褐色	黒土	やや劣化している
40	120	S118	土師器	埴	口	小片	有	— — —	ロクロナア、 ミガキ、被熱	ロクロナア、 ミガキ	—	赤、赤、金 具 褐色	黒土	黒彩か
40	121	S118	土師器	長瀬赤	口~胴	小片	有	(18.2) — —	ハケメ、ナア	ハケメ、ナア	—	赤、白、赤、黒 具 明赤褐色	黒土	
40	122	S118	土師器	埴	口~底	小片	有	(8.0) — —	ハケメ、ナア	ナア、長瀬赤	木炭灰	やや緑、白、赤、黒 具 明赤褐色	黒土	被熱、黒炭
40	123	S119	土師器	埴師埴	口~底	小片	有	(9.7) — —	ロクロナア	ロクロナア	ヘウ割り	赤、赤、白、金 具 褐色	黒土	
40	124	S120	土師器	埴師埴	口~底	40	有	(15.4) 9.4 (3.6)	ロクロナア、 ヘウ割り	ロクロナア	同底赤彩、ヘウ 割り	赤、赤、白、金・黒 具 褐色	黒土	やや劣化している、 内面キズ多
40	125	S120	土師器	埴師埴	口~底	15	有	(15.2) (9.6) (3.8)	ロクロナア、 ヘウ割り	ロクロナア、 ヘウ割り	—	赤、赤、白、金・黒 具 褐色	黒土	
40	126	S120	土師器	埴	口	小片	有	— — —	タタキ目、ナ ア、被熱	ナア、ミガキ	—	赤、赤、黒 具 灰白色	黒土	
40	127	S120	土師器	埴	口~底	小片	有	(9.9) — —	ナア、ハケメ	ナア	木炭灰、穿孔(被 熱彩か)	赤、赤、白、金 具 明赤褐色	黒土	内外面黒炭
40	128	S120	土師器	手づくね土師	口~底	35	有	4.8 4.0 5.1	ナア、長瀬赤	ナア	正転か	やや緑、赤、白、金・黒 具 赤褐色	黒土	
41	129	S121	土師器	埴	口~底	25	有	(16.6) — —	ナア、ヘウ割 り	ナア	—	やや緑、赤、白、金・黒 具 褐色	黒土	
41	130	S121	土師器	埴師埴	口~底	50	有	(13.5) (9.1) (3.7)	ミガキ	ミガキ(被熱)	ミガキ	赤、赤、白、赤、黒 具 褐色	黒土	赤彩か
41	131	S121	土師器	埴	口~底	小片	有	(15.1) — —	ロクロナア、 赤彩か	ロクロナア、 被熱	—	赤、赤、白、赤 具 褐色	黒土	
41	132	S121	土師器	埴	口~底	30	有	(11.5) 4.3 (3.9)	ロクロナア、 ヘウ割り	ロクロナア、 被熱	ヘウ割り	赤、赤、白、赤 具 褐色	黒土	
41	133	S121	土師器	埴	口~底	100	有	11.7 4.8 4.2	ロクロナア、 ヘウ割り	ロクロナア、 被熱	ヘウ割り	赤、赤、白、赤 具 褐色	黒土	口縁 型馬足、可 明か、全体的に劣 化している

20	№	出土位置	種類	器種	部位	保存率	形状	口徑 底径 高さ	外面	内面	蓋・胴内面	胎 色	土 質	備 考
41	134	S121	土師器	高台付埴	11~16	小片	有	(10.0) —	ロクロナデ、 ヘタ裏り	ロクロナデ、 ミガキ	—	密、赤・白・金 良 緑色		
41	135	S121	土師器	長頸壺	ロ~底	85	有	24.7 11.3 36.5	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ、 指頭痕	木炭痕、刺刺圧痕 か	密、赤・白・金・黒 良 明赤褐色		一部黒変
41	136	S121	土師器	長頸壺	ロ~胴	60	有	36.5 —	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ、 指頭痕	—	密、赤・白・金 良 緑色		破断、外口コゲ付 存、黒変
41	137	S121	土師器	長頸壺	コ~胴	30	有	(36.0) —	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ、 指頭痕	—	密、赤・白・金・黒 良 緑色		外口黒変
41	138	S121	土師器	小型壺	ロ~胴	小片	有	(19.0) —	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	—	密、白・金 良 鈍褐色		
41	139	S121	土師器	壺	胴~底	小片	有	(10.0) —	ナデ	ナデ	—	密、赤・白・金 良 鈍褐色		やや劣化している 良 鈍褐色
41	140	S121	土師器	壺	胴~底	小片	有	(10.0) —	ハケメ、ナデ	ナデ	木炭痕	やや粗、赤・白・金 良 明赤褐色		やや劣化、底面割 離している
41	141	S121	土師器	手づくね土師	ロ~底	90	有	2.4 2.0 3.1	指頭痕、ナデ	指頭痕	—	やや粗、赤・白・金 良 明赤褐色		外口黒変
42	142	S122	須恵器	壺	ロ~体	40	有	(16.8) —	ロクロナデ、 蓋熱痕	ロクロナデ	—	密、黒 良 灰白色		
42	143	S122	須恵器	瓮	コ~底	小片	有	15.5 —	指痕	指痕	—	密、白・黒 良 灰白色		肌面風小、磨耗著 しい
42	144	S122	土師器	高台付埴	11~底	80	有	14.5 4.3	ナデ	ミガキ	ヘタ裏り	やや粗、赤・白・金・黒 良 明赤褐色		磨耗著しい
42	145	S122	土師器	手づくね土師	ロ~底	65	有	12.6 — 4.7	ナデ	ロナデ	丸底	やや粗、赤・白・金 良 鈍褐色		一部黒変
42	146	S122	土師器	球頸壺	口	40	有	(11.8) —	ハケメ、ナデ か	ハケメ、ナデ か	—	やや粗、赤・白・金 良 明赤褐色		破断、劣化著しい 147と同一か
42	147	S122	土師器	球頸壺	底	小片	一部	— 7.6	ナデ	ナデ	木炭痕	やや粗、赤・白・金 良 明赤褐色		破断、劣化著しい 146と同一か
42	148	S122・ S114	土師器	小型壺	ロ~底	60	有	13.4 10.6	ヘタ裏りか	ヘタ裏り、ハ ケメ、ナデ	ヘタ裏りか	やや粗、赤・白・金 良 明赤褐色		瓶底破、破断、 劣化している
42	149	S123	土師器	長頸壺	ロ~底	小片	有	(30.0) —	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	—	密、白・金 良 明赤褐色		やや黒変
42	150	S123	土師器	手づくね土師	体~底	80	有	— 3.7	指頭痕	指頭痕	—	密、白・金 良 明赤褐色		
42	151	S124	土師器	壺	11~底	70	一部	(14.9) (5.6) (2.4)	ロクロナデ、 ヘタ裏り	ロクロナデ、 同心円状模文	凹輪ヘタ裏り	密、赤・白・金 良 明赤褐色		劣化、内面割離
42	152	S124	土師器	埴	11~底	65	有	(11.2) 5.2 (4.0)	ロクロナデ、 ヘタ裏り	ロクロナデ、 線文	凹輪糸切痕、ヘタ 裏り	密、赤・白・金・黒 良 明赤褐色		やや黒んでいる
42	153	S124	土師器	埴	11~底	50	有	(11.6) (4.3) (3.9)	ロクロナデ、 ヘタ裏り	ロクロナデ、 線文	ヘタ裏り	密、赤・白・金 良 緑色		
42	154	S124	土師器	埴	11~底	100	有	11.5 4.6 4.3	ロクロナデ、 ヘタ裏り	ロクロナデ、 線文	ヘタ裏り	密、赤・白・金 良 緑色		
42	155	S124	土師器	埴	11~底	55	有	10.6 4.8 4.9	ロクロナデ、 ヘタ裏り	ロクロナデ、 線文	ヘタ裏り	密、赤・白・金 良 緑色		
42	156	S124	土師器	埴	体	小片	有	—	ロクロナデ、 ヘタ裏り	ナデ、線文	ヘタ裏り、磨り出 し痕	密、赤・白 良 鈍褐色		
42	157	S124	土師器	埴	体~底	小片	有	— (7.0)	ロクロナデ、 ヘタ裏りか	ロクロナデ、 線文か	ヘタ裏りか、磨 り出し	密、赤・白・金 良 緑色		劣化著しい
42	158	S124	灰石陶器、刺	埴~底	30	有	— 8.6	— —	ロクロナデ	指痕、トナシ	付着炭介、擦痕、 磨痕	密、黒 良 鈍褐色		遺品147の流式局か 数用瓦

図	No.	出土位置	種類	器種	部位	出土年	反転	口縁 底径 高さ	料 器	内 面	底・内面	胎 色 上 成 期	備 考
45	159	S124	土師器	半球形の埴	口～作	小片	有	(10.6)	ナデ、ヘウ製り	ナデ、胡摩	—	黄、白・金・黒 土 灰白色	
45	160	S124	土師器	丸形埴	口～底	30	有	(27.6)	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ、 指環灰	—	やや暖、赤・白・金・黒 土 明赤褐色	やや劣化している
45	161	S124	土師器	埴	口	小片	有	—	タケキ目、製 成、輪付埴	ナデ	—	黄、黒 土 灰白色	
45	162	S125	土師器	埴	口～底	小片	有	(10.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	—	黄、白 土 灰白色	
45	163	S126	土師器	埴	口～底	小片	有	9.0	ロクロナデ、 ヘウ製り、滑 裏か	ロクロナデ	付け高台	黄、白 土 灰白色	美濃編・大原リオ 陶式器か
45	164	S127	土師器	円筒形土器	胴	小片	有	—	ヘウ製り	ヘウ製り	—	やや暖、赤・白・金 土 灰白色	破損、やや劣化して いる
45	165	S128	土師器	埴	口～底	60	有	(15.5) 6.3 (3.0)	ロクロナデ、 反心円形埴文	ロクロナデ、 反心円形埴文	両面ヘウ製り	黄、赤・白・金 土 灰白色	破損、一部腐食、 やや劣化している
45	166	S128	土師器	埴	口～底	70	有	14.9 5.3 2.7	ロクロナデ、 ヘウ製り	ロクロナデ、 数軒の埴文	両面ヘウ製り	やや暖、赤・白・金 土 灰白色	破損、一部や腐 食
45	167	S128	土師器	埴	口～底	90	有	14.9 5.3 2.7	ロクロナデ、 ヘウ製り	ロクロナデ	両面ヘウ製り、ス ノロ板正置	黄、赤・白・金 土 灰白色	破損、一部腐食
45	168	S128	土師器	埴	口～底	95	有	11.3 5.3 4.4	ロクロナデ、 ヘウ製り	ロクロナデ、 埴文	両面非切通、ヘウ 製り	黄、赤・白・金 土 灰白色	一部腐食
45	169	S128	土師器	埴	口～底	小片	有	—	7.4	ロクロナデ	ロクロナデ	黄、赤・白 土 灰白色	火傷
45	170	S128	土師器	合行罎	胴～底	小片	老	—	ナデ	ナデ	ナデ	黄、赤・白・金・黒 土 明赤褐色	
45	171	S128	土師器	小笠罎	口～底	40	有	(15.6) (7.8) (14.4)	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ、 指環灰	木製灰	やや暖、赤・白・金・黒 土 明赤褐色	
45	172	S128	土師器	埴	口～底	60	有	38.5	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ、 指環灰	—	やや暖、赤・白・金・黒 土 明赤褐色	外周腐食、コゲ
45	173	S128	土師器	カマド附土器	口～底	40	有	(38.2) (44.8) (36.0)	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ、 指環灰	—	やや暖、赤・白・金・黒 土 灰白色	内面腐食
45	174	S129	土師器	埴	口～底	小片	有	(11.7)	ナデ	ナデ	—	やや暖、赤・白・金・黒 土 灰白色	
45	175	S129	土師器	埴	胴	小片	有	—	ハケメ	ハケメ、ナデ	—	やや暖、赤・白・金 土 明赤褐色	劣化恐しい
45	176	集石遺構	土師器	埴	口～底	50	有	11.2 7.2 4.7	ロクロナデ、 ヘウ製り	ロクロナデ、 埴文	ヘウ製り	黄、赤・白・金・黒 土 灰白色	
45	177	集石遺構	土師器	埴	口～底	小片	有	(10.6) (6.7) (4.6)	ロクロナデ、 ミヅキカ	ロクロナデ	ヘウ製り	黄、赤・白・金 土 明赤褐色	やや劣化している
45	178	集石遺構	土師器	埴	口～底	35	有	(11.8) (5.8) (3.8)	ロクロナデ、 ヘウ製り	ロクロナデ	ヘウ製り	黄、赤・白・金 土 灰白色	
45	179	集石遺構	土師器	壺や付埴	口～底	小片	有	—	ロクロナデ、 ヘウ製り	ロクロナデ	ヘウ製り、頸り出 し高台	黄、赤・白・金 土 灰白色	劣化している
45	180	集石遺構	土師器	高杯	口	小片	有	—	ナデ	ナデ	ナデ	黄、白・黒 土 灰白色	
45	181	集石遺構	土師器	子づくね土器	口～底	小片	有	—	ナデ	ナデ	—	やや暖、赤・白・金 土 明赤褐色	
45	182	集石遺構	土師器	子づくね土器	口～底	70	有	5.9 5.0 h.2	ナデ	指ナデ	木製灰	やや暖、赤・白・金 土 明赤褐色	やや腐食
45	183	集石遺構	土師器	子づくね土器	口～底	100	有	3.9 3.4 3.0	ナデ、指環灰	指環灰	—	やや暖、赤・白・金 土 明赤褐色	外周一部腐食

図	No.	出土位置	経 緯	器 種	部 位	残存率 %	反 転	口部 形状 器 種	外 面	内 面	底・胴内部	胎 色	土 成 層	備 考
45	164	紫石遺構	土師器	手づくね土器	口~底	100	—	3.0 — 3.0	任意	ナデ	丸底、圧痕	やや緑、白・金 良 赤褐色		
45	185	紫石遺構	土師器	手づくね土器	口~底	80	—	3.4 — 3.0	ナデ、指痕	ナデ	任意	やや緑、赤・白・金 良 赤褐色		
45	186	紫石遺構	土師器	手づくね土器	口~底	50	有	(3.2) (2.0) (2.6)	ナデ、指痕	ナデ	—	やや緑、赤・白・金 良 赤褐色		
45	187	SD1	土師器	手づくね土器	口~底	100	—	4.1 3.3 3.4	ナデ	—	—	赤・赤・白・金 良 赤褐色		
45	188	SD1	白磁	甕	口	小片	有	—	ロクロナデ	ロクロナデ	—	赤、白 良 緑色		
45	189	SD9	須恵器	甕	体~底	小片	有	—	ロクロナデ、 襷目	ロクロナデ	—	赤、黒 良 灰色		内面に気泡が入っている
45	190	SD9	土師器	坏	体~底	小片	有	(7.2)	ナデ	ミガキ	ヘラ刷り	赤、赤・白・金 やや不具 灰青褐色		一部黒変、スカー
45	191	SD9	土師器	坏	体~底	小片	有	(4.6)	ロクロナデ、 ヘラ刷り	ロクロナデ、 襷目	ヘラ刷りか	赤、赤・白・金 良 灰色		劣化している
45	192	SD9	土師器	坏	体~底	小片	有	(9.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	木槌痕	赤、赤・白・金 良 緑色		外周黒変
45	193	SD9	土師器	坏	体~底	小片	有	(8.4)	ロクロナデ、 ヘラ刷り	ロクロナデ	ヘラ刷りか	赤、赤・白・金 良 緑色		劣化している
45	194	SD9	土師器	甕	胴~底	小片	有	(6.0)	ナデ	ナデ	木槌痕	やや緑、赤・白・金 良 灰褐色		底面黒変
45	195	SD9	土師器	手づくね土器	体~底	26	有	(4.3)	ナデ	ナデ、指痕	木槌痕か	赤、赤・白・金 良 暗赤褐色		
45	196	SD10	土師器	内付甕	胴	小片	有	—	ハケメ、ヘラ 刷りか	ナデ	指痕	緑、赤・白・黒 良 灰色		底面劣、劣化著しい
45	197	SD15	土師器	S字状口縁台 付甕	口	小片	有	(14.0)	ナデ	ナデ	—	やや緑、赤・白・黒 良 灰青褐色		
45	198	SD15	土師器	内付甕	胴	小片	有	(11.0)	ナデ	—	指痕	やや緑、赤・白・黒 良 鈍褐色		外周黒変、劣化し 鮮明
45	199	SK1	土師器	甕	体~底	小片	有	—	ナデ、ヘラ刷 りか	ロクロナデか	ヘラ刷りか	赤、赤・白・黒 良 緑色		劣化著しい
45	200	SK1	土師器	甕	胴~底	小片	有	(9.3)	ナデ	ナデ	木槌痕	赤、赤・白・黒 良 鈍褐色		底面黒変
45	201	P117	土師器	カマド土器	口~体	小片	有	(21.0)	ハケメ、ナデ	ハケメ	—	赤、赤・白・金 良 明赤褐色		内周黒変
45	202	遺設谷	土師器	二重口縁甕	口~胴	60	—	(14.2)	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ、 指痕	—	やや緑、赤・白・金 良 褐色		
45	203	遺設谷	土師器	二重口縁甕	口~底	70	有	(15.8) 8.0	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	—	やや緑、赤・白・金 良 褐色		外周一部黒変
45	204	遺設谷	土師器	甕	口~底	40	有	(13.2) (8.5) (20.3)	ナデ、ヘラ刷 り	ナデ、指痕	ヘラ刷りか	やや緑、赤・白・金 良 明褐色		
45	205	遺設谷	土師器	二重口縁(耳)	口~底	50	有	(8.5) (3.5) (13.6)	ナデ	ナデ	—	やや緑、赤・白・金 良 明赤褐色		外周一部黒変
45	206	遺設谷	土師器	甕	口~胴	30	—	10.0	ハケメ、ナデ	ナデ	—	やや緑、赤・白・金 良 明赤褐色		S字状口縁、ミニ チュアか
45	207	遺設谷	土師器	甕	口~胴	小片	有	(17.6)	ナデ、ハケメ	ハケメ	—	やや緑、赤・白・金 良 赤褐色		折返し口縁
45	208	遺設谷	灰土器	甕	胴	小片	—	—	ハケメ、指痕 襷目	ナデ	—	赤、赤・白・金・黒 良 鈍赤褐色		底面、外周スカー 内周一部黒変

区 号	出七段番	区 別	経 緯	方位	残存率 %	口底 残存 割合 %	外 置	内 置	庭・厨内置	結 核 色 調	土 成 期	備 考	
47	209	埋没谷	土師器	高坪	男	25	有	12.1	ミダケ	ナデ	ナデ	やや粗、赤・白・金・黒 良 明赤褐色	穿孔3ヶ所確認
47	210	埋没谷	土師器	高坪	休-男	35	有	(11.0)	ナデ	ナデ	ナデ	やや粗、赤・白・金・黒 良 明赤褐色	現存部で穿孔3ヶ 所確認
47	211	埋没谷	土師器	高坪	休-男	小片	有	-	ナデ	ヘウナデ	ヘウナデ	やや粗、赤・白・金・黒 良 褐色	穿孔4ヶ所か
47	212	埋没谷	土師器	ミニチュア (素杯小)	休-男	小片	有	-	ナデ、ヘウナ リ	ナデ	ナデ	やや粗、赤・白 良 明赤褐色	
47	213	埋没谷	弥生土器	栗	口-男	小片	有	(21.6)	ナデ、ハケメ、 銅糸目縁 (ハケメ)	ナデ	-	やや粗、赤・白・金・黒 良 褐色	外周、及び内周一 部が黒変、やや劣 化している
47	214	埋没谷	弥生土器	栗	口-男	小片	有	(21.4)	ナデ、ハケメ、 銅糸目縁 (ハケメ)	ナデ	-	やや粗、赤・白・金・黒 良 褐色	内周の一部が黒 変、やや劣化して いる
47	216	埋没谷	土師器	加納口縁型	口	小片	有	(14.3)	ナデ、縄目か ハケメ	ナデ	-	紅、赤・白・金・黒 小片 褐色	折滅し口縁、劣化 著しい
47	216	埋没谷	土師器	壺小	口	小片	有	(16.2)	ナデ	ナデ	-	赤、赤・白・金・黒 良 褐色	受口状口縁
47	217	埋没谷	土師器	壺	口-男	小片	有	14.0	ナデ、ハケメ	ナデ	-	赤、赤・白・金 良 褐色	外置やや屈変
47	218	埋没谷	土師器	壺	口-男	小片	有	(12.4)	ナデ、ハケメ	ナデ、指環状	-	やや粗、赤・白・金・黒 良 褐色	やや劣化している 折滅し口縁
47	219	埋没谷	土師器	壺	男	小片	有	-	ナデ	指環状、ナデ	-	紅、赤・白・金・黒 良 赤褐色	劣化している
47	220	埋没谷	土師器	白付塗か	口-男	30	有	(17.2)	ナデ、ハケメ (底縁2方向)	ナデ	-	紅、赤・金 良 褐色	劣化している
47	221	埋没谷	土師器	壺	男-底	小片	有	7.6	ナデ、ハケメ	ナデ	土板	やや粗、赤・白・金 良 褐色	外置一部黒変
47	222	埋没谷	土師器	壺	男-底	小片	有	11.2	ナデ、ハケメ	ナデ、内周面 取	木炭灰、土灰	紅、赤・口・金・黒 良 褐色	内周取柄、割滅か
47	223	埋没谷	土師器	壺	男-底	小片	有	(7.6)	ヘウナデ	ナデ	土板	やや粗、赤・白・金・黒 やや不具 良 褐色	藍川黒変
48	224	埋没谷	土師器	白付塗	男	小片	有	(14.0)	ナデ、ハケメ	ナデ	ナデ	やや粗、赤・白・金 良 明赤褐色	やや劣化している
48	226	埋没谷	土師器	白付塗	男	小片	有	7.8	ナデ	ナデ	ナデ	やや粗、赤・白・金 良 明赤褐色	やや劣化している
48	226	埋没谷	土師器	白付塗	男	小片	有	-	ナデ、ハケメ	ナデ	ナデ	やや粗、赤・白・金 良 赤褐色	やや劣化している 片面黒変
48	227	埋没谷	土師器	白付塗	男	小片	有	-	脚縁合部に粘 土粉付後、指 ナデ	ナデ	ナデ	粗、赤・白・金・黒 良 褐色	劣化著しい
48	228	埋没谷	土師器	壺	男-底	小片	有	5.9	ナデか	ナデか	-	粗、赤・白・金・黒 良 褐色	劣化著しい
48	229	埋没谷	土師器	壺	男-底	小片	有	7.6	ナデ	ヘウナデ、ナ デ	土板	赤、白・黒 やや不具 良 褐色	劣化している
48	230	埋没谷	土師器	瓶 (鉄器土器小)	男-底	小片	有	(4.1)	ナデ	ナデ	-	やや粗、赤・白・金 良 浅黄褐色	ミニチュアか 黒 変
48	231	埋没谷	土師器	壺 (ミニチュア)	男-底	50	有	3.8	ナデ	ナデ	ナデ	やや粗、赤・白・金 良 明赤褐色	ミニチュア
48	232	埋没谷	土師器	壺 (ミニチュア)	男-底	50	有	3.8	ナデ、ハケメ	ナデ	ナデ	赤、赤・白・黒 良 明赤褐色	ミニチュア
48	233	埋没谷	土師器	壺	男	有	有	(10.3) (5.3) (4.6)	ロクロナデ、 陶板ヘウナデ	ロクロナデ、 陶文	陶板ヘウナデ、男 用出し高台	赤、赤・白・金 良 褐色	やや劣化している

氏名	馬士控名	種別	登録	部位	飛行率	反転	口徑 底径 厚さ	材質	内容	塗・種内蓋	治 染 色	土 成 膜	備 考
48-231	濃橋外	土師器	坏	口~底	20		16.2 6.3 6.0	ロクロナガ、 ヘウ削り	ロクロナガ、 羅文	紅転へう削り、 張り出し黒白	紫、赤・白・金 朱赤褐色		やや劣化している
48-232	濃橋外	土師器	坏	口~底	45		16.6 5.8 6.3	ロクロナガ	ロクロナガ、 羅文	紅転へう削り、 張り出し黒白	紫、赤・白・金 朱褐色		
48-236	濃橋外	土師器	坏	口~底	90	有	(16.4) (7.0) (5.9)	ロクロナガ、 羅転へう削り	ロクロナガ、 羅文	羅転へう削り、 張り出し黒白、或部 に無青	紫、赤・白・金 朱褐色		
48-237	濃橋外	深草器	坏	口~底	20	有	(10.2) (5.4) (3.0)	ロクロナガ	ロクロナガ	羅転赤切歯、トナ ン度か	紫、黒 灰白色		
48-238	濃橋外	土師器	土師器	胴	小片	有	—	羅漢儀、ナダ	ナダ	ナダ	紫、赤・白・金 朱褐色		胴内蓋黒皮
48-239	濃橋外	土師器	土師器	胴	小片	有	(9.0)	ナダ	ナダ	—	紫、赤・白・金 やや不具 朱褐色		外蓋黒皮
48-240	濃橋外	深草器	深草器	胴	小片	—	—	タタキ貝	ナダ、黒皮か	—	紫、赤・黒 灰白色		
48-241	濃橋外	深草器	深草器	胴	小片	—	—	ハケメ、自然 地か	ナダ	—	紫、黒 灰白色		
48-242	濃橋外	土師器	土師器	胴	小片	有	(5.2)	ナダ、ヘウ削 り	ナダ	ヘウ削り、黒皮 「口」	紫、赤・白・黒 朱褐色		一部黒皮
48-243	濃橋外	土師器	土師器	胴	小片	有	—	ヘウ削り	ロクロナガ	ヘウ削り、黒皮 「口」	紫、赤・白・金 朱褐色		一部黒皮
48-244	濃橋外	土師器	土師器	胴	小片	—	—	ロクロナガ、 ヘウ削り	ロクロナガ	ヘウ削り、黒皮 「口」	紫、赤・白・金 朱褐色		やや劣化している
48-245	濃橋外	深草器	深草器	胴	小片	—	—	ロクロナガ、 ナダ、自然地	ロクロナガ	—	紫、黒 灰白色		
48-246	濃橋外	深草器	深草器	胴	小片	有	(13.2) —	ロクロナガ	ロクロナガ	—	紫、黒 灰白色		
48-247	濃橋外	土師器	土師器	胴	100	—	6.7 5.6 2.4	ヘウ削りか	ヘウ削りか	ヘウ削りか	紫、赤・金 朱褐色		直径 143.4g、 孔径 7mm
48-248	濃橋外	土師器	土師器	胴	100	—	5.5 3.6 4.3	ナダ、羅漢儀	ナダ、羅漢儀	木管立、種子仕度 か	紫、赤・白・金 朱褐色		一部やや劣化
48-249	試掘 3Tr	土師器	土師器	胴	小片	有	(9.6)	ヘウ削り	ヘウ削り、ナ ダ	木管立	やや粗、赤・白・金 朱褐色		一部黒皮
48-250	試掘 4Tr	土師器	土師器	胴	30	有	(13.7) —	ハケメ、黒み 丁線	ハケメ、ナダ	—	やや粗、赤・白・金 朱褐色		外蓋一部黒皮
48-251	試掘 4Tr	土師器	土師器	胴	小片	有	21.5 —	ナダ	ナダ	—	やや粗、赤・白・金・黒 朱褐色		
48-252	試掘 4Tr	土師器	土師器	胴	小片	有	(7.7)	ハケメ	ハケメ	—	紫、白 朱褐色		内蓋黒皮
48-253	試掘 4Tr	土師器	土師器	胴	小片	有	(9.2)	ハケメ、ナダ	ハケメ、ナダ	木管立	やや粗、白・金・黒 朱褐色		やや劣化している
48-254	試掘 4Tr	土師器	土師器	胴	小片	—	6.2	—	—	—	紫、赤・白・金・黒 朱褐色		劣化著しい
48-255	試掘 4Tr	土師器	土師器	胴	小片	—	—	ハケメ、黒み 羅文	ハケメ、黒み 羅文	—	紫、赤・白・黒 朱褐色		劣化している
48-256	試掘 1Tr	土師器	土師器	胴	小片	—	—	羅文	ナダ	—	紫、赤・白・金 朱褐色		劣化している

表4 編物石観察表

図 号	出土位置	石 材	重 量 (g)	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)
50 1	S11	花崗片岩	611	12.8	6.3	5.0
50 2	S11	花崗岩	682	14.4	7.2	5.6
50 3	S11	花崗岩	331	9.5	4.9	4.5
50 4	S11	花崗岩	910	14.8	8.3	5.0
50 5	S11	礫砂岩	283	11.7	5.1	4.2
50 6	S11	砂岩	928	14.2	7.2	5.0
50 7	S11	礫砂岩	964	14.9	8.3	5.5
50 8	S11	礫砂岩	369	13.0	4.9	4.8
50 9	S11	花崗岩	1,135	18.5	7.2	6.0
50 10	S11	花崗閃綠岩	960	15.3	10.3	5.2
50 11	S11	花崗岩	1,270	19.4	8.1	7.2
50 12	S11	花崗閃綠岩	934	14.6	7.3	6.5
51 13	S11	花崗岩	621	15.2	6.9	6.3
51 14	S11	花崗岩	728	14.9	8.6	4.6
51 15	S11	礫砂岩	824	14.7	8.2	5.3

表5 砥石観察表

図 号	出土位置	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	石 質	備 考
51 1	S12	8.0	5.0	1.4	93.5	チャート	1面
51 2	S18	24.3	11.4	8.7	3,160.0	泥岩	
51 3	竝裡4bTr	17.8	8.2	4.9	1,250.0	泥岩	3面

表6 鉄製品観察表

図 号	出土位置	種 類	最大長 (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	重 量 (g)	備 考
52 1	S15	鋸	(7.2)	(1.5)	0.3	6.1	
52 2	S116	鋸	(10.8)	(4.0)	0.4	66.0	
52 3	S15	U字形鋸・鋸先	8.3	11.6	0.9	101.0	
52 4	S121	鉄錐?	(12.5)	1.1	0.9	15.6	
52 5	S18	刀子	(6.5)	(1.4)	5.5	12.0	
52 6	S113	刀子	(10.0)	1.8	(0.9)	17.2	
52 7	S119	刀子	(13.0)	2.1	(0.8)	31.0	
52 8	S117	刀子?	(11.8)	(1.2)	(0.9)	20.2	
52 9	3Tr	刀子?	(7.3)	(1.6)	(1.6)	13.6	
52 10	S12	不明	—	—	—	4.9	
52 11	S111	釘	14.0	1.5	1.2	65.6	
52 12	S12	棒状	(3.7)	(0.6)	(0.5)	1.4	
52 13	S121	棒状	(0.8)	(0.7)	(0.6)	1.2	筋線具・軸?
52 14	紫石透櫛	棒状	(3.9)	(0.8)	(0.9)	3.3	筋線具・軸?
52 15	4Tr	棒状	(10.9)	(0.8)	(0.7)	17.4	
52 16	表土	棒状	(2.5)	(0.5)	(0.5)	1.0	筋線具・軸?

Ⅳ. 車居遺跡（1次）の調査

本地点は御手洗川左岸に位置する。御手洗川に沿って北西に傾斜する約540㎡を調査し、竪穴住居跡10、竪穴状遺構1、溝状遺構1、炉3等の遺構を発見した。今宮遺跡同様、調査区の地山は砂質の河岸堆積土で、遺構プランの検出及び遺存状況の判断が非常に困難であった。調査以前は耕作地であったため、灌漑施設の埋設によって一部攪乱を受けていた。表層から遺構確認面までの深さは、約30～50cmを測る。基本層序については、試掘調査時の上層観察を柱状図化し、第54図に示したので参照されたい。

1. 遺構

SI1（第56図、PL14）

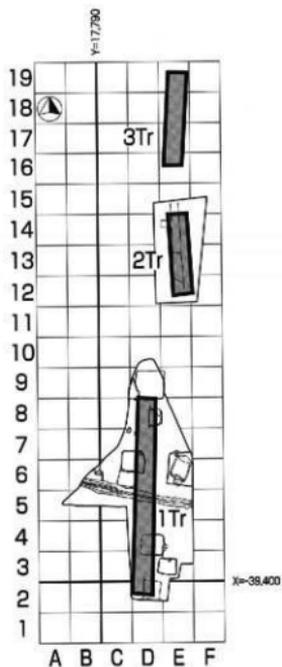
D-8グリッドで確認した。試掘トレンチで西壁を壊してしまったが、方形を呈していたと推測される。遺構確認面から床面までの深さは24cmである。カマドは北辺の東隅で確認した。焚き口は南向きで燃焼部が壁内で取まる形態であったと推測される。構築材には、粘土と礫を用いており、袖石を検出した。また燃焼部中央には凹みがあり、支脚石を据えていた痕跡と推測される。その他、カマド周辺からは複数の礫を検出しており、遺構の廃絶により廃棄されたものと推測される。尚、左袖は礫と粘土で構築しているが、右袖は地山を掘り残して袖としていた。また右側の袖部と壁の間は床面よりやや高く、カマドに付設する棚状の空間としていた可能性も考えられる。遺物は土師器杯・高杯・甕、須恵器甕等があり、カマド左脇部分に集中して出土した。遺物の時期は古墳Ⅹ期に比定した。遺構年代は、カマド周辺の遺物から、6世紀前半頃と推定した。

SI2（第57図、PL18）

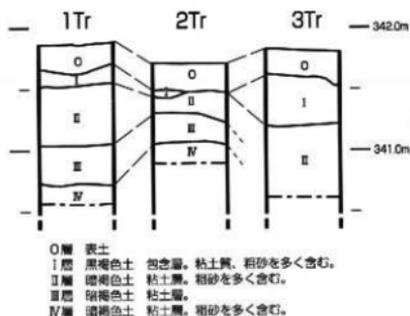
D-9グリッドの南西部分で確認した。遺構の大半は調査区外にあたるものの、南壁及び東壁とカマドを検出した。重複するSI8（6世紀前半頃）を壊していた。確認面から床面までの深さは、北側で10cm、南側で36cmを測る。カマドは、東辺の南端よりやや中央寄りの位置で焼土ブロック・炭化物を確認したが、形態は明確ではない。遺物は土師器杯・皿、須恵器甕片などがあり、カマド右側の住居南東隅から集中して出土した。遺物の時期は、奈・平Ⅴ期に比定した。遺構年代は、カマド周辺の出土遺物から、9世紀後半頃と推定した。

SI3（第57図、PL15）

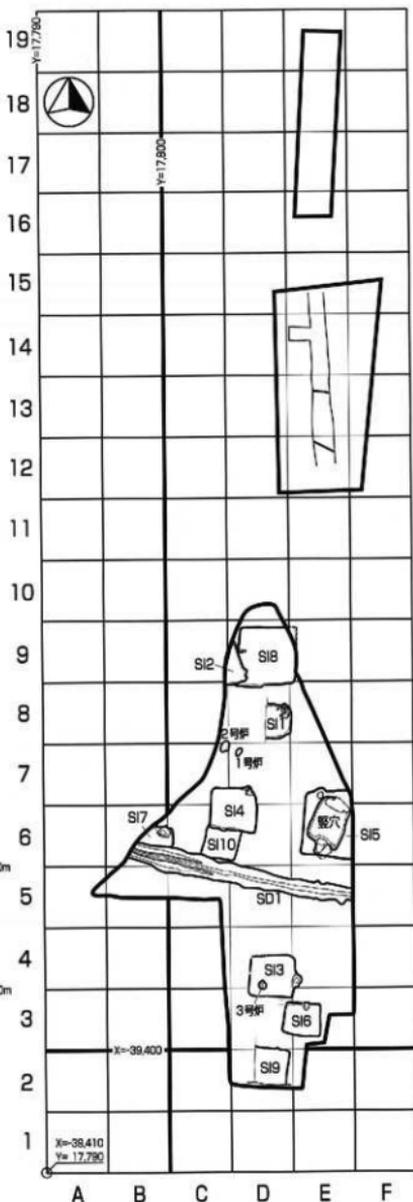
D-3・4グリッドの東部分で確認した。試掘トレンチで西壁を掘削してしまったが、方形を呈していたと推測される。東辺の長さは約3.0m、確認面からの深さは約10cmを測る。中央やや南西のところまで3号炉と重複し、床面を壊されている。カマドは東辺のほぼ中央部に位置するが、遺存状況が悪く、燃焼部と焼土粒と炭化物を確認したのみであった。カマドの形態は明確ではなかったものの、壁面より外側に燃焼部が位置したと推測される。遺物は、土師器杯・高杯、須恵器杯・壺、砥石等が出土した他、陶器、磁器等の近世・近代の遺物が若干混在した。遺物の時期は、土師器の時期から奈・平Ⅴ期に比定した。遺構年代は、カマド周辺出土の遺物から、10世紀前半頃に位置付けておきたい。



第53図 トレンチ配置図

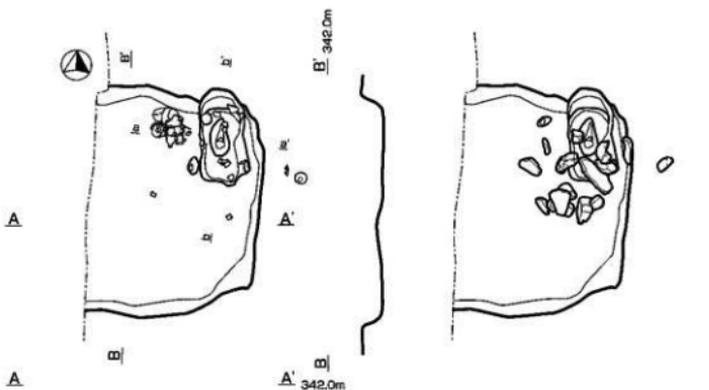


第54図 基本層序柱状図

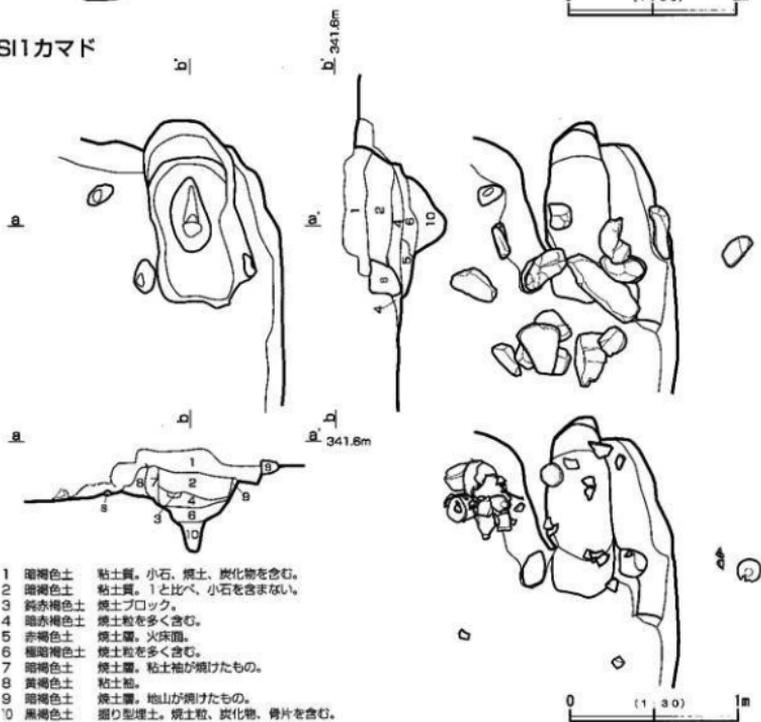


第55図 遺構分布図 (1/400)

S11



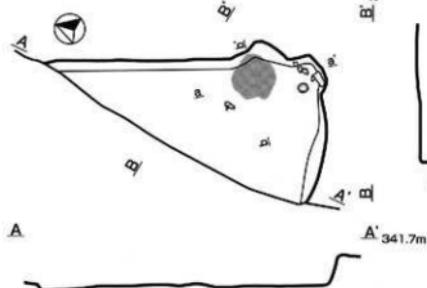
S11カマド



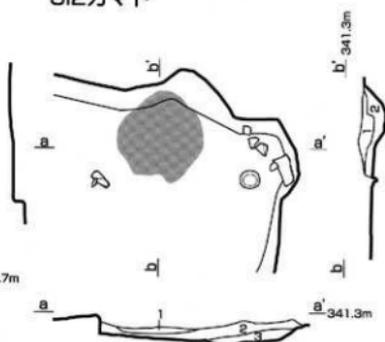
- | | | |
|----|-------|----------------------|
| 1 | 暗褐色土 | 粘土質、小石、灰土、炭化物を含む。 |
| 2 | 暗褐色土 | 粘土質。1と比べ、小石を含まない。 |
| 3 | 鈍赤褐色土 | 焼土ブロック。 |
| 4 | 暗赤褐色土 | 焼土粒を多く含む。 |
| 5 | 赤褐色土 | 焼土層、火床面。 |
| 6 | 極暗褐色土 | 焼土粒を多く含む。 |
| 7 | 暗褐色土 | 焼土層、粘土袖が焼けたもの。 |
| 8 | 黄褐色土 | 粘土袖。 |
| 9 | 暗褐色土 | 焼土層、地山が湧けたもの。 |
| 10 | 黒褐色土 | 掘り型埋土。焼土粒、炭化物、骨片を含む。 |

第56図 S11

SI2



SI2カマド

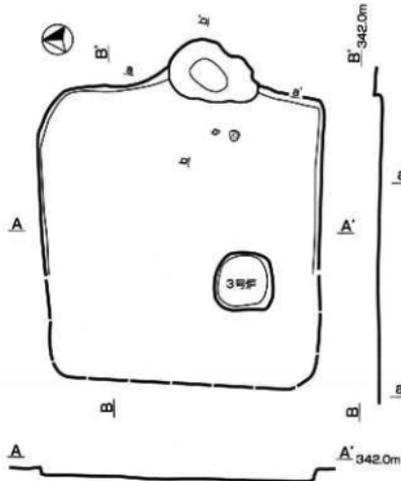


- 1 暗褐色土 粘土質。焼土ブロック、炭化物を多量に含む。
- 2 暗褐色土 粘土質。炭化物を少量含む。
- 3 暗褐色土 やや砂質。炭化物は少ない。

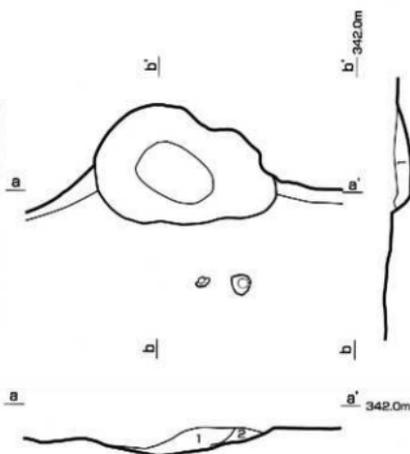
0 (1:60) 2m

0 (1:30) 1m

SI3



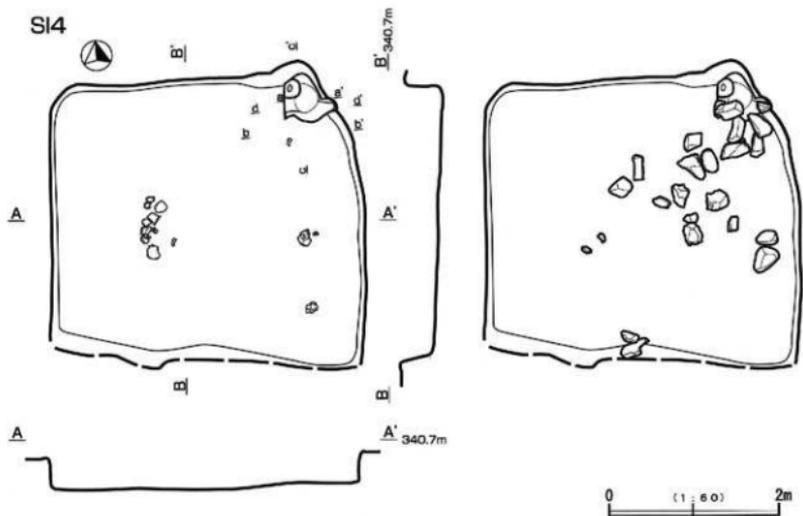
SI3カマド



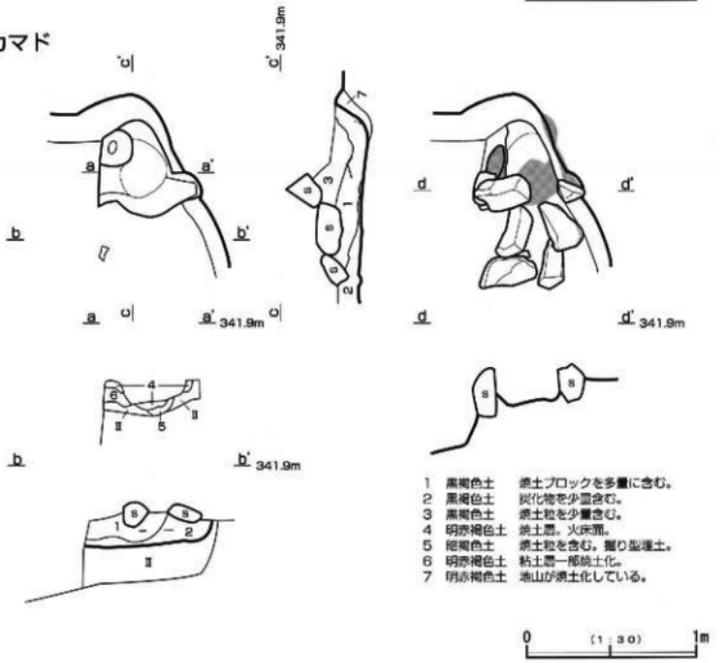
- 1 赤黒色土 焼土質、炭化物を多く含む。
- 2 極暗褐色土 砂粉を含む。地山か。

0 (1:60) 2m

0 (1:30) 1m



SI4カマド



- 1 黒褐色土 赤土ブロックを多量に含む。
- 2 黒褐色土 炭化物を少量含む。
- 3 黒褐色土 赤土粒を少量含む。
- 4 明赤褐色土 焼土層、火灰層。
- 5 暗褐色土 赤土粒を含む。鋸り型蓮土。
- 6 明赤褐色土 粘土層一部焼土化。
- 7 明赤褐色土 堆山が赤土化している。

第58図 SI4

S14 (第58図、PL15)

C・D-6・7グリッドで確認した。S110(10世紀後半～11世紀前半)に北辺の上部を壊されていた。遺構プランは方形を呈すと思われる、確認面から床面までの深さは約40cmを測る。カマドは北東隅で確認した。焚き口は南向きで、燃焼部が壁内で収まる形態であったと推測される。構築材には、粘土と礫を用いており、袖石を持つ袖部とカマド周辺で貼床を確認した。またカマド周辺では、遺構の廃絶により廃棄されたと推測される複数の礫を検出した。遺物は、土師器坏・壺・甕・甌、須恵器壺片・甕片が出土した。遺物の時期は、球胴甕(45)と甌(50)は古墳時代後期頃、他、土師器坏・甕等は奈・平Ⅵ期に比定した。遺構年代は、別時期の遺物が混在しているものの、カマド周辺出土の遺物から、10世紀前半としておきたい。

S15 (第59図、PL15)

E-6・7グリッドで確認した。東側は調査区外であったが、方形を呈すと思われる、南北辺約5.3m、確認面から床面までの深さは20cmを測る。遺構中央部は重複する竪穴状遺構に壊されていた。カマドは北辺中央と西隅の中間に位置する。少量の焼土と礫を確認したのみで、形態については不明である。遺物は土師器坏・甕、須恵器坏等が出土した。遺物の時期は古墳Ⅶ期(53・60・61・62)と奈・平Ⅵ期に比定した。遺構年代については、竪穴状遺構との重複関係を考慮して、7世紀前半頃と位置付けておく。

S16 (第59・60図、PL15)

D-3・4グリッドで確認した。2.7×2.5mの方形を呈し、主軸方向はN-4°-E、確認面から床面までの深さは約25cmを測る。カマドは北辺中央やや右寄りに位置する。焚き口は南向きで燃焼部がほぼ壁内で収まる形態であったと推測される。構築材には粘土と礫を用いており、袖石と袖部及びカマド周辺で貼床を確認した。遺物は土師器坏・甕・羽釜等がカマド右脇でまとまって出土した。その他、覆土から灰袖陶器片、青磁小片、古銭(貞観永寶)等も出土している。遺物の時期は、奈・平Ⅵ～Ⅶ期に比定した。遺構年代は、カマド周辺の遺物から、10世紀代に位置付けておきたい。

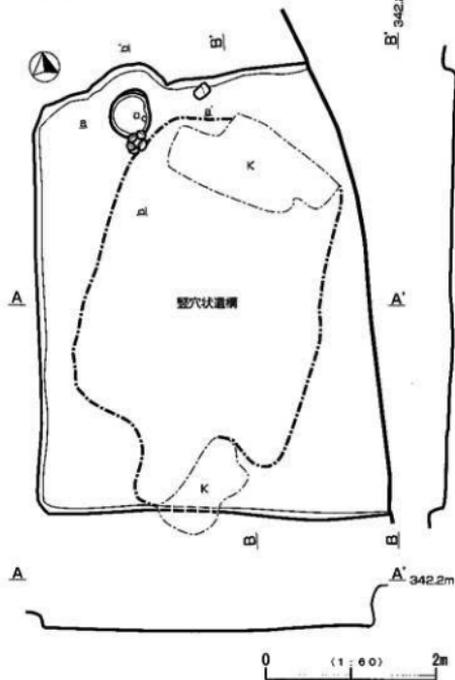
S17 (第60図、PL16)

B-6グリッドで確認した。重複するSD1に南側を壊され、西側は調査区外(地刺境道)で削平されていた。確認面から床面までの深さは80cmを測る。カマドは北辺右端からやや中央寄りに位置する。焚き口は南向きで燃焼部が壁内に収まる形態であったと推測される。構築材には、礫と粘土を用いており、複数の礫を用いた袖部と、カマドの使用により炭化物が大量に散在していた状況を確認した。またS11と同様、カマドと西壁との間に床面よりもやや高い空間が確認できる。遺物は土師器坏・羽釜、灰袖陶器片等の他、転用硯と推測される須恵器甕片が出土した。遺物の時期は奈・平Ⅶ期に比定した。遺構年代は、カマド出土の遺物から、10世紀後半に位置付けておきたい。

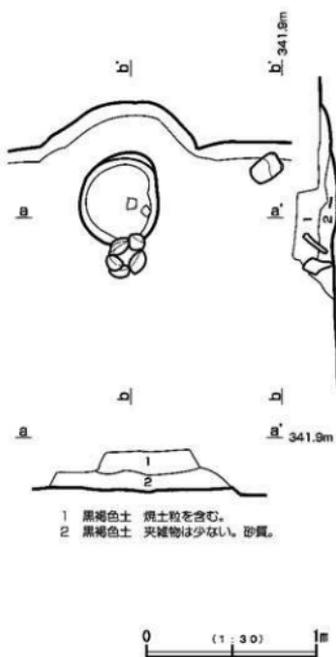
S18 (第61図、PL16)

D-9グリッドで確認した。南北約4.5m、確認面から床面までの深さは約30cmを測る。方形を呈すと推測されるが、重複するS12に西側の一部を壊され、北東隅は調査区外であった。カマドは西壁の中央に位置する。遺存状況が悪く、形態は不明で、左袖部のみが遺存していた。構築材に

SI5

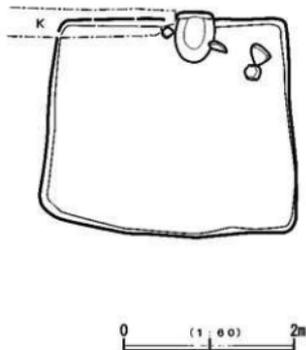
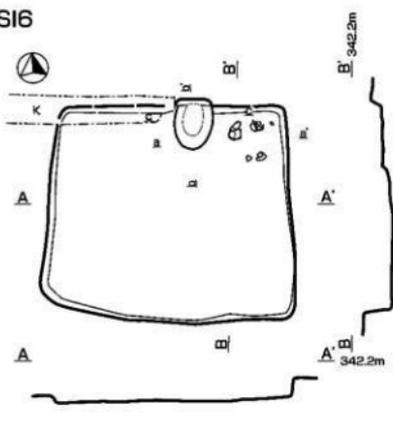


SI5カマド



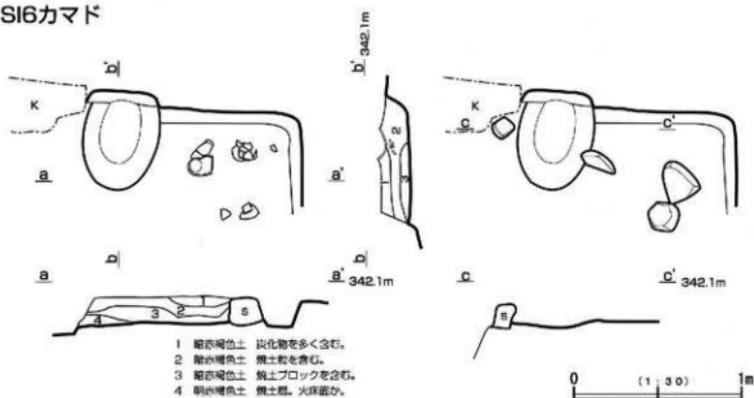
- 1 黒褐色土 煨土粒を含む。
- 2 黒褐色土 夾雑物は少ない。砂質。

SI6

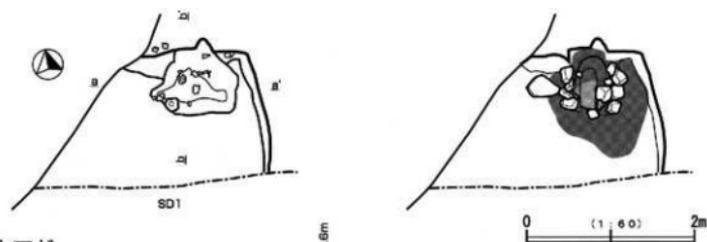


第59図 SI5・6(1)

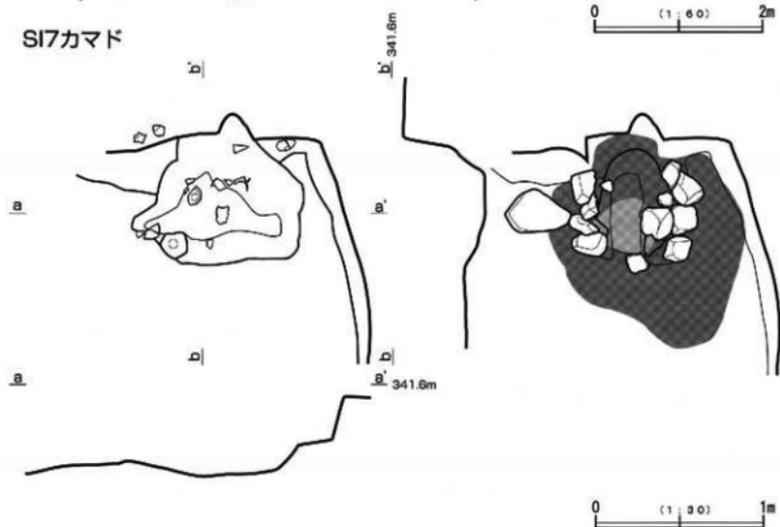
SI6カマド



SI7



SI7カマド



は礫と粘土を用いており、袖石と土師器甕が2個体出土した。遺物は土師器皿・坏・甕・手づくね土器、須恵器甕片、打製石斧等が出土した。遺物の時期は、古墳時代後期と奈・平V期に比定した。異なる時期の遺物が混在したが、おそらくは重複するSI2の影響と推測される。遺構年代については、出土遺物と重複関係から、6世紀前半頃に位置付けておきたい。

SI9 (第61図、PL16)

D-2グリッドで確認した。遺存状況が悪く、遺構プランははっきりしないが、北壁にカマドの支脚石と推測される礫を検出したことから、住居跡と推定した。また遺構中央部からは、縄土石が出土している。遺物は、カマド部分及び中央の礫とともに、土師器坏・高坏・甕、須恵器小型甕片などが出土している。遺物の時期は、古墳中期に比定した。遺存状況が悪く、遺構年代は明確ではないが、出土遺物の時期から、7世紀末頃に位置付けておきたい。

SI10 (第61・62図、PL16)

C・D-6グリッドで確認した。ほぼ床面のみの検出で、遺物の出土範囲をあわせて方形プランを推定した。重複するSI7の南壁を壊し、SD1に南壁を壊されている。カマドは北東隅に礫と焼土を確認したのみで、形態については不明である。遺物は土師器皿・坏・脚高高台坏・甕、灰釉陶器碗などが出土した。遺物の時期は、奈・平Ⅵ・Ⅶ期に比定した。遺構年代は、出土遺物から10世紀後半～11世紀前半に位置付けておく。

竪穴状遺構 (第62図、PL17)

E-6グリッドで確認した。SI5 (7世紀前半頃)の中央を壊している。検出したプランは攪乱を受けて不整形であったが、4.1×2.7mの長方形を呈していたと推測される。上面はSI5の覆土とともに掘削してしまったため、確認面(SI5床面)からの深さは40cmを測る。覆土は灰褐色土で炭・焼土が混在し、上層はシルト質の土であった。覆土には礫と平安期の土器を含むが、近世・近代の陶磁器片が混在していた。地下式坑が陥没し、後に埋没した痕跡のような新しい堆積であった可能性も考えられるが、明確な遺構の時期・性格については不明である。

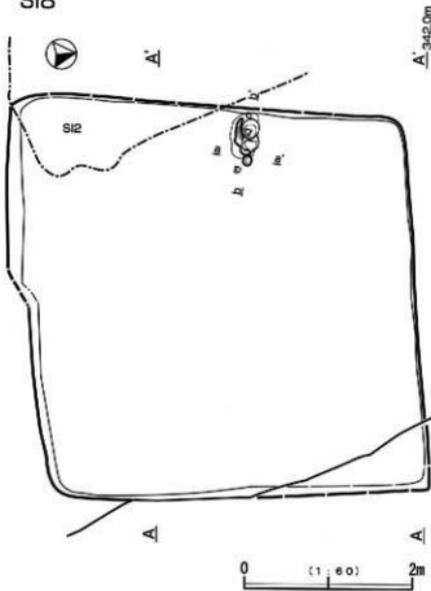
SD1 (第62図、PL17)

B～E-5、B・C-6グリッドにかけて確認した。調査区を東西に横断し、SI7 (10世紀後半)とSI10 (10世紀後半～11世紀前半)を切り崩している。確認範囲での長さは18.6m、最大幅約2.1m、主軸方向はW-72°-N、確認面から床面までの深さは約35cmを測る。土層観察から後世に掘り直した痕跡が確認できた。覆土には多量の礫と遺物が混在しており、土師器坏・皿・柱状高台坏・脚高高台坏・甕、手づくね土器、土鏃、須恵器甕片等が出土した。特に土師器坏の打ち欠き、手づくね土器の出土、複数出土した柱状高台坏・小皿など、祭祀的な遺物の出土が特徴のひとつとしてあげられる。遺物の時期については、奈・平Ⅸ・Ⅹ期頃に比定した。主体的な遺構の使用年代として、11世紀後半～12世紀頃と推定しておきたい。

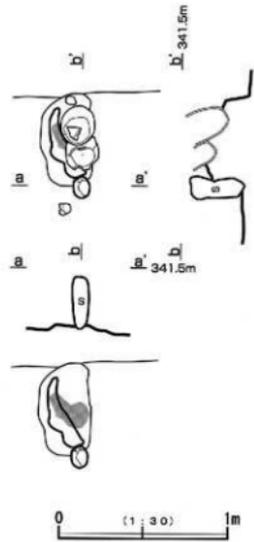
1号炉 (第63図)

C-7グリッド北東隅に位置し、盛り土状に焼土の堆積を確認した。50×26cmの不整形を呈す。本書では炉として報告したが、遺構の性格及び時期については不明である。

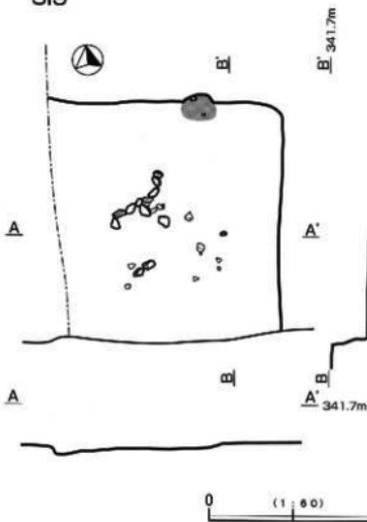
S18



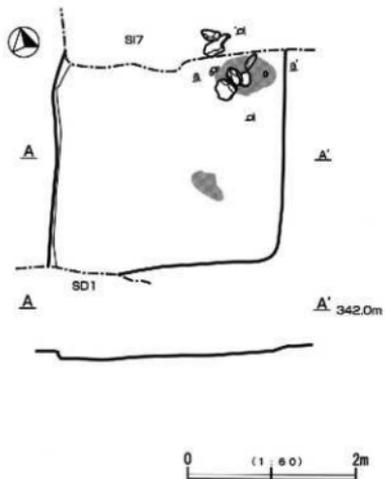
S18カマド



S19

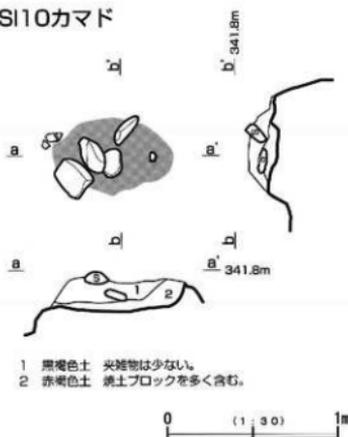


S110



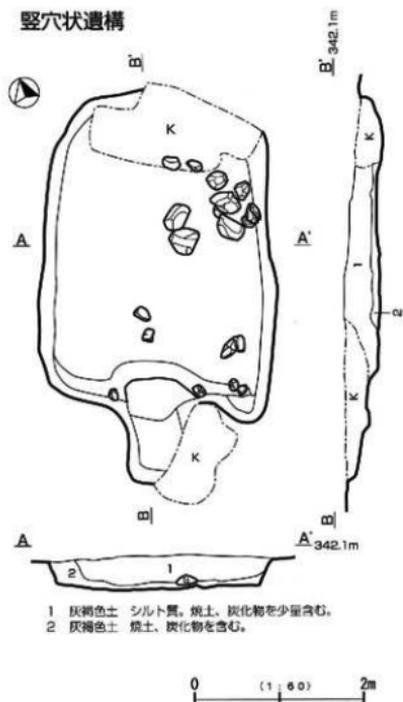
第61図 S18・9・10(1)

SI10カマド



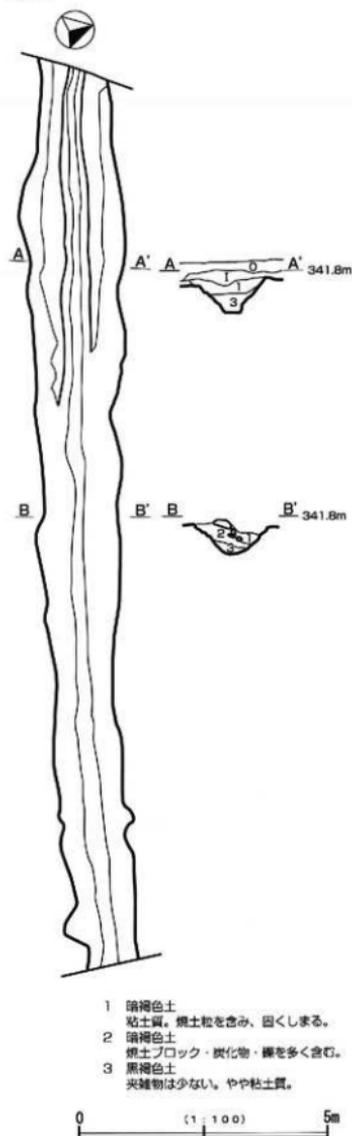
- 1 黒褐色土 夾雑物は少ない。
2 赤褐色土 焼土ブロックを多く含む。

竪穴状遺構



- 1 灰褐色土 シルト質。焼土、炭化物を少量含む。
2 灰褐色土 焼土、炭化物を含む。

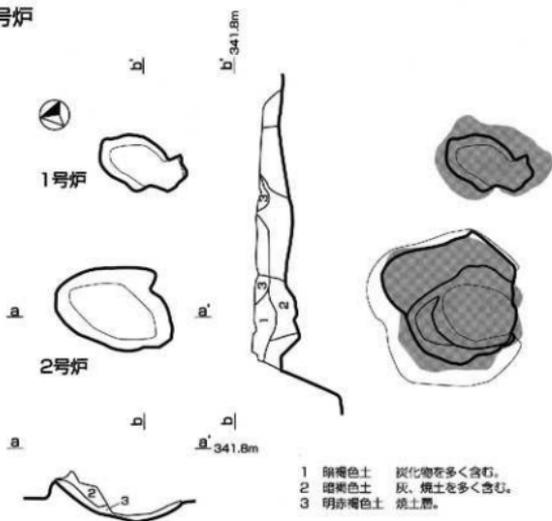
SD1



- 1 暗褐色土 粘土質。焼土粒を含み、固くする。
2 暗褐色土 焼土ブロック、炭化物、糠を多く含む。
3 黒褐色土 夾雑物は少ない。やや粘土質。

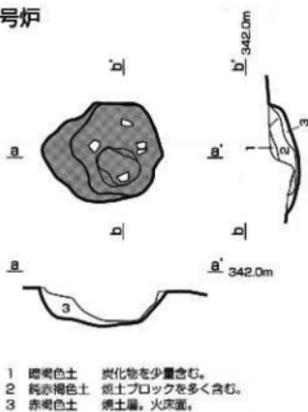
第62図 SI10(2)、竪穴状遺構、SD1

1・2号炉



0 (1:30) 1m

3号炉



0 (1:30) 1m

第63図 1・2・3号炉

2号炉（第63図）

D-7グリッド北西隅で確認した。1号炉の西側に位置し、70×50cmの不整形を呈す。1号炉と同様に炉としたが、性格・時期ともに不明である。

3号炉（第63図）

D-4グリッドで確認した。70×58cmの不整形を呈す。調査時の観察ではSI3（10世紀前半頃）の覆土中に構築した遺構としている。遺物は、古墳時代後期の土師器坏片が出土したが、重複関係ははっきりしないため、遺構年代及び遺構の性格は不明である。

2. 遺物

本調査区の出土遺物は、弥生時代～近世にかけての所産である。土師器を主体としており、出土した遺物時期は弥生時代後半、古墳時代後期、9世紀～12世紀代に大別してみることができる。但し、遺構の遺存状況が悪かったことから、遺構プランの認定が困難で、遺構内出土遺物の同時期性が明確ではなかったという問題がある。ここでは時期ごとに出土遺物の特徴をまとめておきたい。尚、遺構変遷については、第VI章で考察する。

弥生時代後期

弥生土器片2点が、SI2とSI8の覆土に混在していた。山梨県史5期に比定し、甕胴部の小片であるが、縄波状文と籠状文がみられた（16・114）。

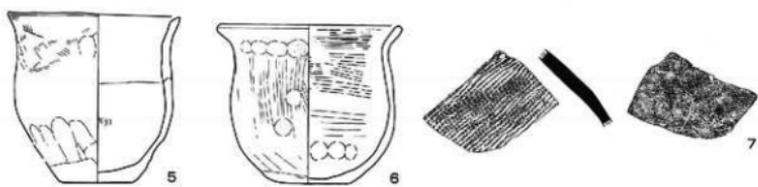
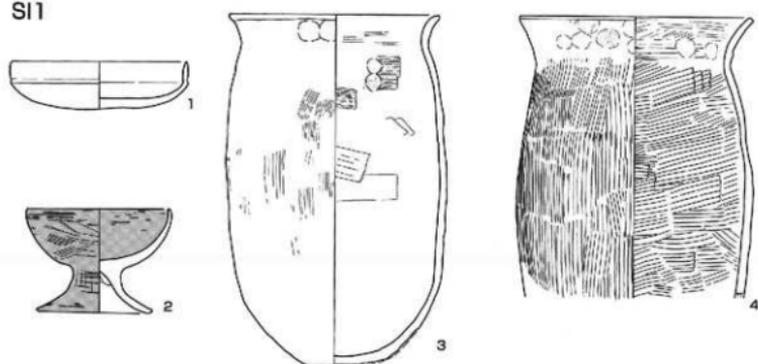
古墳時代後期

本段階の遺物は、SI1・5・8・9から出土している。編年では、古墳I期からⅢ期頃にあたり、6世紀前半～7世紀後半頃の所産と推定している。土師器は、坏・高坏・鉢・甕・甗などがある。坏では半球形の坏（90・115）と、丸底状で有段のもの（1・8・53・87～89）がみられる。内面をミガキ調整されたものが多く、体部が底部から垂直に立ち上がるものや、内湾しながら立ち上がるものなどがある。甕では、長胴甕（3・4・102・103・118）、球形甕（61）、小型甕（5・6・118・181）などがある。特徴としては、長胴甕の頸部屈曲が緩やかで、頸部内面に明確な稜がないことが共通している。また口縁部が長く、内外面をハケメ調整されたもの（4）や、口縁部が短くて内外面をナデ調整されるもの（3・103）、やや胴部が張るもの（102）などがみられる。他、甕と同じ胎土及び調整技法がみられ、体部が半球形を呈して脚がつく鉢（98）、甕の底部（110）、体部がわずかに外反しながら開く鉢状のもの（230）、須恵器小型甕（121）・甕（7・14・15・86・111）などが出土している。

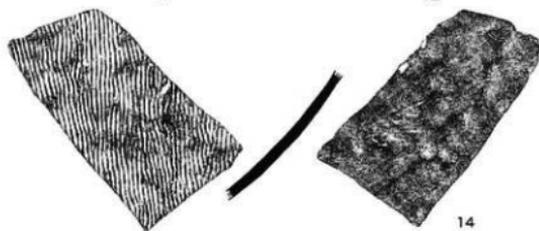
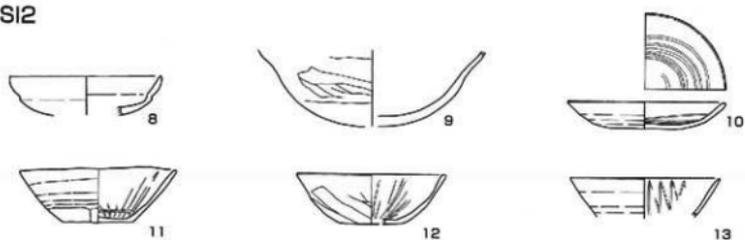
9世紀代

〔奈・平Ⅳ・Ⅴ期〕皿・坏・甕があり、SI2・4・8から出土している。皿は、内面に同心円状暗文があり、底面及び体部を回転ヘラ削りしたもの（10・91・92）がある。坏では、内面に放射状暗文があり、体部下半のヘラ削りが傾位のもの（11）と斜位のもの（12・94・95）、また底部が回転ヘラ削りによって削り出し高台になっているもの（93）などがみられる。甕では、小型甕があり、短い口縁部が胴部より若干肥厚してやや外反しているもの（26・47）がみられた。

SI1

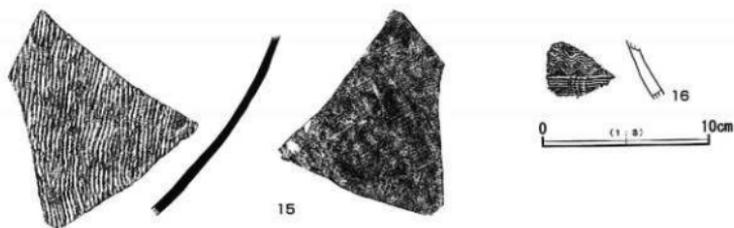


SI2

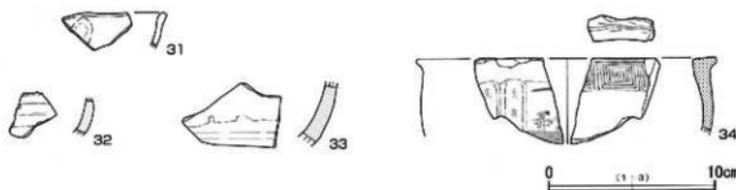
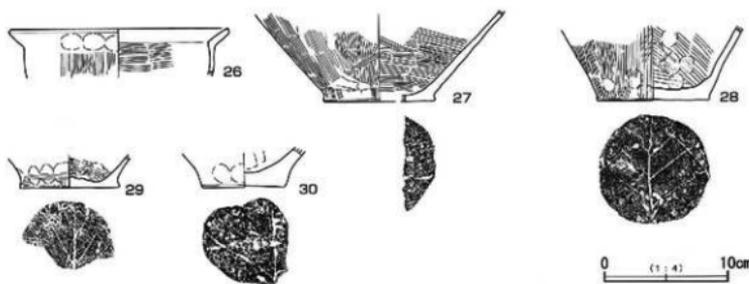
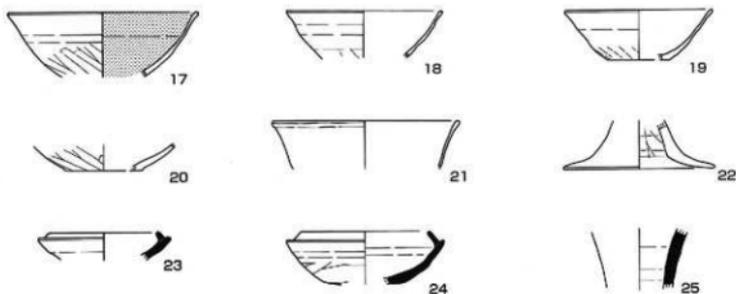


0 10cm

第64図 遺物(1) SI1・2①

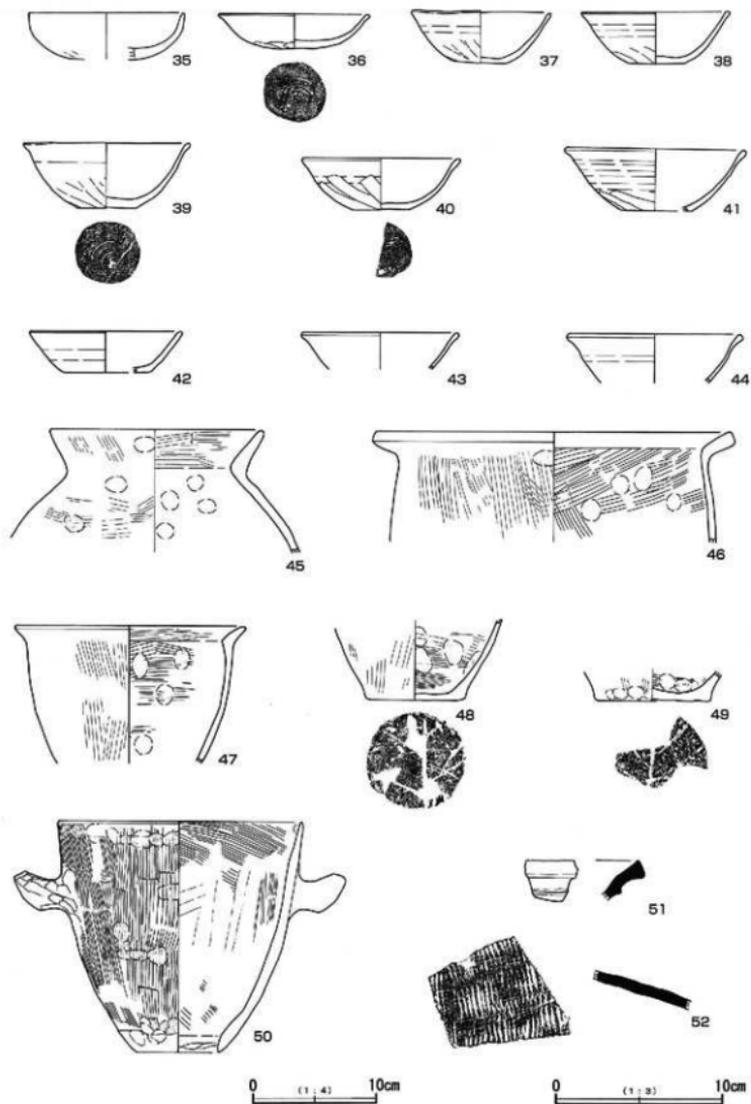


SI3



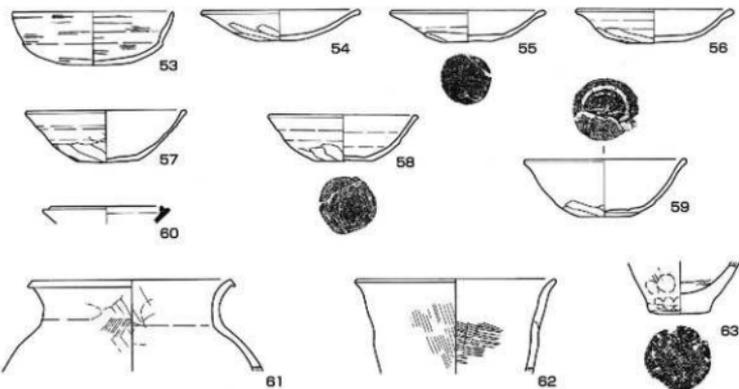
第65図 遺物(2) SI2②・3

SI4

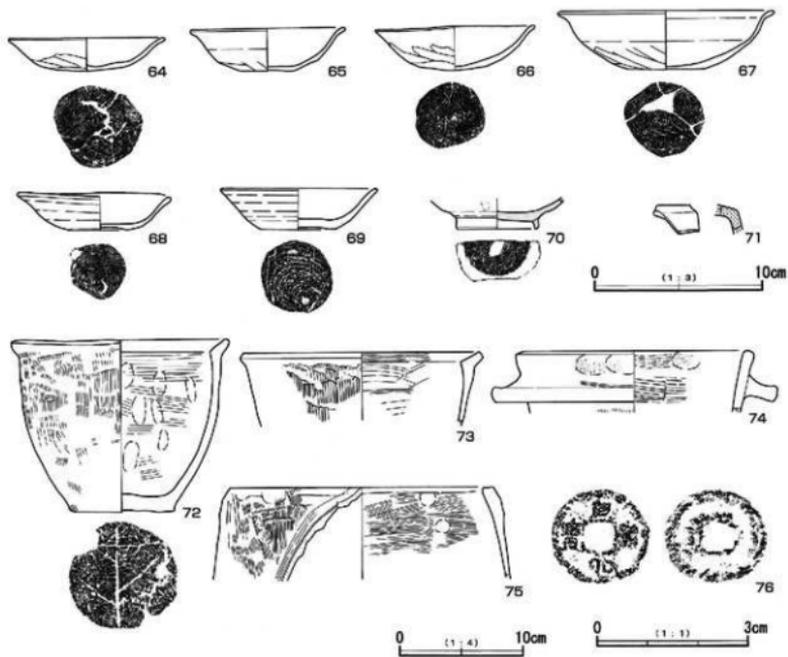


第66圖 遺物(3) SI4

S15

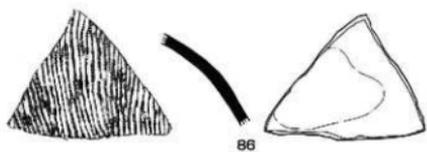
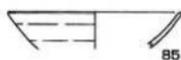
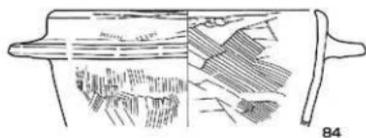
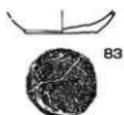
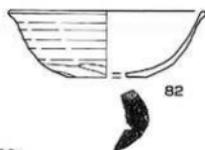
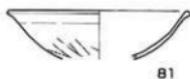
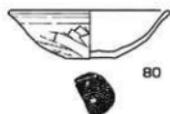
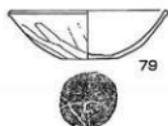


S16

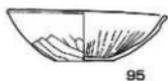
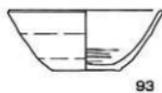


第67図 遺物(4) S15・6

S17

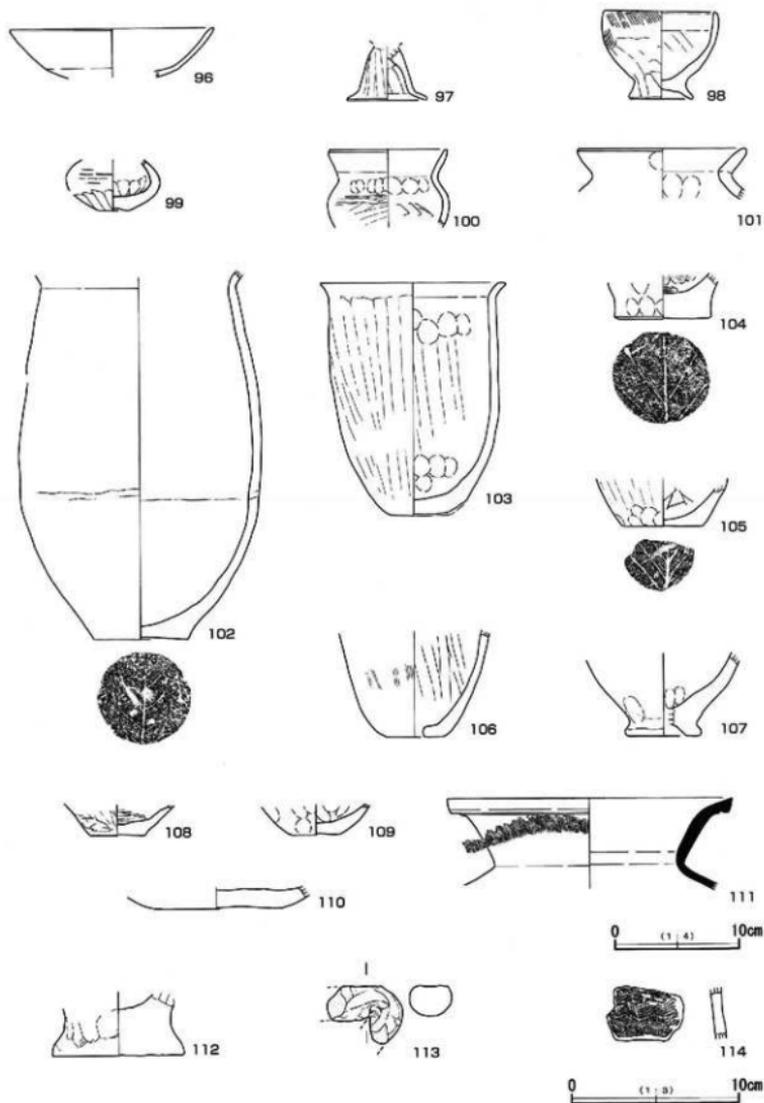


S18



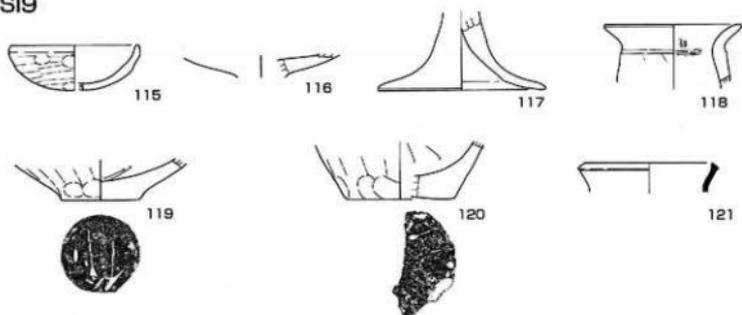
0 (1/4) 10cm

第68圖 遺物(5) S17・8①

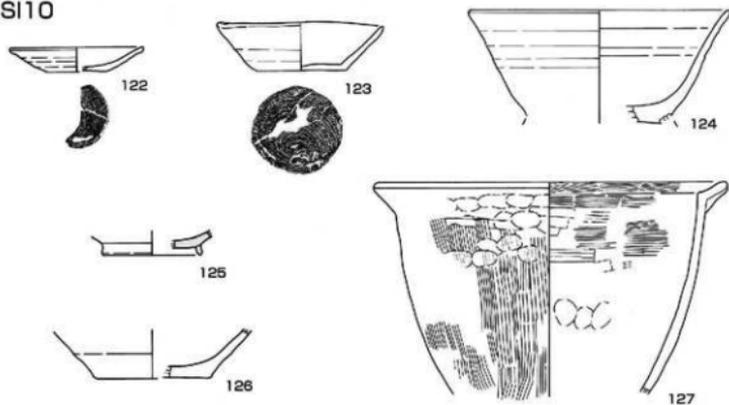


第69圖 遺物(6) S18②

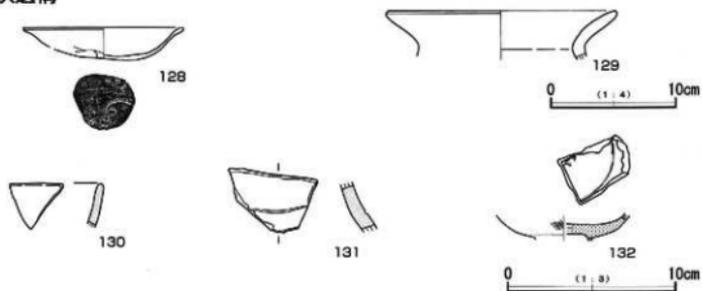
SI9



SI10

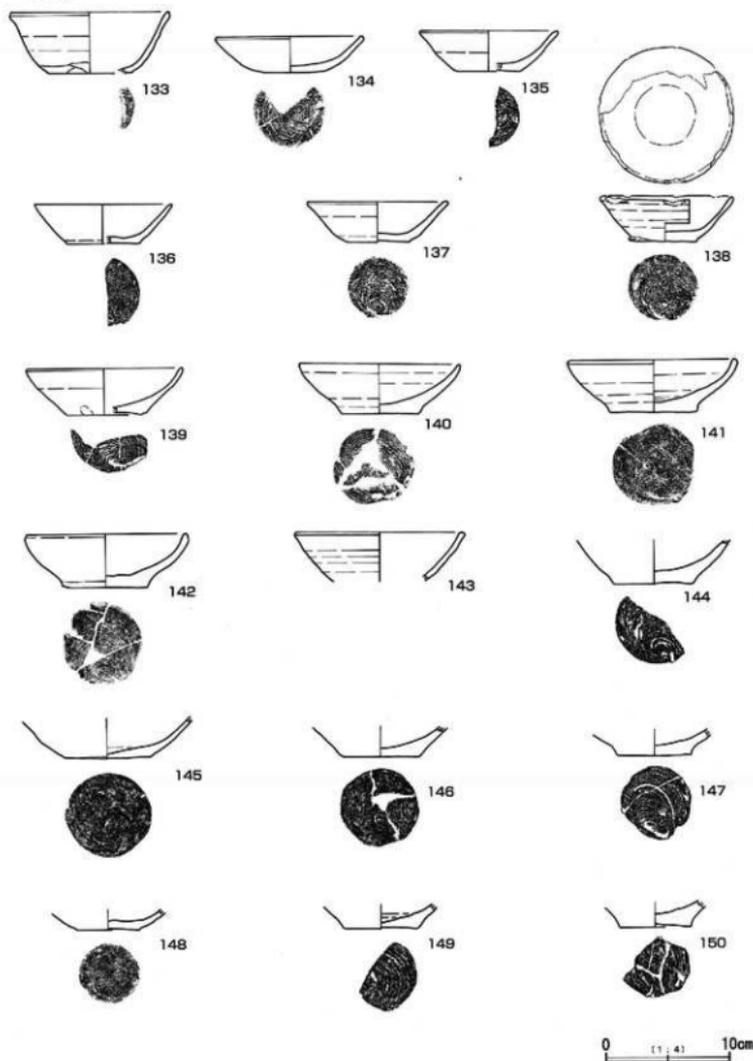


竪穴状遺構

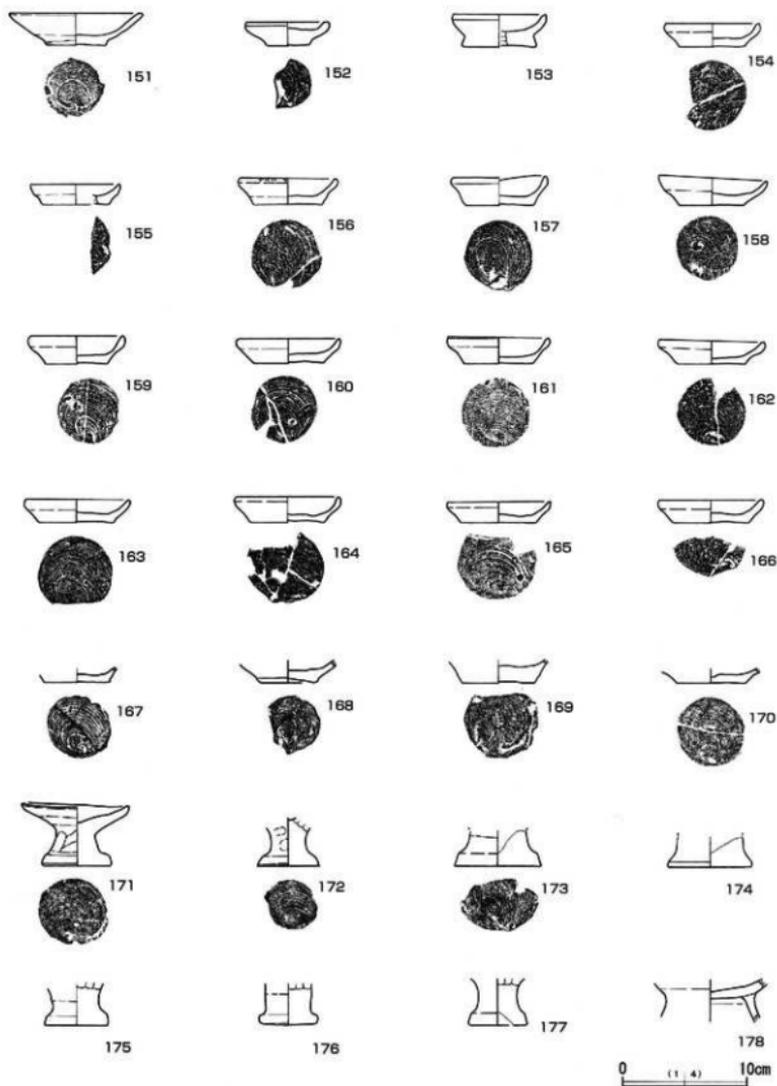


第70図 遺物(7) SI9・10、竪穴状遺構

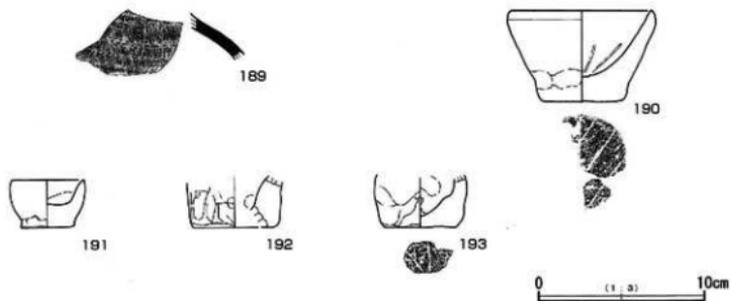
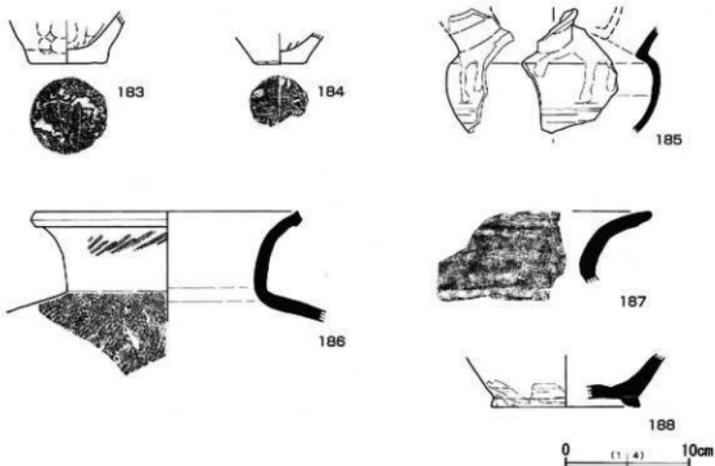
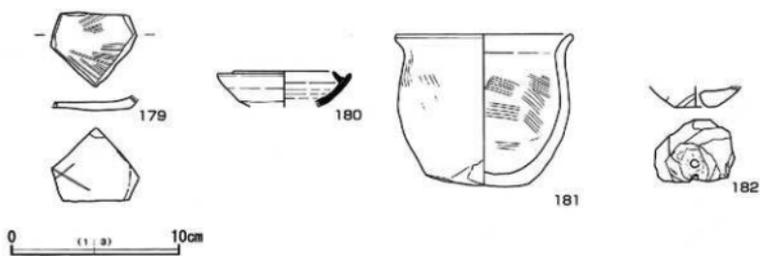
SD1



第71図 遺物(8) SD1①

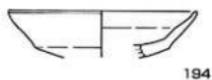


第72図 遺物(9) SD1②

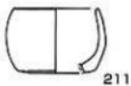
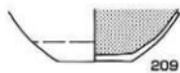
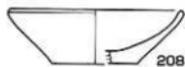
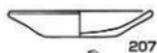
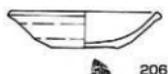
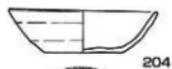
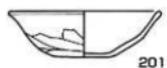
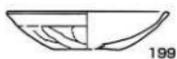
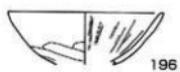


第73図 遺物(4) SD1③

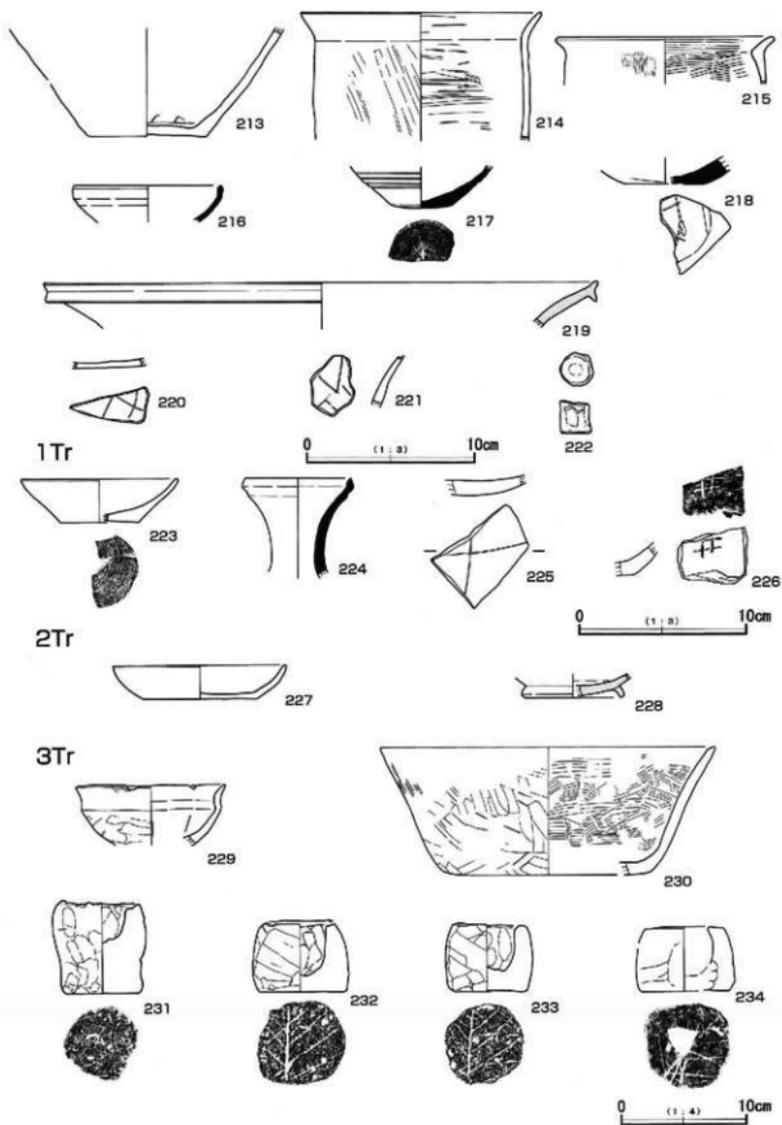
3号炉



遺構外



第74図 遺物(1) 3号炉、遺構外①



第75図 遺物(2) 遺構外②、1・2・3Tr

10～12世紀代

【奈・平Ⅵ期】皿・杯・甕・羽釜などがあり、SI 3・4・6から出土している。編年から10世紀前半の所産と推定している。皿(64)・杯(17～21・65～67)は、底部周辺及び体部下半をヘラ削り調整しており、口縁部が玉縁化している。甕は、長胴甕で口縁が角型で面をなすもの(46)がみられる。羽釜は、羽部がほぼ水平に付いて端部はやや先細りするもの(84)と羽端部がやや角型で面をなしたもの(74)がある。編年においては、カマド形土器(75)とともに、本段階から出現する時期的特徴をもつ遺物としている。他、断片で所産については明確ではないが、折戸53号様式期頃と推察する灰釉陶器碗(70)、近世所産と推察する青磁片(71)等が出土している。

【奈・平Ⅶ期】皿・杯・甕などがあり、SI 4・5・6・7から出土している。編年から10世紀後半の所産と推定している。皿は、外面体部下半をヘラ削りし、口縁部が玉縁化したもの(54～56)がみられる。杯では、玉縁化した口縁部が前段階よりもやや肥厚し、体部下半のヘラ削り痕が弱くなってロクロ目が目立つようになる(37～41・43・44)。甕では、口径が大きくなり、口縁部が肥厚した厚口口縁となり、器形は壺状に開く兆しがみられる(73・127)。

【奈・平Ⅷ期】皿・杯・甕があり、SI 4・6・10から出土している。編年から11世紀前半の所産と推定している。皿(122)・杯は、完全に甲斐型を脱却し、底部及び体部下半をヘラ削り調整しないロクロ成形のもの(42・68・69・123・204)となる。同じくロクロ成形で、口径21cmを測る大型の脚高高台杯(124)が出土している。

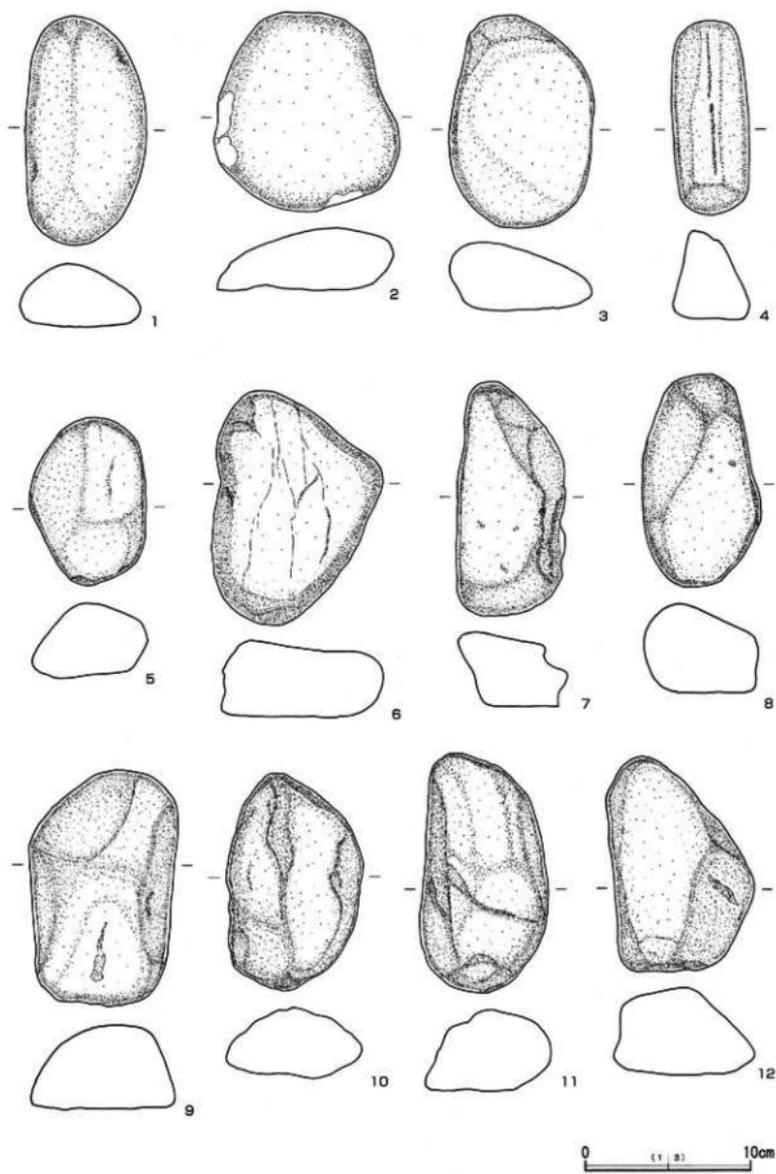
【奈・平Ⅸ・Ⅹ期】小皿が土器群の主体となる段階であり、主にSD1から出土している。編年では11世紀後半～12世紀頃の所産と推定している。明確な時期区分はできなかったが、器形的には、口径10～13cmで体部が直線的に開くもの(135～138)、体部が内湾するもの(139～141)が先行し、口径8cm前後で体部が内湾する小皿(154～166)、及び底部が肥厚して台状になる皿(142・151・152・153)から柱状高台杯(171～177)への変遷が窺える。柱状高台の他にも、菊花碗状に打ち欠きしたもの(138)や、口縁部に鋭利な工具もしくは刃物状のもので刻みをつけたもの(156)、灯明痕と思われる黒変ヤスガがみられたものがある。溝への一括廃棄の状況からも、何らかの祭祀行為の痕跡であった可能性が窺える。

以下、特徴的な遺物について触れておく。

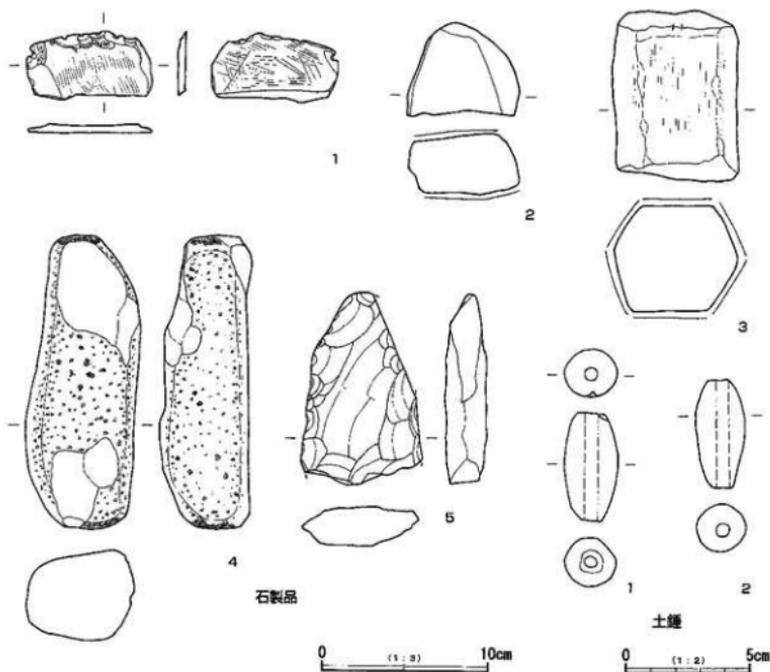
繻刻土器 SD1から、土師器1点(179)、須恵器1点(189)、遺構外から土師器3点、須恵器1点が出土した。文字として判読できるものはなく、「×」(179・225)や須恵器甕外面に文様のような垂線がみられた。須恵器の時期は不明であるが、土師器は奈・平Ⅱ～Ⅴ期頃に比定する。

須恵器 いずれも断片であるが、杯・甕・壺・多嘴瓶(たしへい)があり、SI 2・3・4・7・8・9、SD1及び遺構外から出土した。所産地及び所産時期については明確ではないが、古墳時代後期頃の遺物と共存するものが多くみられる。また、甕胴部の破片で内面や外面に擦痕が認められるものが出土している。尚、杯・甕類の転用・加工の痕跡については第Ⅵ章で後述する。

灰釉陶器 少量かつ断片であるが、SI 6・10及び試掘2Trから出土している。所産地・時期は明確ではない。SI 6出土の碗(70)は、三日月高台で底部に回転糸切痕が残る。釉は明確でないが内面みこみ部と体部の色調が異なり、体部施釉もしくは焼成時に重ねていたと推察される。SI 10



第76図 遺物(3) 礪物石



第77図 遺物(4) 石製品・土製品

出土の碗(125)は、若干三日月高台状で、底部は回転ヘラ削り調整されており、内外面及び底面まで施軸されている。試掘2Tr出土の碗(228)は、粗雑な三日月高台で底面はヘラ削りされている。内面みこみ部には施軸しておらず、体部のみ刷毛塗りされたものと推察される。

手づくね土器 破片も含め、SI8、SD1、試掘3Trより計9点が出土した。明確な時期は不明であるが、古墳時代後期の所産としておきたい。器形の特徴としては、器高が3cm前後で、底面と体部の長さの割合が、ほぼ1:1となるもの(191)、底径より口径が大きく、体部がやや内湾するもの(190)、やや筒状を呈すもの(231)、口径より底径が大きくなるもの(232~234)、底部に木葉痕があるもの(190・193・231~234)等がみられる。また、手づくねでつくられ、外面をヘラ状工具によりナデているもの(190・191)もみられる。

不明土製品 土偶または把手状のもの(113)がSI8、円柱状の土製品がSD1から出土している。

陶磁器 いずれも断片であるが、SI3・6、堅穴状遺構及び遺構外から出土している。陶器では近世瀬戸美濃所産と推察されるもの(32・33)や、古瀬戸15世紀頃の所産と推察されるもの(130)がある。磁器では近代所産の染付碗(34・76)が出土している。(望月)

編物石 今宮遺跡でも述べたが、編物石は複数が集積して出土することにより、認識される棒状の自然礫である。今回は住居跡1軒で確認でき、S19の中央の床面に拡がって、12点が出土している。今宮遺跡のものに比べ、棒状なものより扁平なものが多い。

石製品 砥石と思われるものが3点出土しているが、1はスクレイパー類と言えなくもない。3は高田が指摘する花崗岩質アブライト製で、当地域ではあまり出土しない石材である。4は敲石、5は打製石斧と思われる。

銭貨 皇朝十二銭の1つである、貞観永寶（貞観12、870年初鑄）が、S15の覆土から出土（76）しており、径2.02cm、孔0.54cm四方、重量0.9gである。「山梨県史」によれば、皇朝十二銭は県内では16例（本例を含む）が知られ、そのうち貞観永寶は、南アルプス市の鋳物師屋遺跡、北社市城下遺跡と本例の3例が紹介されている。（野崎）

表7 土器観察表

図	No	出土位置	種類	器種	部位	残存率 %	反転 面	口内 底面 断面 mm	外 面	内 面	底・脚内面	胎 成 色	土 成 色	備 考
64	1	S11	土師器	杯	口~底	80	—	(14.2) 3.8	ナゲ	ナゲ	ヘラ削り	密、赤・白・黒 土 灰褐色	—	劣化
64	2	S11	土師器	高杯	口~底	80	—	11.6 8.3 8.4	ヘラ削り、ナゲ、 ミガキ、捺痕	ヘラ削り、ナゲ、 ミガキ、捺痕	ハケメ、ナゲ	密、赤・白・金 土 褐色	—	やや劣化
64	3	S11	土師器	数割器	口~底	75	—	16.9 6.6 28.7	ハケメ、ナゲ	ハケメ、ナゲ	縦割、割痕	密、赤・白・金 土 灰褐色	—	胎成劣化著しい 内外面黒変
64	4	S11	土師器	長脚盃	口~脚	50	—	18.7 — —	ハケメ、ナゲ、捺 痕	ハケメ、ナゲ、 捺痕	—	密、赤・白・金 土 灰褐色	—	やや劣化 一部黒変
64	5	S11	土師器	小笠	口~底	60	—	13.9 8.9 13.9	ナゲ	ナゲ	ヘラ削り	密、赤・白・金 土 赤色	—	劣化著しい 内面黒変
64	6	S11	土師器	小笠	口~底	95	—	14.4 6.4 18.1	ハケメ、ナゲ、ヘ ラ削り、捺痕	ハケメ、捺痕 痕、ナゲ	ヘラ削り	密、赤・白・金 土 暗赤褐色	—	黒変
64	7	S11	須恵器	壺	胴	小片	有	—	タタキ目、ハケメ か	当て具痕、捺 痕	—	密、赤・白・ 土 灰褐色	—	一部黒変
64	8	S12	土師器	杯	口~底	10	有	(12.2) —	ナゲ	ナゲ、ミガキ	ヘラ削り	密、赤・白・金 土 赤色	—	一部黒変
64	9	S12	土師器	鉢	胴~底	小片	有	—	ヘラ削り、ナゲ	ナゲ	ヘラ削り	密、赤・白・ 土 灰褐色	—	一部黒変
64	10	S12	七印寺	皿	口~底	100	—	12.6 5.7 2.2	ロクロナゲ、ヘラ 削り	ロクロナゲ、 同心円捺痕	回転ヘラ削り	密、赤・白・金 土 褐色	—	—
64	11	S12-e	土師器	杯	口~底	70	—	12.8 5.6 4.3	ロクロナゲ、ヘラ 削り	ロクロナゲ、 捺痕	回転捺痕、 ヘラ削り	密、赤・白・金 土 褐色	—	—
64	12	S12	土師器	杯	口~底	30	有	(12.0) (5.0) (4.1)	ロクロナゲ、ヘラ 削り	ロクロナゲ、 捺痕	ヘラ削り	密、赤・白・金 土 褐色	—	一部黒変
64	13	S12	土師器	杯	口~底	小片	有	(12.0) —	ロクロナゲ	ロクロナゲ、 捺痕	—	密、赤・白・ 土 赤色	—	一部黒変
64	14	S12	須恵器	壺	胴	小片	有	—	タタキ目	当て具痕、捺 痕、捺痕	—	密、赤・白・ 土 灰褐色	—	胎成粗か 外周黒変
65	15	S12	須恵器	壺	胴	小片	有	—	タタキ目	当て具痕、ハ ケメか、捺痕	—	密、赤・白・ 土 灰褐色	—	胎成粗か 外周黒変
65	16	S12	須恵器	壺	胴	小片	有	—	捺痕捺痕、捺痕	ナゲ	—	密、赤・白・ 土 灰褐色	—	胎成粗か 外周黒変
65	17	S13	土師器	杯	口~底	35	有	(18.4) —	ロクロナゲ、ヘラ 削り	ロクロナゲ、 内面黒色	—	密、赤・白・金 土 灰褐色	—	—

図	№	出土位置	類別	器種	部位	形状	数量	1個重量 (g)	外面	内面	底・高内面	胎土 焼色	土質	備考
65	18	S13	土師器	坏	口～体	10	有	(12.6)	ロクロナガ、ヘラ 彫り	ロクロナガ	—	赤、赤・白・金 貝 緑褐色		
65	19	S13	土師器	坏	口～底	40	有	(12.0) (5.0) (4.1)	ロクロナガ、ヘラ 彫り	ロクロナガ	ヘラ彫り	赤、赤・白・金・黒 貝 緑褐色		
65	20	S13	土師器	坏	体～底	25	有	(6.2)	ロクロナガ、ヘラ 彫り	ロクロナガ	緑褐色切痕、 ヘラ彫り	赤、赤・白・黒 貝 緑褐色		
65	21	S13	土師器	坏	口～体	小片	有	(15.9)	ロクロナガ	ロクロナガ	—	赤、赤・白・金 貝 緑褐色		
65	22	S13	土師器	高杯	胴	小片	有	(12.4)	ヘラ彫り、ナガ	—	ヘラ彫り、ナ ガ	赤、赤・白・金 貝 緑褐色		
65	23	S13	土師器	坏	口～体	小片	有	(8.9)	ロクロナガ	ロクロナガ	—	赤、黒 貝 灰青色		
65	24	S13	土師器	坏	口～体	10	有	(10.4)	ロクロナガ、ヘラ 彫り	ロクロナガ	—	赤、白、黒 貝 灰褐色		
65	25	S13	土師器	壺小	胴	小片	有	—	—	—	—	赤 貝 灰青色		
65	26	S13	土師器	小壺	口～胴	小片	有	(17.4)	ナガ、ハケメ、寄 付	ナガ、ハケメ	ハケメ	赤、赤・白 貝 明褐色～暗褐色	内山黒皮	
65	27	S13	土師器	罎	胴～底	小片	有	(8.6)	ハケメ	ハケメ	木炭痕	赤、赤・白・金 貝 緑褐色		
65	28	S13	土師器	罎	胴～底	小片	有	5.0	ナガ	ナガ	木炭痕、種子 状土質	赤、赤・白・金・黒 貝 切褐色		
65	29	S13	土師器	罎	胴～底	小片	有	(6.0)	ハケメ、ナガ、衝 頭痕	ハケメ、ナガ	木炭痕	赤、赤・白・金 貝 暗褐色	木炭痕二重	
65	30	S13	土師器	罎	胴～底	小片	有	(6.6)	ナガ	ヘラ彫り	木炭痕	赤、赤・白・金 赤、赤・白 貝 緑褐色～暗褐色		
65	31	S13	土師器	坏	口	小片	有	—	ロクロナガ、擦痕 痕	ロクロナガ	—	赤、赤・白・黒 貝 緑褐色	黒口か	
65	32	S13	土師器	陶器	体	小片	有	—	擦痕	—	—	赤 貝 緑褐色	式部瀬戸赤土	
65	33	S13	土師器	陶器	体	小片	有	—	ロクロナガ	—	—	赤 貝 緑褐色		
65	34	S13	土師器	土師器	口～体	小片	有	(18.2)	—	—	—	赤 貝 —	近代	
66	35	S14	土師器	半球形の坏	口～体	20	有	(12.6)	ナガ	ナガ	—	赤、赤・白・金 貝 緑褐色		
66	36	S14	土師器	坏	口～体	40	有	(12.2) 4.9 (2.8)	ロクロナガ、ヘラ 彫り	ロクロナガ	緑褐色切痕、 ヘラ彫り	赤、赤・白・金 貝 緑褐色		
66	37	S14	土師器	坏	口～底	70	有	11.2 4.2 4.3	ロクロナガ、ヘラ 彫り	ロクロナガ	ヘラ彫り	赤、赤・白・金 貝 緑褐色		
66	38	S14	土師器	坏	口～底	75	有	12.0 4.5 4.3	ロクロナガ、ヘラ 彫り	ロクロナガ	ヘラ彫り	赤、赤・白・金 貝 緑褐色～明褐色		
66	39	S14	土師器	坏	口～底	40	有	(13.4) 4.8 (5.4)	ロクロナガ、ヘラ 彫り	ロクロナガ	緑褐色切痕、 ヘラ彫り	赤、赤・白・金 赤、赤・白 貝 明褐色	やや劣化	
66	40	S14	土師器	坏	口～底	40	有	(12.8) (4.4) (4.2)	ロクロナガ、ヘラ 彫り	ロクロナガ	緑褐色切痕、 ヘラ彫り	赤、赤・白・金 貝 明褐色	内面一部赤黒皮	
66	41	S14	土師器	坏	口～底	40	有	14.6 (5.6) 5.0	ロクロナガ、ヘラ 彫り	ロクロナガ	ヘラ彫り	赤、赤・白・金 貝 切褐色	やや劣化	
66	42	S14	土師器	坏	口～体	15	有	(12.4) (7.3) (3.6)	ロクロナガ小	ロクロナガ	緑褐色切痕か	赤、赤・白・金 貝 明褐色	劣化著しい	
66	43	S14	土師器	坏	口～体	10	有	(12.8)	ロクロナガ	ロクロナガ	—	赤、赤・白・金 貝 明褐色	緑熱、やや劣化	

図	No	出土位置	壁別	器種	形状	残存率	反転	口徑 底徑 高さ	外面	内面	底・胴内面	胎 色	土 成 期	備 考
66	44	S14	土師器	坏	口-体	17	有	(14.2) — —	ロクロナデ、ヘラ 削り	ロクロナデ	—	密、赤、黒 土 明褐色	—	内面施黄褐色
66	45	S14	土師器	茶	口-胴	16	—	17.3 — —	ハケメ、ナデ、指 図痕	ハケメ、ナデ、 指図痕	—	密、白 粉赤褐色	—	内面中央部施 胎土赤色
66	46	S14	土師器	甕	口-胴	小片	有	(29.1) — —	ハケメ、ナデ、指 図痕	ハケメ、ナデ、 指図痕	—	やや粗、赤、白・金・黒 土 暗茶褐色	—	—
66	47	S14	土師器	小型甕	口-胴	30	有	(18.6) — —	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ、 指図痕	—	やや粗、赤、白・金・黒 土 暗茶褐色	—	一部胎変 やや劣化
66	48	S14	土師器	甕	胴-底	15	—	8.0 — —	ハケメ、ナデ	ハケメ、指図 痕	木葉痕	やや粗、赤、白・金・黒 土 赤褐色	—	内面胎変 外周一部胎変
66	49	S14	土師器	甕	胴-底	小片	—	9.4 — —	ハケメ	ハケメ、ナデ	木葉痕	やや粗、赤、白・金・黒 土 暗茶褐色	—	内面胎変 外周一部胎変
66	50	S14	土師器	肥子付甕	口-底	80	有	(19.8) 6.4 (18.9)	ハケメ、ナデ	ハケメ、ヘラ 削り、ナデ	—	赤、赤、白・金・黒 土 暗褐色	—	外置胎変色 内面スス
66	61	S14	須恵器	壺小	口	小片	—	— — —	ナデ	ナデ	—	赤 土 黄褐色	—	—
66	62	S14	須恵器	甕	胴	小片	—	— — —	タタキ目、ハケメ 跡	ナデ	—	赤 土 灰白色	—	—
67	53	S15	土師器	坏	口-底	35	有	(12.0) — (4.4)	ナデ、ミガキ、産 仕上げか	ナデ、ミガキ、 産仕上げか	ヘラ削り	密、赤、白・金 土 明赤褐色	—	外周一部胎変
67	54	S15	土師器	甕	口-底	55	—	(12.7) 3.1 2.5	ロクロナデ、ヘラ 削り	ロクロナデ	ヘラ削り	やや粗、赤、白・金 土 明褐色	—	—
67	55	S15	土師器	甕	口-底	95	—	12.6 4.0 2.6	ロクロナデ、ヘラ 削り	ロクロナデ	陶板糸切痕、 ヘラ削り	やや粗、赤、白・金 土 暗褐色・明褐色	—	—
67	56	S15	土師器	口	口-底	80	—	12.3 4.6 2.8	ロクロナデ、ヘラ 削り	ロクロナデ、 スス	ヘラ削り	やや粗、赤、白・金 土 暗茶褐色	—	灯明か
67	57	S15	土師器	坏	口-底	85	—	12.9 4.9 4.3	ロクロナデ、ヘラ 削り	ロクロナデ	ヘラ削り	やや粗、赤、白・金 土 暗茶褐色・暗色	—	全体初めにやや胎変 やや劣化
67	58	S15	土師器	坏	口-底	90	有	12.0 4.6 3.8	ロクロナデ、ヘラ 削り	ロクロナデ	陶板糸切痕、 ヘラ削り	密、赤、白・金・黒 土 暗褐色	—	やや劣化
67	59	S15	土師器	坏	口-底	35	有	(11.0) 4.0 (4.7)	ロクロナデ、ヘラ 削り	ロクロナデ、 陶板糸切痕	ヘラ削り	やや粗、赤、白・金 土 明褐色	—	内面にこみ割に胎 切痕
67	60	S15	須恵器	坏	口-体	小片	有	(8.9) — —	ロクロナデ	ロクロナデ	—	密、黒 土 灰白色	—	—
67	61	S15	土師器	埴輪甕	口-胴	小片	有	(16.8) — —	ハケメ、ナデ	ナデ	—	やや粗、赤、白・金・不 土 洗黄褐色	—	—
67	62	S15	土師器	甕小	口-胴	小片	有	(16.3) — —	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	—	粗、赤、白・金 土 褐色	—	やや一部胎変 胎小
67	63	S15	土師器	小型甕	胴-底	50	—	— 4.9 —	ナデ	ヘラ削り	—	やや粗、赤、白・金・黒 土 暗茶褐色	—	—
67	64	S16	土師器	甕	口-底	70	—	12.6 6.9 3.2	ロクロナデ、ヘラ 削り	ロクロナデ	陶板糸切痕、 ヘラ削り	やや粗、赤、白・金 土 暗褐色	—	器口大 底底胎変
67	65	S16	土師器	坏	口-底	30	有	(12.5) 4.6 (3.5)	ロクロナデ、ヘラ 削り	ロクロナデ	ナデ、ヘラ削 り	粗、赤、白・金 土 明褐色・暗褐色	—	胎変 やや劣化
67	66	S16	土師器	坏	口-底	80	—	13.0 5.3 3.6	ロクロナデ、ヘラ 削り	ロクロナデ、 行書物	陶板糸切痕、 ヘラ削り	やや粗、赤、白・金・黒 土 暗褐色	—	やや胎変
67	67	S16	土師器	坏	口-底	55	有	(17.4) 6.0 (4.8)	ロクロナデ、ヘラ 削り	ロクロナデ	陶板糸切痕、 ヘラ削り	密、赤、白 土 褐色	—	器口大
67	68	S16	土師器	坏	口-底	70	—	12.4 4.4 3.1	ロクロナデ、ヘラ 削り	ロクロナデ	陶板糸切痕	やや粗、赤、白・金 土 明褐色	—	—
67	69	S16	土師器	坏	口-底	60	有	12.8 5.8 3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	陶板糸切痕、 スノコ状比喩	やや粗、赤、白・金 土 明褐色	—	底面やや胎変

氏名	出土位置	種別	器種	部位	残存率 %	数量	寸法 H(高さ) D(径)	外面	内面	底・器内面	胎土 色	土質 類	備考	
67	70	S16	灰釉陶器	鏡	体一底	小片	有	— — (6,7)	ロクロナデ	ロクロナデ、 磨輪	面輪糸切痕、 打け高台	密、黒 見 白灰褐色		折戸印付或式小
67	71	S16	青磁	香炉 または 鉢形鏡	体	小片	— — —	— — 磨輪	— — 磨輪	— — —	密、白 良 鈍黄褐色		式置	
67	72	S16	土師器	小形甕	口一底	45	有	(17,8) 8.4 14.0	ハケメ、ナデ	ハケメ、指痕 痕	木漆痕	やや粗、赤・白・金・黒 良 藍色		
67	73	S16	土師器	甕	口一胴	小片	有	(19,6) — —	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	—	粗、赤・白・金・黒 良 藍色		青色
67	74	S16	土師器	甕	口一胴	小片	有	(19,1) — —	ハケメ、ナデ	ハケメ	—	やや粗、赤・白・金 良 赤褐色		
67	75	S16	土師器	コマド形土器	口一底	小片	有	(21,2) — —	ハケメ	ハケメ、指痕 痕	—	滑、赤・白・金 良 赤褐色		内面黒炭
67	76	S16	古鏡	鹿野水鏡	—	100	— — —	— — —	— — —	— — —	— — —	— — —	— — —	重さ 0.9g 870年以降
68	77	S17	土師器	皿	口一底	98	有	13.0 4.8 2.8	ロクロナデ、ヘラ 削り	ロクロナデ	面輪糸切痕、 良 褐色	密、赤・白・金 良 褐色		内外面やや黒炭 灯明か
68	78	S17	土師器	口	口一底	60	有	13.1 3.3 2.3	ロクロナデ、ヘラ 削り	ロクロナデ	ヘラ削り	やや粗、赤・白・金 良 鈍黄褐色		内外面やや黒炭 灯明か 打たれまじか
68	79	S17	土師器	坪	口一底	70	有	12.8 4.5 4.0	ロクロナデ、ヘラ 削り	ロクロナデ	面輪糸切痕、 良 褐色	やや粗、赤・白・金 良 褐色		一部やや黒炭 外底ニス付 灯明か
68	80	S17	土師器	坪	口一底	25	有	(13,0) 3.9 3.9	ロクロナデ、ヘラ 削り	ロクロナデ	面輪糸切痕、 良 褐色	密、赤・白・金 良 明褐色		内面黒スカ
68	81	S17	土師器	坪	口一底	30	有	(14,7) — —	ロクロナデ、ヘラ 削り	ロクロナデ	—	密、赤・白・金 良 褐色		内面黒炭
68	82	S17	土師器	坪	口一底	30	有	(18,8) (6,1) (5,4)	ロクロナデ、ヘラ 削り	ロクロナデ	面輪糸切痕、 良 或係骨孔	密、赤・白・金 良 明褐色		口縁部 黒炭炭
68	83	S17	土師器	坪	体一底	小片	有	— — 5.9	— — ロクロナデ	— — ロクロナデ	— — 面輪糸切痕	粗、赤・白・金・黒 良 明褐色		
68	84	S17	土師器	甕	口一胴	小片	有	(22,4) — —	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	—	密、赤・白・金・黒 良 鈍黄褐色		
68	85	S17	灰釉陶器	鏡	口一底	小片	有	(14,0) — —	ロクロナデ、磨輪	ロクロナデ、 磨輪	—	密、黒 鈍黄褐色		
68	86	S17	厚塗器	甕	胴	小片	— — —	— — タタキ目	— — ナデ、磨痕	— — —	— — —	密、白・黒 良 灰褐色		
68	87	S18	土師器	坪	口一底	小片	有	(14,2) — —	ナデ、磨仕上げか	ナデ、ミガキ	ヘラ削り	密、赤・白・金 良 鈍褐色		
68	88	S18	土師器	坪	口一底	20	有	(14,4) — —	ナデ、磨仕上げか	ロクロナデ	ヘラ削り	密、赤・白・金 良 鈍褐色		
68	89	S18	土師器	坪	口一底	25	有	(11,4) (6,2) (5,3)	ナデ	ナデ	ヘラ削り	やや粗、赤・白・金 不良 鈍黄褐色		
68	90	S18	土師器	半球形の坪	口一底	90	有	11.3 — 4.8	ナデ、ミガキ	ナデ、スス	先底	密、赤・白・金 良 藍色		内面ミガキか
68	91	S18	土師器	皿	口一底	55	有	12.4 5.2 2.4	ロクロナデ、ヘラ 削り	ロクロナデ、 同心円状磨文	縁部ヘラ削り	密、赤・白・金 良 藍色		一部黒炭
68	92	S18	土師器	皿	口一底	90	有	10.6 7.3 2.8	ロクロナデ	ロクロナデ、 一匙取處、同 心円状磨文	縁部ヘラ削り	密、赤・白・金 良 藍色		
68	93	S18	土師器	坪	口一底	20	有	(6,6) (4,8) (5,0)	ロクロナデ	ミガキ	磨り出し高台、 面輪ヘラ削り	密、赤 良 鈍黄褐色		黒色
68	94	S18	土師器	坪	口一底	75	有	11.7 5.0 4.4	ロクロナデ、ヘラ 削り	ロクロナデ、 磨文	ヘラ削り	密、赤・白・金 良 藍色		内面一部黒炭
68	95	S18	土師器	坪	口一底	75	有	12.8 4.7 4.3	ロクロナデ、ヘラ 削り	ロクロナデ、 磨文	ヘラ削り	やや粗、赤・白・金・黒 良 藍色		内外面一部黒炭

図	No	出土位置	種別	器種	部位	残存率	数量	口径 底径 高さ	外 径	内 径	底・底内面	胎 色	土 成 態	備 考
69	96	S18	土師器	高杯	11-体	小片	有	(16.5)	ヘウ割り、ナデ	ナデ	—	青、赤・白 良 鈍褐色		
69	97	S18	土師器	高杯	胴	小片	有	6.6	ヘウ割り、ナデ	—	ヘウ割り、ナ デ	青、赤・白・金 良		
69	98	S18	土師器	台付鉢	口~胴	小片	有	9.5 5.2 7.2	ハケメ、ナデ、指 環痕	ナデ	ナデ	黄、赤・白・金 良 内赤褐色、外褐色		
69	99	S18	土師器	鉢	体~底	50	一部	2.6	ナデ、ヘウ割り	指ナデ	—	黄、赤・白・金・黒 良 印赤褐色	内外裏黒変	
69	100	S18	土師器	小壺	口~胴	小片	有	(12.6)	ナデ、ヘウ割り、 指環痕	ナデ、指環痕	—	黄、赤・白・金 良 茶褐色		
69	101	S18	土師器	壺	口~胴	小片	有	(12.6)	ナデ、指環痕	ナデ	—	黄、赤・白・金・黒 良 茶褐色		
69	102	S18	土師器	長頸壺	胴~底	70	一部	7.7	ナデ	ナデ、コゲ	木炭痕	やや粗、赤・白・金・黒 良 褐色	底部 黒変	
69	103	S18	土師器	長頸壺	口~底	75	—	16.0 19.0	ナデ、ヘウ割り	ナデ、ヘウ割 り	焼熱、割痕	白、白・黒 良 茶褐色~黒褐色	底部 黒変 胎土赤色	
69	104	S18	土師器	壺	底	小片	有	7.8	ナデ	ハケメ、ナデ	木炭痕	やや粗、赤・白・金・黒 良 粗茶褐色	外周底部一部黒変	
69	105	S18	土師器	壺	胴~底	小片	有	(6.4)	ヘウ割り	ヘウ割り、ナ デ	木炭痕	黄、赤・白・金・黒 良 粗茶褐色		
69	106	S18	土師器	壺	胴~底	小片	有	(4.8)	ハケメ	ハケメ、ナデ	ヘウ割り	やや粗、赤・白・金 良 粗茶褐色	底部 やや劣化	
69	107	S18	土師器	台付壺	胴~底	小片	有	(6.0)	ナデ、指環痕	ナデ、指環痕	ナデ	黄、白 良 印赤褐色	胎土赤色	
69	108	S18	土師器	小壺	胴~底	小片	有	4.2	ヘウ割り	ハケメ、ヘウ 割り	—	黄、赤・白 良 粗茶褐色	外周一部黒変 胎土赤色	
69	109	S18	土師器	小壺	胴~底	小片	有	4.2	ヘウ割り	ナデ	ヘウ割り	やや粗、白・黒 良 粗茶褐色	内外黒変	
69	110	S18	土師器	壺	底	小片	有	10.6	ヘウ割り、ハケメ	ナデ	ヘウ割り、ハ ケメ	やや粗、赤・白・黒 良 褐色	内外黒変	
69	111	S18	須恵器	壺	口~底	小片	有	(12.0)	ロクロナデ、鑿 痕状文	ロクロナデ	—	黄、白 良 灰白色		
69	112	S18	土師器	手づくね土器	体~底	小片	有	8.0	指ナデ	—	木炭痕	黄、白・金 良 赤色	外周一部黒変 胎土赤色	
69	113	S18	—	土師器	—	小片	有	—	指ナデ	—	—	黄、赤・白・金・黒 良 印赤褐色		
69	114	S18	弥生上層	壺	胴	小片	有	—	指環痕状文	ナデ	—	やや粗、白・黒 良 鈍茶褐色	一部黒変	
70	115	S19	土師器	半球形の杯	口~底	15	有	(10.6) (3.3)	ナデ	ナデ、ヘウ割 り、ミガキ	丸底	黄、赤・白・金 良 やや不良 明褐色	外周黒変	
70	116	S19	土師器	高杯	体	小片	有	—	ヘウ割り	ナデ	—	黄、赤・白・金 良 やや不良 褐色		
70	117	S19	土師器	高杯	胴	小片	有	(13.1)	ヘウ割り、ナデ	—	ヘウ割り、ナ デ	やや粗、赤・白・金 良 褐色	やや劣化	
70	118	S19	土師器	小壺	口~胴	小片	有	(11.0)	ナデ	ハケメ、ナデ	—	黄、赤・白・金・黒 良 茶褐色	内周黒変、劣化著 し ¹⁾	
70	119	S19	土師器	壺	胴~底	小片	有	6.2	ヘウ割り	ヘウ割り、ナ デ	ヘウ割り	黄、赤・白・金 良 やや不良 明褐色		
70	120	S19	土師器	壺	胴~底	20	有	(8.4)	ハケメ	ハケメ、ナデ	木炭痕	粗、赤・白・黒 良 粗茶褐色	劣化	
70	121	S19	須恵器	小壺	口	小片	有	(11.2)	ナデ	—	—	黄、白 良 灰褐色		

図	No	市七位置	類別	砂 種	部位	残存率 %	反転 有	コウ 要 要素 高 一 部	外 面	内 面	裏・脚内面	胎 色 上 成 調	備 考
70	122	S110	土師器	皿	口~底	30	有	(10.8) (4.8) (1.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	黒輪赤切痕、 ヘウ割り、ス ノコ状凸痕	赤、赤・白・金 良 明褐色	器み大
70	123	S110	土師器	杯	口~底	65	有	13.3 7.0 4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	黒輪赤切痕	やや赤、赤・白・金 良 明褐色	
70	124	S110	土師器	騎高台台杯	口~底	小片	有	(21.0) (10.0) (3.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	黒輪赤切痕、 ヘウ割り、脚 部欠損	赤、赤・白・金 良 明褐色	
70	125	S110	土師器	鉢	底	小片	有	(8.0)	ロクロナデ、 黒輪	ロクロナデ、 黒輪	ロクロナデ、 引け高台、凸 痕	赤、黒 良 灰褐色	
70	126	S110	土師器	鉢	胴~底	小片	有	(9.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	黒輪赤切痕、 スノコ状凸痕	赤、赤・白・金 良 明褐色	外置やや黒変
70	127	S110	土師器	壺	口~胴	小片	有	(28.6) — —	ハケメ、ナデ、 黒輪	ハケメ、ナデ、 黒輪	—	やや赤、赤・白・金 良 明褐色	内外面一部黒変
70	128	器穴状遺構	土師器	皿	口~底	55	有	(13.0) 4.5 (2.6)	ロクロナデ、ヘウ 割り	ロクロナデ、 スス	黒輪赤切痕、 ヘウ割り	赤、赤・白・金 良 明褐色	一部黒変
70	129	器穴状遺構	土師器	壺	口~胴	小片	有	(36.6)	ナデ	ナデ	—	赤、赤・白・金・黒 良 明褐色	内面一部黒変
70	130	器穴状遺構	陶器	鉢	口	小片	有	—	施釉	施釉	—	赤、黒 良 灰白色	15C口蓋片か
70	131	器穴状遺構	陶器	壺	胴	小片	有	—	施釉	施釉	—	赤 良 灰黄色	
70	132	器穴状遺構	磁器	発行鏡	作	小片	有	—	染付	染付	染付	赤 良	
71	133	SD1	土師器	杯	口~底	30	有	(13.0) (6.8) (2.0)	ロクロナデ、ヘウ 割り	ロクロナデ	黒輪赤切痕	赤、赤・白・金 良 明褐色	
71	134	SD1	土師器	杯	口~底	40	一部	(12.0) 5.2 (3.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	黒輪赤切痕	赤、赤・白・金 良 明褐色	劣化、やや黒変
71	135	SD1	土師器	杯	口~底	20	有	(11.1) (5.2) (3.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	黒輪赤切痕、 スノコ状凸痕	やや赤、赤・白・金 良 明褐色	
71	136	SD1	土師器	杯	口~底	30	有	(11.2) (6.0) (2.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	黒輪赤切痕、 スノコ状凸痕	やや赤、赤・白・金 良 明褐色	スス付
71	137	SD1	土師器	杯	口~底	60	有	(11.4) 5.3 3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	黒輪赤切痕、 スノコ状凸痕	赤、赤・白・金 良 明褐色	焼痕 やや黒変 打跡か
71	138	SD1	土師器	杯	口~底	70	有	(10.8) 5.6 (3.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	黒輪赤切痕	赤、赤・白・金 良 明褐色	打跡スス 付花崗片出土
71	139	SD1	土師器	杯	口~底	40	有	(12.8) (6.8) (3.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	黒輪赤切痕、 スノコ状凸痕	赤、赤・白・金・黒 良 明褐色	
71	140	SD1	土師器	杯	口~底	65	有	12.9 6.4 4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	黒輪赤切痕	赤、赤・白・金 良 明褐色	内面黒変、打跡か
71	141	SD1	土師器	杯	口~底	70	有	13.3 7.1 4.3	ロクロナデ	ロクロナデ	黒輪赤切痕、 スノコ状凸痕	赤、赤・白・金 良 明褐色	
71	142	SD1	土師器	杯	口~底	55	有	(12.8) 6.9 (4.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	黒輪赤切痕	赤、赤・白・金・黒 良 明褐色	内外面一部黒変
71	143	SD1	土師器	杯	口~底	小片	有	(18.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	—	赤、赤・白・金 良 明褐色	劣化帯しい 反転
71	144	SD1	土師器	杯	口~底	小片	有	(6.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	黒輪赤切痕	赤、赤・白・金 良 明褐色	内面劣化
71	145	SD1	土師器	鉢	口~底	小片	有	(6.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	劣化、黒輪赤 切痕	赤、赤・白・金 良 明褐色	
71	146	SD1	土師器	杯	口~底	小片	有	(6.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	黒輪赤切痕、 ヘウ割り	赤、赤・白・金 良 明褐色	劣化帯しい
71	147	SD1	土師器	杯	口~底	小片	有	5.9	ロクロナデ	ロクロナデ	黒輪赤切痕	赤、赤・白・金 良 明褐色	内外面一部黒変

図	No	出土位置	種類	器種	部位	残存率 %	反転	口径 底径 器高	外面	内面	底・器内面	胎 土 色	備 考
71	148	SD1	土師器	杯	体~底	小片	有	— 4.5 (5.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	黒転糸切痕、 ヘラ削りか	緑、赤・白・金 黄 純褐色	劣化著しい
71	149	SD1	土師器	杯	体~底	小片	有	— (6.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	黒転糸切痕	やや緑、赤・白・金 黄 明褐色	やや劣化
71	150	SD1	土師器	杯	体~底	小片	有	— (5.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	黒転糸切痕	紫、赤・白・金 黄 褐色	劣化
72	151	SD1	土師器	小皿	口~底	55	有	(11.0) 4.8 2.6	ロクロナデ	ロクロナデ	黒転糸切痕	赤、赤・白・金 黄 弱褐色	内面一部黒変 灯明か
72	152	SD1	土師器	小皿	口~底	30	有	(6.4) (3.4) (1.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	黒転糸切痕	やや緑、赤・白・金 黄 明褐色	スス付著
72	153	SD1	土師器	小皿	口~底	40	有	(7.4) (6.0) (2.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	黒転糸切痕	緑、赤・白・金 黄 明褐色	劣化
72	154	SD1	土師器	小皿	口~底	55	有	(7.5) (5.4) (1.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	黒転糸切痕、 スノコ状圧痕	緑、赤・白・金・黒 黄 褐色	劣化著しい 黒石部出土
72	155	SD1	土師器	小皿	口~底	30	有	(7.4) (5.4) (1.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	黒転糸切痕	緑、赤・白・金・黒 黄 褐色	劣化著しい
72	156	SD1	土師器	小皿	口~底	36	有	7.7 5.6 2.2	ロクロナデ	ロクロナデ	黒転糸切痕	やや緑、赤・白・金 黄 褐色	
72	157	SD1	土師器	小皿	口~底	93	有	7.5 5.5 2.4	ロクロナデ	ロクロナデ	黒転糸切痕	赤、赤・白・金 黄 褐色	火燻ススか
72	158	SD1	土師器	小皿	口~底	70	有	6.6 5.2 2.6	ロクロナデ	ロクロナデ	黒転糸切痕	やや緑、赤・白・金 黄 純褐色	外周黒変
72	159	SD1	土師器	小皿	口~底	56	有	(7.6) 5.1 (2.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	黒転糸切痕	赤、赤・白・金 黄 褐色	
72	160	SD1	土師器	小皿	口~底	60	有	(8.0) 5.6 (2.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	黒転糸切痕、 スノコ状圧痕	赤、赤・白・金 黄 純褐色	内面やや黒変 外周一部黒変 灯明か
72	161	SD1	土師器	小皿	口~底	90	有	8.1 5.6 2.2	ロクロナデ	ロクロナデ	黒転糸切痕、 スノコ状圧痕	赤、赤・白・金 黄 褐色	
72	162	SD1	土師器	小皿	口~底	50	有	(8.4) 5.6 (2.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	黒転糸切痕、 黒転	赤、赤・白・金 黄 純褐色	やや黒変
72	163	SD1	土師器	小皿	口~底	75	有	8.4 6.1 1.9	ロクロナデ	ロクロナデ	黒転糸切痕、 スノコ状圧痕	やや緑、赤・白・金 黄 純褐色	口縁部弱み 灯明か
72	164	SD1	土師器	小皿	口~底	55	有	(8.2) 4.0 (2.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	黒転糸切痕	紫、赤・白・金 黄 褐色	劣化著しい
72	165	SD1	土師器	小皿	口~底	65	有	8.2 6.1 1.8	ロクロナデ	ロクロナデ	黒転糸切痕	やや緑、赤・白・金 黄 純褐色	一部黒変 口縁部弱み 灯明か
72	166	SD1	土師器	小皿	口~底	30	有	(8.2) (6.0) (1.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	黒転糸切痕	赤、赤・白・金 黄 純褐色	内面やや黒変
72	167	SD1	土師器	小皿	体~底	小片	有	— 5.3 —	ロクロナデ	ロクロナデ	黒転糸切痕	赤、赤・白・金 黄 褐色	
72	168	SD1	土師器	小皿	体~底	小片	有	(4.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	黒転糸切痕	緑、赤・白・金 黄 褐色	
72	169	SD1	土師器	小皿	体~底	小片	有	— 5.8 —	ロクロナデ	—	黒転糸切痕	緑、白・赤・金 黄 赤褐色	劣化著しい 黒石部出土
72	170	SD1	土師器	小皿	体~底	30	有	5.5 —	ロクロナデ	ロクロナデ	黒転糸切痕	やや緑、赤・白・金 黄 褐色	スス付著
72	171	SD1	土師器	柱状高台杯	口~底	90	有	8.7 5.7 5.1	ロクロナデ、黒変 痕	ロクロナデ	黒転糸切痕	やや緑、赤・白・金 黄 明褐色	やや劣化
72	172	SD1	土師器	柱状高台杯	脚	小片	有	— (5.0) —	ナデ	—	黒転糸切痕	緑、赤・白・金 黄 純褐色	劣化著しい
72	173	SD1	土師器	柱状高台杯	脚	小片	有	— (7.0) —	ナデ	—	黒転糸切痕	赤、赤・白・黒 黄 やや不黄 褐色	底周黒変

図	No.	出土位置	種類	器種	形状	残存率	数量	1個重量(g)	外 形	内 装	裏・裏内面	結 色	土 質	備 考
72	174	SD1	土師器	柱状高台杯	脚	小片	有	— (6.7)	ナダ	—	黒鉛糸切痕	紫、赤・白・金 黄緑色		劣化著しい
72	175	SD1	土師器	柱状高台杯	脚	小片	有	— 5.2	ナダ	—	黒鉛糸切痕	紫、赤・白・金 黄緑色		劣化著しい
72	176	SD1	土師器	柱状高台杯	脚	小片	有	— (4.5)	ナダ	—	—	紫、赤・白・金 黄緑色		劣化著しい
72	177	SD1	土師器	柱状高台杯	脚	小片	有	— (4.8)	ナダ	—	黒鉛糸切痕	紫、赤・白・金 黄緑色		
72	178	SD1	土師器	脚高台杯	体+脚	小片	有	— —	ロクロナダ	ロクロナダ	黒鉛糸切痕、 付け高台	紫、赤・白・金 黄緑色		内面劣化
72	179	SD1	土師器	杯	底	小片	有	— —	ヘウ張り	ロクロナダ、 ヘウ張り、黒 鉛	黒鉛糸切り、 黄緑色	紫、赤・白・金 黄緑色		黒石部出土
73	180	SD1	須恵器	杯	口+底	小片	有	— (8.0)	ロクロナダ	ロクロナダ	—	紫、赤 黄緑色		
73	181	SD1	土師器	小型甕	口+底	80	有	14.3 A.3 13.5	ハケメ、ナダ	ハケメ、ナダ、 須恵灰	ヘウ張り	紫、赤・白・金 黄緑色		穴内一部黒炭 劣化著しい
73	182	SD1	土師器	甕	胴+底	小片	有	— 3.5	ナダ、ヘウ張り	ナダ	炭成痕跡	紫、赤・白・金 赤不満足 黄緑色		
73	183	SD1	土師器	甕	胴+底	50	有	— 6.2	ナダ、須恵灰	ヘウ張り、ナ ダ	木炭痕	紫、赤・白 黄 外周黄緑色、内周茶褐色		一部黒炭
73	184	SD1	土師器	小型甕	胴+底	30	有	— 4.3	ナダ	ヘウ張り、ナ ダ	木炭痕	やや紫、赤・白・黒 黄緑色		外周ススカ
73	185	SD1	須恵器	多嘴瓶	胴	小片	有	— —	ナダ、ヘウ張り、 輪	ナダ	—	紫、赤・黒 黄 灰長溝色		黒カ
73	186	SD1	須恵器	甕	口+底	小片	有	— (21.6)	ハケメ、タタキ目	ナダ	—	紫、黒 黄 灰長		
73	187	SD1	須恵器	甕	口	小片	有	— —	ナダ、須恵灰	ナダ	—	紫 黄 陶灰白色		内面黒炭
73	188	SD1	須恵器	甕	胴+底	小片	有	— (12.0)	ヘウ張り	ナダ	付け高台	紫、赤 黄 灰白色		胎土火ぶくれ
73	189	SD1	須恵器	甕	胴	小片	有	— —	ロクロナダ、黒鉛 下灰	ロクロナダ	—	紫、白 黄 灰白色		
73	190	SD1	土師器	手づくね土器	口+底	50	有	— (8.5) (5.0) (5.6)	ナダ、須恵灰	ヘウ張り、ナ ダ	木炭痕	やや紫、白・黒 黄 赤褐色		黒炭 胎土赤色
73	191	SD1	土師器	手づくね土器	口+底	40	有	— (4.4) (3.2) (2.9)	ナダ	ナダ	ヘウ張り	やや紫、白・金 黄 黄褐色		黒石部出土
73	192	SD1	土師器	手づくね土器	体+底	15	有	— (6.0)	—	須恵灰	—	やや紫、赤・白 黄 明赤褐色		黒石部出土
73	193	SD1	土師器	手づくね土器	体+底	小片	有	— (4.2)	ナダ	ナダ	木炭痕	紫、赤・白・金 黄 明赤褐色		黒石部出土
74	194	3号坑	土師器	高杯	口+体	小片	有	— (15.2)	ナダ、ヘウ張り	ナダ	—	紫、赤・黒 黄 黄緑色		内外赤彩 外周一部黒炭
74	195	遺構外	土師器	杯	口+底	15	有	— (12.0) (7.0) (3.2)	ロクロナダ	ロクロナダ	ヘウ張り	紫、赤・白・金 黄 黄褐色		外周ススカ
74	196	遺構外	土師器	杯	口+体	小片	有	— (12.6)	ロクロナダ、ヘウ 張り	ロクロナダ、 編文	—	紫、赤・白 黄 黄褐色		
74	197	遺構外	土師器	口	口+底	100	有	— 12.3 2.8 2.7	ロクロナダ、ヘウ 張り	ロクロナダ	黒鉛糸切痕	紫、赤・白・金 黄 黄褐色		外周黒炭 内周ススカ
74	198	遺構外	土師器	杯	口+底	40	有	— 15.0 3.4 2.8	ロクロナダ、ヘウ 張り	ロクロナダ	—	紫、赤・白・金 黄 黄褐色		赤彩カ
74	199	遺構外	土師器	杯	口+底	40	有	— (13.1) (5.2) (8.1)	ロクロナダ、ヘウ 張り	ロクロナダ	ヘウ張り	紫、赤・白・金 黄 黄褐色		ススカ

図	No.	出土位置	種別	器種	部位	残存率	反照	口徑 底径 器高	外面	内面	底・胴内面	施 色 土 成 調	備 考
74	200	遺構外	土師器	坏	口~底	30	有	(12.7) 4.6 (4.0)	ロクロナデ、ヘウ 裏り	ロクロナデ	ヘウ裏り	密、赤・白・金 灰褐色	
74	201	遺構外	土師器	坏	口~底	100		12.3 4.6 3.9	ロクロナデ、ヘウ 裏り	ロクロナデ	ヘウ裏り	密、赤・白・金 灰褐色	内外両面
74	202	遺構外	土師器	坏	口~底	25	有	(14.5) 5.1 —	ロクロナデ、ヘウ 裏り	ロクロナデ	ヘウ裏り	密、赤・白・金・黒 灰褐色	
74	203	遺構外	土師器	坏	体~底	小片	有	6.2 —	ロクロナデ	ロクロナデ	劣化著しい	紅、赤・白・金 黒褐色	劣化著しい
74	204	遺構外	土師器	坏	口~底	60		12.0 4.3 3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	副杯糸切痕、 圧痕	密、赤・白・金・黒 灰褐色	
74	205	遺構外	土師器	坏	口~底	30	有	(11.3) (5.7) (3.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	副杯糸切痕、 スノコ状圧痕	密、赤・白・金 灰褐色	
74	206	遺構外	土師器	坏	口~底	75	有	(12.4) (5.4) (3.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	副杯糸切痕、 スノコ状圧痕	密、赤・白・金 灰褐色	
74	207	遺構外	土師器	皿	口~底	35	有	(11.7) (5.8) (2.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	副杯糸切痕、 スノコ状圧痕	密、赤・白・金 灰褐色	口縁に縁状圧痕
74	208	遺構外	土師器	坏	口~底	15	有	(14.2) (7.0) (4.5)	ナデ	ナデ	副杯糸切痕	密、赤・白・金 灰褐色	
74	209	遺構外	土師器	坏	体~底	小片	有	(5.8) —	ロクロナデ、ヘウ 裏り	ロクロナデ、 内面褐色	副杯ヘウ裏り	密、赤・白・金 灰褐色	包合層
74	210	遺構外	土師器	黄台口	口~底	60	有	(12.4) (6.8) (3.2)	ロクロナデ	ロクロナデ、 器底、被殻	副杯糸切痕、 付け高台	密、赤・白・金・黒 灰褐色	内外両面
74	211	遺構外	土師器	小皿椀	口~底	35	有	(7.0) (6.9) —	ロクロナデ、ヘウ 裏り	ロクロナデ	ヘウ裏り	密、赤・白・金 鈍赤褐色	外面両面 包合層
74	212	遺構外	土師器	坏	体~底	15	有	— (9.6)	ロクロナデ、ヘウ 裏り	ロクロナデ、 内面褐色	割り出し直白 丸	密、赤・白・金 丸 褐色	
75	213	遺構外	土師器	壺	胴~底	30		— 9.5 —	ナデ	ヘウ裏り、ナ デ	圧痕	密、赤・白・金・黒 丸 赤褐色	外面両面 被殻により劣化 包合層
75	214	遺構外	土師器	長柄椀	口~胴	小片	有	(19.4) —	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	—	密、赤・白・金 丸 褐色	包合層
75	215	遺構外	土師器	壺	口~胴	小片	有	(17.5) —	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	—	密、赤・白・金・黒 丸 褐色	内面両面
75	216	遺構外	須恵器	坏	口~体	小片	有	— —	ロクロナデ	ロクロナデ	—	密 丸 灰白色	
75	217	遺構外	須恵器	坏	体~底	小片	有	— —	ロクロナデ、ヘウ 裏り	ロクロナデ	ヘウ裏り、ヘ ウ裏り	密、口 丸 灰褐色	
75	218	遺構外	須恵器	坏	体~底	小片	有	(6.4) —	ヘウ裏り	ナデ	ヘウ裏り、ヘ ウ裏り、擦痕 か	密、白・黒 丸 灰褐色	
75	219	遺構外	陶器	壺	口	小片	有	(44.6) —	ナデ、鉄槌	ナデ	—	密、黒 丸 灰褐色	
75	220	遺構外	土師器	坏	体	小片		—	—	ロクロナデ	ロクロナデ、 ヘウ裏り、縁 割	密、赤・白・金 丸 褐色	
75	221	遺構外	土師器	坏	体	小片		—	ロクロナデ、縁割	ロクロナデ	—	密、赤・白・金 丸 褐色	底成層に縁割小 片層一部中層
75	222	遺構外	—	土製品	—	—		—	ナデ、須恵器	—	ナデ	密、赤・白・金 丸 褐色	厚剥し、形態不明
75	223	試掘1丁	土師器	坏	口~底	30	有	(12.6) (6.2) (3.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	副杯糸切痕	密、赤・白・金 丸 灰褐色	
75	224	試掘	須恵器	壺	口~胴	小片	有	(9.0) —	ロクロナデ	ロクロナデ	—	密、赤・白・黒 丸 灰褐色	内外両面
75	225	試掘1丁	土師器	坏	体	小片		—	縁割 (底成層中)	ナデ	—	密、赤・白・金 丸 褐色	

図	No	出土位置	種類	器種	部位	形状	反転	口径 底径 器内径	外径	内径	底・脚内径	施 色 土 底 色	備 考
75	236	試掘・表土	土師器	杯	作	小片	有	— —	ロクロナデ	ロクロナデ、 焼成前厚削 [工] (丹カ)	底赤褐色 良 艶白	乳、赤、白・金 良 艶白	内面に磨削あり 土土層出土
75	227	試掘 2Tr	土師器	杯	口～底	20	有	(14.0) (9.0) (2.8)	ロクロナデ、ヘラ 削り	ロクロナデ	ヘラ削り	赤、赤・白・金 良 艶白	
75	228	試掘 2Tr	灰土陶器	純	体～底	15	有	(8.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	付け高台 (三 口片高台カ)	赤、黒 良 艶白	
75	229	試掘 3Tr	土師器	杯	口～体	小片	有	(13.0) —	ヘラ削り、ナデ	ヘラ削り、ナ デ	—	赤、赤・白・金 良 艶白	外周磨削
75	230	試掘 3Tr	土師器	鉢	口～底	小片	有	27.0 (16.8) (10.6)	ヘラ削り、ナデ、 ハケメ	ハケメ	—	赤、赤・黒 良 艶白	紋飾 外周磨削
75	231	試掘	土師器	手づくね土器	口～底	100	有	5.3 8.0 7.7	指痕痕	指ナデ	磨削	赤、赤・白・金 良 艶白	
75	232	試掘 3Tr	土師器	手づくね土器	口～底	100	有	5.7 7.0 6.0	ナデ、指痕痕	指ナデ	本磨削	赤、赤・白・金 良 艶白	外周磨削
75	233	試掘 3Tr	土師器	手づくね土器	口～底	100	有	3.9 6.2 5.5	ナデ、指痕痕	指ナデ	本磨削	赤、赤・白・金 良 艶白	
75	234	試掘 3Tr	土師器	手づくね土器	体～底	20	有	(8.2)	ナデ	ヘラ削り	本磨削	赤、白・金 良 艶白	

表8 編物石観察表

図	No	出土位置	石 材	重 量 (g)	最 大 長 (cm)	最 大 幅 (cm)	最 大 厚 (cm)
76	1	S19	砂岩	610	13.9	7.3	3.8
76	2	S19	硬砂岩	698	12.2	11.2	3.9
76	3	S19	ホルンフェルス	687	13.0	8.8	4.2
76	4	S19	花崗閃緑岩	469	11.9	4.7	5.4
76	5	S19	硬砂岩	404	10.2	7.1	4.7
76	6	S19	花崗閃緑岩	1,016	14.3	10.5	4.7
76	7	S19	花崗閃緑岩	634	14.3	6.6	4.5
76	8	S19	硬砂岩	747	13.0	7.2	6.4
76	9	S19	花崗閃緑岩	866	14.4	9.1	6.0
76	10	S19	花崗岩	600	13.2	8.3	4.5
76	11	S19	花崗岩	864	14.6	7.7	6.2
76	12	S19	硬砂岩	789	13.0	9.1	6.0

表9 石器観察表

図	No	出土位置	種 類	最 大 長 (cm)	最 大 幅 (cm)	最 大 厚 (cm)	重 量 (g)	石 質	備 考
77	1	S13	砥石?	7.2	4.0	0.3	20.6	粘板岩	
77	2	SD1	砥石?	6.8	6.7	4.6	192.0	チャート	2面
77	3	SD1	砥石	9.9	7.2	6.1	814.0	花崗岩質アブライト	6面
77	4	試掘	敷石?	18.0	5.5	5.5	1,026.0	安山岩	
77	5	S18	打製石斧	11.8	7.5	2.6	274.0	ホルンフェルス	

表10 土錘観察表

図	No	出土位置	最 大 長 (cm)	最 大 幅 (cm)	最 大 厚 (cm)	重 量 (g)	備 考
77	1	SD1	4.4	2.2	1.9	16.2	内径 0.5cm
77	2	SD1	4.5	2.1	1.9	16.2	内径 0.55cm

V. 車居遺跡（2次）の調査

平成17年5月に試掘調査を行い、遺構を確認したため、引き続き本調査を実施した。10月6日まで430㎡を調査し、住居跡8軒、溝状遺構9、土坑3、井戸跡1、敷石遺構1を確認した。出土した土器は258.3kgであった。本調査地点は、調査前は個人住宅が建っていたため、基礎による攪乱が多く見られ、調査区の一部はモモ畑であった。それ以前はブドウ畑と水田が営まれており、ブドウ畑の排水のための暗渠も確認できた（第79図）。遺構確認面は、暗灰褐色土であったが、この土は乾くと非常に硬くなり、遺構確認が難しい土である。調査区の半分がSD3によって削られているため、基本層序はSI5の土層図を参照されたい（第87図）。

尚、土置き場の関係上、調査区を東西にわけて調査したため、SD3やSX1の遺構確認に関しては分割して調査する結果となり、情報が不十分であることはお断わりしておきたい。また、住居跡のカマド焼土及びSX1の敷石直上や掘り型の土壌については、すべて洗浄し、微小遺物の検出に努めた結果、動植物遺体が出土し、その成果は附編2に纏めた。

1. 遺構

SI1（第80図、PL18）

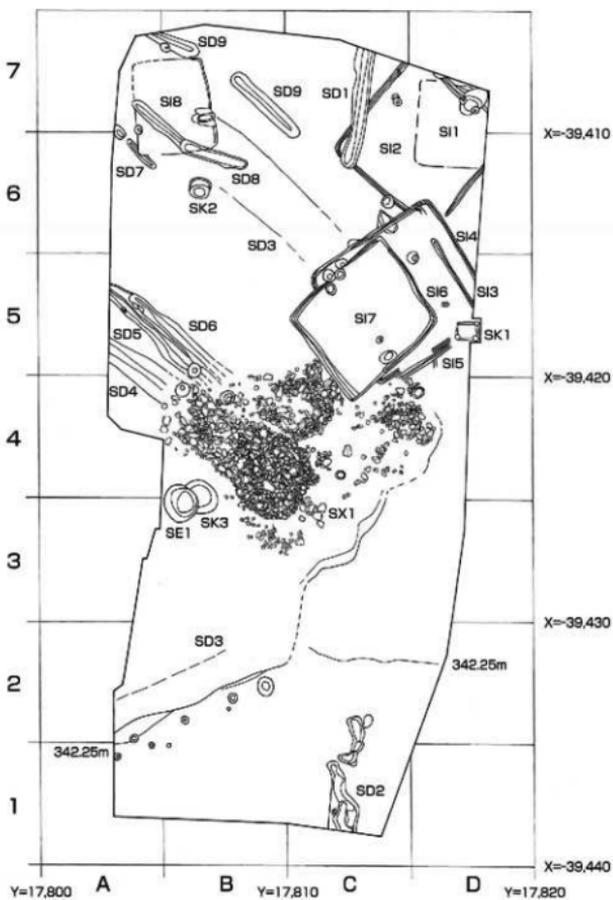
D-6・7グリッドで確認し、SI2の覆土に構築される。調査区の東壁の土層観察により確認したため、形態や規模は不明である。SI2のカマド確認面（SI1の床面？）から坏が1点出土しており、平安時代（奈・平Ⅷ・Ⅸ期、10世紀後半～11世紀前半）と推測される。

SI2（第80・81図、PL18）

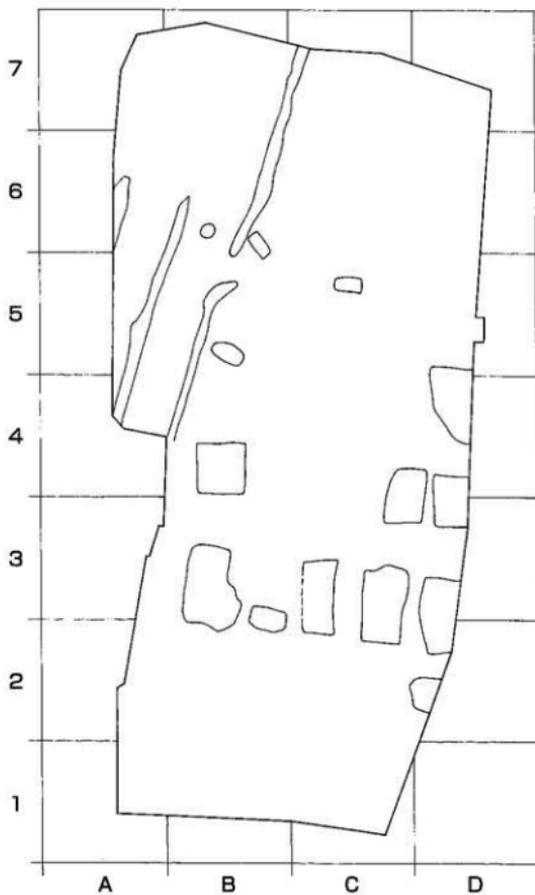
C・D-6・7グリッドで確認し、覆土にSI1が構築され、南東隅でSI4と重複するが、新旧関係は不明である。南西隅をSD1によって壊される。1辺5.4mの方形を呈し、西側に向かって傾斜しているため、西側ほど残存状態が悪く、周溝によって形状がやっとわかる状態である。北東の壁高は25cm程である。床面は概ね硬く平坦であるが、明確な貼床は施されていない。周溝は概ね四周を巡るが、東南壁際では途切れている。この辺りは確認面が低かったため、元々途切れているのかははっきりしない。4本柱穴と推測されるが柱穴ははっきりせず、北西の1個（深さ25cm）だけを確認した。主軸方向はN-39°-Eである。カマドは北壁に付設され、両袖には川原石が1個ずつ使用されている。両袖から煙道部にかけての側壁に顕著な硬化面が認められ、燃焼部にも硬い焼土が見られた。支脚と思われる被熱により赤変した石が、燃焼部で横倒しの状態で出土している。遺物は、覆土の遺存状態が悪いこともあり、あまり多く出土していない。カマド付近から、坏2点、甕6点が出土し、カマド廃棄に伴う祭祀の痕跡と思われる。カマド出土の土器群により判断し、古墳時代後期（古墳Ⅸ期、5世紀第4四半期後半～6世紀第1四半期初め）と推測される。

SI3（第82図）

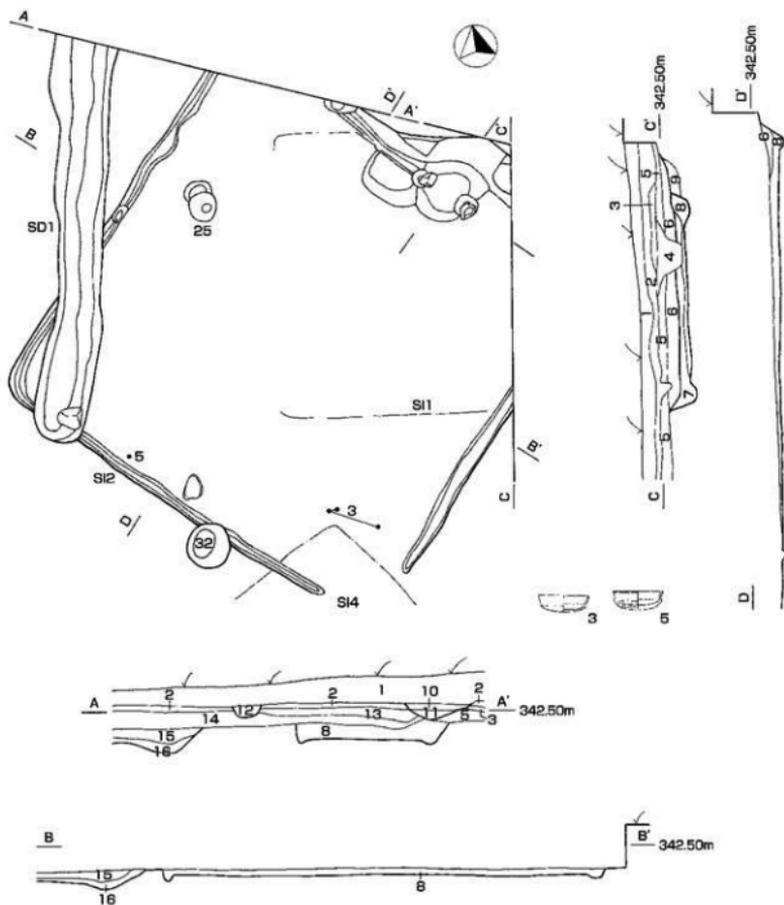
D-5・6グリッドに位置し、SI4・5、SK1と重複するが、これらより新出である。調査区の東壁の土層観察より確認したため、形状等は不明である。重複関係などから、平安時代と推測される。



第78図 遺構分布図

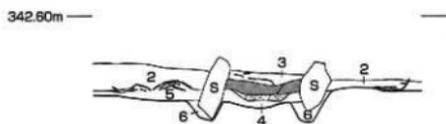
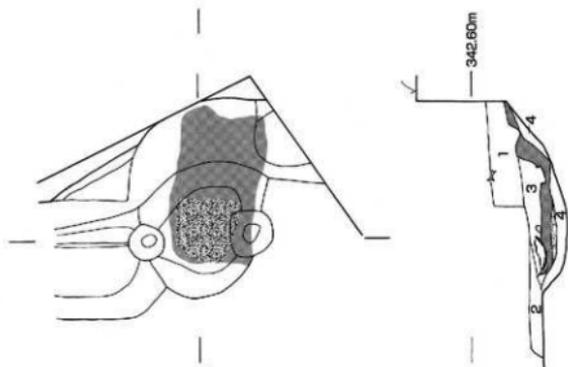
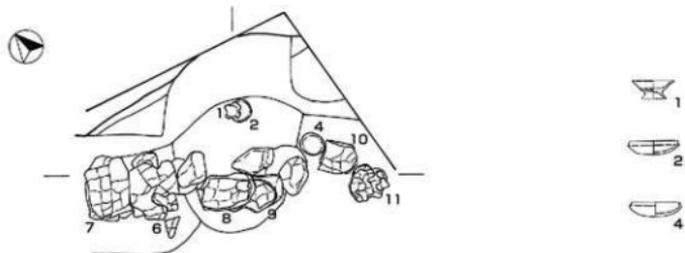


第79圖 攪乱、暗渠分布圖

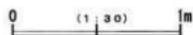
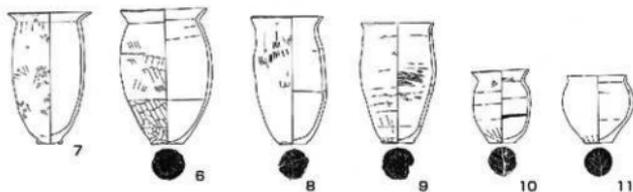


No	色	質	研	器	入	物	備考
				器	器	C	C
1	浮遊色						
2	砂褐色			○			水圧
3	抹茶褐色			○			
4	抹茶褐色			○			
5	抹茶褐色			○	△		
6	抹茶褐色			○	○		SI1
7	抹茶褐色			○	○		SI2
8	抹茶褐色			○	○		SI2
9	灰褐色			○			
10	白黄褐色			○	□		
11	巨黄褐色			○	△		
12	巨黄褐色			○	△	□	
13	灰褐色			○	○		
14	灰褐色			○	○	△	
15	黄褐色			○	○		SD1
16	黄褐色			○	○		SD1

第80図 SI1・2, SD1



No	色調	跡	遺入物				
		跡	跡	跡	跡	跡	跡
1	海苔褐色	○					
2	海苔褐色(配青)	○	□				
3	海苔褐色(配青)	○	□				
4	海苔褐色	○			□		
5	海苔褐色	○	○				
8	海苔褐色	○	○				



第81図 S12カマド

SI 4 (第82・85図、PL 19)

C・D-5・6グリッドで確認し、北壁際でSI 2と重複、東壁をSI 3、東南壁際をSI 5、西壁をSD 3に壊される。南北5.7m、東西約6.0mのほぼ方形を呈し、東壁で深さ15cm程残る。床面は概ね平坦で、SI 6の覆土に当たる箇所は貼床が施されている。周溝は確認できた範囲で四周し、柱穴は4本確認できた。主軸方向ははっきりしないが、N-31°-Wであろう。カマドは北壁に付設され、両袖とも明確に確認できた。特に右袖は燃焼により、内側が赤色硬化していた。北壁はSI 6と共用しているため、SI 6の周溝の深さまで掘り込んでいた。左袖の外側のピットは、カマドより新しいものである。右袖の外側の石は、カマドが使用されていた段階では設置されていたものと思われる。尚、右袖付近の炭化物の範囲は一部右袖下でも確認できたことから、カマド構築時に焼成をしているのか、カマドを再構築したのかもしれない。カマドの覆土から、本遺跡唯一の鉄製品(棒状)が出土している。遺物量は、住居跡の中では最も多く出土している。南壁際は攪乱が多く見られたため、この付近で出土した土器は、本住居跡の覆土中と言えないものも含まれている可能性が高い。カマド左脇から環(15・16)が重なった状態で出土している。時期は古墳時代後期(古墳X期、6世紀第4四半期)としておきたい。

SI 5 (第87図、PL 19)

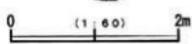
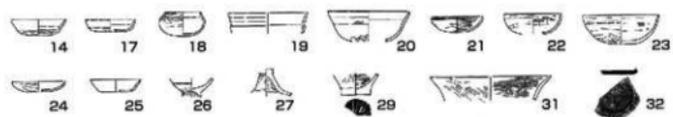
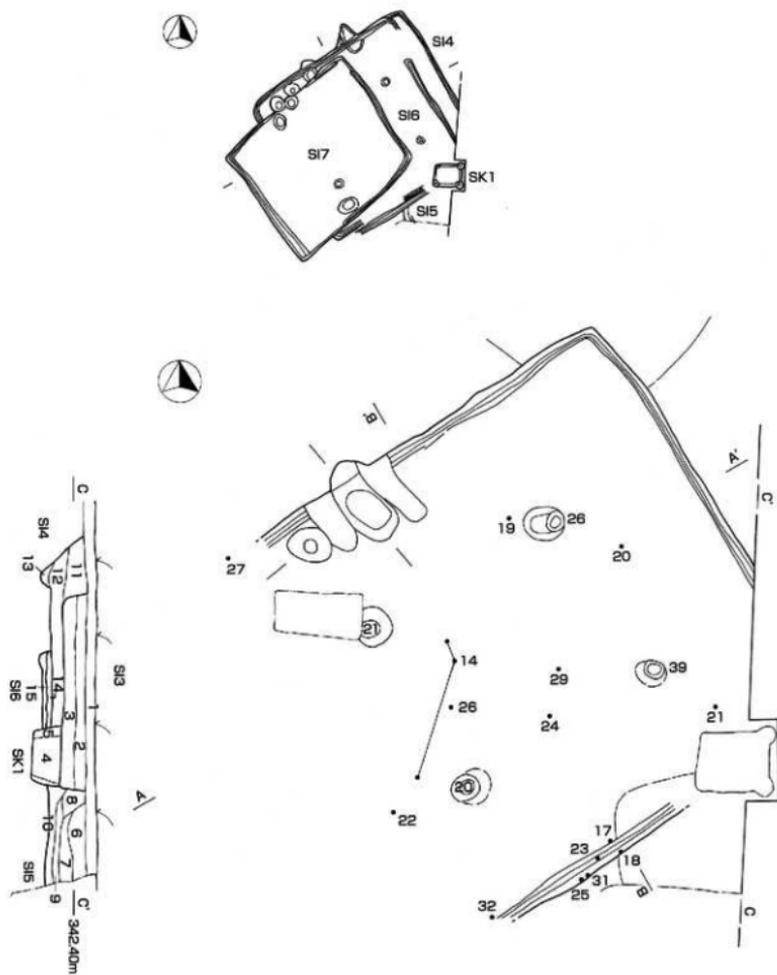
D-5グリッドに位置し、北西隅のカマド周辺を確認しただけで、大半が調査区外に展開するため、規模は不明であるが、方形を呈するものと思われる。SI 4を壊して構築され、SI 3とSK 1によって壊され、南側を基礎の攪乱によって壊される。壁はゆるやかに立ち上がり、確認面から床面までの深さは20cm程である。カマドの構造は不明であるが、袖石が1箇所、攪乱による破壊を免れ残存していた。カマド周辺のため、比較的遺物が出土したが、図示できたものは多くない。今回の調査では珍しい土器も出土し、37の皿は胎土がやや粗いものの注目されよう。遺物にやや時間差が認められるが、古墳時代後期(古墳X期)～奈良時代(奈・平I期)の所産と考えられる。

SI 6 (第83・86図、PL 19)

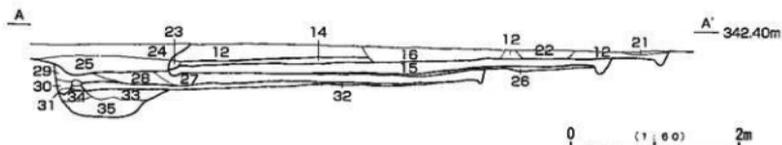
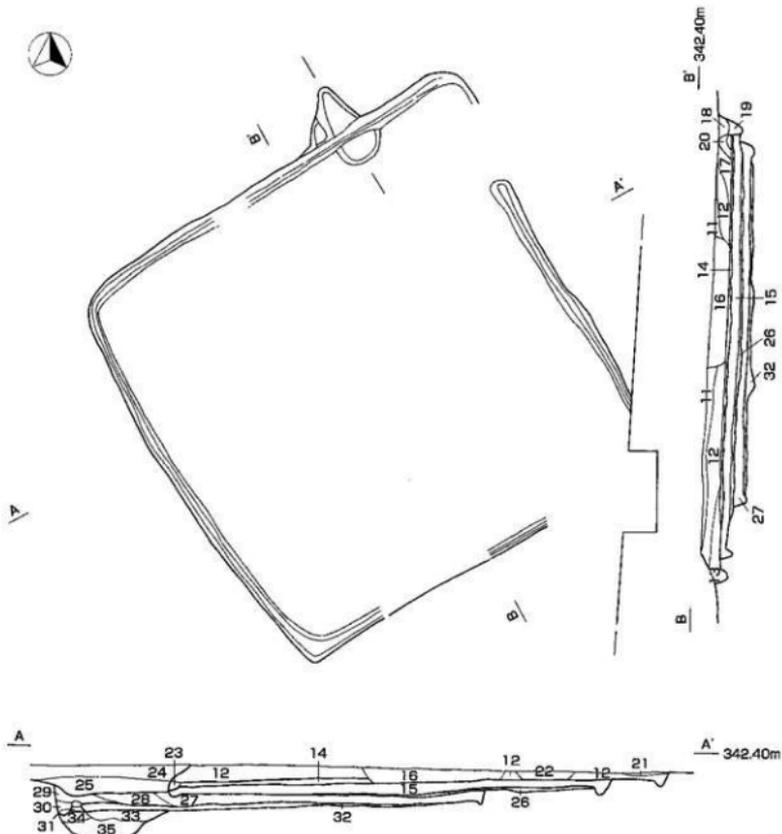
C・D-5・6グリッドに位置し、SI 7を壊して構築され、覆土にSI 4が構築される。一辺5.4mのほぼ方形を呈し、SI 4の掘り型から床面までの深さは10cm程度である。主軸方向はN-30°-Wである。柱穴は確認できず、周溝は北東隅で途切れるものの、壁が確認できた範囲で巡っている。床面は西側に向かってやや傾斜しており、貼床も西側には施されていない。カマドは、SI 4の周溝により壊されており、残存状態は悪い。当初SI 4のIIカマドとしていたが、SI 6を確認したことにより、SI 6のカマドと判断した。北壁をSI 4と共有していることから、本住居跡を壊してSI 4を構築し直した可能性もある。遺物はあまり多く出土せず、しかも破片ばかりであるため図示できるものはなかった。重複関係から、古墳時代後期としておきたい。

SI 7 (第84・86図、PL 19)

C-4~6、D-5グリッドに位置し、覆土にSI 6が構築される。南北4.3m、東西5.0mでやや平行四辺形気味を呈する長方形を呈し、SI 6の掘り型から床面までの深さは10cm程度である。主軸方向はN-37°-Wである。柱穴は確認できず、南壁と北東隅を除き、周溝が確認できた。床面は概ね平坦であり、東壁際を除き貼床が施され、砂層に構築された西側では厚くなっていた。南壁



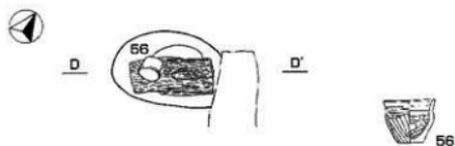
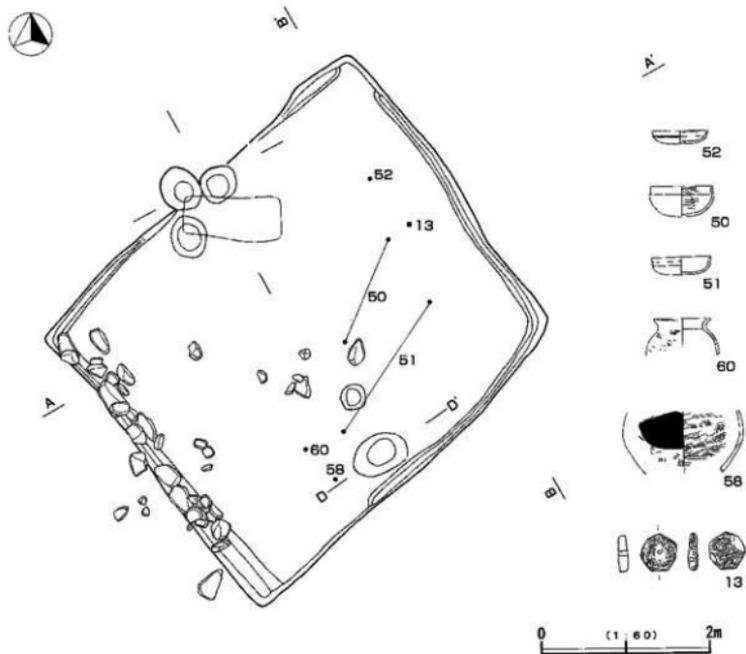
第32图 SI4



No	色 調	壁	入 入 入				備 考
			廊	経 路	C ずら	その他	
1	伊賀焼色						裏上
2	陶灰焼色	○	□				S13
3	漆褐色	○	△				S13
4	陶灰焼色 (粘質)	○	○				SK1
5	陶灰焼色 (粘質)	○	○				SK1
6	陶灰焼色	○	○	△			S13
7	漆灰焼色	○		○	○		S15
8	漆灰焼色	○			○		S15
9	黒焼色	○		○	○		粘二筋○ S15
10	陶灰焼色	○	△				S15
11	陶灰焼色	○	□				S14
12	陶灰焼色	○	△				S14
13	陶灰焼色	○	○				黒色一○ S14
14	漆褐色	○	○				S14 粘灰
15	陶灰焼色	○	△				S16
16	陶灰焼色	○	○				SK
17	漆灰焼色	○		□			S14
18	漆灰焼色	○	△				S14

No	色 調	壁	入 入 入				備 考
			廊	経 路	C ずら	その他	
19	漆褐色	○	□				S14
20	陶灰焼色	○	○				S14 カマド廻
21	漆褐色	○	△				S14
22	漆灰焼色	○	○				S14
23	陶灰焼色 (粘質)	○	○				S14
24	漆褐色	○	○				SD3A
25	陶灰焼色	○	○				SD3A
26	陶灰焼色	○	○				S16 粘灰
27	漆褐色 (粘質)	○	△				S17
28	漆褐色	○	△				S17
29	漆褐色	○	□				シルトロ S17
30	漆褐色 (粘質)	○	○				シルトロ S17
31	漆褐色 (粘質)	○	○				反瀬色砂△ S17
32	漆褐色 (粘質)	○	△				S17 粘灰
33	漆褐色	○	□				シルトロ SD3B
34	漆褐色 (粘質)	○	○				反瀬色心△ SD3B
35	漆褐色 (粘質)	○	○				反瀬色砂△, SD3B

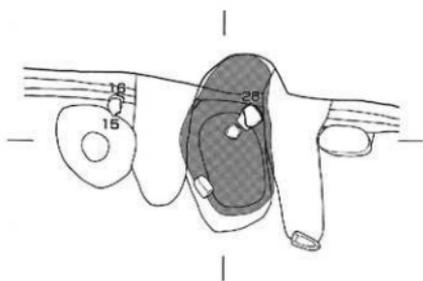
第83図 S16



No.	色質	遺入物			
		棒	瓦	鉄	銅
1	暗褐色	○	△	△	△
2	暗褐色(粘質)	△	△		砂△



第84図 S17



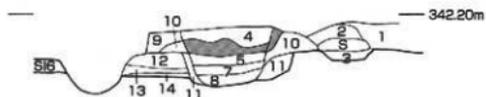
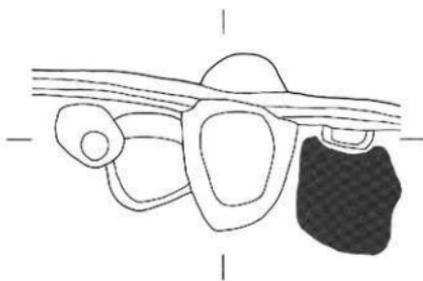
15



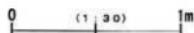
16



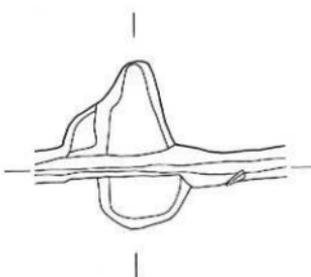
28



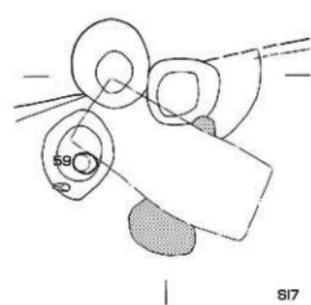
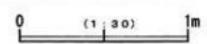
No	色 調	採 掘 層				採 掘 層			
		第1層	第2層	第3層	第4層	第1層	第2層	第3層	第4層
1	暗赤褐色	○	○						○
2	暗灰褐色	○	○						○
3	灰褐色 (砂質)	○							
4	暗灰褐色	○		△					
5	暗赤褐色	○		○	△				
6	暗灰褐色 (粘質)	○	△				△		
7	白灰褐色 (粘質)	○			○	△			
8	暗褐色 (粘質)	○			△	△			
9	暗灰褐色	○	△			△		△	
10	灰灰褐色	○	△					△	
11	黒灰褐色 (粘質)	○							
12	暗赤褐色	○	○						
13	赤褐色	○							
14	暗褐色	○							



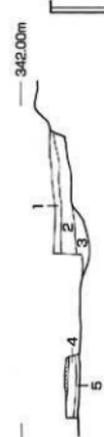
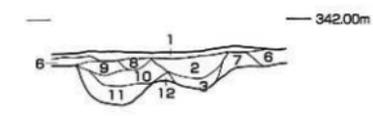
第85図 SI4カマド



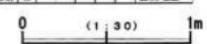
No	色	質	種	遺入物			その他
				銅	鉄	土	
1	薄灰褐色	(粘質)	○	○	△	△	
2	薄灰褐色	(粘質)	○	△	△	△	
3	薄灰褐色	(砂質)	○	○	△	△	
4	薄灰褐色	(粘質)	○	△	△	△	粘土粒△
5	薄褐色		○	△	△	△	



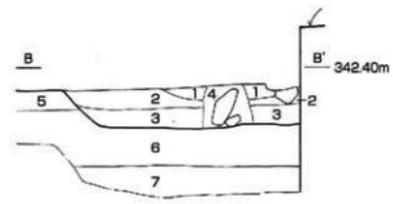
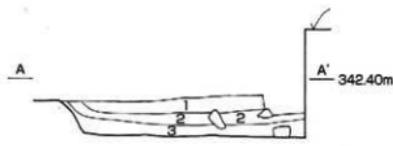
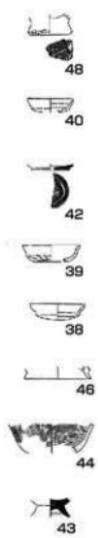
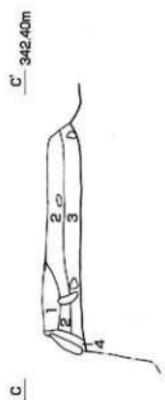
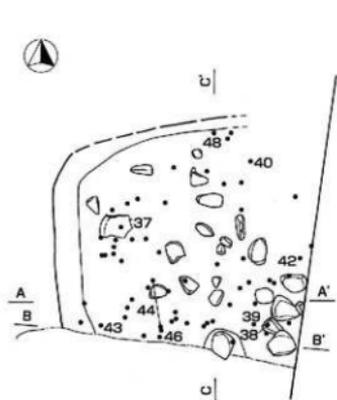
S17



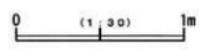
No	色	質	種	遺入物			その他
				銅	鉄	土	
1	薄褐色		○	○	△	△	
2	薄褐色		○	△	△	△	
3	薄褐色		○	△	△	△	白色粘土△
4	暗褐色		○		○	△	
5	灰褐色	(粘質)	○				白色粘土+
6	暗褐色		○			△	
7	暗褐色		○			△	緑○
8	灰褐色		○		○		白色粘土○
9	灰褐色	(粘質)	○				
10	灰褐色	(粘質)	○	△			白色粘土△
11	暗褐色	(粘質)	○				白色粘土△
12	暗灰褐色	(粘質)	○	△			白色粘土△



第86図 S16・7カマド



No.	色	採	種	遺入物			
				磁	石	骨	土
1	強灰褐色	○		○	○		
2	黒褐色	○		○	○		粘土質(○)
3	透灰褐色	○	△	○	○	□	
4	黒褐色	○	○	△	△	○	
5	強灰褐色	○	△				
6	強灰褐色	○	○				
7	強灰褐色(粘質)	○	○				



第87圖 S15

寄り床面から深さ20cm程の土坑が確認でき、その覆土に腐食した板材が確認でき、その直上から小型甕(56)が1点出土している。60の甕はこの土坑の脇から床面に逆位の状態で置かれて出土していた。カマドは新出のピットと混乱により壊され、残存状況はよくない。一部粘土が残存しており、焼土が覆土から出土している。カマドと関連すると思われるピット内から小型壺(59)が出土している。57の甕は掘り廻から出土している。また、床面から棒状の木製品が3点見つかったが、劣化が著しく図示できなかった。これらの土器から、古墳時代中期(古墳Ⅶ期、5世紀第3四半期～第4四半期頃)と想定しておきたい。

SI8 (第88図、PL20)

A・B-6・7グリッドに位置し、SD8に壊されている。西壁際は新出のピットにより壊される。東西3.0m、南北3.8mの長方形を早するが、西壁際は耕作に削平され、ほとんど残存しておらず、東壁で深さ20cmを測る。主軸方向はE-5°-Nである。床面は概ね堅緻であるが、やや中央部で窪み傾向が見られ、貼床は西側で一部施され、北壁寄りで焼土が見られた。カマドは東壁に付設されていたが、あまり遺存状態はよくない。袖は土が堅緻であることから、判断しに過ぎない。遺物は少なく、ドットで示した程度であり、カマドにやや集中している。時期ははっきりしないが、古墳時代後期の最終末であろうか(古墳Ⅷ期)。

SD1 (第80図、PL20)

C-6・7グリッドに位置し、長さ5.0m、最大幅0.7mで、最も深いところで確認面から20cm程で、北側に延びる。SI2を壊して構築され、遺物は内耳鍋など15世紀前半頃のもの若干出土しており、その頃の所産と推定しておきたい。

SD2 (第89図)

C-1・2グリッドに位置し、長さ5.5m、最大幅約1.0mで、最も深いところで確認面から40cm程で、ほぼ南北に延びる。南側に向かってやや深くなる傾向にある。遺物は出土していない。

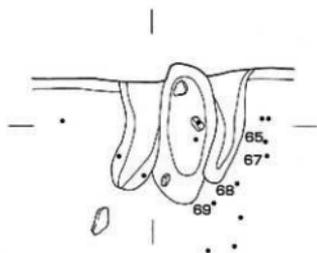
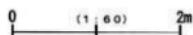
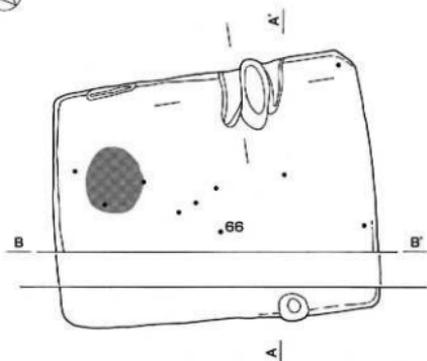
SD3 (第90図、PL20)

A・B-2～7、C-3～5、D-4グリッドに位置し、D-4グリッド付近で「く」の字状に折れ曲がり、調査区の半分近くを占める。発掘調査は土置き場と畑への通路を確保するために、調査区を東西に分け、最初に東半分を実施しているため、調査時には十分状況を把握できなかったことは否めない。分析の結果、SD3は少なくとも3段階において溝が構築されていることが想定できた。

第1段階は、調査区を逆「く」の字状に巡るものである。この覆土には砂層や砂質土と粘質土が互層になっている。SI2やSI5では地山には砂層がまったく含まれておらず、完掘していないものの、地山の掘り込みから大きな掘り込みがあることが窺える。その後何回か埋没と構築が繰り返され、ある段階で砂層の平坦面を作り出している。最終段階は、第90図にトーンで図示しているが、SX1を大きく巡るかのようなSD3Aである。ただし、この溝はSI4より新しく、SI8より古いと想定できる。尚、この第1段階の掘り込みは、田垂川の旧流路ではないかと想定している。

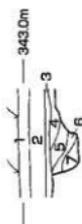
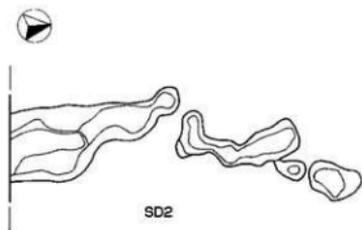
SD4～6 (第91図、PL23)

A・B-4・5グリッドに位置する。長さはSD4が3.2m、SD5・6は6.0mであるが、いず

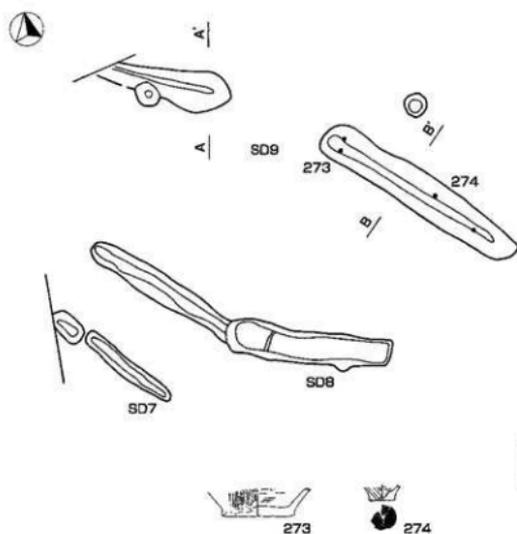


No	色	形	出入			
			形	出	入	備
1	綠茶褐色	○	△	△	△	□
2	綠茶褐色	○	△	△	△	△
3	綠褐色	○	△	△	△	△
4	綠褐色	○	△			
5	綠茶褐色	○	○	△	△	
6	綠褐色	○	△	△	□	□
7	綠褐色	○		○		

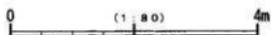




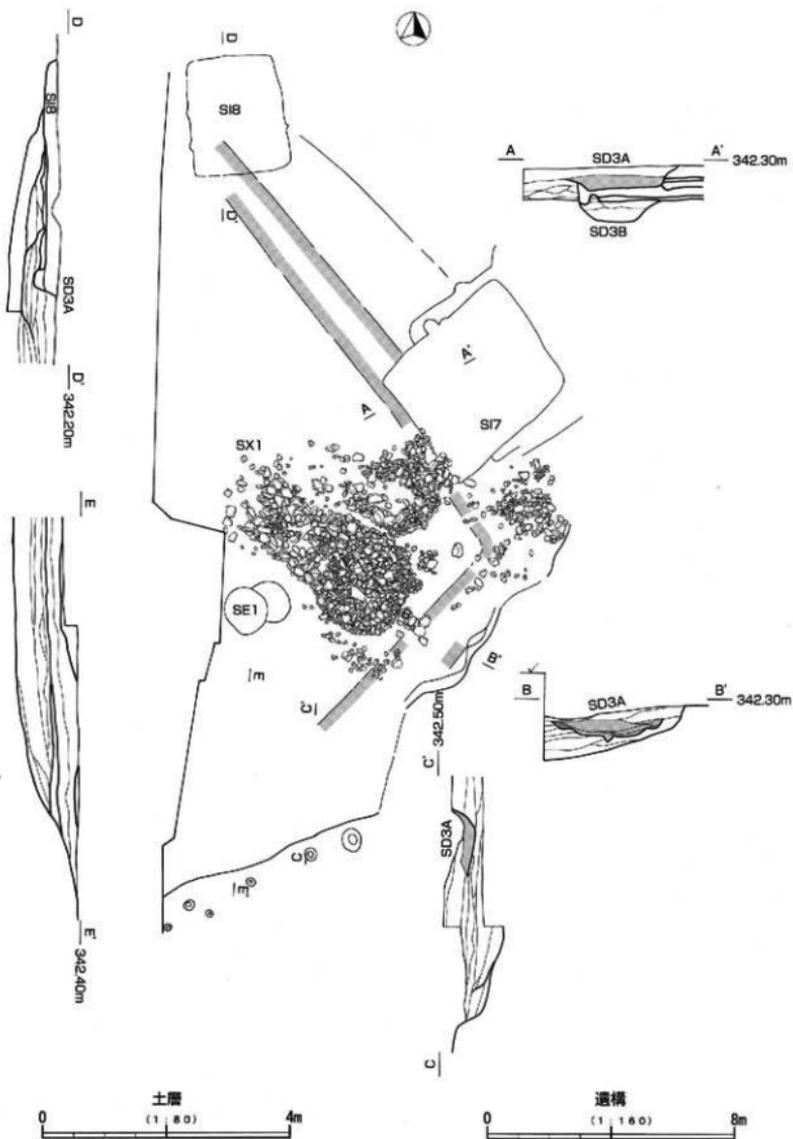
No	色調	評	採入地	備考
1	羽織色土			
2	緑茶褐色土			表二
3	磁茶褐色土			三木田
4	磁褐色土			陶灰褐色砂
5	磁褐色土二	○		
6	陶灰褐色砂質土	○		
7	陶灰褐色砂質土	○		



No	色調	評	採入地	備考
1	陶灰褐色	○		○
2	陶褐色	○		△



第89図 SD2・7・8・9



第90図 SD3

れも調査区外に展開し、地形の傾斜方向に延びている。SD4からは播鉢が出土しているが、この付近は暗渠と重なることから、後世の混入と考えたい。調査時の所見によれば、SD6よりSD5の方が覆土の状況から新しいとしており、出土土器もそれを裏付けている。この3条の溝状遺構は、SX1と方向を一致にしていることから関連する可能性があるが、根拠は特にない。

SD7 (第89図)

A-6・7グリッドに位置し、長さ2.4m、幅0.3m、深さは10cm程である。遺物は出土していない。

SD8 (第89図、PL21)

A-7、B-6・7グリッドに位置し、SI8を壊して構築されている。長さ5.2m、幅0.5m、深さ15cm程である。遺物は出土していない。

SD9 (第89図、PL21)

A・B-6・7グリッドに位置する。断面がV字状を呈し、他の溝状遺構と形状が明らかに異なる。確認した長さは7.2m、幅0.6m、深さ0.4m程である。途中で一旦途切れるが、同一の溝と思われる。273、274の土器が出土しており、274は焼成前の底部穿孔であることから、古墳時代前期頃の方形周溝墓の一部であるかもしれない。

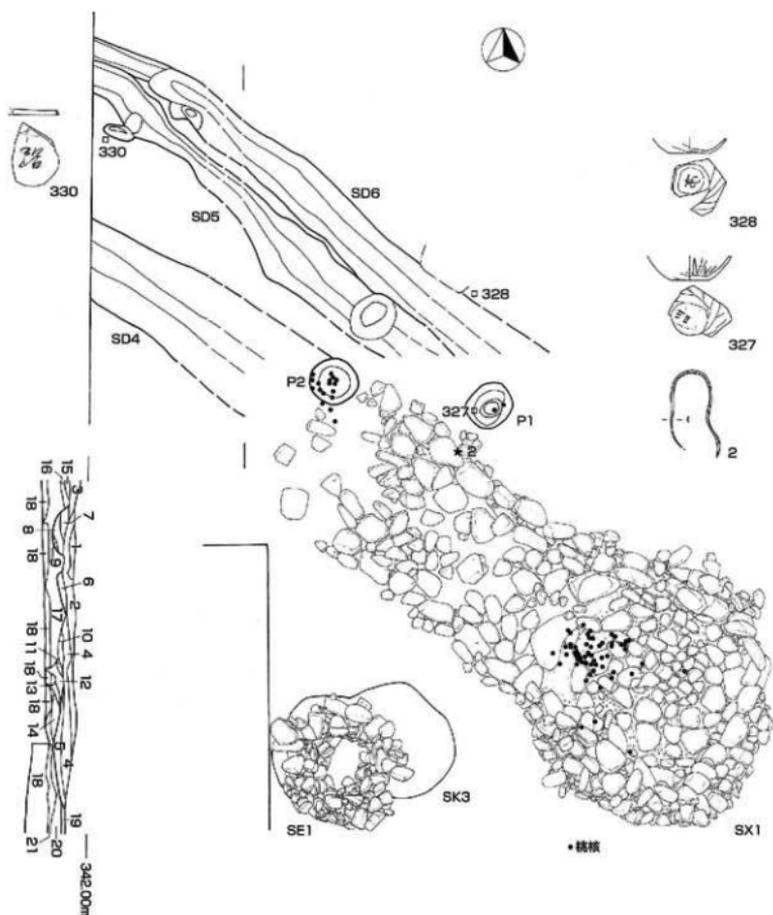
SX1 (第91～93図、PL22・23)

B・C-3・4グリッドに位置する。砂層あるいは砂質土の上に構築され、遺構確認時から石が多量に確認できたものの、一部基礎の攪乱箇所に当たったため、遺構の確認には困難を極めた。SX1としたものは一見すると古墳の石室のような形状を呈する。以下石室と同じ名称を使用しながら説明することにした。

SX1は北西に開口部(入口)があり、長さ6.2m程の横穴式石室状の形状を呈し、主軸方向はS-54°-Eである。羨道は長さ4.0m、幅2.0m、玄室は北壁1.9m、東(奥)壁2.0m、南壁2.1m、閉塞部1.6mのややいびつな方形を呈し、側壁はやや胴張り気味である。北壁と閉塞部の遺存状態が悪く、奥壁は4段、南壁は3段の石積みが残存している。玄室は礫床で数十cmの平坦な礫が敷き詰められ、隙間を小礫で充填しとても硬くしっかりとしているが、この床の上5cm程に細石が敷き詰められた床状のものがもう1面確認できた。閉塞部の基底にはSX1の中では最大の石が掘えられ、羨道は礫床で平坦な石が多用されているものの、平坦な床につくっているとはあまり言い難い。壁は長方体に近い自然石を横口積みにし、部分的に小口積みにして調整して積み上げている。壁の裏には20cm前後の自然石による裏込も見られる。

出土遺物は、覆土に散乱した石の間から奈良～平安時代の土器が少量出土している。その他、桃核が90点出土し、出土位置を記録したものが75点で、他は土壤洗浄による確認である。出土位置の大半が、玄室の石の上(細石による床面下)から出土するが、一部羨道の敷石下のPit2や墨書土器「川口」が出土したPit1からも出土している。Pit2の出土量から判断して、実の状態ではなく、桃核の状態で埋められたと考えられる。さらに、敷石の下から鑷子が出土しており、地鎮具と思われる。

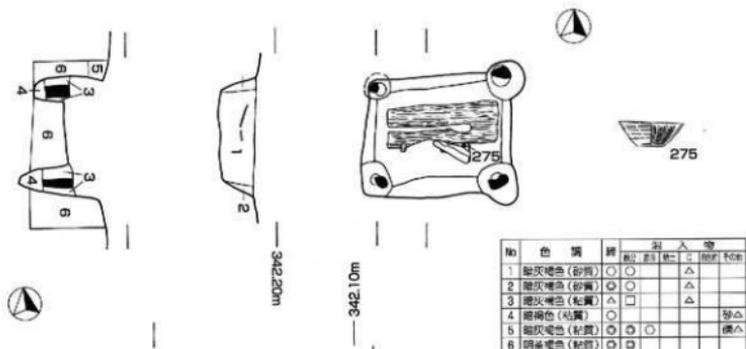
また、SD3でも述べたが、調査区を2つに分けたため、石の分布図を作成すると、北東側にも



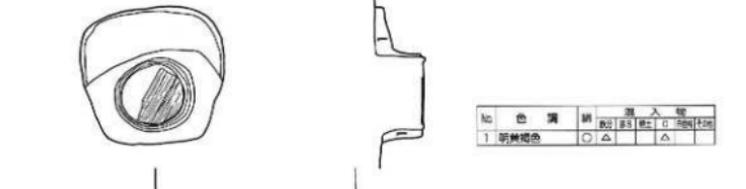
地 色 調	層	混 入 物	備 考
明 暗 色 調	上 部	中 部	下 部
1 灰褐色 (粘質)	○		黄褐色砂○
2 明灰褐色 (砂質)	○		
3 淺褐色	○	△	
4 灰褐色 (砂質)	○		
5 明灰褐色 (砂)	○	△	
6 灰褐色 (砂質)	○	□	黄褐色砂△
7 明灰褐色 (粘質)	○	△	
8 黑灰褐色 (粘質)	○		黄褐色砂△
9 黑灰褐色 (砂質)	○	□	
10 白灰褐色 (砂質)	○	△	
11 雜灰褐色 (砂質)	○	□	白灰褐色砂△
12 白灰褐色 (砂質)	○		
13 明灰褐色 (砂質)	○		明灰褐色砂○ 備考?
14 灰褐色 (砂質)	○		白灰褐色砂○
15 淺褐色	○	△	
16 淺褐色	○	△	白灰褐色砂△
17 明灰褐色 (砂)	○	□	暗褐色砂○
18 明灰褐色 (粘質)	○	□	
19 淺褐色	○		白灰褐色砂○
20 灰褐色 (砂質)	○	△	
21 灰褐色 (砂質)	○	□	白灰褐色砂○

0 (1 : 50) 2m

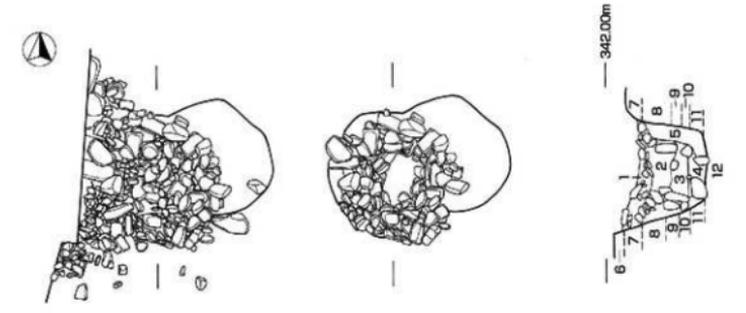
第91圖 SD4・5・6、SX1



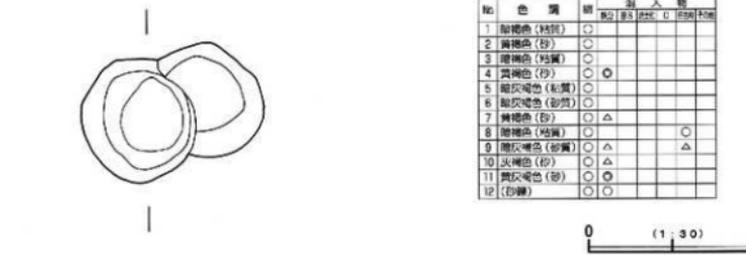
No	色調	材	出入数			
			取	置	出	和
1	暗灰褐色(砂質)	○	○	○	△	
2	暗灰褐色(砂質)	○	○		△	
3	暗灰褐色(粘質)	○	□			
4	暗褐色(粘質)	○	△			砂△
5	暗灰褐色(粘質)	○	○			磚△
6	明黄褐色(粘質)	○	□			



No	色調	材	出入数	
			取	置
1	明黄褐色	○	△	△



No	色調	材	出入数			
			取	置	出	和
1	暗褐色(粘質)	○	○	○	△	
2	黄褐色(砂)	○	○			
3	暗褐色(粘質)	○	○			
4	黄褐色(砂)	○	○			
5	暗灰褐色(粘質)	○				
6	暗灰褐色(砂質)	○	○			
7	黄褐色(砂)	○	△			
8	暗褐色(粘質)	○	○		○	
9	暗灰褐色(砂質)	○	△		△	
10	黄褐色(砂)	○	△			
11	暗灰褐色(砂)	○	○			
12	(砂質)	○	○			



第92図 SK1・2・3、SE1

「コ」の字状の石の分布が見られる。これらはSX1のように基底部がしっかりしておらず、SX1の崩落したものが、結果的にコの字状に近い形態を呈している可能性もあろう。

尚、この敷石遺構の性格については後述するが、礎床を構築した後に礎を積み上げていること、玄室が方形に近い等、これまで県内で確認されている石室の特徴と異なっており、出土遺物も勘案し、奈良～平安時代の祭祀遺構と考えておきたい。

SK1 (第92図、PL21)

D-5グリッドに位置し、SI4より新しく、SI3より古い。ほぼ方形南北85cm、東西75cmのやや長方形を呈し、確認面から底面までの深さは25cmである。土坑の四隅に深さ20～35cmのピットがあり、その中から杭状の木が出土している。木の両端は鋸で切られたようにほぼ直線状を呈していたが、ボロボロに腐った状態であり、実測はできなかった。4辺の壁際の覆土が堅緻であったため、4辺に板があった可能性が高い。つまり4本の杭（一部杭の内側か）を結ぶ桁のような状況が想定できる。但し、底板が存在したかどうかは不明である。覆土中層より、板状の木が出土している。すでに腐っており、板の表面がやっとな確認できる状況であった。その脇から棒状の自然礫が出土し、その下から押しつぶされたかのような状態で内面黒色処理の坏(275)が出土している。この坏から平安時代(奈・平V期、9世紀後半)としておきたい。

SK2 (第92図、PL21)

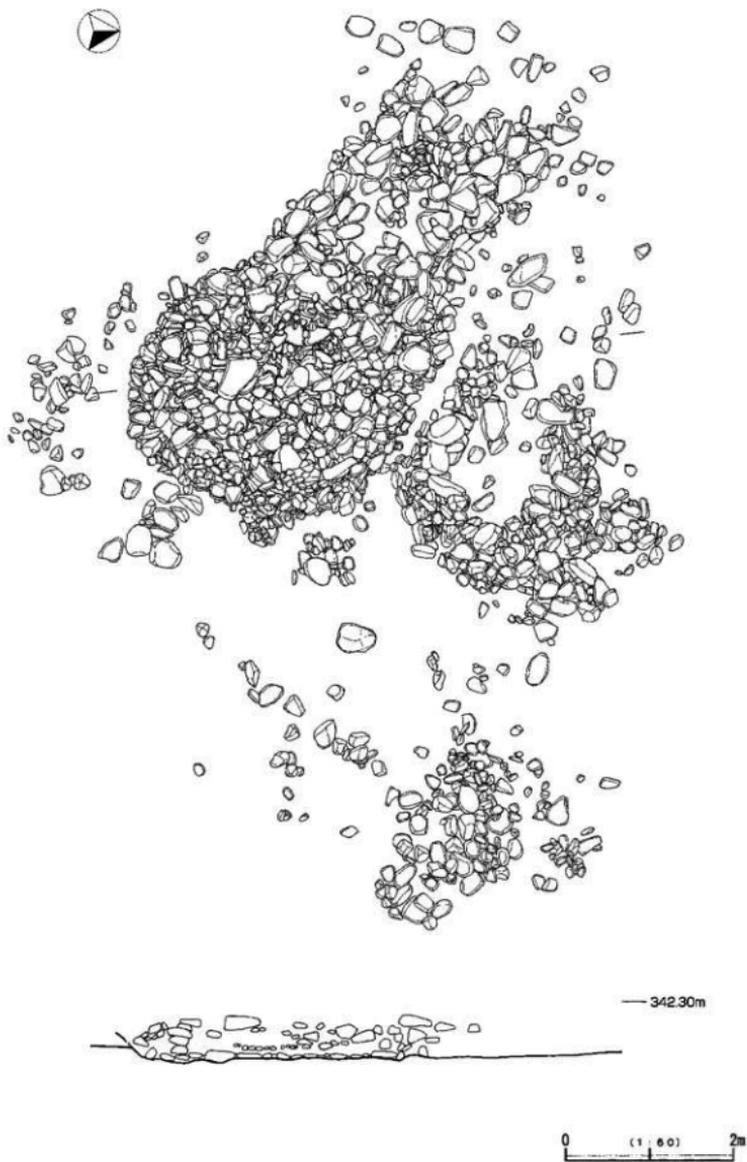
B-6グリッドに位置し、南北85cm、東西75cmのやや扁平な円形を呈し、確認面から底面までの深さは25cmを測る。底面から腐食した板状の木片が出土し、底面に円形の窪みが確認されたことから、桶(早桶か)が設置されていたと考えられる。寛永通寶1点、磁器が出土し、これらから江戸時代末頃の墓塚と思われる。

SK3 (第92図、PL21)

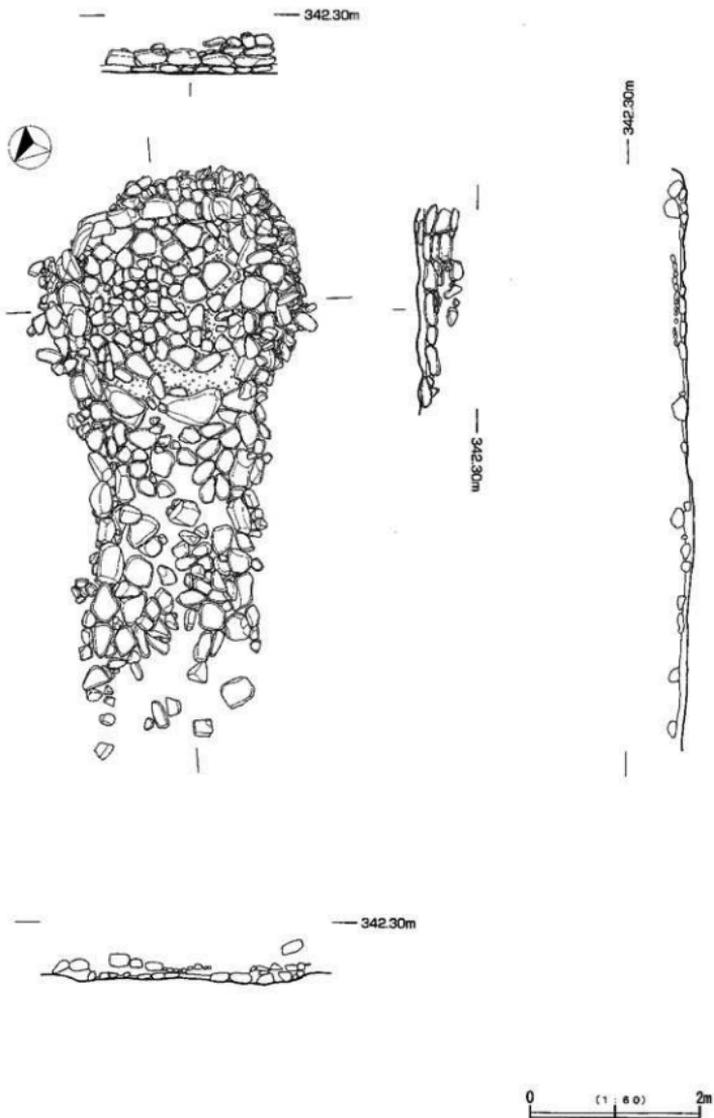
B-3・4グリッドに位置し、SE1とともに確認した。新旧関係は確認できなかったが、SE1に伴う礫との関連から、SE1に伴うものか、古いものと思われる。1.9m程の円形を呈し、深さは15cm程である。

SE1 (第92図、PL21)

B-3・4グリッドに位置する。確認時には礫が集中しており、SX1と同じ遺構と考えていた。ところが、礫を取上げるにつれ礫の集中範囲が限定され、円形に礫が配置され、大型の概ね長方形の礫が方形に並ぶことに気がついた。確認面から深さが60cmと深くはないが、湧水レベルよりも掘り込んでいるため、完掘後は水が10cm以上溜まるのを確認した。よって、田垂川の護岸工事をしていない頃には、もっと湧水レベルは高かったと推測されることから、溜め井戸と考えたい。掘り型は径70cm程の円形であるが、石積みは確認面で約90cmのはほぼ方形で、下部では約50cmと下位に行くにしたがい狭くなっている。注目すべきは石組みの方法である。井戸の骨格は一辺30cm前後で、厚さ15cm前後の立方体状の自然石を立てた状態で2段に掘え付けて、概ね方形の桁としている。その後、その隙間や上面に石を小口積みや平積みにして、上面では平面形が円形状を呈するように構築している。ただし、ある段階で井戸内部や上面に礫が置かれ、口が塞がれたと思われる。鐘方氏によれば、この方形石組型井戸の古例として、平安時代中頃の高槻市嶋上町衛跡を紹介しており、



第93圖 SX1(?)



第94図 SX1(2)

中世に盛行するという。

当初、SX1と関連する遺構で奈良・平安時代の所産かと考えていたが、最上層の石の間から、中世の上器が僅かに出土していることから、中世まで下る可能性も否定できない。尚、西側の調査区外にも線が続いていることから、関連する遺構が展開していると思われる。(野崎)

2. 遺物

本調査区の出土遺物は、縄文時代～近世にかけての所産である。土師器を主体とした遺物群は、出土状況から弥生時代、古墳時代中期、古墳時代後期～9世紀、10世紀～11世紀を面期として、断続的な変遷をみることができる。以下、時代順に各遺構出土遺物をまとめておく。

縄文時代前期 SD3から2点出土しており、305は深鉢の胴部、306は底部である。接合はしないが、同一個体と推察される。外面にLRの単節縄文、内面にはナデ調整が施され、底面には網状痕が確認でき、前期後半の譜襷式期と思われる。

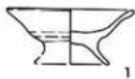
弥生時代(弥生2期:中期初頭、5期:後期) SD3から出土している。SI4・6・7からの出土もみられたが、いずれもSD3堆積中に構築されていることから、元々はSD3覆土中に混在していたものと考えている。307・308は弥生2期に比定した。307は波状口縁を呈し、口縁部外面にLRの単節縄文が施されている。308は、先端が鋭く尖ったヘラ状工具による刻み目口縁で、胴部に条痕文がみられる。309～324・326は、口縁部から胴部上半に櫛描波状文・簾状文が施されるもので、弥生5期に比定した。309～312はハケ状工具による刻み目口縁、313～317は単純口縁である。325は胴部小片で、時期は明確ではないが、S字状結節羽状縄文(LR)が施されている。尚、胎土に繊維を含むものはなかった。

古墳時代前期 SD3及びSD9から出土している。141は高坏、179・181は台付甕である。141はSD3から出土したもので、脚部に穿孔がみられる。また坏部と脚部の接合部は、脚部を坏部に差し込む形になるものと推察される。よって、同遺構から出土した高坏の中でも、先行するものとして本段階に位置付けている。台付甕は、口縁形状がS字ではなく、179は折返し口縁、181は口縁端部が内側に小さく屈曲している。SD9からは、土師器3点が出土している。272は甕口縁部であり、内面にナデ及び外面にヘラナデ調整されている。273は大型の壺底部であり、外面にナデ調整、内面は被熱の痕がみられる。274は壺底部で、焼成前に穿孔していることから、SD9が方形周溝墓の一部であった可能性を推察する要因となっている。

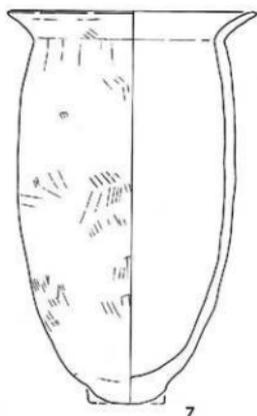
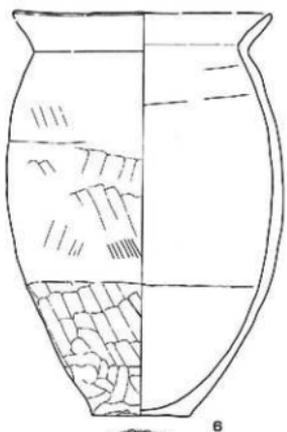
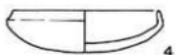
古墳時代中期

SD3(古墳Ⅳ～Ⅵ期:5世紀第2四半世紀～第4四半世紀頃) 本段階の坏は、77～89とした。77・78は胎土がやや粗く、内外面をハケメ調整した坏であり、古墳Ⅳ期に比定した。79・80は口縁部が小さく外反する坏である。81～83は半球形を呈す丸底坏である。84・86・87は、半球形でやや扁平になった平底坏である。また82・83・86には灯明痕や被熱による黒変がみられ、86は外面に櫛柄状の線刻がみられる。時期的には古墳Ⅴ期に比定した。高坏は、132～138・140・142～151がある。132・133は坏部分が二重口縁状になる高坏で、坏部がやや大きく、稜が2つみられる。136は脚部がやや棒状を呈し、坏部がやや小さい。138は器高(脚部)がやや低く、脚端部が反り返っている。

SI1

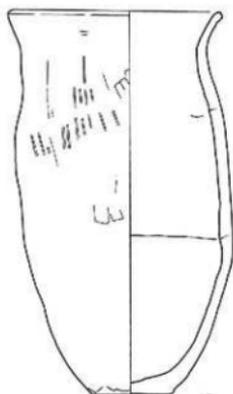


SI2

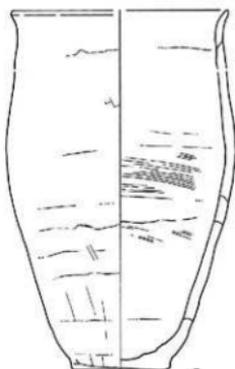


0 10cm
[1-4]

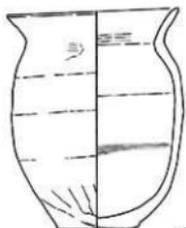
第95図 遺物(1) SI1・2①



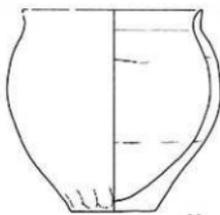
8



9



10



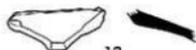
11



0 (1:4) 10cm



12

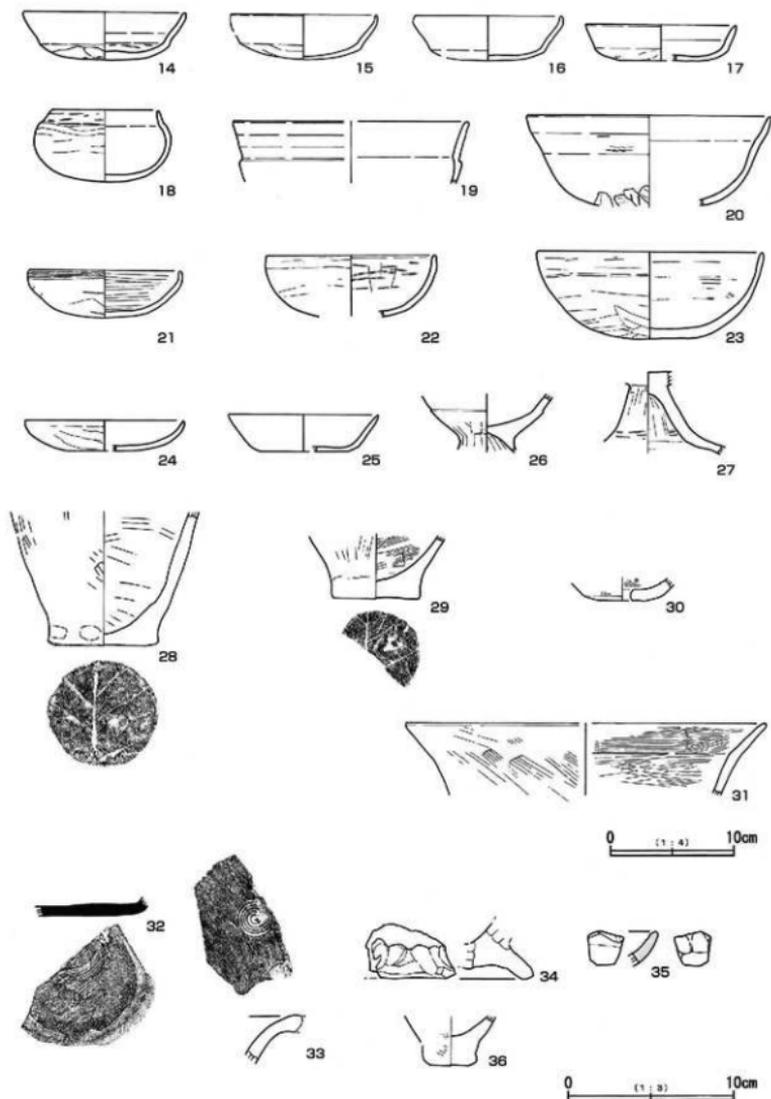


13

(12, 13) 0 (1:3) 10cm

第96図 遺物(2) S12②

SI4



第97図 遺物(3) SI4

132は坏部のみであったが、やや大型で外面をミガキ調整されている。時期的には古墳Ⅵ期相当とした。134・135は断片であるが、稜のない緩やかに内湾する坏部が出土している。尚、編年では脚部に穿孔がない段階であり、142に未貫通の穿孔を圍った痕跡がみられたのみであった。他、147・150の小型品や、140のように粘土貼り付けを施したものが出土している。壺は、153～171までとしたが、底部断片も多くあり、遺物の時期については明確ではない。157・160は単純口縁壺、153～156は小型丸底壺である。単純口縁壺には、157のように口縁部の内外面にミガキ調整する器厚が薄いものと、160のように内外をナデ調整し、やや肥厚するものがみられる。甕では、台付甕と思われる179～181が出土している。179は折返し口縁であり、時期的には古墳時代前期まで遡る可能性も窺える。その他、断片のため時期は明確ではないが、有段口縁壺(183)、赤彩土器片(184・185)が出土している。

S17 (古墳Ⅵ期：5世紀第3四半世紀～第4四半世紀) 坏は、丸底で有段のものが出土した。50は横俵坏で器高が高く、口縁が直立している。51・52は器高が低く、扁平で口縁がほぼ直立している。53～55はいずれも破片であるが、高坏と思われる。53は脚部であり、小型で稜がみられ、端部が外反している。54・55は脚部で、外面をヘラ削り調整している。さらに55は焼成後、器台状に穿孔したと思われる痕跡が確認できた。甕は、長胴甕と球胴甕が出土している。57はやや胴狭りで粗いハケメがみられ、時期的にやや先行する可能性があると考えられる。56は小型甕で、胴部の内外をヘラ削り、口縁部をナデ調整している。59は小型で口径が大きく、扁平で内面をハケメ調整した広口の壺である。他に破片であるが、脚を有する手づくね土器(61)、外面に暗文がみられる須恵器片(62)、内面に漆が付着した赤彩土器片(63・64)等が出土している。

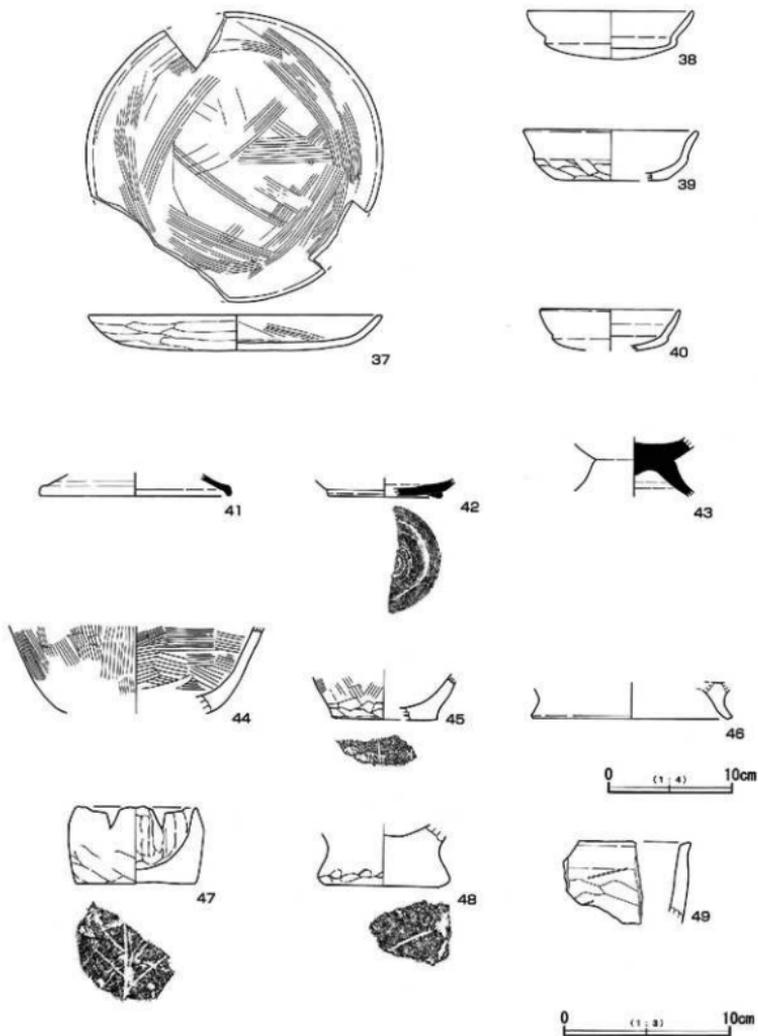
S12 (古墳Ⅵ期：5世紀末～6世紀初頭) 2～5は坏でいずれも丸底を呈している。2・4は扁平で、体部がくの字状に屈曲している。5は体部が内側に屈曲した後、口縁部が外反してS字状を呈している。3は体部の低い位置に段があり、口縁部はやや内湾している。甕は長胴甕と小型甕があり、6・7・10などの頸部内面の稜が明確なものと、8・9などの頸部屈曲が緩やかで口縁部が短いものがみられる。11は小型甕で球胴形を呈している。尚、甕類は、内面がナデ調整されているものが多くみられた。その他、12・13は須恵器甕の口縁部と胴部(肩部分)の小片が出土した。

古墳時代後期(古墳Ⅶ期～古墳Ⅷ期)

S14 (古墳Ⅶ期：6世紀第4四半世紀) 坏は丸底が主体であり、14～17は、外面底部にヘラ削りの痕跡をみることができる。18は丸底で体部が内湾し、ヘラ削り・ミガキ調整されている。19・20はやや大型の坏で、体部外面に段や稜がある。21～23は半球形の坏であり、内外面にヘラ削り及びミガキ調整がみられる。26・27は高坏で、脚部はヘラ削りされており、坏部に段がみられる。甕は断片であるが、28・29のように底部に木葉痕がみられるものや、31のように大きく開く口縁部などがある。他、24の丸底で扁平な坏、25の盤状坏等、次段階の遺物も若干混在した。また、小片であるが30の甕、32の須恵器坏、34の脚を有する手づくね土器、35の陶器片、36のミニチュア土器等が出土している。

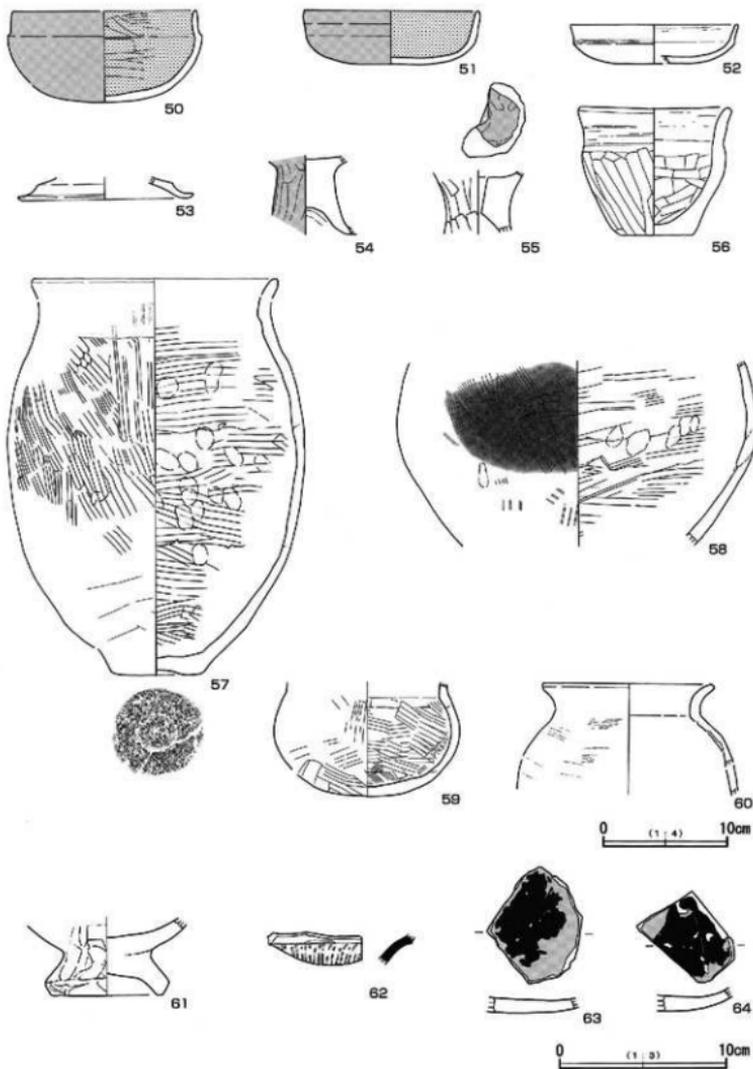
S18 (古墳Ⅷ期：7世紀末頃～8世紀初頭) 坏では、65～67が出土した。65は半球形の坏で、口縁端部が小さく外反する。66は手づくね技法で成形され、内外面はヘラナデ調整されている。67は

S15



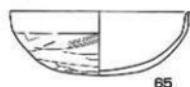
第98図 遺物(4) S15

S17



第99図 遺物(5) S17

S18



65



66



67



68



69



70



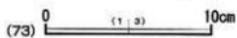
71



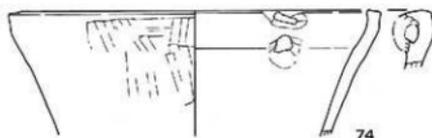
72



73



SD1



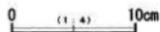
74



75



76



第100図 遺物(6) S18、SD1

甕と同じ胎土で体部がやや厚く、口縁部がわずかに外反している。甕では70・71の底部断片があり、底面に木葉痕はなく、外面はヘラ削り・ナデ調整されている。68は小甕型で、外面は黒変している。その他、69は球胴甕と思われ、内面はナデ調整されており、底部に木葉痕がみられる。72は瓶片、73は坏で口縁部の屈曲は弱い、内面に稜がみられる。

SD3 (古墳Ⅹ・X期：6世紀代) 90～94は坏である。90は体部がくの字状に屈曲し、口縁部がやや内湾している。91・93は有段の坏で、91は外面をミガキとヘラ削り調整され、92は内外をナデ調整されている。94はやや小型の半球形の坏で、ヘラ削り調整がされている。139は高坏である。坏部は外面に段がみられ、内面は黒色処理、外面は赤彩されている。187は甕で、口縁部が短く、頸部内面に明確な稜がない器形である。他、破片であるが把手付甕(186)が出土している。

7世紀末～9世紀(古墳Ⅹ期～奈・平Ⅴ期)

SI5 (古墳Ⅹ期～奈・平Ⅰ期：7世紀末頃～8世紀初頭) 37は盤で、口径23cm、器高2.9cmを測る。器厚は体部から口縁まではほぼ同じであり、内面ハケメ調整、外面にヘラ削りがみられる。38～39は土師器坏である。いずれも丸底で、前段階の特徴が退化・簡略化されたものといえる。甕は44～46・48があり、破片である44・45は長胴甕、46は台付甕の台部と思われる。その他、須恵器(41～43)、手づくね土器(47)、埴の口縁で線刻がみられるもの(49)が出土している。

SD3 (奈・平Ⅰ・Ⅱ期：7世紀末～8世紀前半、及びⅣ・Ⅴ期：9世紀代) 奈・平Ⅰ・Ⅱ期段階では、95～100の土師器坏がある。95～97は盤状坏で、95は底部が弧状、96・97は平底を呈す。100はやや小型で体部が内湾している。内外面はヘラナデ調整されており、古墳時代後期からの系譜が窺える。奈・平Ⅳ・Ⅴ期段階では、101・102の土師器蓋、103～115・116・120・131の土師器坏、182の土師器甕等がある。坏は甲斐型で、内面の暗文と体部下半にヘラ削り調整がみられる。105～108は削り出し高台の坏で、105・107・109にはみこみ部に暗文がみられる。尚、105は内面暗文が緻密で、口径約14.6cmを測る。奈・平Ⅲ期の甲斐型成立期の様相が窺え、時期的にやや先行するものと推察される。115は口縁部がやや外反しており、外面に螺旋状暗文がみられる。182は、口縁が鳩状に開く甕で、内外面はハケメ調整されており、口縁部内面に稜がみられる。

SX1 (古墳Ⅹ期～奈・平Ⅱ期：7世紀末頃～8世紀前半) 283～290・294～296は土師器坏、297は須恵器坏である。284～290は盤状坏で奈・平Ⅰ・Ⅱ期に比定しており、底面がやや弧状を呈すものと、平底のものがみられる。291はつまみを有する土師器蓋であり、外面はミガキ調整されている。292・293は須恵器蓋で、縁端部の屈曲が弱く、外へ開く形になっている。294～296は甲斐型坏であり、奈・平Ⅳ期に比定している。他、断片であるが、土師器では甕(298)や盤(304)、須恵器では瓶(299・300)や壺(301)が出土している。尚、283は古墳時代後期段階の土師器坏であるが、本遺構の主體的な時期ではなく、混在したものと考えられる。

SK1 (奈・平Ⅴ期：9世紀後半) 275・276は土師器坏である。275は内面黒色処理されたもので、内面には暗文がみられ、底部及び外面体部下半は回転ヘラ削りされている。

その他 遺構年代が明確ではないものの、SD5から奈・平Ⅳ期に比定する土師器坏片(270)、SD6から奈・平Ⅳ期に比定する土師器坏片(271)が出土している。

SD3



77



78



79



80



81



82



83



84



85



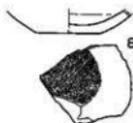
86



87



88



89



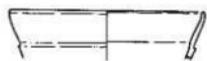
90



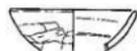
91



92



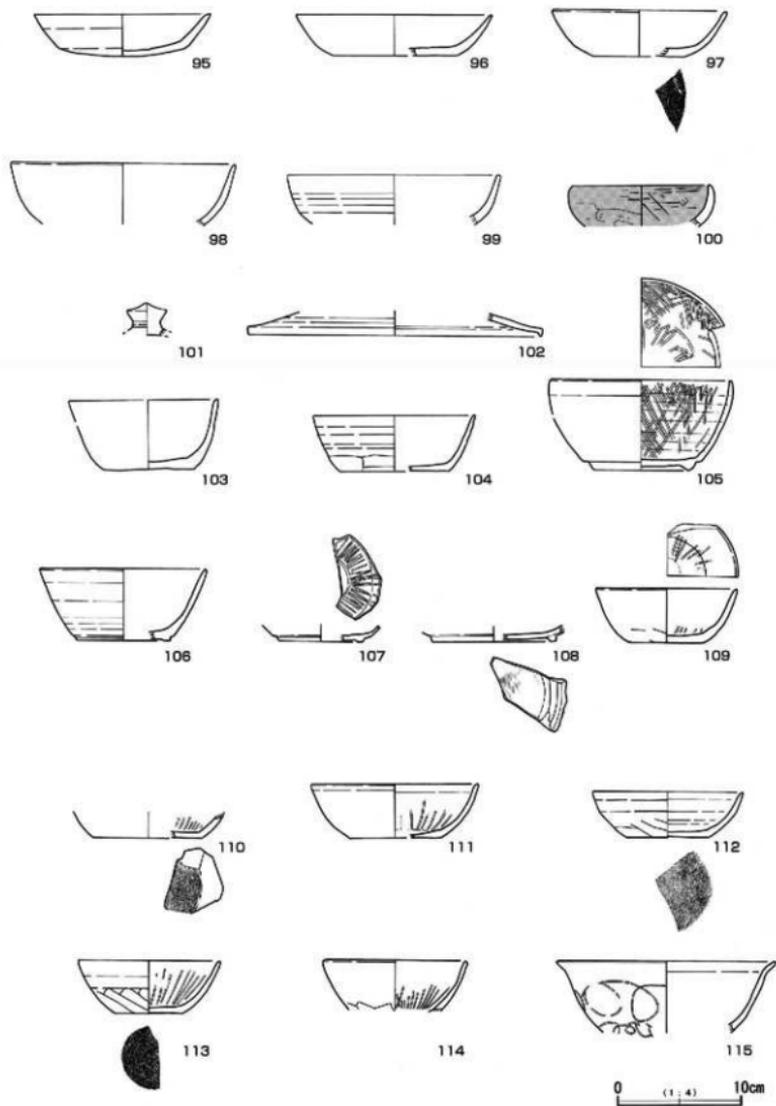
93



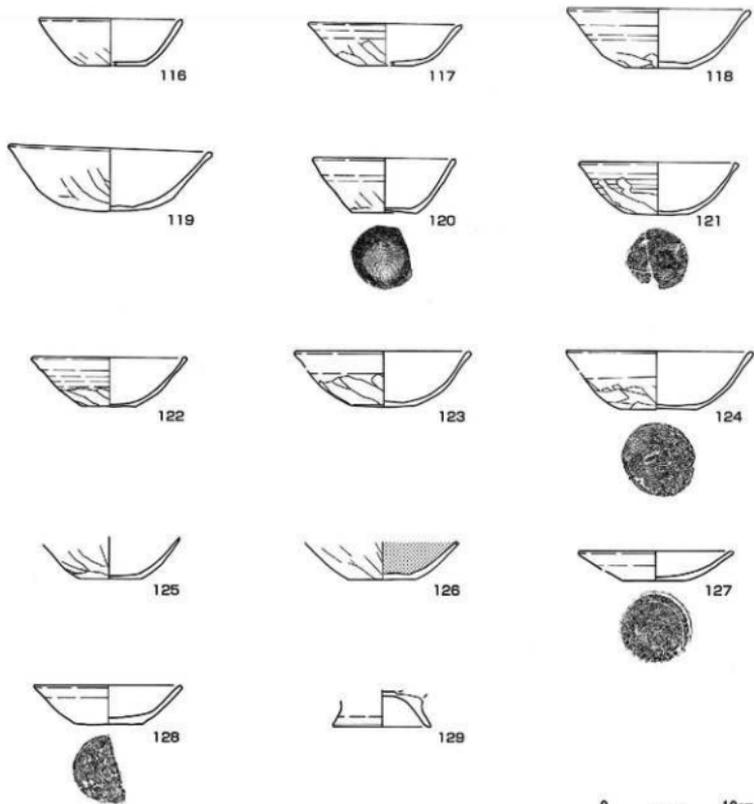
94



第101圖 遺物(7) SD3①



第102図 遺物(B) SD3②

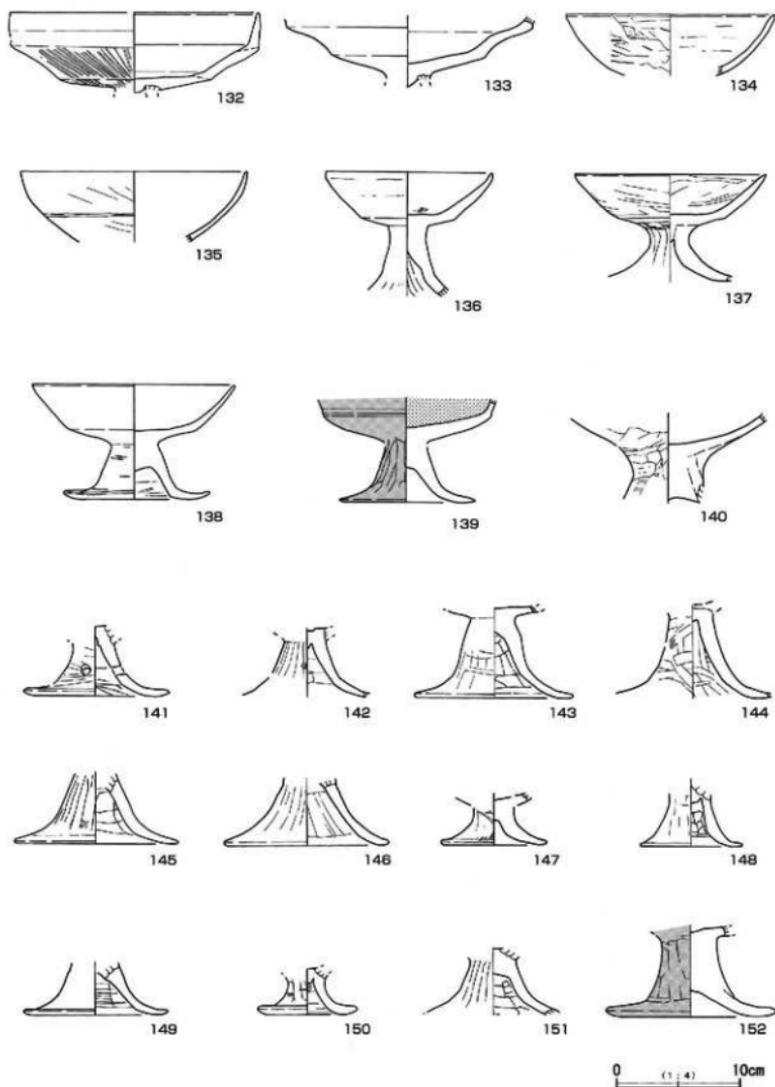


0 (1:4) 10cm

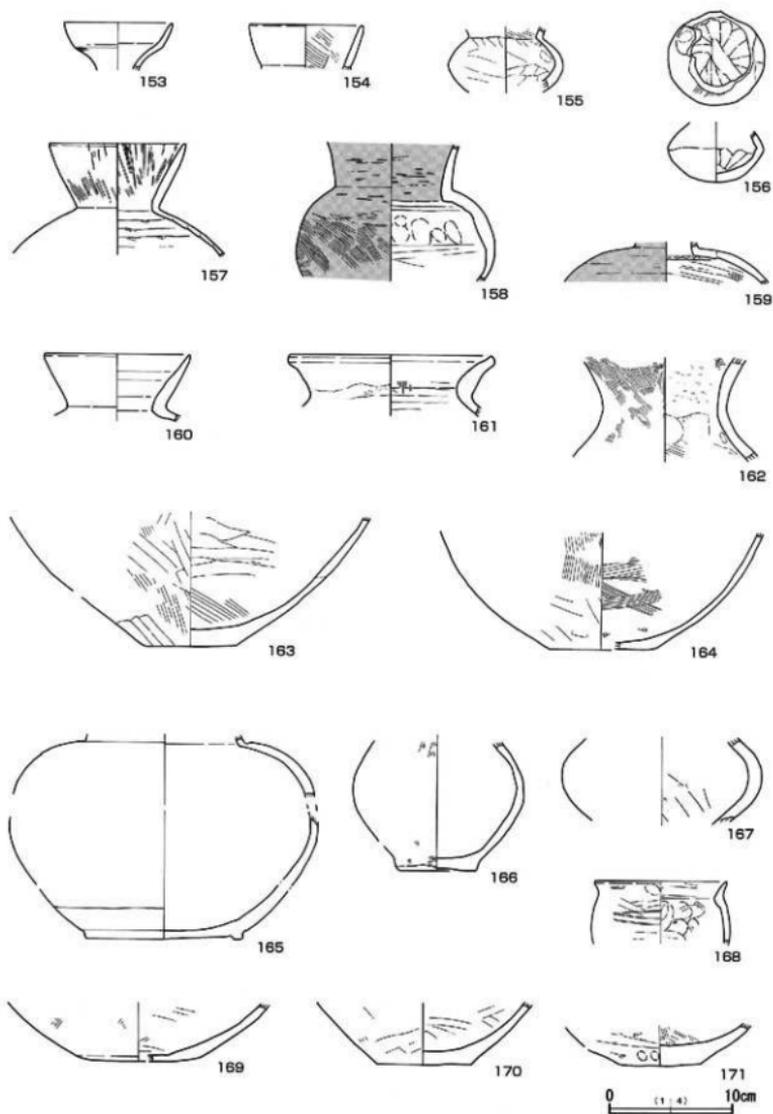


(130, 131) 0 (1:3) 10cm

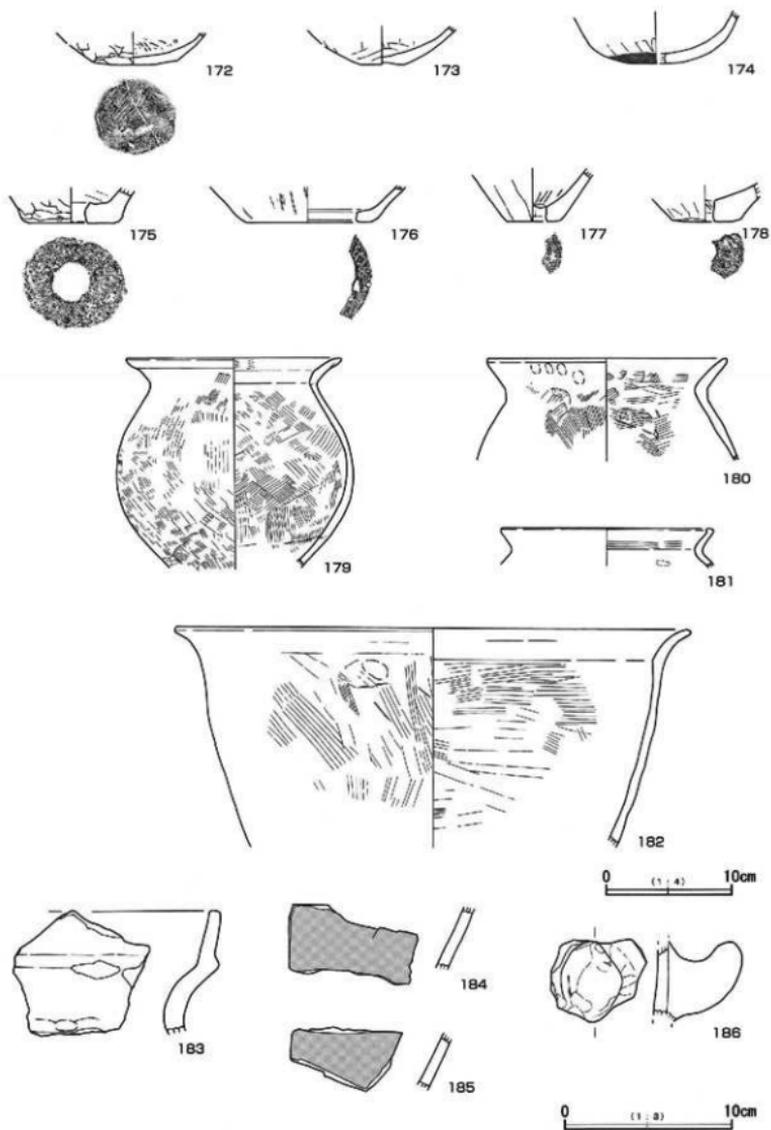
第103図 遺物(9) SD3③



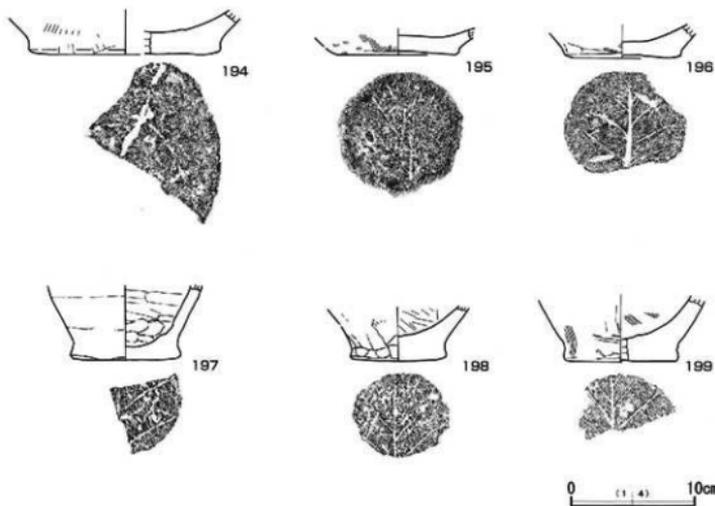
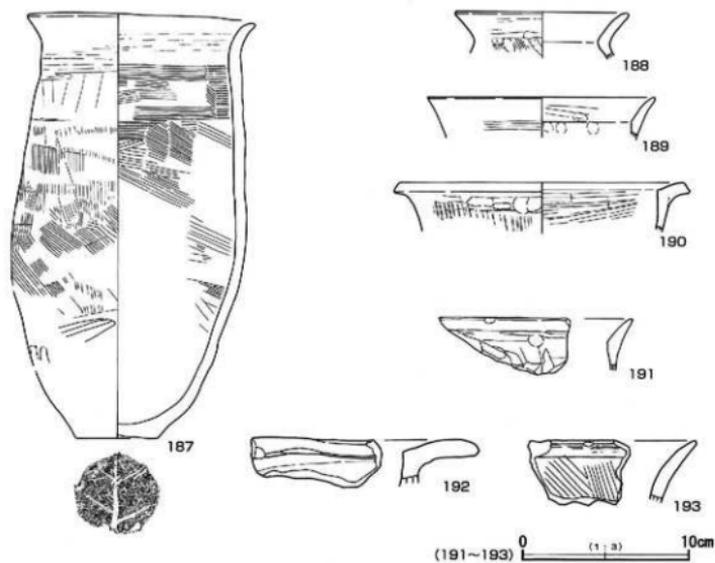
第104圖 遺物(10) SD3④



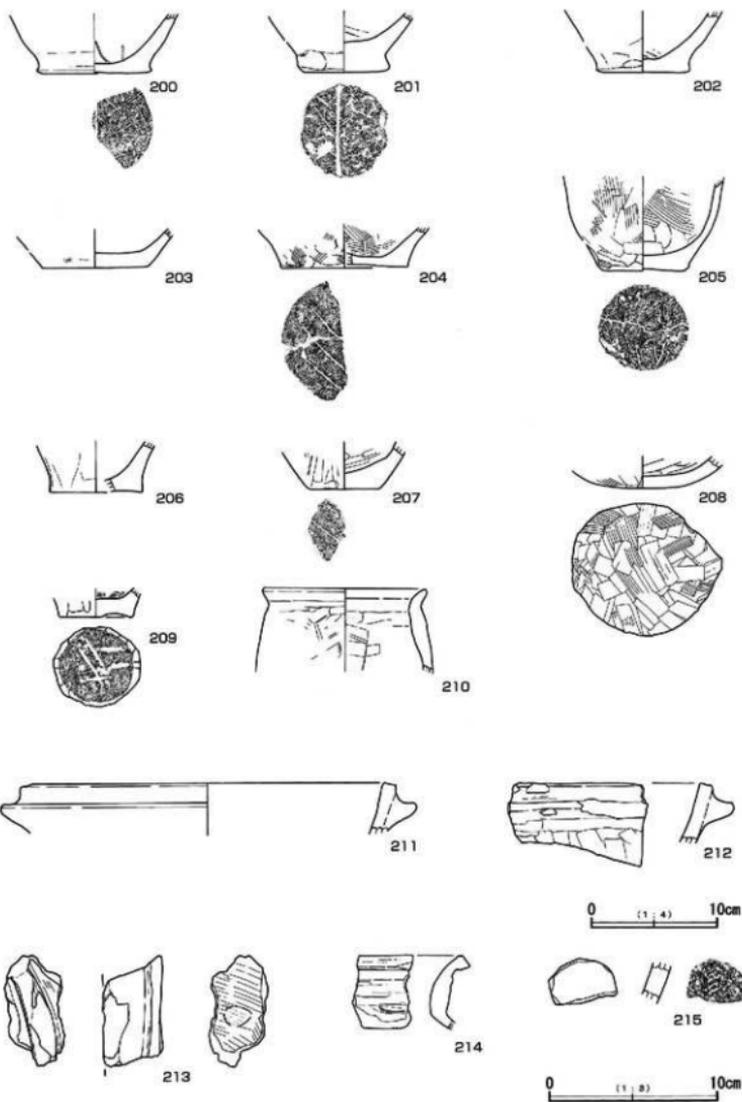
第106圖 遺物(1) SD3◎



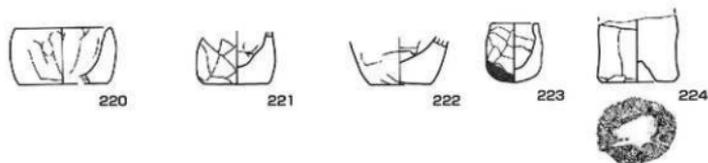
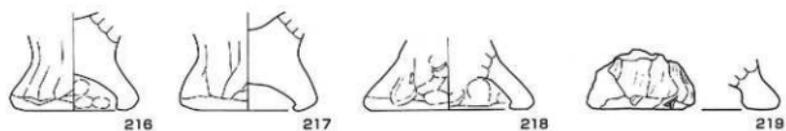
第106図 遺物(12) SD3⑥



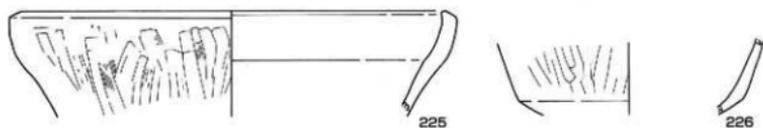
第107図 遺物(19) SD3⑦



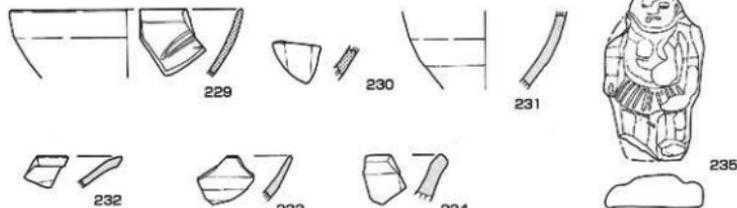
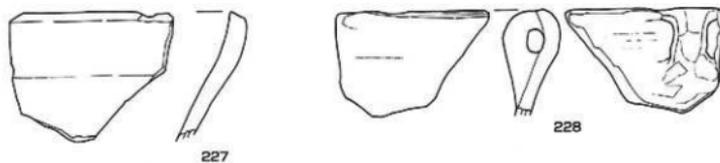
第108図 遺物(4) SD3⑥



0 (1:3) 10cm



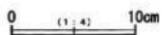
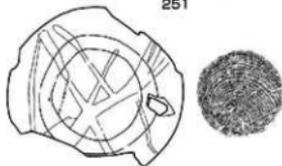
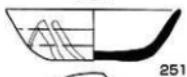
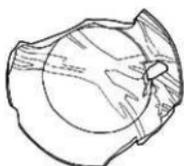
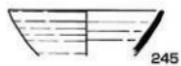
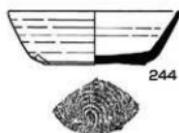
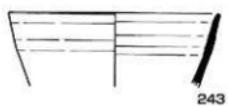
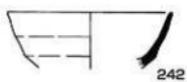
0 (1:4) 10cm



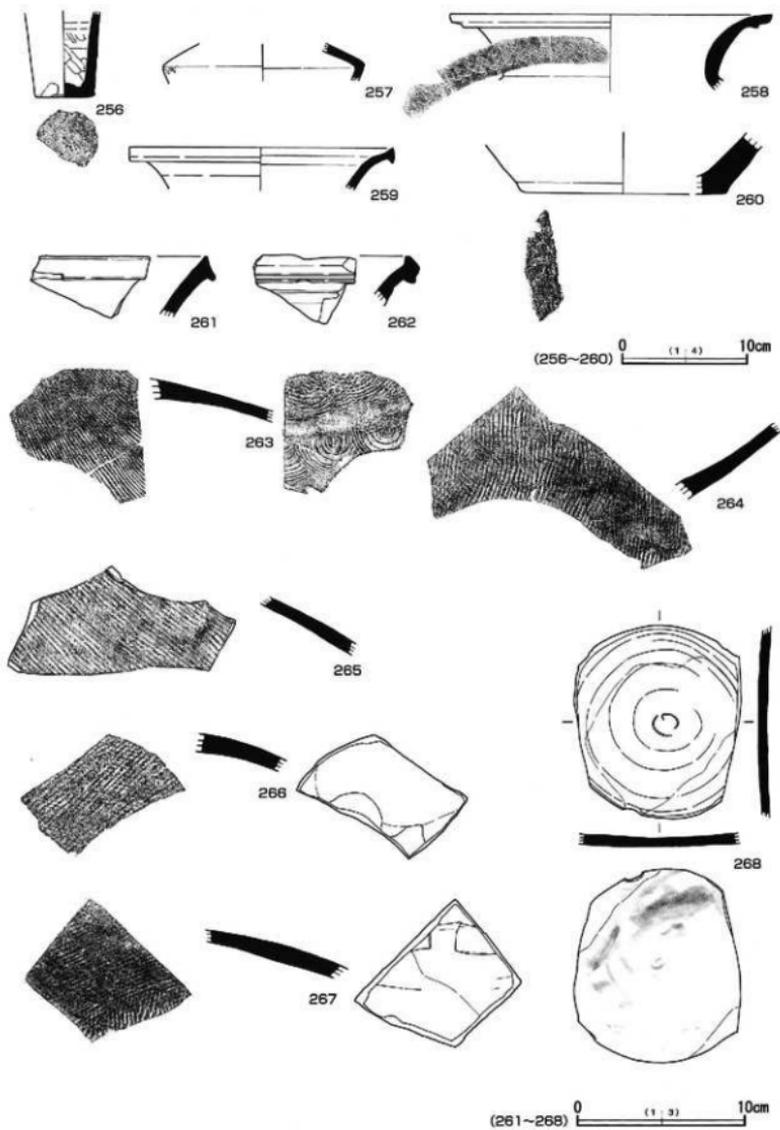
0 (1:3) 10cm

0 (1:1) 3cm

第109圖 遺物(4) SD3⑨

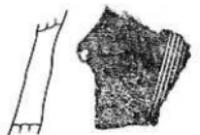


第110図 遺物(4) SD3⑩

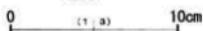


第111圖 遺物(切) SD3①

SD4



269



SD5



270

SD6

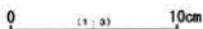


271

SD9



272



273



274



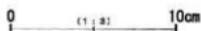
SK1



275



276



SK2



277



278



279



遺構外



280



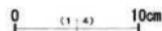
(攪乱)



281

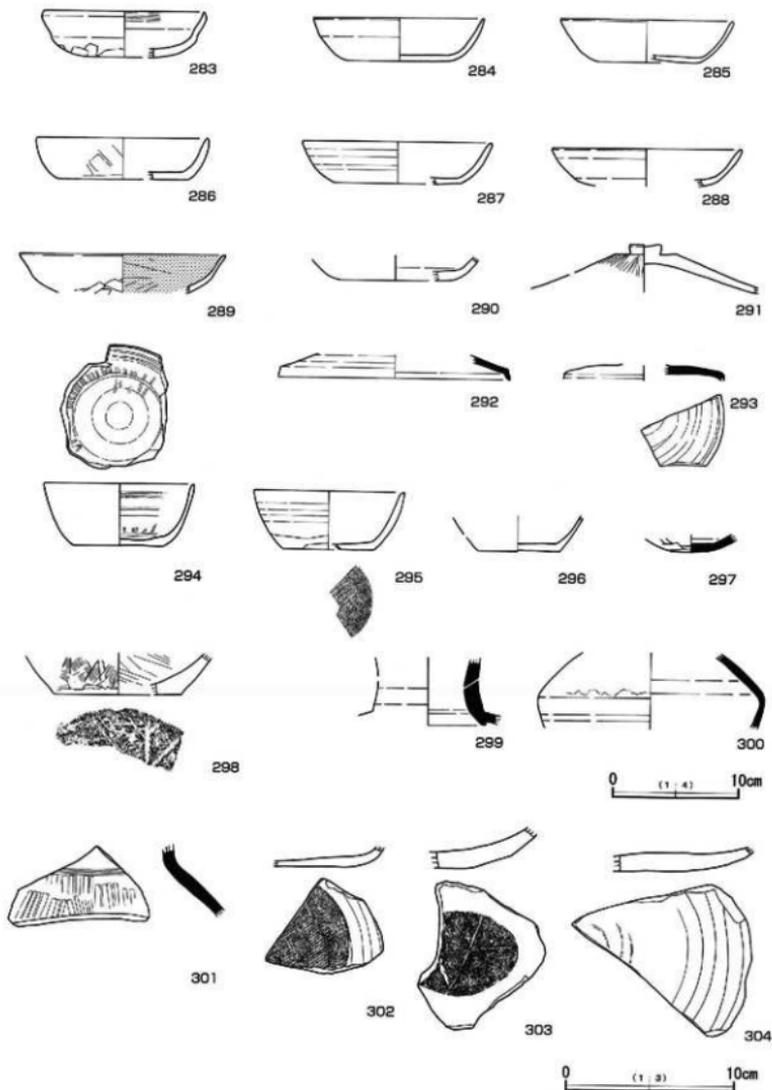


282

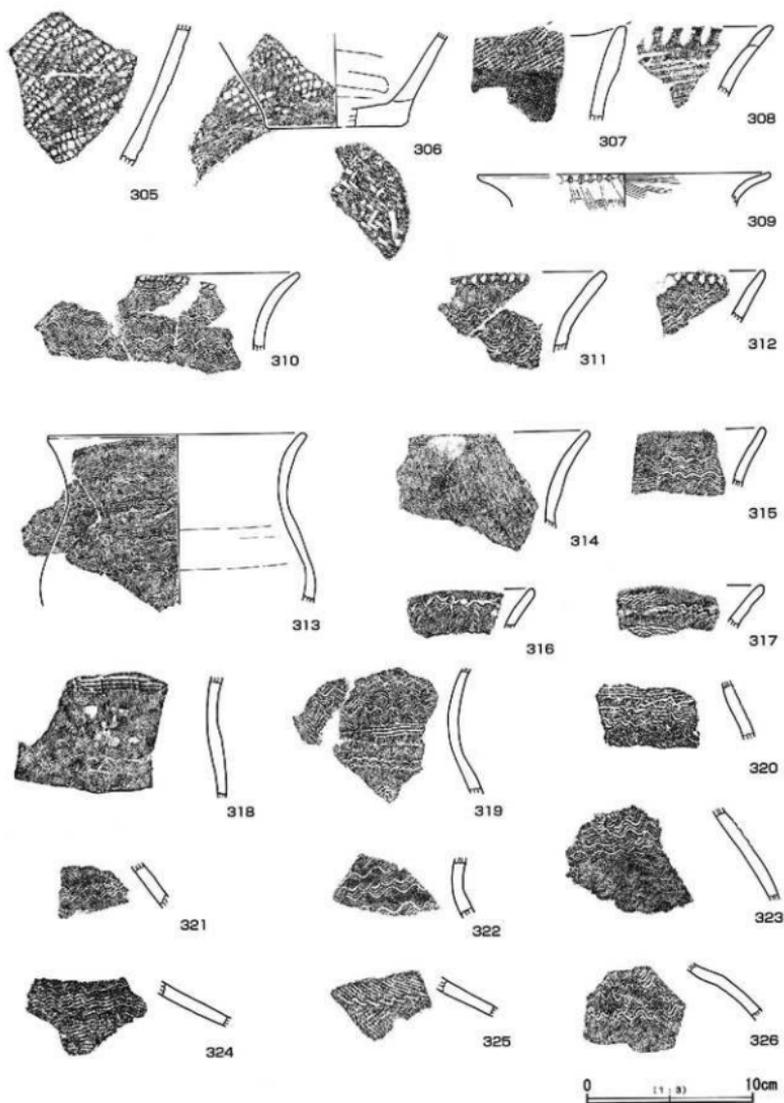


第112図 遺物(㊦) SD4・5・6・9、SK1・2、遺構外

SX1



第113圖 遺物(9) SX1



第114図 遺物(陶) 縄文・弥生土器

10世紀～11世紀

SD3 (奈・平Ⅵ～Ⅷ期：10世紀～11世紀前半) 117～119・121～126は土師器坏で、奈・平Ⅵ期に比定した。口縁部は玉縁化し、底部から体部過半に斜位のヘラ削り調整がみられる。190は同時期に比定する土師器壺であり、口縁が肥厚して角張り、面を成している。127・128の体部ヘラ削りが消滅した坏や、129の脚高台坏は、奈・平Ⅶ期に比定し、本調査区における甲斐型の終末段階とした。奈・平Ⅶ期に比定するものでは、189・191の渦状の口縁を呈す甕や、193の口縁内側の稜がなく、内外面にハケメ調整がみられるものなどが出土している。

S11 (奈・平Ⅷ期：11世紀後半) 脚高台坏(1)が出土した。口縁部はやや玉縁化しているが、胎上は鈍い橙色で砂粒を多く含む。

中世(12～15世紀頃) いずれも断片で少量であるが、SD1・3・4から内耳埴(74・228)、埴(76・225～227)、播鉢(269)、羽釜(75・211・212)、青磁碗(229)・青磁壺(230)、天目茶碗(231)、陶器(232)などが出土している。内耳埴・埴外面には、縦方向のヘラナデ調整が顕著にみられ、底部は確認できなかったが、胎土観察や編年から丸底状の器形を呈すものと推察される。尚、埴(76)の口縁部の一部に刻み目がみられた。269は播鉢の体部片であり、内面に5条の播口がみられる。羽釜は羽が短く、口縁部に近い位置に付けられており、体部外面に縦方向のヘラナデ調整がみられる。青磁は小片であるが碗(229)と壺(230)が出土した。碗には内面に陰刻があり、12世紀後半または15世紀頃、壺は13世紀中～後葉頃の所産と推察される。天目茶碗・陶器(232)も小片のため明確ではないが、ともに瀬戸美濃15世紀頃の所産と推察される。

近世・近代

いずれも破片であるが、SD3から瀬戸産の陶器(233・234)、泥面子(235)、SK2から染付(277・278)、寛永通寶(279)が出土している。泥面子は人形で、裸に腰巻をつけた姿をしている。これらの時期については、およそ19世紀代の所産と推察される。

以下、須恵器及び特徴的な遺物についてまとめておく。

須恵器

坏 SI4、SD3から計14点(32・42・240～251・297)が出土している。240は蓋受けがあり、底部はヘラ削り調整されて丸底を呈している。241は口縁部が若干受口状を呈している。32・244・251は平底で回転糸切痕がみられる。また244・245・250・251は、内外面に火撃がみられる。42は扁平な三角付け高台で、底部は回転ヘラ削りされている。

蓋 SI5、SD3、SX1から計7点(41・236～239・292・293)が出土している。236・239は古墳時代後期の所産と推察される。縁端部は肥厚し、鋭角に屈曲している。41・237は奈良期の所産と推察される。宝珠が扁平で縁端部は先細りとなり、屈曲が弱く、外側に開く形になっている。

甕 SI2・5・7、SD3、SX1から計13点(12・13・62・258～261・263～267・301)が出土している。258は、頸部から胸部の間に櫛描波状文がみられる。263～267までは胸部片であり、外面にタタキ目がみられ、263は内面に当て具痕(青海波文)がみられる。

甕・瓶 甕はSD3・SX1から計3点(252・256・262)が出土している。252・256は底部に回転糸切痕がみられる。尚、瓶と推察されるが、断片のため区別が困難なものとして、257・299・300

が出土している。

壘 SD3から1点(268)出土している。底面を風字硯状に加工されたもので、内外面に擦痕が確認できる。また、墨痕が確認でき、転用硯として利用されたことが窺える。

線刻土器

SI5、SD3、SX1から計7点(49・86・89・110・130・282・303)が出土している。文字は確認できなかった。49は土師器埴の口縁部で、2条の線刻がみられる。86は半球形の埴で、外面に櫛指状の線刻がみられる。89は土師器埴で、焼成前に鋭利な工具で底部に線刻したものであり、4条のラインで「」と刻まれている。110は土師器埴で、底部に2条の線刻がみられる。130は土師器埴で、底部に3条の線が明確にみられる。303は土師器埴で、底部に「」が刻まれている。

手づくね土器

SI4・5・7、SD3、攪乱から計13点(34・47・61・216~224・281)が出土している。34・61・216~219は脚がつくものであり、古墳時代の所産と思われる。47・220は外面にヘラ削りの痕がみられるが、内面は指ナア調整されている。223は、底部が黒変している。224は棒状で、外面にヘラ削りがみられたが、器形については不明である。

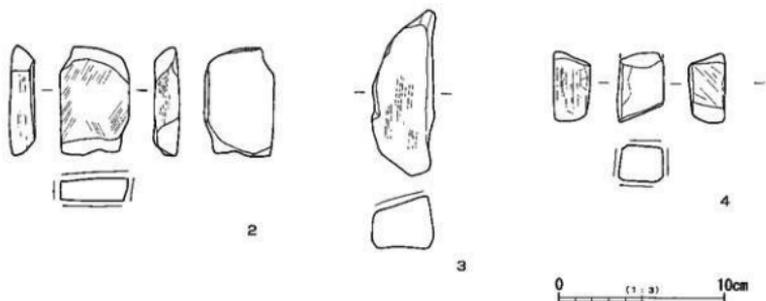
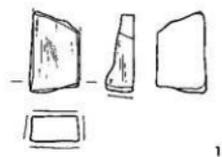
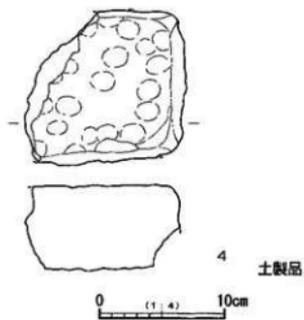
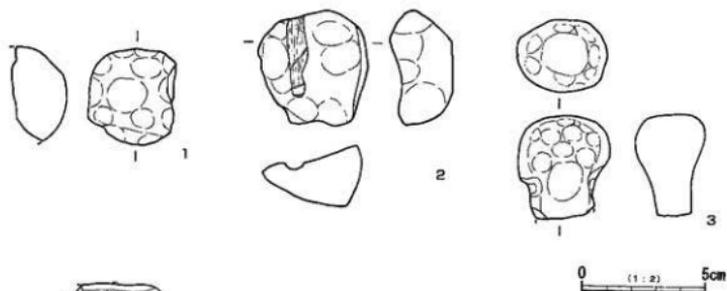
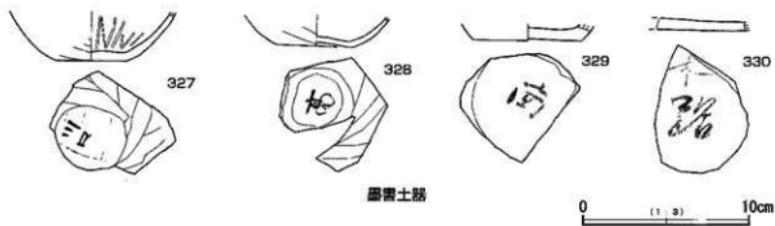
墨書土器 「川口」「高」「南」「□路(本カ)」の4点の墨書土器が出土している。「南」はSX1の覆土から、他の3点はSX1の北側で出土した。いずれも判読できる文字がみられたが、「□路」には別筆の「本」らしき文字が確認でき、他にも文字らしき痕跡が認められる。(望月)

土製品 4点が出土している。1は破片であるためよくわからないが、何らかの製品であると思われる。2はいわゆる試し焼きのような焼成粘土塊である。3は土偶状であるが、磨耗しているためはっきりしない。4は一宮町内で稀に出土する日干しレンガ状の粘土柱である。

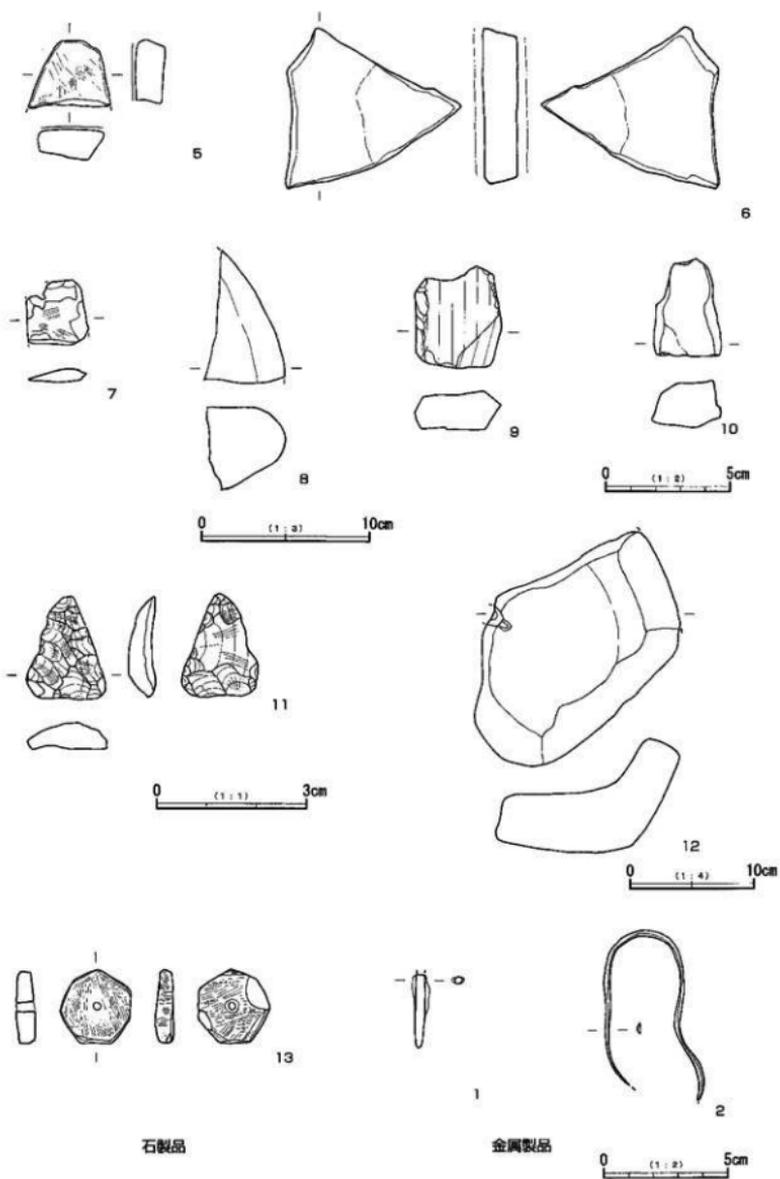
石製品 砥石は6点出土しているが、石材が硬くかつ刷面や擦痕などがはっきりしないものは、除外してある。1~5は携帯用のものであり、6は一見すると縄文時代の敷石住居に使用されているものと類似している。7は磨製石斧、8は磨石、11は石鎌で、縄文土器も若干出土している。縄文時代の石器が出土しても問題がないと思われるが、時期は不明である。12は暗渠に転用された石臼であろう。9・10は石英製であるため、火打石と想定している。10は明確な打点が見られないが、あまり報告例が多くないので、敢えて掲載しておく。

一般的に火打石は、石英、メノウ、玉髄、サヌカイトなどの石材が知られている。石英は火打石としては欠けやすいため最適ではないが、入手しやすい石材であるため、しばしば用いられるようである。『甲斐國志』に日影村(甲州市一旧大和村)や小尾村(北社市須玉町増富)で火打石が産出すると記載されているが、明治期の記録には登場しないようである。ここで火打石とする石材が何を指しているかは定かではないが、『山梨県史』では火打石のみならず、火打鉄についても言及されていないのは残念である。

13は石製模造品でSI7の覆土から出土している。七角形を呈する単孔の有孔円板である。県内では石製模造品は古墳から出土するものの、集落からの出土例は極端に少ない。『山梨県史』では、甲府市伊勢町遺跡の白玉と笛吹市御坂町二之宮遺跡の有孔円盤、勾玉、白玉等が紹介されているが、この他に笛吹市内では一宮町大原遺跡、八代町五里原遺跡(子持勾玉)、石和町大蔵経寺前遺跡な



第115図 遺物(1) 墨書土器、土製品、石製品①



石製品

金属製品

第116図 遺物の石製品②、金属製品

どが知られる程度であり多くない。県内では工房が確認されていないため、現状では搬入品と考えざるを得ず、集落での希少性を考慮すると、なんらかの祭祀行為と関連性を想定するのが妥当であろう。

金属製品 鉄製品は1点のみで、棒状鉄製品がSI4のカマド内から出土している。青銅製品も1点だけで、鑄子であろうか。SX1の敷石の下から出土しており、地鉄具として利用された可能性が高い。この他、2点の鉄滓が出土している。いずれも鍛冶滓と思われる。(野崎)

表11 土器観察表

図	名	百七	種類	器種	部位	検出層	数量	口径	外 面	内 面	底・胴内面	胎色	土質	備 考
95	1	SI1	土師器	野高曲輪	口~胴	70	有	10.2 — (4.5)	ナゲ	ナゲ	—	密、赤 土 褐色		
96	2	SI2	土師器	埴	口~底	59		11.6 — 3.3	ナゲ	ナゲ	ヘク削り	密、白 土 明赤褐色		焼熱、黒皮
95	3	SI2	土師器	埴	口~底	60		12.0 — 4.0	ナゲ、ヘク削り	ナゲ	ヘク削り	密、赤 土 褐色		劣化腐しい
95	4	SI2	土師器	埴	口~底	59		11.9 — 4.0	ナゲ	ナゲ	ヘク削り	密、白 土 明赤褐色		焼熱、黒皮
95	5	SI2	土師器	埴	口~底	95	有	(12.0) — (4.5)	ヘク削り、ナゲ、ナゲ	ナゲ	ヘク削り	密、白 土 赤色		
95	6	SI2	土師器	貝割壺	口~底	90		20.8 8.0 32.8	ヘク削り、ナゲ	ナゲ	木製炭二重	密、赤、白、金、黒 土 褐色		
95	7	SI2	土師器	貝割壺	口~底	90		20.1 — (31.9)	ハケメ	ナゲ	木製炭	密、白 土 褐色		焼熱 割壺らしい
96	8	SI2	土師器	貝割壺	口~底	96		17.3 7.0 31.5	ハケメ	ナゲ	木製炭	密、赤、白、金、黒 土 褐色		焼熱 割壺らしい
96	9	SI2	土師器	貝割壺	口~底	50	有	(17.5) (8.0) (29.3)	ヘク削り、ナゲ	ナゲ	木製炭	密、赤、白、金、黒 土 褐色		
96	10	SI2	土師器	小壺	口~底	96		14.0 6.6 18.0	ヘク削り、ナゲ	ナゲ、煮沸痕	木製炭	密、白 土 褐色		焼熱
96	11	SI2	土師器	壺	口~底	90		14.4 6.7 16.5	ナゲ、ヘク削り	ナゲ	木製炭	密、白 土 褐色		
96	12	SI2	須恵器	壺	口	小片		— — —	ロクロナゲ	ロクロナゲ	—	密、白 土 明赤褐色		自然毒
96	13	SI2	須恵器	壺	胴	小片		— — —	ロクロナゲ	ロクロナゲ、指 痕あり	—	密、白 土 明赤褐色		自然毒
97	14	SI4	土師器	埴	口~底	60	4	(13.0) — (13.5)	ヘク削り、ナゲ	ナゲ、ミガキ	—	密、白、金、黒 土 褐色		褐色
97	15	SI4	土師器	埴	口~底	60	一筋	(12.0) — (3.9)	ナゲ、漆仕上げ	ナゲ	ヘク削り	密、赤、白 土 明赤褐色		
97	16	SI4	土師器	埴	口~底	60	一筋	(12.0) — (3.7)	ナゲ	ナゲ	ナゲ	密、赤、白 土 明赤褐色		劣化
97	17	SI4	土師器	埴	口~底	30		(12.0) — (2.9)	ヘク削り、ナゲ	ナゲ	ヘク削り	密、赤、白 土 褐色		黒皮
97	18	SI4	土師器	埴	口~底	90		8.4 — 3.8	ヘク削り、ナゲ、 ミガキ、漆仕上げ	ナゲ	ヘク削り	密、赤、白、金 土 褐色		焼熱
97	19	SI4	土師器	埴	口~底	小片	有	(14.0) — —	ヘク削り、ロク ロナゲ	ナゲ、ミガキ	—	密、白、金 土 褐色		

氏名	No.	出土位置	種別	器種	部位	残存率	長	幅	口径	底径	底面	外底	内底	底・胴内面	胎色	上成	備考
	97	20	S14	土師器	坏	口~体	小片	有	—	(19.8)	—	ヘウ割り、ナデ	ナデ	—	赤・赤・白・金 良 鈍褐色	—	黒変
	97	31	S14	土師器	坏	口~底	40	有	—	(12.9)	—	ヘウ割り、ナデ、 ミガキ、塗仕上	ミガキ、ナデ	—	赤・白・黒 良 鈍褐色	—	一部黒変
	97	22	S14	土師器	坏	口~体	20	有	—	(18.2)	—	ヘウ割り、ナデ	ナデ、ミガキ	—	赤・赤・白・金 良 鈍褐色	—	
	97	23	S14	土師器	坏	口~底	80	有	—	18.2	—	ナデ、ミガキ、 ヘウ割り	ナデ、ミガキ	赤切取、ヘウ 割り	赤・赤・白・金・黒 良 鈍褐色	—	鏡状、黒変
	97	24	S14	土師器	坏	口~底	20	有	—	(12.6)	—	ヘウ割り、ナデ	ナデ	ヘウ割り	赤・赤・白・黒 良 鈍褐色	—	部分的に黒変
	97	25	S14	土師器	壺状坏	口~底	小片	有	—	(12.0)	—	ナデ	ナデ	ヘウ割り	赤・赤・白・金 良 明赤褐色	—	鏡状
	97	26	S14	土師器	高坏	体~底	20	有	—	—	—	ヘウ割り、ナデ	ナデ	ナデ	赤・赤・白・黒 良 鈍褐色	—	
	97	27	S14	土師器	素坏	胴	30	有	—	—	—	ヘウ割り、ナデ、 ミガキ	—	ヘウ割り、ナ デ	赤・赤・金 良 鈍褐色	—	胴部に僅あり
	97	28	S14	土師器	壺	胴~底	20	有	—	(15.8)	—	ハケメ、撥灰	ナデ	木燻灰	やや紅、白・金 良 明赤褐色	—	鏡状
	97	29	S14	土師器	壺	胴~底	10	有	—	(16.8)	—	ハケメ	ハケメ	木燻灰	赤・白・金 良 明赤褐色	—	黒変
	97	30	S14	土師器	瓶	底	小片	有	—	—	—	ナデ	ハケメ	—	赤・赤・白・黒 良 明赤褐色	—	黒変
	97	31	S14	土師器	壺	口~胴	小片	有	—	(29.3)	—	ハケメ、ナデ	ハケメ	—	赤・赤・白・金・黒 良 赤色	—	
	97	32	S14	須恵器	坏	底	小片	有	—	—	—	ナデ、挿灰	—	回転糸切取、 ヘウ割り、挿 灰	赤・赤・白・金 良 灰白色	—	軽変
	97	33	S14	土師器	壺	口	小片	有	—	—	—	口縁に同心円状 の溝	—	—	赤・赤・白・金 良 鈍褐色	—	
	97	34	S14	土師器	手づくみ土 器	脚	小片	有	—	—	—	撥灰	—	指ナデ	やや紅、赤・白・黒 良 赤色	—	
	97	35	S14	陶器	小皿	口	小片	有	—	—	—	塗灰	施灰	—	青 良 鈍褐色	—	
	97	36	S14	土師器	ミニチュア	体~底	小片	有	—	(2.3)	—	ナデ	ナデ	—	赤・白 良 鈍褐色	—	
	98	27	S15	土師器	壺	口~底	90	有	—	23.0	—	ヘウ割り	ハケメ、ナデ	ヘウ割り	赤・赤・白・金・小石 良 赤色	—	一部黒変
	98	36	S15	土師器	坏	口~底	70	有	—	(13.2)	—	ナデ	ナデ	ヘウ割り	赤・白・金 良 明褐色	—	鏡状
	98	38	S15	土師器	坏	口~底	20	有	—	(14.0)	—	ヘウ割り、ナデ	ナデ	ヘウ割り	赤・赤・白・金 良 鈍褐色	—	黒色
	98	40	S15	土師器	坏	口~体	小片	有	—	(11.2)	—	ナデ、ヘウ割り	ナデ	—	赤・白・金 良 鈍褐色	—	
	98	41	S15	須恵器	壺	口~底	小片	有	—	(15.0)	—	ロクロナデ	ロクロナデ	—	赤・白 良 鈍褐色	—	
	98	42	S15	須恵器	坏	底	小片	有	—	(9.1)	—	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切取	赤・白 良 鈍褐色	—	付行高台
	98	43	S15	須恵器	高坏	体~脚	小片	有	—	—	—	ナデ	ナデ	ナデ	赤・赤・白 良 鈍褐色	—	
	98	44	S15	土師器	壺	胴	小片	有	—	—	—	ハケメ、ナデ	ハケメ	—	赤・赤・白・金・小石 良 赤褐色	—	

区	%	出土位置	種別	器種	部位	材質	形状	口縁 底径 高さ	外径	内径	底・脚内径	胎色	土質	備考
98	45	S15	土師器	甕	底	小片	有	— (11.0)	ハケメ、ヘウ割 り、ナデ	ハケメ、ナデ	本底裏	密、赤・白・金・小石 良 明赤褐色		
98	46	S16	土師器	白付甕小	脚	小片	有	— (16.0)	ヘウ割り、ナデ	ナデ	—	密、赤・白 良 褐色		
98	47	S15	土師器	手づくね土 器	口~底	40	有	— (7.0)	ナデ、ヘウ割り	撥ナデ	本底裏	密、赤・白・金 良 鈍褐色	内面黒変	
98	48	S15	土師器	甕	底	小片	有	— (8.0)	ナデ	ナデ	本底裏	やや粗、赤・白・金・黒 良 褐色		
98	49	S15	土師器	鉢	口	小片	有	— (14.7)	ヘウ割り、ナデ 撥ナデ	ナデ	—	密、赤・白・金・黒 良 鈍褐色	中世か	
99	50	S17	土師器	坏	口~底	40	有	— (13.8)	ヘウナデ、赤影	ナデ、内面黒色	ヘウ割り	密、赤・白・金 良 灰白色		
99	51	S17	土師器	坏	口~底	65	有	— (4.3)	ナデ、赤影	ナデ、内面黒色	—	密、赤・白・金 良 灰白色	黒変	
99	52	S17	土師器	坏	口~底	35	有	— (3.2)	ナデ、ヘウ割り 赤影か	ナデ	ヘウ割り	密、赤・白・金 良 灰白色	黒変	
99	53	S17	土師器	家鉢小	口	小片	有	— (14.0)	ナデ	ナデ	—	密、赤・金 良 灰白色		
99	54	S17	土師器	高坏	脚	小片	有	— (14.0)	ヘウ割り、赤影	ナデ、内面黒色	ナデ	やや粗、赤・白・金 良 褐色	脚部粘土層定か	
99	55	S17	土師器	高坏小	脚	小片	有	— (14.0)	ヘウ割り	赤影	—	やや粗、赤・白・金・黒 良 鈍褐色	厚凡か	
99	56	S17	土師器	小型甕	口~底	55	有	— 12.1 5.8 10.4	ヘウ割り	ヘウ割り、コゲ	ヘウ割り	紅、赤・白 良 褐色	破熟	
99	57	S17	土師器	長胴甕	口~底	50	有	— (13.5) (31.9) (7.2)	ハケメ、ヘウ割 り	ハケメ、撥ナ デ	—	粗、赤・白・金・黒 良 赤色		
99	58	S17	土師器	浅胴甕	脚	小片	有	— (14.0)	ハケメ	ハケメ、撥ナ デ	—	密、赤・白・金・黒 良 灰白色	外周一部黒変	
99	59	S17	土師器	甕	胴~底	60	有	— (12.0) (9.0)	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ コゲ	ハケメ、ナデ	密、赤・白 良 赤色	破熟	
99	60	S17	土師器	甕	口~底	20	有	— (9.0)	ハケメ	—	—	赤、赤・白・金 小片 淡灰色	破熟、劣化著しい	
99	61	S17	土師器	手づくね土 器	体~脚	40	有	— (6.8) (4.7)	撥ナデ	ナデ	撥ナデ	やや粗、白・黒 良 鈍褐色	一部赤色	
99	62	S17	須恵器	甕	胴	小片	有	— (13.5) (31.9) (7.2)	ナデ、 ミガキ(破欠)	ナデ	—	密、白 良 鈍灰色		
99	63	S17	土師器	坏	底	小片	有	— (13.5) (31.9) (7.2)	ヘウ割り、赤影	ナデ、赤影、 付着	ヘウ割り、赤 影	密、赤・白 良 鈍褐色	口と同部赤か	
99	64	S17	土師器	坏	底	小片	有	— (13.5) (31.9) (7.2)	ヘウ割り、赤影	ナデ、赤影、 付着	ヘウ割り、赤 影	密、赤・白 良 鈍褐色	口と同部赤か	
100	65	S18	土師器	手づくねの坏	口~底	70	有	— 14.4 5.2	ヘウ割り、ナデ	ナデ	ヘウ割り	密、赤・白・金 良 淡黄褐色	外周黒変	
100	66	S18	土師器	坏	口~底	100	有	— 9.4 3.9 5.1	ヘウ割り	ヘウナデ、内面 黒色	ヘウ割り	密、赤・白・金 良 鈍褐色	赤み大 外周黒変	
100	67	S18	土師器	坏	口~底	30	有	— (8.3) (5.2) (3.9)	ナデ	ナデ	ヘウ割りか	密、赤・白・金 良 赤色	黒変	
100	68	S18	土師器	小型甕	口~底	40	有	— (10.4) (4.2) (7.0)	ヘウ割り、ナデ	ヘウナデ、ナデ	ヘウナデ、本 底裏	密、赤・白・金・黒 良 鈍褐色	破熟、やや劣化	
100	69	S18	土師器	甕	胴~底	15	有	— 8.6	ナデ、ハケメ	ハケメ	本底裏、赤 影	やや粗、赤・白・黒 良 鈍褐色	底付赤き調帯 底裏を撥ナデ	

国・No	品上位置	種別	器種	部位	残存率	反転	口縁底径 器高	外側	内面	底・脚内面	胎 色	土 質	備 考
100 70	S18	土師器	甕	底	小片	有	(10.4)	ヘラ削り	ハケメ、ナデ	ヘラ削り	密、赤・白・黒 具 褐色色		一部黒灰
100 71	S18	土師器	甕	底	小片	有	(6.7)		ハケメ、ナデ		密、赤・白・黒 具 褐色褐色		
100 72	S18	土師器	甕	腹～底	小片	有	(5.2)	ヘラ削り	ヘラ削り		密、赤・白・金・黒 具 褐色褐色		
100 73	S18	土師器	環	11～体	小片	有	—	ナデ	ナデ		密、赤・白・金 具 明赤褐色		
100 74	SD1	土師器	内耳環	口～胴	小片	有	(20.6)	ナデ	ナデ		密、白・黒 具 淡黄褐色		被熱、コグ、15C前 半色地藍
100 75	SD1	土師器	羽蓋	口～腹	小片	有	—	ナデ	ナデ		密、赤・白 具 灰白色		被熱、コグ、15C前 半色地藍
100 76	SD1	土師器	鍋	口～胴	小片	有	—	ハケメか、口縁 部に削み	ナデ		密、白 具 灰白色		内耳小、15C前半 色地藍
101 77	SD3	土師器	杯	口～底	30	有	(13.8) (5.7) (5.4)	ハケメ、ナデ	ハケメ	ヘラ削り	密、赤・白・金・黒 具 褐色褐色		被熱、内匠割盤
101 78	SD3	土師器	杯	11～底	30	有	(17.4) (7.0) (6.0)	ナデ	ナデ	ヘラ削り	密、赤・白・金 具 明赤褐色		一部黒灰
101 79	SD3	土師器	杯	口～体	小片	有	(14.2)	ナデ	ナデ、捺線痕		やや暗、赤・白・金・黒 具 褐色色		
101 80	SD3	土師器	杯	口～体	小片	有	(13.3)	ナデ	ナデ		やや暗、赤・白・金 具 灰褐色		被熱、劣化
101 81	SD3	土師器	半球形の杯	口～底	70	有	12.8 — 4.7	ナデ、ヘラ削り	ナデ	丸蓋	密、赤・白・金 具 褐色褐色		外面・極黒灰
101 82	SD3	土師器	半球形の杯	口～底	75	有	11.9 — 5.5	ヘラ削り、ナデ	ヘラナデ	ヘラ削り、ナ デ、丸蓋	密、赤・白・金 具 赤色		穴外口一部黒灰、灯 明か・墨土赤色
101 83	SD3	土師器	半球形の杯	11～底	50	有	11.4 — 5.7	ヘラ削り	ナデ	ヘラ削り、丸 蓋	密、赤・白・金 具 褐色		外口一部黒灰
101 84	SD3	土師器	半球形の杯	口～底	50	有	14.1 5.0 6.0	ヘラ削り、ナデ	ナデ	ヘラ削り	密、赤・白・金 具 淡黄褐色		
101 85	SD3	土師器	半球形の杯	口～体	小片	有	(16.6)	ナデ	ナデ		密、赤・白・金・黒 具 淡黄褐色		
101 86	SD3	土師器	半球形の杯	口～底	50	有	14.8 5.0 7.3	ヘラ削り、線刻 ナデ	ミガキ、ハケメ	ヘラ削り	密、赤・白・金 具 褐色		外面・墨土灰 被熱5集
101 87	SD3	土師器	半球形の杯	体～底	小片	有	(5.0)	ヘラ削り、ナデ	ヘラナデ	ヘラ削り、ナ デ	密、赤・白・金 具 赤褐色		赤影か
101 88	SD3	土師器	半球形の杯	口～体	小片	有	(14.0)	ナデ	ナデ		やや暗、赤・白・金 具 褐色		やや劣化
101 89	SD3	土師器	杯	体～底	小片	有	(5.2)	ヘラ削り	ナデ	ヘラ削り、線 刻	密、赤・白 具 灰白色		被熱4集、ナ
101 90	SD3	土師器	杯	口～底	30	有	(12.4) — (5.0)	ヘラ削り、ナデ、 線仕上げ	ヘラ削り、ミガ キ、線仕上げ		密、赤・白・金 具 褐色		
101 91	SD3	土師器	杯	口～体	小片	有	(13.0)	ミガキ、ヘラ削 り、線仕上げ	ミガキ、線仕 上げ		密、赤・白・金 具 鈍褐色		
101 92	SD3	土師器	杯	口～体	小片	有	(16.1)	ヘラ削り、ナデ、 線仕上げ	ナデ、線仕上 げ		密、赤・白・金 具 鈍褐色		
101 93	SD3	土師器	土師土	口～体	小片	有	(15.6)	ナデ、ヘラ削り、 線仕上げ	ナデ、ミガキ、 線仕上げ		密、赤・白・金 具 褐色褐色		
101 94	SD3	土師器	半球形の杯	11～底	小片	有	(16.0)	ヘラ削り、ナデ	ヘラナデ		密、赤・白・金 具 鈍褐色		

号	品名	規格	形状	部位	材料	規格 公差	外 径	内 径	成・取内径	加 工 材 質	七 成 開	備 考	
102 95	SD3	土磨粉	盤状环	口→底	有	(14.0) — (2.4)	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ヘラ削り	密・赤・白・金 良 炭色		焼熱、劣化耐電	
102 96	SD3	土磨粉	盤状环	口→底	有	(15.6) (10.0) (5.3)	ナゲ	ナゲ	ヘラ削り	密・赤・白・金・黒 良 炭色		焼熱、劣化耐電	
102 97	SD3	土磨粉	盤状环	口→底	有	(14.0) (7.2) (3.7)	ロクロナゲ	ロクロナゲ	回転糸切歯、 ヘラ削り	密・赤・金 良 炭色			
102 98	SD3	土磨粉	环	口→体	小片	有	(17.6) —	ロクロナゲ	ロクロナゲ	削、赤・白・金 良 炭色		外面赤黒か	
102 99	SD3	土磨粉	环	口→体	小片	有	(11.0) —	ロクロナゲ	ロクロナゲ	—	やや粗、赤・白・金・黒 良 炭色		
102 100	SD3	土磨粉	环	口→体	小片	有	(11.0) —	ヘラ削り、ミガ キ、表面	ナゲ、ミガキ、 表面	—	密・赤・白・金・黒 良 炭色		
102 101	SD3	土磨粉	環	口→体	小片	有	—	ナゲ	ナゲ	ナゲ	密・赤・白・金 良 炭色		
102 102	SD3	土磨粉	環	口→体	小片	有	(12.6) —	ナゲ、ミガキ	ナゲ	—	密・赤・金 良 炭色		黒底か
102 103	SD3	土磨粉	环	口→底	有	(11.9) (7.2) (5.5)	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ヘラ削り	密・赤・白・金・黒 良 炭色		焼熱、劣化耐電	
102 104	SD3	土磨粉	环	口→底	有	(15.0) 8.5 (4.5)	ロクロナゲ、ヘ ラ削り	ロクロナゲ	ヘラ削り	密・赤・白 良 炭色		焼熱、1層一部黒底	
102 105	SD3	土磨粉	环	口→底	有	(14.6) (7.6) (7.3)	ロクロナゲ、ミ ガキ	ロクロナゲ、磨 文	削り出し高台	密・赤・白・金・黒 良 炭色		一部に黒底あり	
102 106	SD3	土磨粉	环	口→底	有	(18.4) (7.6) (5.8)	ロクロナゲ、ミ ガキ	ロクロナゲ	削り出し高台 及 鈍質	密・赤・白・金・黒 良 炭色		劣化耐電	
102 107	SD3	土磨粉	环	口→体	小片	有	(6.8) —	ロクロナゲ	ロクロナゲ、磨 文	削り出し高台 良 炭色			
102 108	SD3	土磨粉	环	口→体	小片	有	(10.0) —	ロクロナゲ	ロクロナゲ	削り出し高台 良 炭色		黒底、外面赤黒か	
102 109	SD3	土磨粉	环	口→底	有	(11.4) (5.8) (4.4)	ヘラ削り、ロク ロナゲ	ロクロナゲ、磨 文	ヘラ削り	密・赤・白・金 良 炭色		焼熱、黒底	
102 110	SD3	土磨粉	环	口→体	小片	有	(8.4) —	ロクロナゲ、ヘ ラ削り	ロクロナゲ、磨 文	ヘラ削り、鏡 質 炭色	密・赤・白・金 良 炭色		
102 111	SD3	土磨粉	环	口→底	有	(14.0) (7.4) (4.4)	ロクロナゲ	ロクロナゲ、磨 文	ヘラ削り	密・赤・白・金 良 炭色		外面赤黒か	
102 112	SD3	土磨粉	环	口→底	有	(12.0) (6.8) (3.5)	ロクロナゲ、ヘ ラ削り	ロクロナゲ	回転糸切歯、 ヘラ削り	密・赤・白・金 良 炭色		外面一部黒底	
102 113	SD3	土磨粉	环	口→底	有	11.4 5.4 4.3	ロクロナゲ、ヘ ラ削り	ロクロナゲ、磨 文	回転糸切歯、 ヘラ削り	密・赤・白・金 良 炭色		やや劣化	
102 114	SD3	土磨粉	环	口→体	小片	有	(11.6) —	ロクロナゲ、ヘ ラ削り	ロクロナゲ、磨 文	—	密・赤・白・金・黒 良 炭色		
102 115	SD3	土磨粉	环	口→体	小片	有	(19.4) —	ロクロナゲ、磨 文	ロクロナゲ	—	密・赤・白・金 良 炭色		
102 116	SD3	土磨粉	环	口→底	有	(11.4) (5.4) (3.8)	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ヘラ削り	密・赤・白・金 良 炭色		焼熱、劣化耐電	
102 117	SD3	土磨粉	环	口→底	有	(12.0) (4.4) (3.4)	ロクロナゲ、ヘ ラ削り	ロクロナゲ	ヘラ削り	密・赤・白・金 良 炭色			
102 118	SD3	土磨粉	环	口→底	有	(14.1) (5.6) (3.7)	ロクロナゲ、ヘ ラ削り	ロクロナゲ	ヘラ削り	密・赤・白・金 良 炭色		内面一部黒底	
102 119	SD3	土磨粉	环	口→底	有	16.3 — (5.1)	ロクロナゲ、ヘ ラ削り	ロクロナゲ	ヘラ削り	密・赤・白 良 炭色		焼熱、劣化耐電	

図	%	地上位置	建別	種類	方位	成程	反照	口徑 高低 割合	外 面	内 面	底・舞内面	助 色 上 成 面	備 考	
103	120	SD3	土庫壁	坪	口~底	35	有	(11.3) (5.0) (4.4)	ロクロナデ、ヘ ウ廻り	ロクロナデ	藍赤切燐、 黒色	赤・白・金 黒色		
103	121	SD3	土庫壁	坪	口~底	70	有	(12.6) (5.2) (4.2)	ロクロナデ、ヘ ウ廻り	ロクロナデ	藍赤切燐、 ヘウ廻り	黒・赤・白・金 黒色	劣化、割離臭い	
103	122	SD3	土庫壁	坪	口~底	35	有	(12.4) (4.1) (4.9)	ロクロナデ、ヘ ウ廻り	ロクロナデ	ヘウ廻り	黒・赤・金 黒色		
103	123	SD3	土庫壁	坪	口~底	70	有	14.9 5.2 4.5	ロクロナデ、ヘ ウ廻り	ロクロナデ	ヘウ廻り	黒・赤・白・金 黒色	内面割離、破断、や や劣化、成程臭い	
103	124	SD3	土庫壁	坪	口~底	45	有	(14.8) (6.0) (4.7)	ロクロナデ、ヘ ウ廻り	ロクロナデ	藍赤切燐、 ヘウ廻り	赤・赤・白・金 黒色	割離、割離臭い、 外壁成程臭い	
103	125	SD3	土庫壁	坪	底~底	60	有	— (4.8)	ロクロナデ、ヘ ウ廻り	ロクロナデ	ヘウ廻り	赤・赤・白・金 黒色	一部臭い	
103	126	SD3	土庫壁	坪	体~底	小片	有	— (8.2)	ロクロナデ、ヘ ウ廻り	ロクロナデ、内 面黒色	ヘウ廻り	やや黒、赤・白・金 黒色		
103	127	SD3	土庫壁	坪	口~底	40	有	(12.2) (5.4) (2.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	藍赤切燐	赤・赤・白・金 黒色	やや劣化	
103	128	SD3	土庫壁	坪	口~底	30	有	(11.8) (5.5) (3.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	藍赤切燐	やや黒、赤・白・金 黒色	やや劣化	
103	129	SD3	土庫壁	新高高台坪	脚	小片	有	— ナデ	ナデ	ナデ	—	赤・赤・白・金・黒 黒色	劣化臭い	
103	130	SD3	土庫壁	坪	底	小片	有	— ナデ	ナデ	ナデ	ヘウ廻り、ナ デ、黒色	赤・赤・白 黒赤褐色		
103	131	SD3	土庫壁	坪	口	小片	有	— ナデ	ロクロナデ	ロクロナデ、新 文、内面黒色	—	赤・赤・白・金 黒赤褐色		
104	132	SD3	土庫壁	高坪	口~底	40	一部	(19.6) —	ナデ、ミガキ	ナデ	—	赤・赤・白・金 黒赤褐色	一部臭い	
104	133	SD3	土庫壁	高坪	体	30	有	— ナデ	ナデ	ナデ	—	赤・赤・白・金 黒赤褐色	破断、臭い、やや劣 化	
104	134	SD3	土庫壁	高坪小	口~底	小片	有	(16.5) —	ヘウ廻り、ナ デ	ロクロナデ	—	赤・赤・白・金 黒赤褐色	外壁臭い	
104	135	SD3	土庫壁	高坪小	口~底	小片	有	(16.0) —	ヘウ廻り、ナ デ	ナデ	—	赤・赤・白・金 黒赤褐色		
104	136	SD3	土庫壁	高坪	口~底	40	有	(18.2) —	ナデ、ヘウ廻り	ハケメ、ナ デ	しほり目	やや黒、赤・白・金・黒 黒赤褐色	外壁赤褐色	
104	137	SD3	土庫壁	高坪	口~底	70	有	(18.2) —	ハケメ、ヘウ廻 り、ナデ	ヘウ廻り、ナ デ	—	赤・赤・白・金・黒 黒赤褐色	一部臭い、外壁赤褐 色	
104	138	SD3	土庫壁	高坪	口~底	80	有	16.2 11.6 8.4	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	ヘウ廻り、ナ デ	赤・赤・白・金 黒赤褐色	一部臭い	
104	139	SD3	土庫壁	高坪	体~底	40	一部	— (10.8)	ミガキ、ヘウ廻 り、ナデ	内面黒色、ミガ キ、赤形	ナデ、ヌ付 面、赤形	赤・赤・白・金・黒 黒赤褐色	外壁、割内面赤形	
104	140	SD3	土庫壁	高坪	底~底	30	有	— ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	黒・赤・白・金 赤色	脚内外に鉄土釘付	
104	141	SD3	土庫壁	高坪	脚	15	一部	— (11.6)	ナデ、ミガキ	ナデ	ナデ	ヘウ廻り、ナ デ	やや黒、赤・白・金 黒赤褐色	脚成腐等付
104	142	SD3	土庫壁	高坪	脚	10	有	— ナデ	ナデ	ナデ	ヘウ廻り、ナ デ	赤・赤・金 黒赤褐色	未貫通孔	
104	143	SD3	土庫壁	高坪	底~底	40	有	— (12.6)	ヘウ廻り、ナ デ	ナデ	ナデ	ヘウ廻り、ナ デ	赤・赤・白・金 黒赤褐色	
104	144	SD3	土庫壁	高坪	脚	30	有	— ナデ	ヘウ廻り、ナ デ	ナデ	ナデ	ヘウ廻り、ナ デ	赤・赤・黒 黒赤褐色	やや劣化

氏名	No.	品上位置	種別	器種	部位	残存率	原形	口徑 底径 高さ	外国	西国	産・国内	胎 色	上 成 色	備考
104	145	SD3	土師器	高杯	胴	小片	有	— (13.0)	ヘウ刷り、ナブ、 ミダキ	—	ヘウ刷り、指 ナブ	密、赤・白・金 具 褐色		
104	146	SD5	土師器	高杯	胴	35	有	— 13.1	ヘウ刷り、ナブ	—	ヘウ刷り、ナ ブ	やや粗、赤・白・金 具 褐色		
104	147	SD3	土師器	高杯	体・脚	35	有	— (8.4)	ヘウ刷り、ナブ	ナブ	ナブ	密、赤・白・金 具 褐色		
104	148	SD3	土師器	高杯	胴	45	有	— (8.2)	ヘウ刷り、ナブ	—	ヘウ刷り、ナ ブ	やや粗、赤・白・金・黒 具 褐色		やや黒変
104	149	SD3	土師器	高杯	胴	30	有	— (11.4)	ナブ	—	ヘウ刷り、ナ ブ	密、赤・白・金 具 褐色		一部黒変
104	150	SD3	土師器	高杯	胴	25	有	— (8.0)	ヘウ刷り、ナブ	ナブ	ヘウ刷り、ナ ブ、赤彩	密、赤・白・金 具 褐色		
104	151	SD3	土師器	高杯	胴	小片	有	—	ヘウ刷り、ナブ	—	ヘウ刷り、ナ ブ	密、赤・白・金 具 褐色		
104	152	SD3	土師器	高杯	体・脚	45	有	— (13.6)	ヘウ刷り、ナブ、 赤彩	ナブ	ナブ	粗、赤・白 具 褐色		
105	153	SD3	土師器	瓢か	口・腹	小片	有	— (8.6)	ナブ	ナブ	—	密、赤・白・金・黒 具 褐色		
105	154	SD3	土師器	埴・小笠形	口	小片	有	— (9.1)	ナブ	ナブ	ハケメ、ナブ	密、赤 具 褐色		
105	155	SD3	土師器	埴・小笠形	口・脚	小片	有	—	ハケメ、ナブ	ハケメ、ナブ、 指跡	—	やや粗、白 具 褐色		
105	156	SD3	土師器	埴か	胴・底	40	有	—	ナブ、指跡	指ナブ	—	密、赤・白・金 具 褐色		外面指痕で輪状突起 低伏
105	157	SD3	土師器	埴	口・脚	40	有	— (10.8)	ナブ、ミダキ	ナブ、指跡、 頸部ミダキ	—	密、赤・白・金 具 褐色		
105	158	SD3	土師器	埴	体・脚	40	有	—	ハケメ、ナブ、 ミダキ、赤彩	ハケメ、指跡、 ナブ、ミダキ、 頸部赤彩	—	密、赤・白・金・黒 具 褐色		
105	159	SD3	土師器	埴	胴	小片	有	—	ナブ、赤彩	ハケメ、ナブ	—	密、赤・白・金 具 褐色		
105	160	SD3	土師器	埴	口	10	有	— (11.8)	ロクロナブ	ロクロナブ	—	密、赤・白・金・黒 具 褐色		
105	161	SD3	土師器	埴	口	小片	有	— (15.5)	ナブ、ハケメ	ナブ、ハケメ	—	密、赤・白・金 具 褐色		
105	162	SD3	土師器	埴	胴	小片	有	—	ハケメ	ハケメ、ナブ	—	密、赤・白 具 褐色		内面縦溝、指痕著しい
105	163	SD3	土師器	埴	胴・底	10	一部	— (7.2)	ハケメ、ヘウ刷 り	ハケメ、ナブ	—	密、赤・白・金 具 褐色		
105	164	SD3	土師器	埴	胴・底	小片	有	— (8.8)	ハケメ、ヘウ刷 り	ハケメ	ヘウ刷り	やや粗、赤・白・金 具 褐色		
105	165	SD3	土師器	埴	胴・底	45	有	— (12.6)	ロクロナブ	ロクロナブ	磨り出し高台	密、赤・白・黒 具 褐色		縦溝、劣化著しい、 一部黒変 赤丸跡か
105	166	SD3	土師器	小笠形	胴・底	40	有	— 6.4	ハケメ、ナブ	ナブ	—	やや粗、赤・白・金 具 褐色		劣化、外面やや黒変
105	167	SD3	土師器	埴	胴	小片	有	—	ナブ	ナブ	—	密、赤・白 具 褐色		縦溝、やや劣化
105	168	SD3	土師器	小笠形	口・脚	小片	有	— (10.6)	ハケメ、ヘウ刷 り、指跡	ハケメ、指跡	—	密、赤・白 具 褐色		
105	169	SD3	土師器	埴	胴・底	小片	有	— (11.4)	ナブ、ヘウ刷り	ナブ	ヘウ刷り	密、赤・白・金 具 褐色		縦溝、やや黒変

図	No.	出土位置	遺物	形種	部位	残存率	反転	口縁 底径 割合	外面	内面	底・裏内面	胎 色	土 流 調	備 考
103	170	SD3	土師器	甕	胴~底	小片	有	(7.6)	ハケメ	ヘラナガ		やや粗、赤・白・金 色 褐色		外周一部黒化、やや劣化
105	171	SD3	土師器	甕・壺	胴~底	小片	有	(6.6)	ヘラ削り、指紋	ハケメ	ヘラ削り、指 ナア	赤、赤・白・金 赤土		外周やや黒化
106	172	SD3	土師器	甕・鉢	胴~底	小片	有	(6.5)	ヘラ削り	ナア	ヘラ削り	赤、赤・白・金 良 褐色		外周黒化
106	173	SD3	土師器	甕・鉢	胴~底	小片	有	(5.4)	ヘラ削り	ナア	ヘラ削り	赤、赤・白・金 良 褐色		
106	174	SD3	土師器	甕・鉢	胴~底	小片	有	—	ナア、ヘラ削り	ナア	ヘラ削り	やや粗、白 良 褐色		外周黒化黒化
106	175	SD3	土師器	甕	底	小片	有	7.6	ナア、ヘラ削り	ナア	地成目穿孔	赤、赤・白・金 良 褐色		粗熱、やや劣化
106	176	SD3	土師器	甕	底	小片	有	(10.0)	ヘラ削り、ナア	ナア	ヘラ削り	赤、赤・白・金 良 褐色		地成目穿孔、穿孔ヘ ラ削り
106	177	SD3	土師器	甕	胴~底	小片	有	(4.3)	ヘラ削り、ナア	ヘラナア	ヘラ削り	赤、赤・白 良 赤色		粗熱、劣化、黒化
106	178	SD3	土師器	甕	胴~底	小片	有	(6.2)	ヘラ削り、ナア	ナア	—	赤、赤・白 良 明赤褐色		
106	179	SD3	土師器	甕	口~胴	40	有	(17.4)	ハケメ、ナア	ハケメ、ナア	—	赤、赤・白・金 良 浅黄褐色		粗熱、外周黒化 新近し口縁 当り黒化
106	180	SD3	土師器	甕	口~胴	小片	有	(19.0)	ヘラ削り、指紋	ハケメ、ナア	—	赤、赤・白・金 良 赤色		粗熱、黒化
106	181	SD3	土師器	甕	口~底	小片	有	(17.0)	ナア	ハケメ、ナア、 指紋		やや粗、赤・白・金 良 褐色		粗熱、劣化黒しい 金付葉か
106	182	SD3	土師器	甕	口~底	10	有	(41.0)	ハケメ、指紋、 ナア	ハケメ、指紋、 ナア	—	やや粗、赤・白 良 赤色		粗熱、劣化黒しい、 部黒化
106	183	SD3	土師器	甕	口	小片	有	—	ナア	ナア	—	やや粗、赤・白・金・黒 良 褐色		やや黒色 二層口縁
106	184	SD3	土師器	甕	胴	小片	有	—	赤彩、ナア	赤彩、ナア	—	赤、赤・白・金 良 褐色		
106	185	SD3	土師器	甕	胴	小片	有	—	赤彩、ナア	赤彩、ナア	—	赤、赤・白・金 良 褐色		
106	186	SD3	土師器	甕	底手	小片	有	—	ヘラ削り、ナア	ナア、ハケメ	—	赤、白・金 良 褐色		76品表
107	187	SD3	土師器	足取盤	口~底	70	有	—	ハケメ、ナア	ハケメ、ナア	木炭痕	赤、赤・白・金 良 赤色		粗熱、黒化
107	188	SD3	土師器	甕	底	小片	有	(6.2)	ハケメ、ナア	ナア	—	赤、赤・白・金 良 赤色		内周黒化
107	189	SD3	土師器	甕	口	小片	有	(10.0)	ナア	ナア、指紋痕	—	赤、赤・白 良 褐色		瓢か
107	190	SD3	土師器	甕	口~胴	小片	有	(23.6)	ハケメ、指紋痕	ハケメ	—	やや粗、赤・白・金 良 褐色		
107	191	SD3	土師器	甕	口	小片	有	(25.4)	ナア、指紋痕	ナア、指紋痕	—	赤、白 良 褐色		
107	192	SD3	土師器	甕	口	小片	有	—	ナア	ハケメ、ナア	—	やや粗、赤・白・金 良 赤褐色		
107	193	SD3	土師器	甕	口	小片	有	—	ハケメ、ナア	ハケメ	—	赤、赤・白 良 褐色		瓢か
107	194	SD3	土師器	甕	底	小片	有	(13.3)	ハケメ	ナア	木炭痕か	赤、赤・白 良 褐色		劣化

図	No.	出土位置	種別	器種	部位	残存率	反紙	二重 反紙 厚さ	外面	内面	底・脚内面	胎 色	土 色調	備 考
107	195	SD3	土師器	壺	底	小片	有	(9,6)	ハケメ	ナデ	木炭灰	紫、赤・白・金 及 褐色		被熱、劣化、一部黒変
107	196	SD3	土師器	壺	底	小片	有	(9,4)	ヘウ刷り、ナデ	ナデ	木炭灰	やや紫、赤・白・金・黒 及 赤褐色		
107	197	SD3	土師器	壺	胴~底	小片	有	(8,8)	ナデ	ナデ、指痕痕	木炭灰、赤褐色 及 褐色	やや紫、赤・白・金		外面やや劣化
107	198	SD3	土師器	壺	胴~底	小片	有	(7,6)	ヘウ刷り、ナデ	ヘウナデ	木炭灰	紫、赤・白・金		片断黒変
107	199	SD3	土師器	壺	胴~底	小片	有	(9,2)	ハケメ、ナデ	ハケメ	木炭灰	紫、赤・白・金・黒 及 赤褐色		
108	200	SD3	土師器	壺	胴~底	小片	有	(9,0)	ナデ	ヘウナデ	木炭灰	紫、赤・白・金 及 赤色		やや劣化
108	201	SD3	土師器	壺	胴~底	小片	有	7,3	ナデ、指痕痕	ナデ	木炭灰	紫、赤・白・金・黒 及 褐色		一部黒変
108	202	SD3	土師器	壺	胴~底	小片	有	7,3	ナデ、指痕痕	ヘウナデ、ナデ	木炭灰か	紫、赤・白・金 及 褐色		
108	203	SD3	土師器	壺	胴~底	小片	有	8,2	ヘウ刷り、ナデ	ナデ	ヘウ刷り	紫、赤・白・金・黒 及 褐色		一部黒変
108	204	SD3	土師器	壺	胴~底	小片	有	10,0	ハケメ、ナデ、 指痕痕	ハケメ、内面黒 色	木炭灰	やや紫、赤・白・金・黒 及 褐色		
108	205	SD3	土師器	壺	胴~底	小片	有	(12,8)	ハケメ、ナデ、 指痕痕	ナデ、ハケメ	木炭灰	紫、赤・白・金・黒 及 褐色		片断黒変
108	206	SD3	土師器	壺	胴~底	小片	有	(7,4)	ヘウ刷り	ナデ	ナデ	紫、赤・白 及 褐色		劣化変しい
108	207	SD3	土師器	壺	底	小片	有	(5,4)	ヘウ刷り	ナデ	木炭灰	紫、赤・白・金・黒 及 赤色		被熱、内外黒変
108	208	SD3	土師器	壺	底	小片	有	—	ハケメ	ハケメ	ハケメ、丸太 及 褐色	紫、赤・白		外面一部黒変 疑わしいか
108	209	SD3	土師器	壺	胴~底	小片	有	(6,0)	ヘウ刷り	ハケメ	ハケメ状工具 による剥落 (4)	紫、赤・白・金 及 赤褐色		
108	210	SD3	土師器	壺	口~胴	小片	有	(12,0)	ハケメ、ナデ	ハケメ、ナデ	—	紫、赤・白・金 及 褐色		
108	211	SD3	土師器	付蓋	口~胴	小片	有	(28,2)	ナデ	ナデ	—	紫、赤・白・金 及 黄褐色		一部黒変
108	212	SD3	土師器	付蓋	口~胴	小片	有	—	ヘウ刷り、ナデ	ナデ	—	紫、赤・白・金 及 黄褐色		黒変
108	213	SD3	土師器	ナマド形土 器	胴部	小片	有	—	ナデ	ハケメ、指痕痕	—	紫、赤・白・金 及 赤褐色		
108	214	SD3	土師器	壺・蓋	口~底	小片	有	—	ナデ	ナデ	—	紫、赤・白・黒 及 褐色		
108	215	SD3	土師器	土製円筒	—	—	有	縦 径 2.7 厚さ 4.0 長さ 1.1	ナデ	ハケメ	—	やや紫、赤・白・金・黒 及 赤褐色		断面径小、 重さ 13.5g
108	216	SD3	土師器	手づくね土 器	胴~底	20	有	(7,8)	指ナデ、ヘウ刷 り	ナデ	指ナデ、指痕 痕	紫、白・黒 及 赤色		一部黒変
108	217	SD3	土師器	手づくね土 器	胴	20	有	(8,3)	指ナデ	ナデ	指痕痕	紫、赤・白・黒 及 赤褐色		
108	218	SD3	土師器	手づくね土 器	胴	小片	有	(5,1)	ナデ、指痕痕	—	ナデ、指痕痕	紫、白 及 褐色		一部黒変
108	219	SD3	土師器	手づくね土 器	胴	小片	有	—	ナデ	ヘウナデ	指痕痕	紫、赤・白 及 褐色		

品	№	出仕位置	建型	仕様	部位	残存率	取込	口許 基準 容積	外面	内面	底・溝内底	胎 地 色	上 次 調	備 考
109	220	SD3	土煉器	手づくね土	体~底	20	有	(5.6) (5.3) (3.4)	ナゲ	指ナゲ	-	密、赤・白・金・黒 及 明赤褐色	-	表面黒皮
109	221	SX1上	土煉器	手づくね土	体~底	95	-	(3.9)	ナゲ	指ナゲ	-	やや粗、赤・白・金・黒 良 明赤褐色	-	内外黒皮
109	222	SD3	土煉器	手づくね土	体~底	40	有	(3.6)	-	指ナゲ	-	密、赤・白・金 良 赤褐色	-	-
109	223	SD3	土煉器	手づくね土	口~底	小片	有	(2.9) (3.8)	ナゲ、取込痕	ナゲ、指込痕	不整形	密、赤・白・金 良 赤褐色	-	一部黒皮
109	224	SD3	土煉器	手づくね土	-	-	-	6.8	ナゲ	-	-	密、白・金・黒 良 赤褐色	-	-
109	225	SD3	土煉器	焼	口~底	小片	有	(33.6)	ナゲ	ナゲ	-	密、赤・白・黒 良 褐灰色	-	表面黒皮、コゲ
109	226	SD3	土煉器	粗か	側	小片	有	-	ナゲ	ナゲ	-	密、赤・白 良 褐色	-	黒皮
109	227	SD3	土煉器	粗	口~側	小片	-	-	ナゲ	ナゲ	-	密、赤・白・金 良 赤褐色	-	15C前半
109	228	SD3	土煉器	内耳橋	口~側	小片	-	-	ナゲ	ナゲ	-	密、赤・白・金 良 赤褐色	-	13C前半
109	229	SD3	青磁	明	口~体	小片	有	(14.0)	ロクロナゲ、指 込	指込、指輪、ロ クロナゲ	-	密、黒 良 オリーブ灰色	-	12C後半若しくは1415 Cか
109	230	SD3	青磁	煮	側	小片	-	-	指輪、花分か	指輪	-	密、黒 良 オリーブ灰色	-	13C中~後半、大半 表面黒皮
109	231	SD3	青磁	大目系破	体	小片	有	-	指輪	指輪	-	密、白・黒 良 灰白色	-	15C代
109	232	SD3	青磁	煮か	口	小片	-	-	指輪	指輪	-	密、黒 良 灰オリーブ色	-	黒皮剥離、13C境
109	233	SD3	陶器	陶	口	小片	-	-	ロクロナゲ、指 輪	ロクロナゲ、指 輪	-	密、黒 良 灰白色	-	黒皮剥、近世
109	234	SD3	陶器	男・鉢	口	小片	-	-	ナゲ	ナゲ	-	密 良 鈍褐色	-	黒皮剥
109	235	SD3	土製品	灰田子	-	80	-	縦 1.5 横 2.0 厚 0.7	取込痕	-	-	密、赤・白・黒 良 鈍黄褐色	-	裏き 4.1g
110	236	SD3	陶器	煮	家床~底	25	有	(16.4) (3.8)	ロクロナゲ、ヘ ク振り	ロクロナゲ	-	密 良 灰白色	-	-
110	237	SD3	陶器	煮	家床~縁	25	有	(17.0)	ロクロナゲ、長 把	ロクロナゲ	-	密、白・黒 良 灰白色	-	-
110	238	SD3	陶器	煮	口縁	小片	有	-	自然釉	ナゲ、取込	-	密、黒 良 灰白色	-	-
110	239	SD3	陶器	煮	口~体	20	有	(17.6)	ロクロナゲ	ロクロナゲ、指 輪、指痕	-	密、黒 良 灰白色	-	黒皮剥
110	240	SD3	陶器	坏	口~底	25	有	(8.6) (2.9)	ロクロナゲ、ヘ ク振り	ロクロナゲ	-	密、黒 良 灰白色	-	-
110	241	SD3	陶器	坏	口~体	小片	有	(10.0)	ロクロナゲ	ロクロナゲ	-	密、赤・白 良 灰白色	-	-
110	242	SD3	陶器	坏	口~体	小片	有	(13.2)	ロクロナゲ	ロクロナゲ	-	密、白・黒 良 黄褐色	-	-
110	243	SD3	陶器	坏	口~体	小片	有	(16.8)	ロクロナゲ	ロクロナゲ	-	密、白・黒 良 灰白色	-	-
110	244	SD3	陶器	坏	口~底	20	有	(13.8) (8.0) (4.3)	ロクロナゲ、ヘ ク振り	ロクロナゲ	取込赤取痕	密、白 良 灰白色	-	火傷

国	No	出土位置	類別	器種	部位	残存率 %	反映 率	口径 高さ 底径	外国	内器	底・脚代面	胎 色	土 文	備 考
110	345	SD3	須恵器	坏	口~底 小片	有	(12.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	密、白・黒 灰白色	—	火障
110	346	SD3	須恵器	坏	口~底 小片	有	(12.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	密、赤・白・黒 灰白色	—	
110	347	SD3	須恵器	坏	口~底 小片	有	(12.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	密、赤・白・黒 灰白色	—	
110	348	SD3	須恵器	坏	口~底 小片	有	(12.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	密、赤・白 灰白色	—	
110	249	SD3	須恵器	坏	体~底 小片	有	—	ロクロナデ、ヘ タ削り	ロクロナデ	—	—	密、白・黒 灰白色	—	
110	250	SD3	須恵器	坏	体~底 小片	有	(8.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘタ削り	—	密、赤・白 灰白色	—	火障
110	251	SD3	須恵器	坏	口~底 小片	有	14.0 7.2 4.1	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	密、赤・白・黒 不灰 褐色	—	内外火障
110	252	SD3	須恵器	壺	口~底 小片	有	(6.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	密、黒 灰白色	—	外周黒変
110	253	SD3	須恵器	鉢	口~底 小片	有	(6.1)	ヘタ削り	自然脱	ヘタ削り	—	密、黒 灰白色	—	
110	254	SD3	須恵器	甗か	体~底 小片	有	—	ヘタ削り、軸付 蓋	ロクロナデ	ヘタ削り	—	密、赤・白・黒 灰白色	—	
110	255	SD3	須恵器	甗	口~底 小片	有	—	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	密、白・赤 灰白色	—	
111	256	SD3	須恵器	甗	口~底 小片	有	(4.8)	ロクロナデ、投 蓋	ロクロナデ、ナ デ	—	—	密、白・黒 やや不灰 青灰色	—	
111	257	SD3	須恵器	甗か	口~底 小片	有	—	ナデ、自然脱	ナデ	—	—	密、赤 灰白色	—	
111	258	SD3	須恵器	甗	口~底 小片	有	(25.6)	輪縁流紋文	ナデ	—	—	密、黒 灰白色	—	
111	259	SD3	須恵器	甗	口~底 小片	有	(20.8)	ナデ	ナデ	—	—	密、赤・黒 灰白色	—	
111	260	SD3	須恵器	甗	口~底 小片	有	(16.4)	ナデ	ナデ	—	—	やや粗、口 縁 灰白色	—	
111	261	SD3	須恵器	甗	口~底 小片	有	—	ナデ	ナデ	—	—	密、赤 やや不灰 灰白色	—	
111	262	SD3	須恵器	甗	口~底 小片	有	—	ナデ	ナデ	—	—	密、白 灰白色	—	
111	263	SD3	須恵器	甗	口~底 小片	有	—	タタキ目、自然 輪	ナデ、青海流文	—	—	密、黒 灰白色	—	
111	264	SD3	須恵器	甗	口~底 小片	有	—	タタキ目、流文	ナデ、青海流文	—	—	青 流 明灰白色	—	
111	265	SD3	須恵器	甗	口~底 小片	有	—	タタキ目、自然 輪	ナデ	—	—	密、白・黒 赤褐色	—	
111	266	SD3	須恵器	甗	口~底 小片	有	—	タタキ目、流文	ナデ、流文	—	—	密、赤・白・黒 脚代 灰白色	—	瓶用甗か
111	267	SD3	須恵器	甗	口~底 小片	有	—	タタキ目、流文	ナデ、流文	—	—	密、黒 灰白色	—	瓶用甗か
111	268	SD3	須恵器	甗	口~底 小片	有	—	ナデ	ナデ	—	—	密、黒 灰白色	—	瓶用甗、灰字刷線蓋 か
111	269	SD4	土師器	甗	口~底 小片	有	—	ナデ	ナデ	—	—	密、白 灰白色	—	瓶用、ナデ
111	270	SD5	土師器	坏	口~底 小片	有	(8.0)	ヘタ削り、ナデ	ロクロナデ、ヘ タ削り	ヘタ削り	—	密、赤・白・黒 灰白色	—	

品名	出土地	産別	種類	部位	形状	反転	口縁 突起 高さ %	外 径	内 径	底・胴内面	胎 色 土 色 調	備 考
112 271	SD8	土師器	坏	口~体	小片	有	(12.8)	ロクロナデ、ヘ ラ削り	ロクロナデ		紫、赤・白・金 良 鈍褐色	一般馬堂
112 272	SD9	土師器	甕	口	小片	有	—	ナデ、ヘラナデ	ナデ		紫、赤・白・金・黒 良 鈍褐色	
112 273	SD9	赤生土器	甕	胴~底	10	有	(17.6)	ナデ、ヘラ削り	ナデ		紫、赤・白・金・黒 良 鈍褐色	穴面酸化、鉄質少
112 274	SD9	土師器	甕	胴~底	小片	有	(2.4)	ヘラ削り、ナデ	ナデ、指築痕	焼成前穿孔	白、 灰 明赤褐色	鉄粒、馬堂
112 275	SK1	土師器	坏	口~底	66	有	—	ロクロナデ、酒 瓶ヘラ削り	内助黒色、紺文	ヘラ削り	紫、赤・白・金 良 褐色	
112 276	SK1	土師器	坏	口~体	小片	有	—	ロクロナデ	ロクロナデ	—	紫、赤・白・金 良 褐色	玉縁
112 277	SK3	磁器	瓶	口~体	小片	有	(11.4)	染付	染付	—	紫、黒 良 灰白色	19C 瀬戸産
112 278	SK3	磁器	小皿	口~底	30	有	(10.0) (4.0) (2.1)	染付	染付	付け高台	紫、黒 良 灰白色	19C少
112 279	SK2	土師器	寛水盥盆		100	有	—	直径 23.5cm 口径 6.5cm 厚み 1.2cm	—	—	—	重さ 2.8g
112 280	海濱外	土師器	高坏小	口~体	小片	有	—	赤影	赤影	—	紫、白・金 良 褐色	
112 281	横乱	土師器	子づくね土 器	口~底	50	有	(6.2) (2.6)	指ナデ	指ナデ	—	紫、赤・白・金・黒 良 褐色	
112 282	横乱	土師器	坏	底	小片	有	(7.0)	ナデ	ロクロナデ	磨削	紫、赤 良 鈍褐色	
112 283	SX1 上	土師器	坏	口~底	40	有	(18.0) (2.7)	ナデ、ヘラ削り	ナデ	ヘラ削り	紫、赤・白・金 良 鈍褐色	褐色 内列縁仕上げ
112 284	SX1 上	土師器	盤状坏	口~底	45	有	(18.6) (8.0) (3.5)	ロクロナデ、ヘ ラ削り	ロクロナデ	ヘラ削り	紫、赤・金 良 鈍褐色	口縁打ち欠き、黒底、 打明片無用
112 285	SX1 上	土師器	盤状坏	口~底	40	有	(13.6) (7.9) (3.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ削り	紫、赤・白・金 良 褐色	
112 286	SX1	土師器	盤状坏	口~底	20	有	(14.0) (8.0) (3.3)	ロクロナデ、ヘ ラ削り	ロクロナデ	ヘラ削り	紫、赤・白・金 良 褐色	やや酸化、赤彩少
112 287	SX1上	土師器	盤状坏	口~底	30	有	(13.0) (8.3) (3.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ削り	紫、赤・白・金・黒 良 褐色	赤彩少
112 288	SX1成	土師器	盤状坏	口~体	小片	有	(15.0)	ナデ	ナデ、ミガキ、 付着物	—	紫、赤・金 良 褐色	
112 289	SX1	土師器	盤状坏	口~体	小片	有	(16.4)	ヘラ削り	ナデ、内面黒色	—	紫、赤・白・金 良 灰青褐色	丹塗馬堂
112 290	SX1	土師器	盤状坏	口~底	小片	有	(8.6)	ナデ	ナデ	ヘラ削り	紫、赤・白・金・黒 良 褐色	やや酸化
112 291	SX1 覆土	土師器	甕	口~底	50	有	—	ヘラ削り、ミガ キ	ナデ	—	紫、赤・金 良 褐色	
112 292	SX1	土師器	甕	口~体	小片	有	—	ナデ	ナデ	—	紫、白・黒 良 灰白色	外側鉄粒
112 293	SX1	土師器	甕	口~体	20	有	—	ナデ	ロクロナデ	—	紫、赤・黒 良 灰色	
112 294	SX1 覆土	土師器	坏	口~底	40	有	(12.0) (7.2) (3.0)	ロクロナデ、ヘ ラ削り、ミガキ	ロクロナデ、磨 文	ヘラ削り	紫、赤・白・黒 良 褐色	劣化著しい
112 295	SX1上	土師器	坏	口~底	30	有	(11.3) (7.2) (3.0)	ロクロナデ、ヘ ラ削り	ロクロナデ	ヘラ削り、赤 切痕	紫、赤・金 良 褐色	
112 296	SX1 覆土	土師器	坏	口~底	小片	有	6.6	ナデ	ナデ	ヘラ削り、赤 切痕	紫、赤・白・金 良 褐色	

図	No	出土位置	類別	器種	部位	残存率	反転	口径 底径 高さ	外 面	内 面	底・胴片肉	胎 色	土 色	備 考
113	297	SX1	須出器	坏	底	小片	有	(3,0)	ヘラ削り	ロクロナデ	ヘラ削り	密、白 洗 灰白色		
113	298	SX1	土師器	甕	胴~底	小片	有	(10,2)	ハケメ	ハケメ	木鼻痕	密、赤・白・金・黒 洗 灰色		瓶底、内面ワケ付痕
113	299	SX1	須出器	瓶	胴	小片	有	—	シクロナデ	ロクロナデ	—	密、白・黒 洗 灰色		
113	300	SX1	須出器	瓶	胴	小片	有	—	シクロナデ、自然 然乾	ワクロナデ	—	密、白・黒 洗 灰白色		
113	301	SX1	須出器	甕	胴	小片	有	—	ナデキヨ、自然 乾	ナデ	—	密、赤・黒 洗 灰色		
113	302	SX1	土師器	坏	体~底	小片	有	—	ヘラ削り	ロクロナデ	ヘラ削痕	密、赤・白 洗 灰色		
113	303	SX1 甕土	土師器	坏	底	小片	有	—	ナデ	ナデ	編刷	密、赤・黒 洗 灰色		劣化
113	304	SX1 甕土	土師器	瓶	底	小片	有	—	ヘラ削り	ナデ	両面ヘラ削り	密、赤・白 洗 灰色		外面劣化
114	305	SD3	陶文土器	部鉢	胴	小片	有	—	LR草部陶文	ナデ	—	やや粗、白・黒 洗 灰色		
114	306	SD3	陶文土器	部鉢	胴~底	小片	有	(8,6)	LR草部陶文	ナデ	新代在	やや粗、赤・白・金 洗 灰色		
114	307	SD3	弥生土器	部小	口	小片	有	—	口縁部にLR草 部陶文	—	—	粗、白 洗 灰色		弥生3期(中前期説、 劣化深い 突起または流紋に縁)
114	308	SD3	弥生土器	甕	口	小片	有	—	流紋文、口縁に 鋭いヘラ状工具 による刻み目	—	—	密、赤 洗 灰色		弥生3期(中前期説、 内面劣化深い)
114	309	S17	弥生土器	甕	口	小片	有	17.6	ハケメ、刷り目 1線	ハケメ	—	密、赤・金・黒 洗 灰色		
114	310	SD3	弥生土器	甕	口	小片	有	(22,0)	横溝流紋文、刷 り目口縁	ナデ	—	密、赤・白・小石 洗 灰色		
114	311	SD3	弥生土器	甕	口	小片	有	—	横溝流紋文、刷 り目口縁	—	—	密、白 洗 灰色		一部黒変
114	312	SD3	弥生土器	甕	口	小片	有	—	横溝流紋文、刷 り目口縁	ナデ	—	密、白 洗 灰色		一部黒変
114	313	SD3	弥生土器	甕	口~胴	30	有	15.6	横溝流紋文	ナデ	—	密、赤・白・金・黒 やや不真 洗 灰色		一部黒変
114	314	SD3	弥生土器	甕	口	小片	有	—	横溝流紋文	ナデ	—	やや粗、赤・白・金・黒 洗 灰色		劣化
114	315	SD3	弥生土器	甕	口	小片	有	—	横溝流紋文	ナデ	—	密、赤・白・金・黒 不真 洗 灰色		
114	316	SD3	弥生土器	甕	口	小片	有	—	横溝流紋文	ナデ	—	密、赤・白・金・黒 やや不真 洗 灰色		劣化している、内面 黒変
114	317	SD3	弥生土器	甕	口	小片	有	—	横溝流紋文	ナデ	—	密、赤・白・金 洗 灰色		やや劣化、内面黒変
114	318	SD3	弥生土器	甕	胴	10	有	—	横溝流紋文	ナデ	—	密、赤・白・黒 洗 灰色		劣化
114	319	S16	弥生土器	甕	胴	小片	有	—	横溝流紋文、刷 り目口縁	ナデ	—	やや粗、白・黒 洗 灰色		外面黒変
114	320	S17	弥生土器	甕	胴	小片	有	—	横溝流紋文、ハケメ	ハケメ	—	密、白・黒 洗 灰色		外面・部底、内面 黒変
114	321	SD3	弥生土器	甕	胴	小片	有	—	横溝流紋文	ナデ	—	密、赤・白 洗 灰色		
114	322	SD3	弥生土器	甕	胴	小片	有	—	横溝流紋文	ナデ	—	やや粗、赤・白・黒 洗 灰色		内面やや劣化

図	№	出土位置	種類	器種	部位	残存率	反性	口縁 発祥 部	外面	内面	底・器内面	胎 色 土 成 割	備 考
114	323	SD3	弥生上層	甕	胴	小片	—	—	帯状灰文	ナゲ	—	赤・白・金・黒 灰明赤褐色	
114	324	SD3	弥生上層	甕	胴	小片	—	—	帯状灰文、葉 状文	ナゲ	—	赤・白・金 黒黄褐色	
114	325	SD3	弥生上層	甕	胴	小片	—	—	LRのS字状斜 帯状灰文	ナゲ	—	やや傾、赤・白・金 褐色	
114	326	SD3	弥生上層	甕	胴	小片	—	—	斜帯状灰文	ナゲ	—	赤・赤・白・金 褐色	外側黒変
115	327	B4G Pit1	土師器	坏	体～底	小片	4.2	—	ヘラ削り	コクロナテ、瑠 璃	ヘラ削り、黒 漆「黒口」	赤・赤・白・金 灰黄褐色	
115	328	B5G	土師器	坏	体～底	小片	4.8	—	ヘラ削り	コクロナテ	黒紅赤切痕、 ヘラ削り、黒 漆「黒」	赤・赤・白・金 灰黄褐色	
115	329	SX1	土師器	坏	底	小片	(6.4)	—	ヘラ削り	コクロナテ	黒紅赤切痕、 ヘラ削り、黒 漆「黒」	赤・赤・白 灰黄褐色	黒粘
115	330	A3G	土師器	坏	底	小片	—	—	—	コクロナテ	黒紅赤切痕、 ヘラ削り、黒 漆「黒」	赤・赤・白・金 灰黄褐色	割れ口に研ぎ痕

表12 土製品観察表

図	№	出土位置	種類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備 考
116	1	S17	土製品	(3.9)	(3.5)	(2.2)	30.2	カマド左袖ピット内
115	2	SX1	焼成粘土塊	4.7	4.5	2.5	34.6	壺石の下、竹管の割突痕有
115	3	(C3G)	焼成粘土塊	(4.3)	3.7	2.9	37.6	七隅?
115	4	SX1	焼成粘土柱	25.0	(13.5)	7.0	1,016.0	

表13 石器観察表

図	№	出土位置	種類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	石 質	備 考
115	1	S14	礫石	(4.9)	3.1	1.7	29.6	緑色凝灰岩	5面
116	2	S17	礫石	6.6	4.2	1.5	69.0	緑色凝灰岩	4面
116	3	S17	礫石	10.1	3.8	3.2	169.0	硬砂岩	1面
115	4	SD3	礫石	3.8	2.8	2.3	40.8	白色凝灰岩	5面
116	5	SD3	礫石	4.0	5.0	1.8	45.8	硬砂岩	1面
116	6	SE1	礫石?	9.8	10.6	2.1	331.0	硬砂岩	2面
116	7	(A2G)	磨製石斧?	(4.0)	3.6	0.8	15.8	頁岩	
116	8	S15	礫石	(8.2)	(4.8)	(5.0)	182.0	花崗閃緑岩	
116	9	(A6G)	火打石	4.2	3.5	1.6	27.8	石英	
116	10	(B4G)	火打石?	4.0	2.8	1.9	24.4	石英	
116	11	(B6G)	石鏝	2.1	1.6	0.6	1.5	黒曜石	未製品か
116	12	暗塚	石片?	(19.2)	(16.5)	(9.3)	1,835.0	安山岩	
116	13	S17	有孔内張	3.0	2.9	0.8	9.9	滑石	石製構造物

表14 金属製品観察表

図	№	出土位置	種類	最大長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重 量 (g)	備 考
116	1	S14	棒状	(3.0)	(0.3)	(0.3)	0.9	カマド内出土
116	2	SX1	鏝子?	(7.0)	(0.2)	(0.4)	4.1	青銅製、壺石の下から出土

Ⅵ. まとめと今後の課題

1. 集落変遷と土器の再加工について

発見した遺構・遺物について、時代及び編年時期から下記の通り整理した。尚、各調査区名は、車后遺跡1次調査区を車1、同2次調査区を車2、今宮遺跡調査区を今宮と略して示している。

〔集落成立以前〕

縄文時代前期：(車1) -	(車2)SD3	(今宮)埋没谷
弥生時代 : (車1) -	(車2)SD3	(今宮)埋没谷
古墳時代前期：(車1) -	(車2)SD9	(今宮)埋没谷

〔集落成立以後〕

古墳時代中期 (5世紀第4四半世紀～6世紀初頭頃)

古墳Ⅴ期：(車1) -	(車2)SD3	(今宮) -
古墳Ⅵ期：(車1) -	(車2)SD3	(今宮) -
古墳Ⅶ期：(車1) -	(車2)SI7	(今宮) -
古墳Ⅷ期：(車1) -	(車2)SI2	(今宮) -

古墳時代後期 (6世紀初頭頃～7世紀末頃)

古墳Ⅸ期：(車1)SI1	(車2)SD3	(今宮) -
古墳Ⅹ期：(車1)SI8	(車2)SI4・SD3	(今宮) -
古墳Ⅺ期：(車1)SI5	(車2) -	(今宮) -
古墳Ⅻ期：(車1) -	(車2) -	(今宮) -
古墳Ⅼ期：(車1)SI9	(車2)SI5・8	(今宮)SI5・11・22

奈良時代 (7世紀末～8世紀頃)

奈・平Ⅰ期：(車1) -	(車2)SI5	(今宮)SI3・5～7・16・17
奈・平Ⅱ期：(車1) -	(車2)SX1	(今宮)SI1・6・8・16・20・21
奈・平Ⅲ期：(車1) -	(車2) -	(今宮) -

平安時代 (9世紀頃～11世紀前半頃)

奈・平Ⅳ期：(車1) -	(車2)SD3・5・SX1	(今宮)SI2・11・12～14・18
奈・平Ⅴ期：(車1)SI2	(車2)SK1・SD3	(今宮)SI4・13・15・23・24・28
奈・平Ⅵ期：(車1)SI3・4・6	(車2)SD3	(今宮)SI28
奈・平Ⅶ期：(車1)SI6・7・10	(車2)SD3	(今宮) -
奈・平Ⅷ期：(車1)SI6・10	(車2)SI1・SD3	(今宮) -

〔住居跡消滅以後〕

平安時代末期 (11世紀後半頃～12世紀頃)

奈・平Ⅸ・Ⅹ期：(車1)SD1	(車2) -	(今宮) -
-----------------	--------	--------

中・近世

13～15世紀：(車1) -	(車2)SD1	(今宮) -
19世紀 : (車1) -	(車2)SK2	(今宮) -

(1) 遺構変遷について

前述の通り、本調査区における縄文時代前期から中・近世までの様相が明らかとなった。以下、本調査区における土地様相の推移について触れておく。尚、本調査区では掘立柱建物跡等は確認できなかったため、ここでいう住居跡とは、竪穴住居跡を示している。

本調査区では、縄文時代前期～古墳時代前期の住居跡はなく、同時期の遺構としては車2のSD3・9、今宮の埋没谷を確認している。元々は自然流路であったと想定するSD3からは、縄文時代前期後半頃の土器2点(305・306)が出土している。周辺では同時期の遺構が発見された事例はなく、遺物の出土状況から流れ込みによるものと思われる。

弥生時代には、隣接する鞍掛遺跡で弥生時代前期の住居跡や、亀沢遺跡で弥生時代後期の水田跡が検出されており、周辺地域において明確に土地利用がはじまった段階といえる。本調査ではSD3から弥生時代中期初頭の土器2点(307・308)と、SD3・埋没谷から、複数の弥生時代後期(弥生5期A相)の土器が出土した。但し、住居跡や水田跡等の人為的な遺構は確認できなかった。

古墳時代前期の遺構では、SD9を確認した。調査範囲内における部分的な確認であったが、遺構断面はV字状を呈し、遺物が出土している。尚、焼成前に底部穿孔した壺が出土したことから、方形周溝墓である可能性が窺える。

古墳時代中期の遺構では、車2でSI2・7を確認した。県内では正式報告されている調査事例は少ないものの、本調査区に隣接する鞍掛・清水遺跡や、近年調査が実施された大蔵経寺前遺跡(石和町)、五里原遺跡(八代町)等、本市域において遺構・遺物の分布が確認されつつある。本調査区で住居跡が出現する最初の段階であり、SI7は古墳Ⅶ期、SI2は古墳Ⅷ期に比定した。SI7は後出するSI4・6と重複し、形態・規格などの特徴は明確ではない。SI2のカマドからは複数の土器が出土しており、カマド廃棄に伴う祭祀の痕跡と想定している。また車2のSD3の一部からも、高坏が複数出土しており、何らかの祭祀行為の痕跡とみられる。尚、車2では祭祀遺構と想定したSX1が後世に出現するが、本段階から既に居住域の様相とはやや異なる祭祀的な様相が窺える。

古墳時代後期前半の遺構としては、車1でSI1・5・8、車2でSI4を検出した。確認できた住居跡軒数は前段階と大きくは変わらないものの、古墳Ⅸ期には遺構及び遺物が希薄になる。また、次段階の古墳Ⅹ期には、全調査区で住居跡が確認できるようになり、車1でSI9、車2でSI5・8、今宮でSI5・11・12を検出した。古墳時代から奈良時代の移行期における集落様相の変化が窺えた。

奈良時代には、車居遺跡では希薄化し、車1のSI9、車2のSI5以降は、9世紀後半段階まで住居跡が確認できなくなる。その一方、今宮においては継続性がみられ、軒数も増加し、次段階にかけて最盛期となる。車2では、SI5・8から盤や手づくね成形の坏など、特徴的な遺物が出土した。また祭祀遺構と推察するSX1及びその周辺からは、多量の桃核及び墨書土器が出土している。SX1の遺構年代は明確ではないが、祭祀の場としての様相が明確に現れた段階と考えられる。一方、住居跡の変遷がみられるようになった今宮では、奈・平Ⅰ・Ⅱ期に比定した10軒を検出した。このうち出土遺物の年代が近く、遺構の規格性・主軸方向・カマドの付設位置等が類似する

遺構がみられた。これらの遺構は近接または重複して構築されていることから、比較的短期間に変遷したと考えられる。また、条里制施行により、中尾条里や本都塚条里等が成立していた時期と考えられる。本調査では、今宮の調査区北側で水田跡を確認した。埋没谷を掘削して構築しているものの、遺物が伴わず、詳細な年代は不明である。但し、集石遺構との重複関係や周辺の状況から、少なくともこの時期には成立していたと推察している。また、調査時の所見では、自然堤防状の高まりを境に、居住区と生産域が分かれていたとしており、当時の居住域と生産域の様相が窺える。

次段階の奈・平Ⅲ期は、甲斐国の古代における変革期であり、甲斐型土器杯の成立や、国分・東原地域において甲斐国分僧寺・尼寺の造営される時期にあたる。国分二寺が造営される国分・東原地域においては、新興集落が出現する。一方、本調査区においてはSX1で若干の遺物が出土した以外、遺構・遺物とも確認されなかった。後述するが、これに関しては猪股喜彦氏の論考があり、国分寺周辺に出現した集落とその周辺域に分布する伝統的な継続がみられる集落についてまとめられている。なお、古墳時代中期と同様に県内における奈良時代の集落調査の事例が少なく、今回確認した祭祀遺構や生産域と集落の関連性などについては注目されよう。

平安時代には、奈・平Ⅲ期の空白期を経て、9世紀前半頃の住居跡が今宮で確認できる。集落の様相も前段階と同様で、比較的短期の間に変遷し、やや軒数も多くなる。奈・平V期からは、車1でも住居跡の変遷が窺えるようになるが、遺構数は減少し、奈・平Ⅶ期最後に住居跡は確認できなくなる。住居形態の特徴としては、これまで北側の壁に付設されていたカマドが、東壁に付設される傾向がみられた。住居跡が消滅した後の遺構としては、奈・平Ⅸ・X期に比定する車1のSD1がある。小皿・脚高台など複数出土しており、土地の境などにおいて行われた祭祀行為の痕跡であった可能性が窺える。中世では、車2でSD1・3とSE1の上層において、13～15世紀代の遺物が出土している。なかでもSD1から出土した塙や内耳は、外面に入る縦方向ハケメが特徴的であり、15世紀の所産と推察される。他、SD3(SE1付近)からは天目茶碗、白磁、青磁などが出土している。SE1の廃絶年代がこの段階まで下る可能性もあるが、同時期に比定できる明確な遺構は確認できなかった。近世では車2のSK2があり、磁器と古銭(寛永通寶)が出土した。検出状況から早桶による墓塚と推察した。

(2) 甲斐国分二寺周辺における集落変遷との関係性について

741(天平13)年2月、聖武天皇により国分寺建立の詔が出されたことで、諸国に国分寺が造営された。甲斐国では、国分寺所用瓦の生産年代(750年前後)から、8世紀後半段階にはじまるとされている。この時期は、甲斐国内で独自に発達する甲斐型杯の成立年代(750年代)とされていることから、古代甲斐国の大きな変革期であったことがわかる。本地域における集落の様相についても、国分二寺周辺の国分・東原地域に草地蔵遺跡・岡之木神社遺跡・松原遺跡などで新興集落が成立した。これについて猪股喜彦氏は、国分二寺創建に伴って、各地から動員された人々の、新たな居住地と推察されている。またこのような集落遺跡を、国分寺集落、または二寺の造営・維持に関連する遺跡として、国分寺関連遺跡と呼称されている。さらに、国分寺集落の外側には、大原遺跡、筑前原遺跡、二之宮遺跡などの弥生・古墳時代から変遷する伝統的な拠点集落が存在し、国府や国分寺と有機的に関わっていたとする二極構造を指摘している。

今回調査した車居遺跡・今宮遺跡や、隣接する鞍掛・清水遺跡は伝統的な拠点集落にあたるが、前述のとおり、今回の調査においては国分寺造営期にはSX1で若干の遺物が出土した以外、遺構・遺物ともに確認できない状況がみられた。一方、国分寺集落の概要として、報告されている調査例をみると、松原遺跡（第5共選場地区）では8世紀後半に成立し、9世紀第2四半世紀からの空白期を経て、10・11世紀に継続的な変遷をみせている。同じく竜ノ木遺跡についても住居跡の出現時期は8世紀中頃であり、本調査区と対照的な傾向が窺える。尚、猪股氏は、正式報告がなされていない整理途上段階であり、概要を述べるにとどまったとしていたが、今回の調査成果においては、同じ傾向が示されたといえる。未だ正式報告がなされていないところもあり、課題は多いが、国分寺造営期のヒトの動きを推察する手がかりの一つになったといえる。

(3) 土器の転用・加工について

今回の調査で出土した遺物のなかには、転用の痕跡が確認できたものがいくつか存在した。転用の痕跡としては、使用痕と加工痕がみられた。ここでいう加工とは、破砕行為による形状変化を指している。遺物の転用には、実用的な効果や便宜性を得ることを目的としたものと、祭祀行為の道具として「打ち欠き」されたものがみられた。打ち欠きについては、村木志伸氏が、「土器を日常雑器としての食器からそれとは異なるもの（あるいは非日常的な性質を有するもの）に転化させる行為」と表現されている。また祭祀行為との関係性については、糸川道行氏が、打ち欠き・穿孔土器の出土状況の分析から、集落における様相について検討されている。本書では打ち欠きについての分析はできなかったが、転用・加工がみられる資料について若干の考察を加えながら触れておく。

まず、実用的な用途を目的で転用した遺物としては、擦痕や摩滅がみられるものが出土した。土師器については判別できなかったが、須恵器杯・盤・甕胴部片、灰軸陶器があり、車1で1点(14)、車2で5点(32・239・266・267・268)、今宮で3点(52・143・158)出土した。墨痕があり、転用視と認められるものは、車2のSD3で1点(268)、今宮のSI24で1点(158)出土した。268は盤の底部を風字硯状に整形したもので、両面に擦痕が確認できる。158は灰軸陶器碗で、内面および底部高台内側に擦痕があり、さらに体部と高台の一部を打ち欠いている。車2のSI4出土の須恵器杯(32)、今宮のSI8出土の須恵器高台杯(52)は、明確な墨痕は確認できなかったが、転用視として使われた可能性が窺える。その他、車1のSI2や車2のSD3出土の須恵器甕胴部片(車1-14、車2-266・267)や、車2のSD3から出土した須恵器蓋(239)は、いずれも内面に擦痕が確認でき、さらに外面にも磨耗(擦痕か)がみられた。これらは硯以外に、石皿や播鉢のように磨り潰すための道具や、砥石等の用途で使われたものと思われる。

祭祀行為の道具として転用した遺物としては、灯明具や底部穿孔土器などが出土した。灯明の痕跡がみられた遺物は、車1で10点(56・77・78・79・137・140・151・160・163・165)、車2で2点(82・284)、今宮で2点(101・103)出土している。いずれも土師器杯・皿で、住居跡及び溝から出土している。照明としての日常道具的な用途も考えられるが、溝からの出土が多くみられ、何らかの祭祀行為に使われたものと考えられる。底部穿孔土器は、甌と判断したもの以外では車1ではSI7(82)、車2ではSD3(175)、SD9(274)、今宮ではSI2(13)、SI16(107)が出土している。確実に焼成後の穿孔と判断できる遺物としては、車1出土の土師器杯(82)、今宮出土の

土師器坏2点(13・107)がある。奈良・平安期の所産であり、何らかの祭祀行為との関連が窺える。これら以外は焼成前に穿孔された遺物であり、転用加工とは異なるものの、祭祀行為の痕跡を示す資料といえる。また車2のSD9出土の壺(274)は、方形周溝墓の可能性を示す根拠となっている。その他、菊花椀状に等間隔に口縁を打ち欠いた、車1のSD1出土の土師器坏(138)が出土している。(望月)

2. 今宮遺跡の水田跡について

今宮遺跡(2次)において、水田跡が確認されているため、触れておきたい。調査時の状況については、調査担当者の所見をそのまま引用することにした。

水田面は第2次調査区のほぼ中央で確認された。この部分が下層の埋没谷の中央に当たるためやや凹地となっており、そのために残存していたものと考えられる。水田面は傾斜に直交する溝とそれに伴う畦畔で区画されており、内部は小さな段差で2枚に区画されていた。小畦畔は確認されていない。2枚とも北側に水口状の落ち込みを持っている。水田面には小ピットが5基みられるが性格は不明である。この水田面を覆う砂層より上には条里方向の溝が掘り込まれており、この両者の間の時期には条里地割が造られたと推定できる。

水田面の北側には畦畔等は確認されていないが水田土壌が広がっている。この周辺から古墳時代前期の土器とそれらを伴う溝が発見されている。そのため本遺跡における水田は古墳時代からすでに形成されていた可能性がある。

水田跡の下層から埋没谷が確認された。埋没谷は調査区北端で落ち込み、ほぼ2次調査区すべての下層に存在する。つまり古墳時代前期以降の水田はこの埋没谷上層の凹地に営まれていたことになる。埋没谷は洪水砂によって一気に埋没したものと思われる。埋没谷の北側の微高地上から落ち込んだような状態で弥生時代後期の土器が出土している。本調査区の北側に弥生時代の遺跡が存在するものと考えられる。先述したとおり上層からは古墳時代前期の土器が出土しており、埋没谷は弥生時代後期～末期の洪水によって一気に埋没し、古墳時代になって再び生産域として開発されたのであろう。(『山梨考古』58に掲載前の原稿より)

上述の文について、整理作業の進捗により一部を修正する必要が生じている。弥生時代後期～古墳時代前期の遺物が出土しているのは埋没谷の下層からであり、上層からは古墳時代中期の土器が出土している。このことからこの間に洪水が生じた想定される。

水田跡の年代ははっきりしていない。一般的に、水田跡からは土器などの遺物が出土しないものであり、状況証拠から古代(奈良～平安時代)の所産と推定しておきたい。

今宮遺跡以外にも、中尾条里内で調査が実施され、関連する構構が確認されているので、紹介しておきたい。一部概報が刊行されているが、いずれも本報告書が出版されておらず、訂正される可能性があることをご了承願いたい。

中尾条里内の亀沢遺跡では、計4回の調査が実施されている。現在東部共立エコー園がある地点

は1992年と1994年に調査し、弥生時代後期の水田が確認されている（平成6年一宮町概報）。この水田面を洪水が覆い、その後の堆積土を掘り込んで、2条の溝が構築されている。この溝は表層条里の地割方向と一致するという。しかも、2本の溝の間隔は約12.5mで、現状の短冊型の坪割りと一致するようである。また、この北側の沓中井製作所地点は2000年に調査し、水田に關係する溝が1条確認されているが、年代ははっきりせず、条里より古い可能性が高いようである。さらに北側のコブやまなし地点では、2002年に条里方向と同じ溝が1条、条里より古いと思われる溝1条と水田跡²が2箇所確認されている。

この亀沢遺跡の南側の前河原遺跡では、2回の調査が行われ、御手洗川寄りの現在(山梨オートシステム)がある地点（2次調査、第6図前河原遺跡b）では、1999年に上層から条里と同じ方向の畦畔状の痕跡が確認され、下層から条里方向と異なる（古い）畦畔が確認されている。さらに、鞍掛遺跡の一宮中学校体育館地点（第6図鞍掛遺跡b）では、1998年に条里方向の畦畔と溝が確認されている。

このように、御手洗川の兩岸で溝状遺構や水田跡が確認されている。これは御手洗川が幾度となく流れを変え、その旧流路が凹地を呈し、そこに水田が形成されたものが、後世の削平を受けず、残存しているケースが少なくない。それ以外の地点では、表層条里の地割と同じ方向の溝だけが確認されるケースが見られる。ただしこの場合、必ずしも水田面が確認されるわけではない。これは、「微高地上では旧地表面の一部が削平されて古い地層の直上に現地表面の耕作面があり、低地部分では各時期の堆積と耕地面の復旧ないし再開発・維持が繰り返されてきたプロセスが確認される。前者の削平のプロセスは考古学的な発掘調査では確認することができず、後者は明確に検出される。（中略）条里プランに規制された平安～鎌倉時代頃の溝が検出されていることからすれば、少なくとも部分的には、換言すれば微細・基本微地形の制約の下では、その時期には耕地化が開始されており、条里地割の原型が存在したことになる。中世から近世にかけての土地利用の集約化のプロセスにおいて、地下げないし平坦化が進行し、旧耕地面を削平する形で条里地割の維持ないし明確化が行われたと考えられる。」と金山氏が説明する、条里地割の垂直的単層性とまさに符合する。ここで留意すべきは、伊勢田遺跡の科学分析で畝作の可能性が指摘されているように、条里内では必ずしも水田だけが営まれていたのではなく、木村氏が指摘するように畝が少なくないことである。畝の場合、その痕跡を確認することは水田より難しいが、条里を考える上では避けて通れず、検討課題であることは言うまでもない。

また高木氏によれば、この京戸川扇状地の微地形は、上半部と下半部では対照的であり、上半部は土石流堆積によって形成された土石流凸地であり、下半部は泥流舌状地であるという。泥流舌状地とは、「扇状地面を切って流れてきた河川が、扇状地上流れる状態に変化する点=交差点を頂点として形成される堆積地形」であり、「この上半部と下半部の境界付近で得られる湧水、あるいは交差点付近における分水によって灌漑」され、下半部に条里地割が成立したとする。第117図に確認できた湧水ポイントを示したが、的を射た指摘と思われる。

一方、平成8年～9年にかけて同じ一宮町内の坪井条里内でも調査が行われ、この表層条里の地割に沿って流れる坪田川の旧流路（埋没谷）が確認されている。調査担当の瀬田によると、「条里

方向に沿って坪田川が流れているが、この方向は自然地形に沿ったものではなく、人工的に造られたものの可能性が高い」という。特に、平成8年の調査（北藤巻遺跡）では、この旧流路（埋没谷）の底面から9世紀前半に位置付けられる土師器が出土していることから、「坪山川は条里における基幹水路として開発された可能性がある」としている。

さらに、今宮遺跡では、自然堤防上に広がる住居跡群において、奈良時代の住居跡の主軸方向がバラバラであるが、9世紀以降になると住居跡の主軸方向が表層条里の方向と一になると、調査担当者は指摘している。これらの状況から、当地域の条里施工時期を9世紀前半代とするのが、現在の見方となっている。なお、国分寺周辺の条里型地割から指摘される国分条里については、笛吹市の遺跡地図では存在しておらず、高木氏の見解とも異なるため、今後の検討課題としておきたい。

3. 墨書土器について

今回の調査で出土した墨書土器はそれほど多くないが、特徴的な文字が見られることから、検討しておきたい。

まず、今宮遺跡のSI13から2点（79・87）、遺構外から1点（244）出土している「石」は、地名を表していると思われる。現在石という地名は、御手洗川の upstream の京戸川流域に拡がっており、その関連性を考えておきたい。一方で、町内からは石禾（石和）の墨書も多く出土しており、石禾（石和）との関連性も留意しておく必要があるかもしれない。

また、車居遺跡（2次）のSX1付近から出土した「川口」（327）も地名を表していると考えられる。当初、河口駅との関連性も想定したが、それよりも調査地点が田垂川と御手洗川との合流付近であることから、河口付近という理解でいいのではないかと考えている。

今宮遺跡のSI2の10と車居遺跡（2次）のSX1付近から（330）、「路」が出土している。路は、まさに「御坂路」のような「みち」を示していると考えられる。「路」の墨書土器は、他にも鞍掛遺跡（一宮中学校プール地点）、大原遺跡（遺構外）から出土し、いずれも9世紀代と考えられる。「路」の墨書土器は、武蔵国や上野国でも若干出土しており、これらは東山道や関連道路に隣接した遺跡において見られると指摘されている。このことから、「路」の墨書は道路を示すものであり、今宮・車居・鞍掛遺跡と大原遺跡を結ぶ「みち」が存在していることを、墨書土器の出土は暗示していると考えたい。

以下、この「みち」について、検討を加えておきたい。

猪股氏の指摘にもあるように、古墳時代後期～奈良時代（国分二寺建立以前）においては、扇状地の湧水帯に立地する鞍掛遺跡群（鞍掛・清水・車居・今宮遺跡）と大原遺跡の2箇所を拠点集落が営まれる。その後、やや内陸の扇状地中央の遺跡空白地に甲斐国分僧寺・国分尼寺が造営されるに伴い、関連した集落（松原遺跡、両ノ木神社遺跡、竜ノ木遺跡、金山遺跡、車地藏遺跡、桜畑遺跡、矢倉遺跡、国分寺西遺跡、北中原遺跡など）が集中するようになると言われている。これら新興集落の北側で、鞍掛遺跡と大原遺跡との間には、筑前原・筑前原北遺跡、西山町遺跡、南西田遺跡など古墳時代～奈良時代の集落が存在するが、ほぼ鞍掛遺跡群と大原遺跡の2つの拠点集落を結ぶ、ルート上に位置している。このことから、遅くとも古墳時代後期には、湧水帯付近に立地

する鞍掛遺跡群と大原遺跡の2つの拠点の集落を結ぶ「みち」が存在していたと、想定しておきたい。当然のことながら、「みち」はこれ1つではなく、集落と墓域である古墳群を結ぶもの、他の集落とを結ぶものもあったことは想像に難くない。

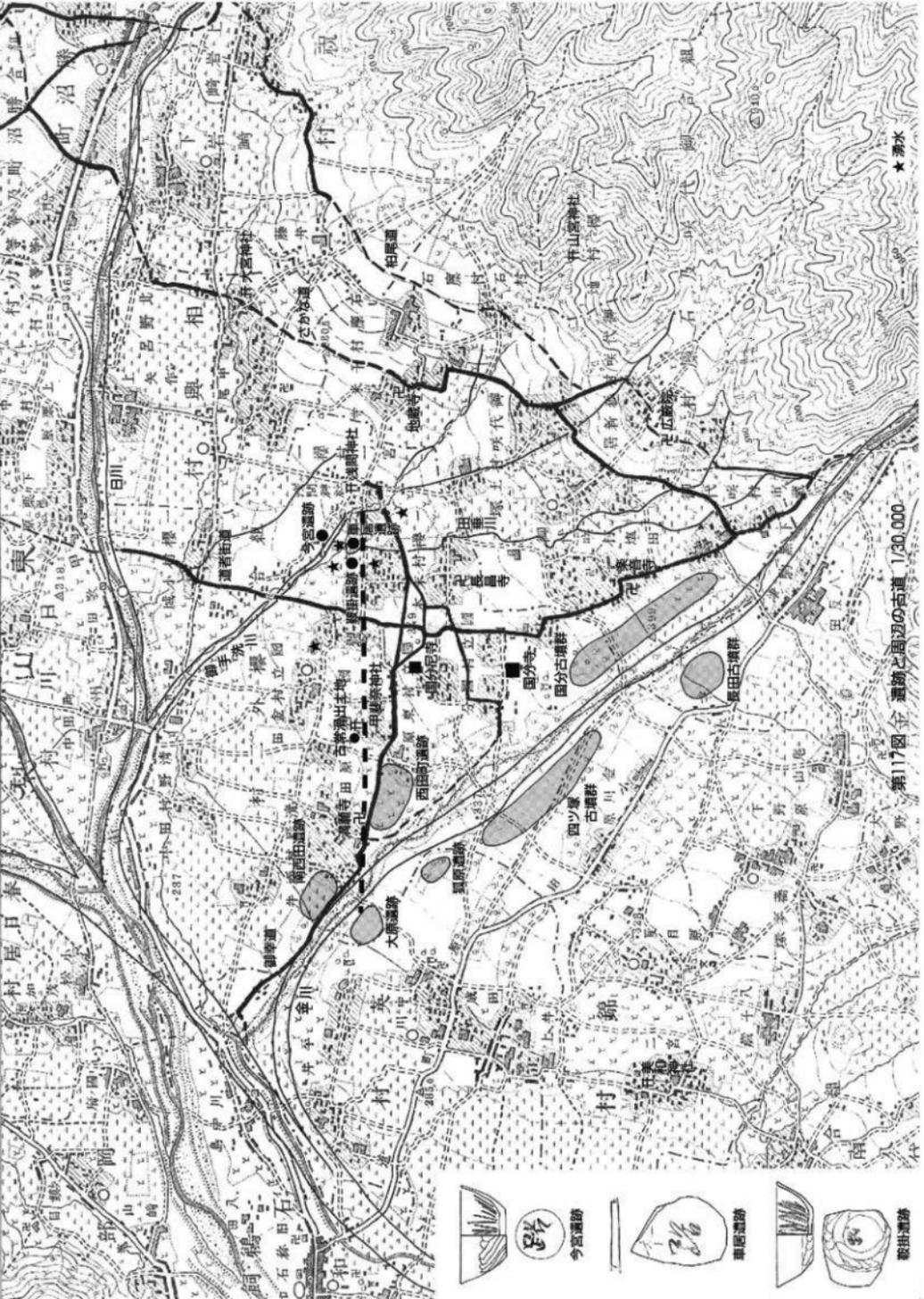
ところが、国分二寺造立に伴い、周辺部に関連集落が営まれるようになると、様相が変化したものと思われる。特にこの一帯に林部郷の中心地があったと言われており、国分二寺付近を通る、前述の「みち」よりやや南に迂回する「みち」の存在が想定される。このルート上には、平安時代の弘仁末から藤原期初頭の過渡期に制作されたとされる木造十一面観音立像（県指定）が安置される満願寺、甲斐国惣社とも言われる甲斐奈神社があり、また甲斐奈神社の近くの畑からは、古瀬戸瓶を中に入れた14世紀代の古常滑大甕（県指定）が出土している。さらに12世紀後半から13世紀初頭にかけての青白磁など中世の遺構や遺物が多数出土した西田町遺跡や、甲斐奈神社の東側には鎌倉～室町時代の大溝や建物跡、さらに新しい時期と思われる土器が見つかった筑原遺跡なども存在する。

この「みち」は、現在の御幸道（あるいは一宮）と呼ばれるルートとはほぼ重なる。御幸道とは、甲斐一宮である浅間神社の公祭である御幸祭のルートを示している。現在の御幸祭は明治20年頃に降変更された北側のルートのものであり、明治以前は南側ルートの古御幸道を通っていたという。この古御幸道は、一宮町内では2つのルートがあり、南側の国分寺を通過するルートの方が、古いと言われている。この御幸祭がいつまで遡るのかははっきりしないが、遅くとも11世紀代には始まったとする説がある。なお、大正3年刊の『東八代郡誌』の浅間神社の項には「淳和天皇天長2（825）年、国司文屋秋津、本州の水籬を朝廷に献上しければ、朝廷勅使を本社及び鎌村の美和社（二宮）、西山梨郡国里村の玉諸社（三宮）に下し、水籬を祈願するため、三社を赤坂山の麓、釜無川の東岸に勧請し、宮祠を造立し、神輿行幸の行在所と為し、毎歳その典を挙行せしむ。」と記載されている。しかし、この出典は明らかではなく、またこの時期には浅間神社はまだ建立されていなかったと思われる、疑問視せざるを得ない。

一宮浅間神社は現在木花咲耶姫命を祭神とするが、もともとは浅間神を祭るために浅間神社となったと言われている。『日本三代実録』には、貞観6（864）年の富士山噴火は浅間大神の祟りであり、甲斐国に浅間神が祭られていなかったためであるとされ、貞観7（865）年12月9日に甲斐国八代郡の郡家以南に、続く12月20日に山梨郡に浅間明神が建立されたと記載されている。現在の浅間神社が、八代郡・山梨郡のどちらに属していたのか、郡家以南という記載と関連して解釈が分かれるところであるが、この頃山宮神社から現在の地に遷宮されたとするのが、有力な見方であることには変わりがない。

9世紀後半に浅間神社が建立されたことにより、浅間神社、鞍掛遺跡群、国分二寺、大原遺跡を結ぶルートが甲斐国内で重要な位置付けとなっていったと思われる。つまり、「路」の墨書は数多のみちを指しているのではなく、官道に準じる重要な「支道」を指していると考えておきたい。

もう1点、この付近の「みち」の形成に関して、中尾条里との関連が見過ごせない。この条里については前述したように、施工時期は9世紀前半代とされている。9世紀半ばに建立されたとされる浅間神社は中尾条里に制約されており、坪界の角に鎮座している。今回の調査原因である県道市



第117図 金 遺跡と周辺の古道 1:30,000

★湧水



之蔵山梨線は、浅間神社でL字形に屈折しており、この渠道はまさに坪界線に構築されている。この道は、江戸時代の一之宮村絵図にも記されており、さらに遡るものと考えていいのではないだろうか。ただし、細かい点を指摘すれば、現道は浅間神社の東側を迂回しているが、江戸時代は西側を迂回している。

だとすれば、この道は浅間神社の西方に位置する車居遺跡と鞍掛遺跡を通過しており、先述の「みち」と重なってくることになる。ここで注目すべきは、車居遺跡（1次）で確認された、ほぼ東西に伸びるSD1である。この溝は、条里プランと方向が重なるものの、かつ断面形がV字形を呈している。一宮町内では、坪界溝は平成7年度に中尾条里上矢作工業団地地区で1例確認されており、また他の条里関連の溝とも、このSD1はやや楕円を異にする。県史編年の奈・平Ⅸ～Ⅹ期に位置付けられるものであるが、この「みち」との関連性を考える必要があらう。

また、浅間神社の北東に位置する大宮神社付近には、古代の豪族である三枝氏の本拠地があったとされ、また野呂郷の中心的集落も浅間神社の北側に存在したと想定できることから、この間を結ぶ道も存在したであろう。

なお、この他にも中世の鎌倉街道の支道として、一宮町には3本の鎌倉道が知られている。東から、柏尾道、さかな道（魚道）、道者街道である。柏尾道は「笹子道」と「御坂路」を結ぶ近道として利用されたという。また、広蔵院の住職が甲州市の景德院に通った道とも言われており、まさに広蔵院を通過している。この広蔵院は、寺伝によると寛正元（1460）年の開創と言われている。さかな道（魚道）は、静岡方面から魚を積んだ馬が通ったことから呼称されているという。古代、この地に勢力を築いた在庁官人の三枝氏一族の屋敷があったと言われている大宮神社と、『甲斐國志』にこの地（物部郷という）の娘が物部尾輿に嫁ぎ守屋の母となり、推古天皇の時に地蔵3尊を造らせたと言う伝承が記述される地蔵寺付近を通過している。また、道者街道は、秩父方面から雁坂峠を越えて富士講の行者が通った道、あるいは金峰山と富士山を結ぶ修験者の通用道と言われ、鎌倉街道の市之蔵辺りから分岐し、天平12（740）年創建と伝えられる楽音寺や塩田郷、国分二寺を通過している。これらの道の起源が、いつ頃まで遡れるかは明確ではないが、道者街道の一部は官道である御坂路から国分二寺へ抜ける道として、国分二寺創建時まで遡る可能性を指摘できよう。

「路」の調査から飛躍した考えを述べたが、その痕跡を見つけることはなかなか難しいことである。これまでも、北中原遺跡、狐原遺跡の報告書で「みち」について言及されているが、今回できる限り新たな視点で言及するように努めたつもりである。集落間を結ぶ道は必ず存在したのであり、留意していく必要があらう。

なお、第117図は、明治32年陸地測量部発行「甲府市」の地図を、加工して作成したものである。これは、明治40年の水害により、金川や笛吹川の流路がこの100年の間だけでも大きく変わっており、できるだけ古く正確な河道を祖上にあげたいという意図によるものである。また、この図には現在の河川の位置も図示しておいたが、遺跡の立地には河川の位置の検討が欠かせないものであり、今後の調査の進捗により、山河道を復元していくことは課題である。なお、御幸道と鎌倉道は、県が作製した昭和の地図による推定道筋を、第117図では若干修正している。一部修正しきれていない箇所もあるが、今後の課題としておきたい。鎌倉街道に関しては、明治40年の水害による金川の

流路変更に伴う修正が必要であり、今回は敢えて図示していない。

4. 車居遺跡（2次）のSX1（敷石遺構）について

今回確認した敷石遺構（SX1）は、当初その形態から、古墳の石室の可能性を想定した。一見すると1辺2m程のやや膨張り状の玄室に、4m程の羨道が付随する構造のようである。玄室は南東隅が比較的残りが良いことから、礎床を構築したのち壁を積み上げたという構造が窺え、壁は基本的には横口積みされ、部分的に小口積みによって調整され、裏込め石も認められる。ここまでは問題はないが、次の疑問が残る。羨道部の床が十分に敷石されていないのは後世における欠落だとしても、羨道部に側壁が構築されていたと想定できるほど平坦ではない。また、玄室に使用されている石が総体的に小型であり、とても封土の土圧に耐えられる構造とは考え難い。さらに、礎床が先に構築されること、平面形が方形の玄室は県内では確認されていないことなど、古墳や積石塚の在り方は異なっている。一宮町の古墳は、扇状地の扇頂に立地する千米寺古墳群、扇尖部の楽音寺古墳群、金川の右岸の回分古墳群、左岸の四ツ塚古墳群に代表されるように集中して構築される。その一方で、都塚のように扇状地先端部にも古墳が単独で存在する例もあるが、調査がされておらず、その構造は不明である。これらの古墳と比較すると、SX1の構造は異質であり、とても古墳の石室とは想定し難い。また、出土土器も流れ込みの可能性もあるが、奈良～平安時代の所産のものである。これらの状況証拠から、古墳の石室ではなく、奈良時代以降の遺構と考えたい。

それでは、SX1が古墳の石室でないとする、何が考えられるだろうか。この性格を考える上での情報は、あまり多くない。

まず、青銅製の鏝子と桃核の出土が目目される。鏝子は羨道部の敷石の下から出土しており、故意に安置したと想定でき、地鎮具と考えられる。また、桃核は玄室の床面及び敷石下のPit 2などから併せて90点が出土している。その大半が玄室に集中するが、敷石の下や羨道部の石の上からも1点ずつ出土している。県内の古墳から桃核が出土したという報告例は知らないが、県外ではいくつか報告例が知られている。古墳の場合、あくまでも石室に副葬品として安置されたものであり、神話などから呪術的な意味が想定されている。今回は掘り型からも出土していることは注目される（注）。Pit 2は径約60cmのほぼ円形で、深さ30cm程であるが、15点がピット内の覆土から出土している。この状況からは、実が付いた状態ではなく、桃核の状態で敷石の下に埋められたと考えるのがより妥当だと思われる。これらは食物残渣ではなく、何らかの祭祀的意図を考えるべきであろう。

SX1の西側に隣接して井戸跡であるSE1が確認されている。SE1は時期を特定できる情報に乏しいが、埋め戻した石の間から中世の土器が僅かに出土しており、SX1より後出の可能性もあるが、井戸と敷石遺構との関連性を疑いたくなる。

ところで、この敷石遺構や井戸跡は、大きな溝状遺構（SD3）内に存在する。現在河垂川は、調査地点付近で、「コ」の字状に迂回している。西側の鞍掛遺跡の調査から、一宮中学校方向に旧流路が存在したことが判明している。これが、ある時期にコの字状に河川改修されたと考えられる。現在この河垂川は、ほぼ一ノ宮と末木の大字境になっており、少なくとも江戸時代の一ノ宮村と末木村にまで遡ることができる。その一方で、SD3は地山である真土を掘り込んでおり、砂質土が

覆土になる溝状遺構で、旧河道であった可能性が高い。しかも、SI4付近で、「く」の字状を呈していることから、導水遺構であった可能性も考えられる。しかし、ある段階で、この河道を改修する土木工事をし、現状のコの字状に西側に張り出すように改修したのではなかろうか。つまり、今回の調査区の西側であるコの字形の敷地には何らかの遺構が存在し、確認されたSD3は、その遺構の東辺に当たるのかもしれない。さらに仮説を加えれば、SD3については何回か溝を構築し直しており、コの字形の敷地を巡る溝が存在した可能性も考えられる。

また、今回の調査では、手づくね土器が今宮遺跡で14点（SI7-50、SI17-117、SI20-128、SI21-141、SI23-150、集石遺構-181~186、SD1-187、SD9-195、試掘2Tr-248）、車居遺跡（1次）で9点（SI8-112、SD1-190~193、試掘3Tr-231~234）、車居遺跡（2次）で13点（SI4-34、SI5-47、SI7-61、SD3-216~224、Bグリッド掘乱《SD3か?》-281）が出土している。時期的には、古墳時代後期から平安時代まで幅があるものの、手づくね土器は何らかの祭祀行為の可能性を示唆する遺物と言われており、継続的に祭祀行為が行われていたと考えたい。

これらの状況から、SX1は古墳ではなく、古代の何らかの祭祀遺構と考えたい。現時点では鞍掛遺跡の調査成果が公にされていないので難しいが、浅間神社の西方という立地条件、しかもしばしば氾濫していた河川の兩岸で、なおかつ田垂川と御手洗川の合流地点にも当たることから、水辺の祭祀、特に治水を祈念したのではないかと想定しておきたい。

（注）ただし、古墳の石室から桃核が発見される場合は、あくまでも条件がよい状態に限られ、かつ石室を解体しない限り、掘り型を調査することはありえない。そのため、掘り型に安置された桃核がないとは断定しがたい。

5. 今後の課題

一宮町域には国分二寺の建立に伴い、国分寺関連集落が多く存在するなど、古代の集落が集中することで知られている。これまで国道20号バイパスや中央自動車道の建設工事を端緒に、数多の発掘調査が行われてきた。その成果は、部分的に公にされてきたものの、調査事例の多さにより報告書が刊行されず、第三者に周知されていないことは、誠に残念である。

現在、笛吹市では国分寺・国分尼寺の整備事業を進めており、今後確認調査の進捗により、国分二寺の状況は少しずつ解明されることであろう。その一方で、国分寺の関連集落の調査成果はあまり公にされておらず、また調査を実施しても造寺・営繕を支えた工房等の概要を明らかにすることができていない。国分二寺の状況もさることながら、それらを取り巻く環境を分析していくことは、この地域の歴史を解明する上で避けて通れないことである。

今回報告した今宮遺跡と車居遺跡調査はほぼ道路幅の調査であり、その成果は限定的であるが、国分二寺の造営時に存在した拠点集落であり、その造営に関わったであろう集落の一端を、報告できたと思う。西隣の鞍掛遺跡とは相関性の高い集落であることは間違いなく、鞍掛遺跡と清水遺跡の調査成果の報告をもって、この地域の歴史像の解明に資すると考えている。

これまで一宮町内の古代集落は、甲斐国の「祀」の中心である国分二寺という視点で取り上げら

れることが多かったが、今回は甲斐一之宮である浅間神社の西方という立地条件を考慮したつもりである。それ故、河川の変遷を含む地理（自然）的環境にも留意したが、御手洗川・田垂川の河川の変遷や、洪水などの自然営力との関連なども課題として残されている。また、古代以降は車居遺跡（1次）のSD1（12世紀頃）と車居遺跡（2次）のSD1・SE1の遺構をもって、若干の遺物は出土するが、生活痕跡がはっきりしなくなる。そのため、土地利用状況についてはまったく言及することができず、これも課題とせざるを得ない。

調査に着手してから10年以上が経過し、報告書作成には色々な面で困難が付きまどってしまった。町村合併により、今まで十分な知見がない地域の報告書を作成することになったため、報文中には事実誤認や議論の飛躍もあろうが、報告者としては出来る限りの責を果たそうとした次第である。本報告が、この地域の歴史像を解明する契機となることを期待しつつ、多くの方のご協力に感謝し、結びとしたい。

（野崎）

引用・参考文献

- 秋山 敬 2004 『甲斐の荘園』 甲斐新書刊行会
浅間神社 2005 『甲斐國・一之宮 浅間神社誌』
芦川村村誌編纂委員会 1992 『芦川村誌』上巻
荒木志伸 1999 『墨書土器にみえる諸痕跡』『お茶の水史学』第43号
石和町教育委員会 1996 『石和の地名』
一宮町 1965 『一宮町誌』
一宮町教育委員会 1990 『大原遺跡発掘調査概報』
一宮町教育委員会 1992 『筑前原遺跡』
一宮町教育委員会 1996 『いちのみやの遺跡 一宮町埋蔵文化財発掘調査概要報告—平成6年度—』
一宮町教育委員会 1998 『いちのみやの遺跡 一宮町埋蔵文化財発掘調査概要報告—平成8年度—』
一宮町教育委員会 1999 『いちのみやの遺跡 一宮町埋蔵文化財発掘調査概要報告—平成9年度—』
一宮町教育委員会 2004 『松原遺跡』
一宮町教育委員会ほか 1995 『電ノ木遺跡』
一宮町教育委員会ほか 1997 『西田町遺跡調査報告書』
一宮町教育委員会ほか 1998 『南西田遺跡調査報告書』
糸川道行 2005 『古代土器の打ち欠き・穿孔—千葉県印西市鳴神山遺跡群出土土器の検討—』『研究紀要』24 千葉県文化財センター
猪股喜彦 1996 『金川扇状地の土地開発—甲斐国分寺周辺の集落—』『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第7集
猪股喜彦 2002 『甲斐国分寺地域における集落構造と展開に関する若干の考察』『山梨県考古学協会誌』第13号
大山真亮 1994 『桃』『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズ刊行会

- 小川貴司 1996 「火打石の提起する諸問題」『土筆』第4号
- 春日居町誌編纂委員会 1988 『春日居町誌』
- 鐘方正樹 2003 『井戸の考古学』同成社
- 金田章裕 1985 『条里と村落の歴史地理学研究』大明堂
- 金田章裕 1995 「条里地割の形態と重層性」『条里制研究』第11号
- 木村茂光 1992 『日本古代・中世畠作史の研究』校倉書房
- 木村茂光 1996 『ハタケと日本人—もう一つの農耕文化』中公新書
- 甲府市教育委員会 2006 『甲府市内遺跡Ⅲ』
- 甲府市史編さん委員会 1989 『甲府市史』史料編第1巻 原始・古代・中世
- 甲陽圖書刊行會 1911 『甲斐國志』上
- 甲陽圖書刊行會 1912 『甲斐國志』下
- 齊藤享治 1998 『大学テキスト 日本の扇状地』古今書院
- 齊藤孝正 1994 「東海地方の施釉陶器生産—猿投窯を中心に—」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東3 施釉陶器—』古代の土器研究会
- 酒井清治 1993 「武蔵国内の東山道について—特に古代遺跡との関連から—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集
- 坂井 隆 1989 「東山道・あづま道を中心とする道路遺構の考古学的特徴—上野地方の陸上交通史序論—」『研究紀要』6 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 坂本大輔 2006 「日本古代の地方行政と神社—古代神社からみる甲斐国府」『山梨県考古学協会誌』第16号
- 坂本美夫 1984 「甲斐の郡（評）郷制」『研究紀要』1 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 坂本美夫 1984 「甲斐国府—その環境と展望—」『研究紀要』3 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 敷島町教育委員会 2001 『埋蔵文化財試掘調査年報'01』
- 敷島町教育委員会 2002 『埋蔵文化財試掘調査年報'02』
- 式内社研究会 1981 『式内社調査報告』第十巻 東海道5
- 菅原征子 2003 「富士山噴火による甲斐国浅間神社の創建」『日本古代の民間宗教』吉川弘文館
- 須藤 賢・谷岡武雄 1951 「甲斐條里の諸問題—甲府盆地の歴史地理的研究(第1報)—」『地理学評論』24-2 日本地理学会
- 瀬田正明 1996 「5. 今宮遺跡」『山梨考古』第58号
- 高木勇夫 1985 『条里地域の自然環境』古今書院
- 高田賢治 2002 「砥石から見た平安時代の物流—甲府盆地を中心として—」『八ヶ岳考古』平成13年度年報
- 武田 広 2001 『一宮町 史跡めぐり』
- 武田 広 2003 『一宮町の古道と石造物』

- 中山誠二 1994 「山梨県」『古代における農具の変遷—稲作技術史を農具からみる—』（助静岡原埋蔵文化財調査研究所設立10周年シンポジウム資料集）
- 中山誠二 1996 「甲府盆地の埋没条里—条里の施工時期をめぐって—」『条里制研究』第12号
- 新田真也 2006 「『日本三代実録』からみた古代八代郡の動向—甲斐国八代郡擬大領無位伴直真貞—」『山梨県考古学協会誌』第16号
- 新津 健 1999 「遺跡から出土するモモ核について—山梨県内の事例から—」『山梨考古学論集』Ⅳ
- 平川 南 2003 「古代の内神」『古代地方木簡の研究』吉川弘文館
- 平凡社 1995 「山梨県の地名」
- 堀内 真 1997 「御幸祭について」『山梨県史研究』第5号 山梨県御坂町 1971 「御坂町誌」本誌編
- 御坂町・御坂町教育委員会 1992 「御坂町の地名考」
- 八代町 1975 『八代町誌』上巻
- 八代町 1976 『八代町誌』下巻
- 山梨教育會東八代支會 1914 「東八代郡誌」
- 山梨郷土研究会 1992 「山梨郷土史研究入門」山梨日日新聞社
- 山梨県 1998 「山梨県史」資料編1 原始・古代1
- 山梨県 1999 「山梨県史」資料編2 原始・古代2
- 山梨県 2001 「山梨県史」資料編3 原始・古代3
- 山梨県 2003 「山梨県史」民俗編
- 山梨県 2004 「山梨県史」通史編1 原始・古代
- 山梨県考古学協会 1992 「甲斐型土器—その編年と年代—」
- 山梨県教育委員会 1985 「鎌倉街道（御坂路）」
- 山梨県教育委員会 1986 「若彦路」
- 山梨県教育委員会 1988 「御幸道」
- 山梨県教育委員会 1988 「鎌倉道」
- 山梨県教育委員会 1995 「北中原遺跡」
- 山梨県教育委員会 1996 「狐原遺跡」
- 山梨県教育委員会 1997 「梅平本田遺跡」
- 山梨県教育委員会 1999 「南西田遺跡・西林遺跡・四ツ塚古墳群」
- 山梨県教育委員会 2000 「二本柳遺跡」

I. 今宮・伊勢田遺跡のプラント・オパール分析

1. はじめに

植物珪酸体は、ガラスの主成分である珪酸（ SiO_2 ）が植物の細胞内に蓄積したものであり、植物が枯死した後も微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール（植物珪酸体）分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出し、その組成や量を明らかにする方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている。

ここでは、今宮・伊勢田両遺跡において稲作跡の探査を目的にプラント・オパール分析を行った結果について報告する。

2. 試料

(1) 今宮遺跡

調査地点は、3Tr、4aTr、4bTrの3地点である。試料は、3TrではIV層、V層、IX層、X層の4点、4aTrではI層、IV層、VIII層、VIII'層、IX層、X層の6点、4bTrではI層、IV層、V層、VIII層、IX層、X層、XI層、XII層の上下の9点、計19点が採取された。

(2) 伊勢田遺跡

調査地点は、TP1、TP2、SD1、SD2の4地点である。

試料は、TP1ではII層、III層、VI層の3点、TP2ではII層、III層、V層、VI層の4点、さらにSD1とSD2の覆土各1点、計9点が採取された。

3. 分析方法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）」をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料上の絶乾（105℃・24時間）、仮比重測定
- 2) 試料土約1gを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40 μm 、約0.02g）
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電子灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散（300W・42KHz・10分間）
- 5) 沈底法による微粒子（20 μm 以下）除去、乾燥
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は計数値を試料1g中のプラント・オパール個数(試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める)に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重(1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞球酸体1個あたりの植物体乾重, 単位: 10^{-8} g)を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を産出し図示した。換算係数は、イネは赤米、キビ族はヒエ、ヨシ属ヨシ、ウシクサ族はススキ、タケ亜科については数種の平均値を用いた。その値は、それぞれ2.94(種実重は1.03)、8.40、6.31、1.24、0.48である(杉山・藤原, 1987)。

4. 分析結果

稲作跡の探査が主目的であるため、同定は、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族(ススキやチガヤなどが含まれる)、キビ族(ヒエなどが含まれる)の主要な5分類群を中心に行った。

採取された試料すべてについて分析を行った結果、イネ、ヨシ属、ウシクサ族、タケ亜科の各分類群のプラント・オパールが検出された。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1、2及び図1～5に示した。また、主な分類群については巻末に顕微鏡写真を示した。

5. 考察

稲作跡(水田跡)の検証や探査を行う場合、一般に試料からイネのプラント・オパールが検出されれば、そこで稲作が行われていた可能性が考えられる。そのうち、試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合には、その可能性が高くなる。また、その層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて稲作の可能性について検討を行った。

(1) 今宮遺跡

1) 3Tr

ここでは、IV層、V層、IX層、X層の4試料について分析を行った。その結果、イネのプラント・オパールは、IV層とV層から検出された。プラント・オパール密度は1,200～1,600個/gとやや低い値である。したがって、本地点ではこれらの層準において稲作が行われていた可能性は考えられるものの、他所からの混入の危険性も否定できない。

2) 4aTr

ここでは、I層、IV層、VIII層、IX層、X層の6試料について分析を行った。その結果、イネのプラント・オパールはI層、IV層、IX層、X層より検出された。このうち、I層は比較的新しい時期の耕作土である。IV層、IX層、X層の各層準ではいずれもプラント・オパール密度が1,000個/g以下と低い値である。したがって、本地点ではこれらの層準において稲作が行われていた可能性が考えられるものの、他所からの混入の危険性も否定できない。

3) 4bTr

ここでは、I層、IV層、V層、VIII層、IX層、X層、XI層、XII層の上下の9試料について分析を行った。その結果、イネのプラント・オパールはV層を除く各層より検出された。したがって、これら

の層準で稲作が行われていた可能性が考えられる。このうち、Ⅰ層は比較的新しい時期の耕作土である。Ⅳ層ではプラント・オパール密度は3,000個/g弱とやや低い値であるものの、直上のⅤ層からは全く検出されていないことから、上層からの混入の危険性は考えにくい。したがって、本層準では本地点あるいは近傍において稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

(2) 伊勢田遺跡

1) TP1

ここでは、Ⅱ層、Ⅲ層、Ⅵ層の3試料について分析を行った。その結果、Ⅱ層とⅢ層よりイネのプラント・オパールが検出された。プラント・オパール密度は6,000~6,100個/gと高い値である。したがって、これら両層準においては稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

2) TP2

ここでは、Ⅱ層、Ⅲ層、Ⅴ層、Ⅵ層の4試料について分析を行った。その結果、Ⅱ層とⅢ層よりイネのプラント・オパールが検出された。このうち、Ⅱ層ではプラント・オパール密度が7,400個/gと高い値である。Ⅲ層では3,000個/gとやや低い値であるが、TP1では高い値が認められている。したがって、これらの層準において稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

3) SD1・2覆土

ここでは、両試料からイネのプラント・オパールが700個/gとやや低い密度であるが検出された。したがって、これらの溝が稲作施設に伴うものである可能性が考えられる。

なお、各調査地点ともほとんどの層準において湿地に生育するヨシ属の量が少なく、乾いた土壤条件を好むススキ属やタケ亜科が比較的優勢である。とくに、伊勢田遺跡ではこの傾向が顕著である。したがって、それぞれの遺跡一帯は、概ね乾いた環境で現在に至ったものと推定される。また、伊勢田遺跡で営まれた稲作は畑作であった可能性も考えられる。

6. まとめ

今宮遺跡・伊勢田遺跡においてプラント・オパール分析を行い、稲作跡の探査を試みた。その結果、今宮遺跡では1bTrのⅣ層、伊勢田遺跡ではⅡ層とⅢ層においてイネのプラント・オパールが高い密度で検出されたことから、これらの層準において稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、伊勢田遺跡のSD1とSD2の覆土からイネのプラント・オパールが検出されたことから、両溝が稲作遺構に伴うものである可能性が示唆された。

参考文献

- 杉山真二・藤原宏志(1987)川口市赤山障屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析、赤山—古環境編—、川口市遺跡調査会報告、10:281-298。
- 藤原宏志(1976)プラント・オパールの分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—、考古学と自然科学、9:15-29。
- 藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査—、考古学と自然科学、17:73-85。

表1 今宮遺跡のプラント・オパール分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	3Tr					4aTr					4bTr									
	IV	V	IX	X		I	IV	W	IX	X		I	W	V	W	IX	X	XI	XII-1	XII-2
イネ	12	16				60	10		7	8		52	7		27	22	11	13	7	7
キビ族 (ヒエ属など)																				
ヨシ属	12	11	7			13	10	13	15			6	15	7		7	11	7	7	
ウシクマ族 (ススキ属など)	6	5	7			13	10	7									11	13	7	7
タケ亜科 (おもにネヅサ属)	18	32	14	14		114	20	30	20	58		58	59	7	20	65	86	86	27	93

播定生産量 (単位: kg/m²・年)

イネ	0.35	0.47				1.77	0.29		0.22	0.24		1.53	0.22		0.78	0.64	0.34	0.39	0.20	0.21
(イネ科)	0.12	0.16				0.62	0.10		0.08	0.09		0.53	0.08		0.27	0.22	0.12	0.14	0.07	0.07
キビ族 (ヒエ属など)																				
ヨシ属	0.75	0.67	0.44			0.94	0.63	0.84	0.82	0.94		0.41	0.93	0.46	0.46	0.72	0.42	0.42		
ウシクマ族 (ススキ属など)	0.07	0.07	0.08			0.17	0.12	0.08								0.14	0.16	0.08	0.09	
タケ亜科 (おもにネヅサ属)	0.09	0.15	0.07	0.07		0.55	0.10	0.16	0.09	0.32	0.28	0.28	0.28	0.03	0.10	0.31	0.41	0.41	0.13	0.45

表2 伊勢田遺跡のプラント・オパール分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	試料			TP1				TP2				SD1	SD2
	II	III	VI	II	III	V	VI	覆土	覆土				
イネ	61	60		74	30			7	7				
キビ族 (ヒエ属など)													
ヨシ属	6		9	7	7	7							
ウシクサ族 (ススキ属など)	18	22	9	7	7		12		14				
タケ亜科 (おもにネザサ節)	115	119	83	103	96	52	112	87	35				

推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

イネ	1.78	1.75		2.17	0.87			0.21	0.20
(イネ類)	0.62	0.61		0.76	0.30			0.08	0.07
キビ族 (ヒエ属など)									
ヨシ属	0.38		0.58	0.47	0.47	0.41			
ウシクサ族 (ススキ属など)	0.23	0.28	0.11	0.09	0.09		0.15		0.17
タケ亜科 (おもにネザサ節)	0.55	0.57	0.40	0.50	0.46	0.25	0.54	0.42	0.17

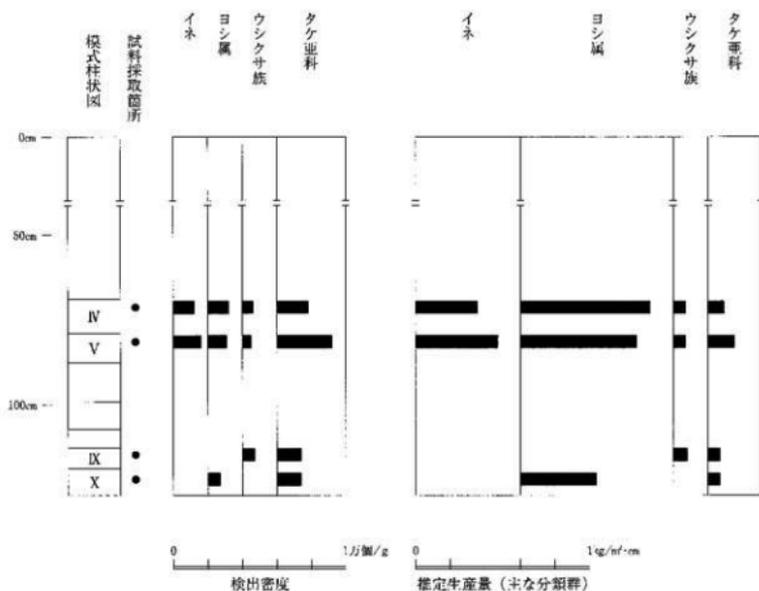


図1 今宮遺跡3 Trにおけるプラント・オパール分析結果
※主な分類群について表示

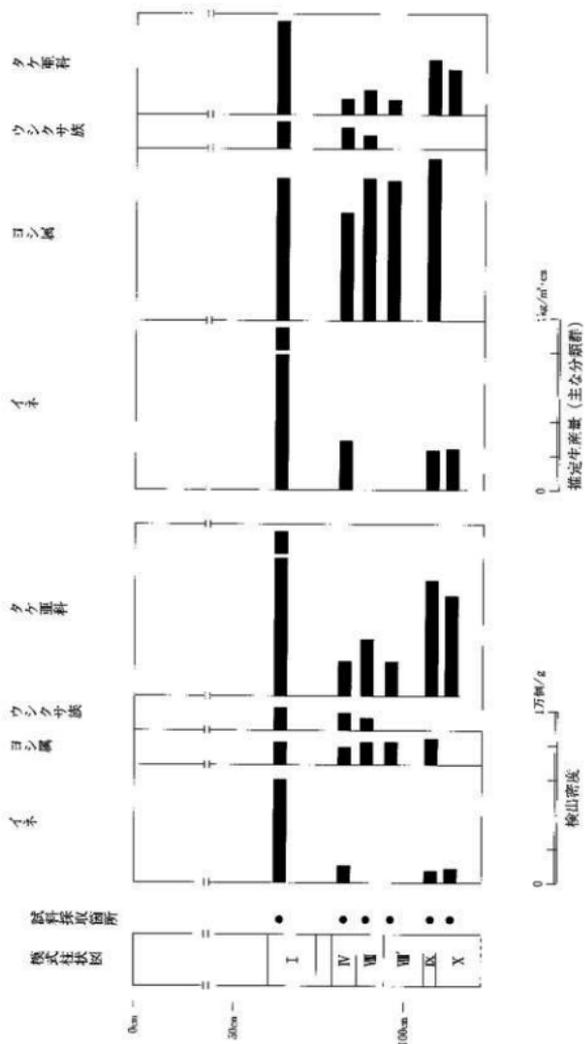


図2 今宮遺跡 4aTr におけるプラント・オパール分析結果

※ 主な分類群について表示

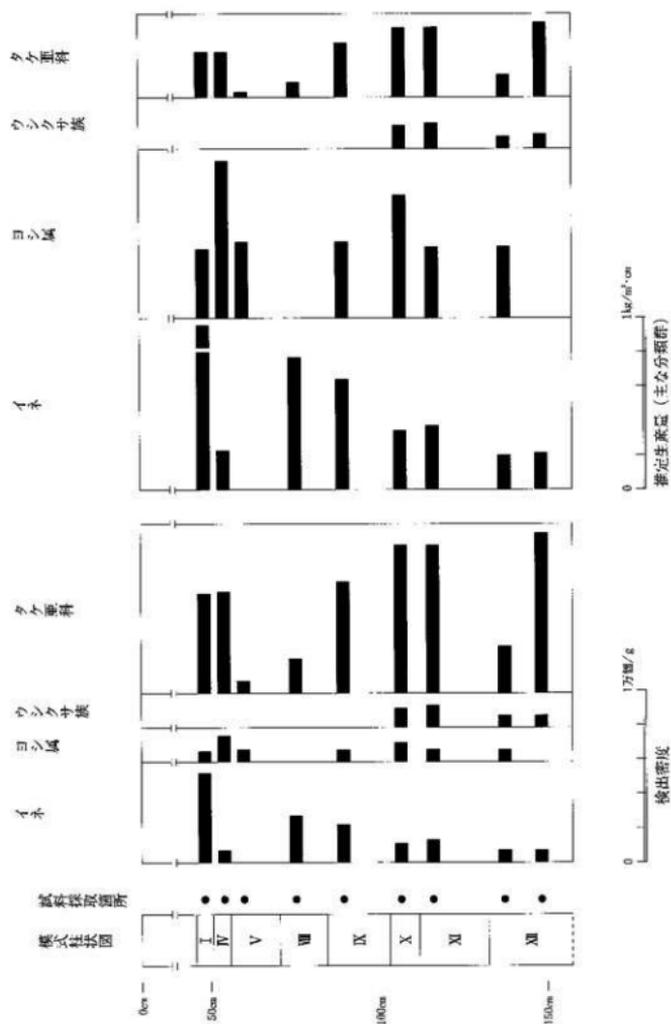


図 3 今宮遺跡 4bTr におけるプラント・オバール分析結果
※主な分類群について表示

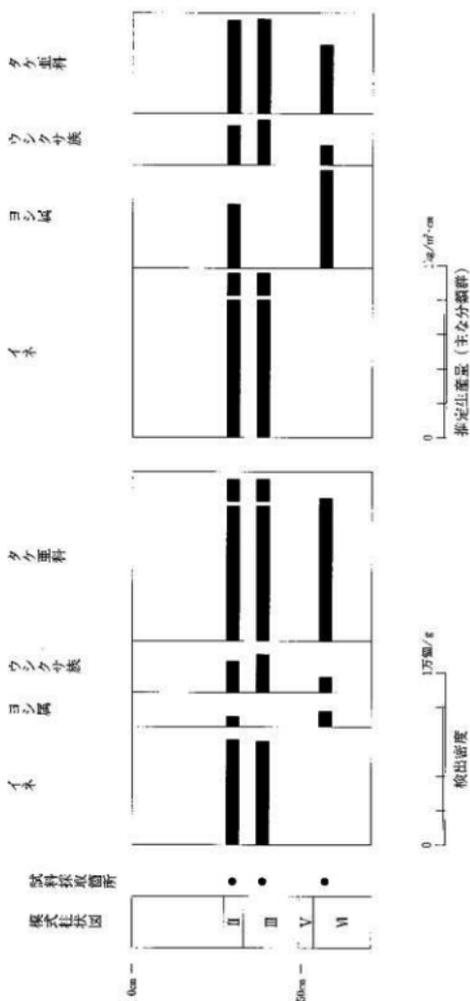


図 4 伊勢田遺跡TPIにおけるプラント・オパール分析結果
※主な分類群について表示

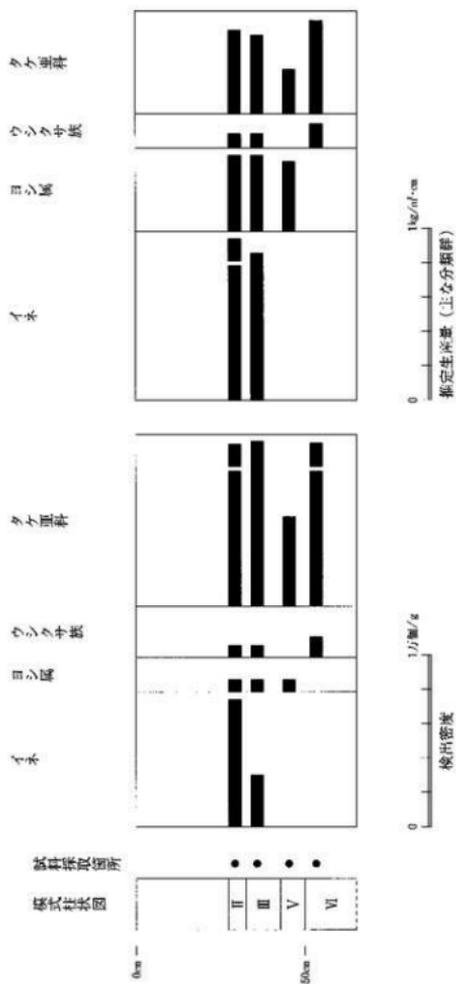
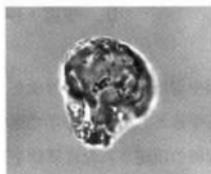


図5 伊勢田遺跡TP2におけるプラント・オパール分析結果

※主な分類群について表示

植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真

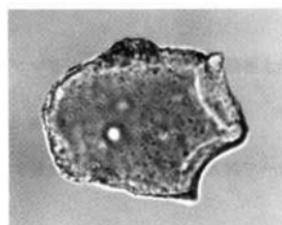
No.	分類群	遺跡	地点	試料名
1	イネ	今宮	3Tr	V
2	イネ	今宮	4bTr	Ⅳ
3	ヨシ属	今宮	4bTr	X
4	タケ亜科	今宮	4aTr	I
5	タケ亜科	今宮	4bTr	X
6	ウシクサ族	今宮	4bTr	X
7	イネ	伊勢田	TP1	Ⅱ
8	イネ	伊勢田	TP1	Ⅲ
9	イネ	伊勢田	TP2	Ⅱ
10	ヨシ属	伊勢田	TP1	Ⅵ
11	タケ亜科	伊勢田	TP1	Ⅱ
12	ウシクサ族	伊勢田	TP2	Ⅲ



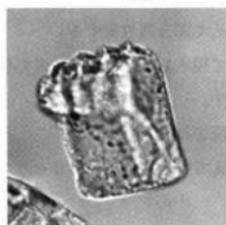
1 イネ



2 イネ



3 ヨシ属



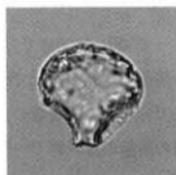
4 タケ亜科



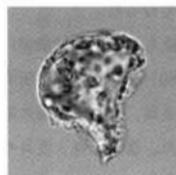
5 タケ亜科



6 ウシクサ族



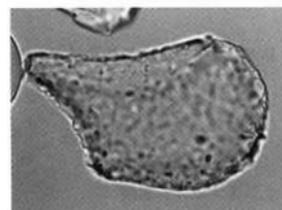
7 イネ



8 イネ



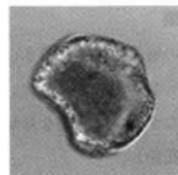
9 イネ



10 ヨシ属



11 タケ亜科



12 ウシクサ族

0 50 100 μm

II. 今宮・伊勢田遺跡の花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、湖沼や湿原の堆積物を対象として広域な森林変遷を主とする時間軸の長い植生や環境の変遷を復原する手法として自然科学で用いられてきた。考古遺跡では、埋没土壌や遺構内堆積物など堆積域や時間軸の限定された堆積物を対象とすることによって、狭い範囲の植生や短い時間における農耕を含む植生や環境の変遷を復原することも可能である。なお、乾燥的な環境では花粉などの植物遺体が分解されて失われていることも多く、これも環境指標となる。

2. 試料と方法

試料は伊勢田遺跡のSD1の覆土、SD2の覆土、今宮遺跡の1Tr TP2のⅡ層、Ⅲ層、V層、VI層、4bTrのⅠ層、Ⅳ層、V層、Ⅷ層、Ⅸ層、X層、XI層、Ⅻ-1層、Ⅻ-2層の計15点である。

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈殿法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分間放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9:1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、クリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm・2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、鳥倉（1973）および中村（1980）を基本とし、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。

3. 結果

分析の結果、樹木花粉5、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉5、シダ植物孢子1形態の計12分類群が同定された。結果は花粉遺体一覧を表1に示した。なお花粉数が少なく組成図は作成できなかった。主要な分類群は写真に示した。以下に同定された分類群を示す。

〔樹木花粉〕

ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科

[草本花粉]

イネ科、アブラナ科、セリ科、タンポポ亜科、ヨモギ属

[シダ植物胞子]

単条溝胞子

1) SD1・SD2 覆土

各溝とも花粉が少なく、出現傾向は不明である。

2) 1TrTP2

II層・III層・V層・VI層とも花粉が少なく、出現傾向はつかめない。

3) 4bTr

I層、IV層、V層、VIII層、IX層、X層、XI層、XII-1層、XII-2層の各試料とも花粉が極めて少ないが、V層・XII-2層からヨモギ属が少量出現している。

4. 花粉分析からみた植生・環境

SD1・SD2・1TrTP2・4bTrの試料とも、花粉が極めて少なく、植生の復元は困難である。堆積物に花粉などの植物遺体が少ない原因としては、堆積速度が速かったために密度が低い、水流などにより淘汰され堆積した、土壌分析の行われるやや乾燥した堆積環境であった等が推定される。4bTrのV層・XII-2層からはヨモギ属の花粉が少量出現しており、ヨモギ属が乾燥地を好むことから、4bTrにおいては、やや乾燥した堆積状況であった可能性がある。

参考文献

中村 純 (1973) 花粉分析, 古今書院。

金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復元, 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店。

日本第四紀学会編 (1993) 第四紀資料分析法, 東京大学出版会。

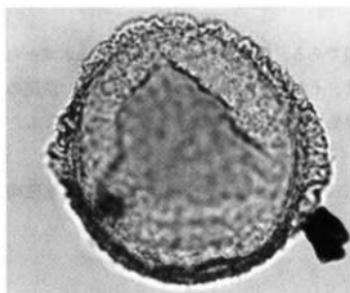
島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態, 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集。

中村 純 (1980) 日本産花粉の標徴, 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第13集。

表1 今宮・伊勢田遺跡における花粉分析結果

学名	分類群	和名	4bTr															
			SD1 フタ土	SD2 フタ土	1Tr	TP2	I層	II層	III層	V層	VI層	IV層	V層	VI層	IX層	X層	XI層	XI-2層
Arboreal pollen		樹木花粉																
<i>Tsuga</i>		ツガ属																
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>		マツ属様構造松亜属	2	1							1							
<i>Cryptomeria japonica</i>		スギ		1														
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>		コナラ属コナラ亜属		1														
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>		コナラ属了カガン亜属	2	1														1
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉																
Moraceae-Urticaceae		クワ科-イラクサ科	1															
Nonarboreal pollen		草本花粉																
Gramineae		イネ科	3	2	1													1
Cruciferae		アブラナ科	1	1														
Umbelliferae		セリ科		1														
Lactucoideae		タンポポ科		1							1							
<i>Artemisia</i>		ヨモギ属	1	1	1									4			1	3
Fern spore		シダ植物胞子																
Monolete type spore		単条溝胞子		1							1	1	1					
Arboreal pollen		樹木花粉	0	2	5	0	1	1	1	1	0	2	1	0	0	0	0	1
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Nonarboreal pollen		草本花粉	1	5	6	1	0	0	1	0	4	0	0	0	0	1	4	
Total pollen		花粉総数	1	8	11	1	1	1	2	0	6	1	0	0	1	5		
Unknown pollen		未同定花粉	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Fern spore		シダ植物胞子	0	0	1	0	0	1	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0

今宮・伊勢田遺跡の花粉・孢子遺体



1 ツガ属



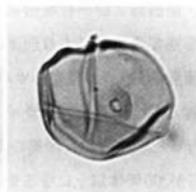
2 マツ属複維管束型属



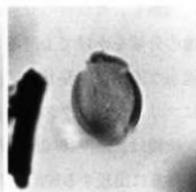
3 コナラ属コナラ亜属



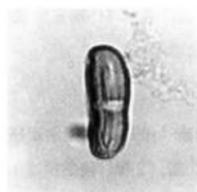
4 コナラ属アカガシ亜属



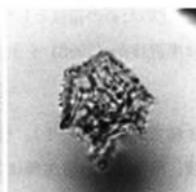
5 イネ科



6 アブラナ科



7 セリ科



8 タンポポ科



9 ヨモギ属

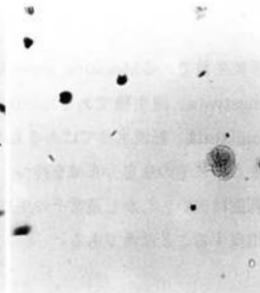


10 シダ植物単条溝胞子

45µm



11 SD2



12 1Tr-TP2 II層



13 4bTr X層

160µm

Ⅲ. 今宮・伊勢田遺跡の珪藻分析

1. はじめに

珪藻は、珪酸体の殻を持つ顕微鏡サイズの単細胞藻類である。珪藻類全体の分布域は淡水域から海水域にわたるが、個々の種は環境要因への適応を見せ、それぞれ特定の生息場所を持つ。珪藻の化石は、水成堆積物中からふつうに多産し、また化石群集の種の組成は堆積環境をよく反映するため、古環境の復元の指標としてよく利用されてきた。

ここでは、山梨県一宮町、伊勢田遺跡内のSD1、SD2から得られた資料2点からその堆積環境の推定を行った。

2. 分析方法

土壌から珪藻分析用に採取した試料を風乾後、秤量する。この試料に約15%の過酸化水素水を加え加熱し、有機物の分解・漂白および一般堆積物と珪藻殻の分離を行う。反応終了後蒸留水を注ぎ、遠心分離をかけて上澄みを捨てることにより珪藻殻の濃集を行う。この操作を数回繰り返した後、適当な濃度に調整した珪藻懸濁液0.5ml程度をカバーガラスに滴下し乾燥させる。乾燥した試料上にプリユラックス等の封入剤を滴下し、スライドガラスに張り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油没1000倍で行った。珪藻化石群集の組成を把握するために、メカニカルステージを用いて任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数した。なお珪藻殻が半分以上破損したものについては計数・同定は行っていない。珪藻の同定については、K. Krammer & Lange-bertalot (1985-1991)などを参考にした。また、古環境の復元のための指標としては、小杉(1988b)、安藤(1990)の環境指標種群を、堆積環境の推定には黒沢ほか(1993)を主に参考にした。

3. 結果

産出した珪藻化石は、淡水生種のみで、6属、8種であった(表1)。安藤(1990)の淡水産珪藻の環境指標種群に基づく、湖沼浮遊生種は1種、沼沢湿地付着生種は2属、2種、陸生種は1種、広域種は3属、4種の産出が認められた。さらに、この2地点の堆積環境を推定するためには2分帯化し、図示した(図1)。I帯はSD2に、II帯はSD1に相当する。以下に分帯ごとの特徴を記載する。

[I帯]

SD2に相当するI帯は、湖沼浮遊生種である*Melosira granulata*、沼沢湿地付着生種である*Pinnularia gibba*、*Tabellaria fenestrata*、陸生種である*Hantzschia amphioxys*の産出によって特徴づけられる。*Melosira granulata*は、好流水性ではあるものの*Melosira italica*に比べ、水深の浅いところや流水速度の緩いところにその生息分布域を持つ。また*Hantzschia amphioxys*は陸生種ではあるが、その生息分布範囲は広い。しかし通常その生息個体数が少ないため出現率は低く、この地点のようにまとまって出現することは希である。

[II帯]

SD1にあたるII帯は、広域種の、特に*Melosira italica*の多産や陸生種である*Hantzschia amphioxys*、沼沢湿地付着生種の*Pinnularia gibba*の産出に特徴がみられる。*Melosira italica*は

淡水広域種として認定されているが、一般的には好流水性であり、水深のある水域をその生息分布域としている。

4. 珪藻化石群集から推定される堆積環境について

産出した珪藻化石群集から推定される堆積群集を地点ごとに以下にまとめる。

[I帯]

産出される化石群集から淡水環境が展開していたものと推定される。湖沼浮遊生種である *Melosira granulata* と沼沢湿地付着生種である *Pinnularia gibba*、*Tabellaria fenestrata* の産出の組合せは、この地点が当時湖沼であったことを示唆している。また陸生種である *Hantzschia amphioxys* の産出は、この水域が浅かったこと、大型植生が近くに存在したことを推定させる。さらに産出する化石殻の保存度がかなり悪く、また産出個体数が少ないことから、やはり大型植物によるかなり大きな集落が存在していたことが考えられる。

[II帯]

産出した珪藻化石群集全体から、当時この地域に淡水域が広がっていたとわかる。さらに沼沢湿地付着生種の *Pinnularia gibba* が産出していることから湖沼の存在も考えられる。しかし一方で *Melosira italica*、*Navicula capitata*、*N. viridula* といった広域種が多く産出することから流水のそれほどきつくない水路が存在していたと考えの方が適している。前出の *Pinnularia gibba* は、その水路内に存在した植生に付着していたと考えられる。またこの根拠として、産出する化石の保存度自体はよいものの、産出する個体数そのものが少ないこと、珪藻化石にしてはその産出種が非常に少ないことがあげられる。このことはこの地点における珪藻の遺骸殻の流出を示唆しており、そこから水路の存在が浮かび上がってくる。そして陸生種である *Hantzschia amphioxys* の存在は、この水路の流水がきつくないこと、また大型植生が近くに存在していた可能性、この試料採取地点の水深は浅かったであろうことを示唆している。

5. おわりに

これら2地点のみでは正確な堆積環境は復元できない。また、その環境の変遷をたどることは不可能である。しかし、今後このようなデータを蓄積し、それを総合的に解釈することにより、当時の環境やその変遷する姿が読み取れるであろう。

参考文献

- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42-2, p. 73-109.
- 小杉正人 (1988 b) 珪藻の環境指標群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27(1), p. 1-20.
- 黒沢一男・村山泰輔・鈴木里江・小杉正人 (1993) 「国分谷の古環境の変遷」 松戸市立博物館, 63-90.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot (1986) Bacillariophyceae, Süsswasserflora von Mitteleuropa, 2(1), p. 1-876.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot (1986) Bacillariophyceae, Süsswasserflora von Mitteleuropa, 2(2), p. 1-596.

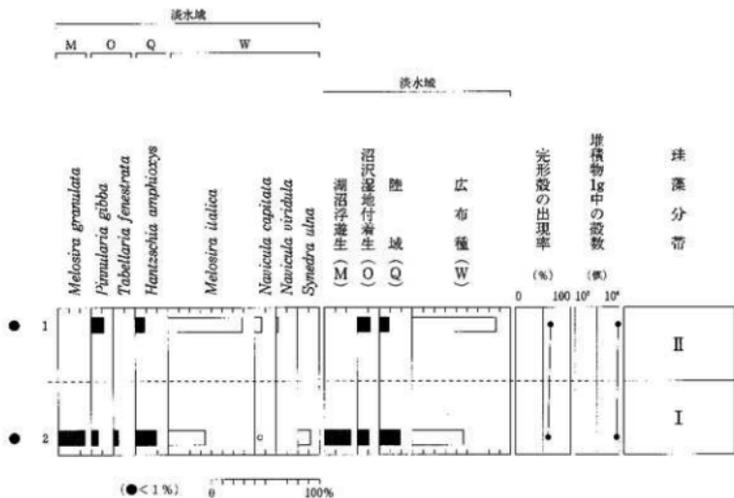
Krammer, K. and H. Lange-Bertalot (1986) Bacillariophyceae, Susswasserflora von Mitteleuropa, 2(3), p. 1-596.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot (1986) Bacillariophyceae, Susswasserflora von Mitteleuropa, 2(4), p. 1-596.

第1表 伊勢田遺跡における珪藻の産出表

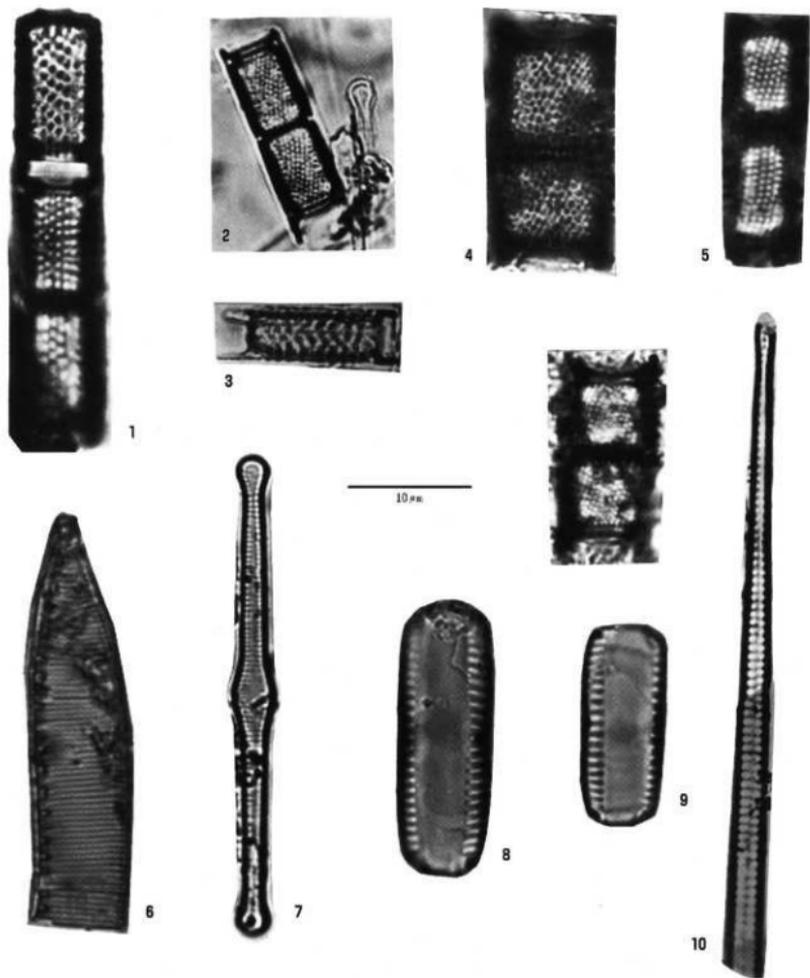
表中の各指標種は、小杉(1989)、安藤(1990)に基づく

分類群	種群	1	2
<i>Hantzschia amphioxys</i>	Q	17	38
<i>Melosira granulata</i>	M	—	48
<i>M. italica</i>	W	137	68
<i>Navicula capitata</i>	W	13	2
<i>N. viridula</i>	W	3	—
<i>Pinnularia gibba</i>	O	23	12
<i>Synedra ulna</i>	W	—	23
<i>Tabellaria fenestrata</i>	O	—	9
湖沼浮遊生 (M)		—	48
沼沢湿地付着生 (O)		23	21
陸域 (Q)		17	38
広布種 (W)		153	93
珪藻総数		193	200



第1図 伊勢田遺跡における珪藻のダイアグラム

表中の各指標種は、小杉(1989)、安藤(1990)に基づく



- 1-3. *Melosira granulata* (No2)
 4-6. *Melosira italica* (No1)
 7. *Hantzschia amphioxys* (No2)
 8. *Tabellaria fenestrata* (No2)
 9. *Pinnularia gibba* (No1)
 10. *Synedra ulna* (No2)

1. 資料と分析方法

資料は調査時に採取された動植物遺体、およびカマド焼土などの水洗篩別より検出された動植物遺体からなる。このうち、動物遺体については全資料を分析対象とし、同定不能な破片も含め、すべて計量をおこなった。植物遺体については多量に出土した桃核のみを分析対象とした。同定はいずれも現生標本との比較によりおこなった。桃核については長さ、幅、厚さの計測をおこなった。年代は住居跡が古墳時代後期、SX1(敷石遺構)が奈良~平安時代である。

2. 分析結果

(1) 植物遺体

B4グリッドのSX1(敷石遺構)より多量の桃核が出土した。出土地点は敷石中央部と周辺のピット2基の3箇所に集中している(第91図)。遺存状況は完存76点、半欠と破片がそれぞれ7点と完存が圧倒的に多い。太田(1986)は奈良県布留遺跡において破片が多かったことから、硬い桃核を割って中の種子(仁)を利用したと考えたが、本遺跡の場合は実のついた状態、もしくは桃核の状態で利用されたと考えられる。

桃核の大きさは長さ22~29mm(平均25.5)、幅17~24mm(平均20.9)であった。大きさの変異は南アルプス市大師東丹保遺跡から出土した弥生後期~鎌倉時代の桃核の大きさの変異(新津1997)に取り、県内の弥生中期~戦国時代遺跡の平均値とも顕著な差はない(新津1999)。

奈良県布留遺跡の古墳時代前期~奈良・平安時代の桃核の大きさと比較すると、長さ20mm以下、幅15mm以下の小形が含まれない点で奈良・平安時代の傾向に近い。ただ、本遺跡では長さ30mm以上の大形の資料も含まれず、ばらつきが小さいことが指摘できる。布留遺跡では古墳時代前期より栽培が行われていた可能性が指摘されているが(太田1986)、本遺跡のモモが栽培されたものであったかは、さらなるデータの蓄積により検討する必要がある。

本遺跡例は特殊な遺構から集中的に出土しており、祭祀的な意味合いを持っていた可能性が高い。今後食用、祭祀用の区別や野生種と栽培種を区別する際の指標となろう。

以上の他にB5グリッドにおいて被熱したクルミの破片1点が検出された。カマドのサンプル中からも種子類が20点ほど検出されているが、同定にいたらなかった。

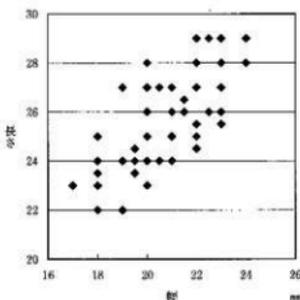


図 桃核計測結果

表 出土動物遺体一覧

出土地点など	種	部位	左右	位置	数	重さ(g)	焼け	備考
A4 グリッド 精査	ヤギ	上顎M2	右	実存	1	3.4		
S12 カマド	哺乳類	?		破片	8	0.2	+	
	カエル目	上腕骨	左	近位端	1	*	+	
	カエル目	腕尺骨	右	近位端	1	*	+	
	小動物	?	?	破片	51	0.8	+	
	シカ?	臼歯	?	破片	3	0.7		
	哺乳類	?	?	破片	1	0.8		
S14 カマド	カエル目	腕尺骨	左	近位端	1	*	+	
	哺乳類	?		破片	2	0.8		
	小動物	?		破片	13	0.1	-	
S16 カマド	小動物	?		破片	8	*	-	トリ・カエルなど?
S18 カマド	哺乳類	?	?	破片	6	1.5	+	大型獣
	哺乳類	?	?	破片	7	0.5	+	
	哺乳類	?	?	破片	30	4.0	+	大型獣
	哺乳類	?		破片	41	1.3	+	
	哺乳類	?		破片	30	2.3	+	
	哺乳類	?		破片	2	*	+	
SX1(敷石上-茂遺)	イノシシ	上顎M3		破片	1	2.0		未磨片
SX1(敷石下-表遺)	哺乳類	?		破片	4	0.2		
SX1(敷石上-石葺)	哺乳類	?		破片	3	*		
	哺乳類	?	?	破片	6	0.2		
SX1(敷石下-石葺)	イノシシ	中脛骨		実存	1	0.4	!	
	哺乳類	?		破片	2	0.1		

「小動物」=小型鳥類・カエルなど

* = 0.1g以下

(2) 動物遺体

大部分の骨は被熱しており、焼けたことにより残ったものである。ほとんどが同定不可能な獣骨片だったが、カエル類、イノシシ、ヤギ、シカ?が確認できた。このうち、ヤギは近世以降の暗渠からの出土である。古墳時代後期の住居跡のカマドからはカエル類とシカらしき臼歯片が検出された。カエル類は2軒の住居跡から出土しており、偶然混入したものではなく、食用とされた可能性もある。ただ、県内ではカエル類の出土例は北杜市清水端遺跡(縄文後期、金子1986)のヒキガエルが知られるのみである。今後分析例を増やしていく中で検討したい。イノシシ類は奈良・平安時代のSX1(敷石遺構)から検出されたが、2点のみの断片的な出土である。

3. おわりに

今回の調査ではカマドの焼土などを水洗選別にかけることで、比較的多くの動物遺体が検出された。同定に至った資料は少量であったが、古墳時代～古代の動物利用の一端をうかがうことができた。内陸部の食生活と環境を復元する上ではこうした地道な検出努力の積み重ねが重要である。末筆ながら検出作業に当たられ、分析の機会を与えていただいた野崎進氏、文献をご教示いただいた鈴木伸哉氏(早稲田大学)に感謝申し上げる次第である。

表 出土桃核一覧

No.	出土地点	遺存状況	数	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	備考	No.	出土地点	遺存状況	数	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	備考		
1	SX1	半分	1	-	20.0	-		48	SX1	完存	1	24.0	21.0	16.5			
2	SX1	半分	1	-	20.0	-		49	SX1	完存	1	27.0	23.0	18.0			
3	SX1	完存	1	25.0	20.0	16.0		50	SX1	完存	1	24.0	20.0	16.0			
4	SX1	完存	1	24.0	19.5	15.0		51	SX1	完存	1	26.5	21.5	16.0			
5	SX1	完存	1	29.0	23.0	18.0		52	SX1	完存	1	25.0	21.0	17.0			
6	SX1	完存	1	26.0	23.0	18.0		53	SX1	完存	1	26.0	21.0	16.0			
7	SX1	完存	1	23.0	17.0	14.0		54	SX1	完存	1	27.0	23.0	16.0			
8	SX1	破片	1	-	-	-		55	SX1	完存	1	23.5	19.5	15.5			
9	SX1	完存	1	24.0	21.0	17.0		56	SX1	完存	1	24.5	22.0	17.0			
10	SX1	完存	1	23.5	-	16.0		57	SX1	完存	1	25.0	22.0	18.0			
11	SX1	完存	1	-	-	-		58	SX1	破片	1	-	-	-			
12	SX1	破片	1	-	-	-		59	SX1	破片	1	-	-	-			
13	SX1	半分	1	-	-	-		60	SX1	完存	1	27.0	19.0	14.5			
14	SX1	完存	1	29.0	22.5	17.5		61	SX1	完存	1	24.0	20.5	17.0			
15	SX1	完存	1	27.0	-	17.0		62	SX1	完存	1	26.0	22.5	18.0			
16	SX1	完存	1	28.0	20.0	15.0		63	SX1	完存	1	26.5	23.0	17.0			
17	SX1	完存	1	25.0	22.0	18.0		64	SX1	完存	1	26.0	20.0	16.0			
18	SX1	完存	1	26.5	21.5	17.0		65	SX1	完存	1	25.0	22.0	17.5			
19	SX1	完存	1	25.0	18.0	13.0		66	SX1	完存	1	-	-	-			
20	SX1	半分	1	-	-	-		67	SX1	完存	1	29.0	23.0	15.0			
21	SX1	完存	1	27.0	20.5	16.0		68	SX1	完存	1	29.0	22.5	17.0			
22	SX1	完存	1	24.0	19.0	16.0		69	SX1	完存	1	22.0	18.0	24.5			
23	SX1	半分	1	-	-	-		70	SX1	完存	1	27.0	21.0	15.0			
24	SX1	完存	1	24.5	19.5	15.0		71	SX1	完存	1	26.0	23.0	18.0			
25	SX1	完存	1	26.0	21.0	17.0		72	SX1	完存	1	25.0	21.0	17.0			
26	SX1	完存	1	27.0	22.0	18.0		73	SX1	完存	1	26.0	21.0	16.0			
27	SX1	完存	1	24.0	19.0	15.0		74	SX1	完存	1	23.0	20.0	17.0			
28	SX1	完存	1	28.0	22.0	18.0		75	SX1	完存	1	24.0	18.0	13.0			
29	SX1	完存	1	29.0	21.0	18.5		76	SX1 (石室-敷石上)	完存	1	23.5	18.0	15.0			
30	SX1	破片	1	-	-	-		77			1	24.0	-	-			
31	SX1	完存	1	-	19.5	17.0		78			1	26.0	20.0	16.0			
32	SX1	完存	1	25.0	20.0	15.5		79			1	28.0	23.0	18.0			
33	SX1	完存	1	26.0	21.5	18.0		80									
34	SX1	完存	1	27.0	20.0	16.0		81									
35	SX1	完存	1	-	21.5	17.0		82									
36	SX1	完存	1	27.0	-	17.0		83									
37	SX1	破片	1	-	-	-		84			SX1 (渡道-敷石上)	完存	3	27.0	22.0	17.0	
38	SX1	完存	1	24.0	21.0	15.0		85					3	23.0	18.0	13.5	
39	SX1	完存	1	-	19.0	13.0		86	SX1 (渡道-敷石下)	完存	1	24.0	-	13.0			
40	SX1	完存	1	26.0	20.0	15.0		87			1	28.0	24.0	18.0			
41	SX1	半分	1	-	-	-		88			2	22.0	19.0	13.0			
42	SX1	完存	1	26.0	22.5	18.0		89			2	22.0	19.0	14.0			
43	SX1	完存	1	25.0	22.0	17.5		90			1	-	-	-			
44	SX1	完存	1	24.0	21.0	17.0			半分	1	-	-	-				
45	SX1	破片	1	-	-	-			平均			25.5	20.9	16.5			
46	SX1	完存	1	28.0	23.0	17.0			標準偏差			1.8	1.7	1.7			
47	SX1	完存	1	25.5	22.0	17.0											

参考文献

- 太田三喜 1986 「古代遺跡出土の桃核について」 考古学と自然科学 第19号
金子浩昌 1986 「清水端遺跡検出の動物骨」『清水端遺跡』 明野町教育委員会
新津 健 1997 「モモ、クルミについて」『大師東丹保遺跡Ⅰ区』 山梨県教育委員会
新津 健 1999 「遺跡から出土するモモ核について」『山梨考古学論集Ⅳ』 山梨県考古学協会

SUMMARY

Fuefuki City is located at the eastern part of Kofu Basin, which is located in the middle of Yamanashi Prefecture, which is in turn located approximately in the middle of Japan. Fuefuki City is a new administrative unit created in 2004 through the merger of five cities and a village, and the addition of another village in 2006. Fuefuki City has been the center of political power and culture of Kai-Koku (the Kai Realm) for about 1,000 years, since the Kai provincial administrative center (Kai-Kokufu), Kai provincial temple (Kai-Kokubun-Ji), and Kai provincial nunnery (Kai-Kokubu-NiJi) has been placed here in the Ancient Period (Kodai) of Japan, and until the Takoda Clan moved its manor to Kofu.

This volume reports on the excavations conducted in association with the construction of the bypass for the prefectural road Ichinokura-Yamanashi Route. The two archaeological sites in the report, Imamiya Site and Kurumai Site, are located in Ichinomiya-Cho on the eastern end of Fuefuki City, or northeast of the Kai Kokubun-Ji/Kokubu-NiJi provincial temple and nunnery. The two archaeological sites are located on the confluence of the Tadare River and Mitarashi River and on the alluvial fan of Kyoudo River, and consequently experienced multiple flooding events. The area has a high occurrence of archaeological sites as it is located at the wellspring of artesian waters from the alluvial fan area.

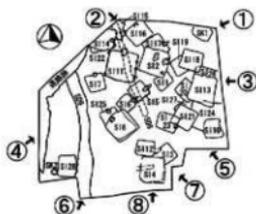
Imamiya Site is located on the right bank of Mitarashi River. An excavation covering 1,300m² was conducted between 1995 and 1996, resulting in the discovery of 28 dwelling remains dating from the end of the Kofun Period to Nara/Heian Periods, as well as rice paddy remains. The rice paddy remains, found under incised-valley fill, are noteworthy because they are oriented in a different direction from paddies laid out under the Jori system in the 9th century, and are thus examples of earlier cultivations. At the Kurumai Site, located on the left bank of Mitarashi River, an area of approximately 1,000m² was surveyed in two excavations in 1995 and 2005, resulting in the discovery of 18 dwellings from the Kofun to Nara/Heian Periods, wells, and ceremonial features.

In this excavation, the findings included a large amount of pottery fragments, a Jogan-Eiho coin, which is a type of Kochosen (or Kocho Junisen, a series of twelve kinds of copper coins minted by the central government between the Nara and Heian periods (708-987)), and ink-inscribed pottery fragments with the Chinese characters "michi/road/路", "kawaguchi/river mouth/川口", and "ishi/rock/石". Ceremonial artifacts, such as hand-coiled pottery, were not uncommon. The archaeological feature found in the 2nd (2005) Kurumai Site excavation, with paving stones resembling a stone chamber of a Kofun burial mound, is thought to be a ceremonial feature, as it is in other ways unlikely to be part of a funeral mound and 90 peach pits were discovered within. The presence of ceremonial artifacts and features cannot be unrelated to the two sites' overall location to the west of the Asama Shrine in Kai-Ichinomiya, and their specific positions on the banks of a river. The ink-inscribed pottery fragment with the Chinese character "michi/road/路" has been discovered elsewhere at Kurakake Site and Oohara Site, both located to the west of Kurumai Site. This suggests the presence of a road linking the sites located along the belt of wellsprings. As this area is located at the southern end of the Nakao Jori area, this road could have been incorporated into the roads of the Jori system (land boundary system) which was established later.

Fuefuki City is in the process of site conservation works of the Kokubun-Ji/Kokubu-NiJi provincial temple and nunnery. The findings from these two archaeological sites is hoped to throw light on the history of the area prior to the establishment of these two temples.

報 告 書 抄 録

ふりがな	いほみやいせき・くるまいせき							
書名	今宮遺跡・車居遺跡							
副書名	県道市之蔵山梨線バイパス道路建設工事に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	笛吹市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第5集							
編者名	楳月 学・野崎 進・粟月秀和・古環境研究所							
編集機関	笛吹市教育委員会							
所在地	〒406-8555 山梨県笛吹市八代町南917 TEL 055-265-4852							
発行年月日	西暦2007年3月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		国家座標		調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
伊勢田遺跡	山梨県笛吹市・宮町 北郡塚字伊勢田	(19201)	13	35度 38分 53秒	138度 41分 49秒	19950117～ 19950127	120	県道バイパス 建設工事
今宮遺跡	山梨県笛吹市一宮町 一ノ宮字今宮	(19201)	14	35度 38分 47秒	138度 41分 48秒	19941212～ 19950502 19950524～ 19950906	860 440	
車居遺跡	山梨県笛吹市一宮町 一ノ宮字車居	(19201)	123	35度 38分 41秒	138度 41分 48秒	19950905～ 19951227 20050517～ 20051006	540 430	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
今宮遺跡	集落跡 生産跡	古墳時代～平安 時代、近世	住居跡 溝 土坑 水田跡	27軒 3 3	弥生土器、土師器、 須恵器、鉄製品、 石製品	墨書土器「石」出土		
車居遺跡	集落跡	古墳時代～中世、 近世	住居跡 竪穴状遺構 溝 土坑 井戸跡 敷石遺構	18軒 1 10 3 1 1	縄文・弥生土器、 土師器、須恵器、 鉄製品、青銅製品、 石製品、動植物遺 体	貞観水竇1点、桃核90点 出土 崇善土器「川口、路、南、 高」出土 水迎の祭祀遺構か？		



調査区近景① 北東から



調査区近景② 北西から



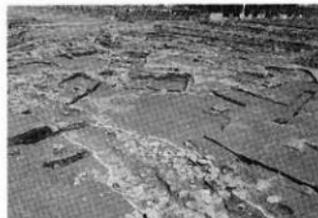
調査区近景③ 東から



調査区近景④ 南西から



調査区近景⑤ 南東から



調査区近景⑥ 南から



調査区近景⑦ 南東から



調査区近景⑧ 南から



調査前状況



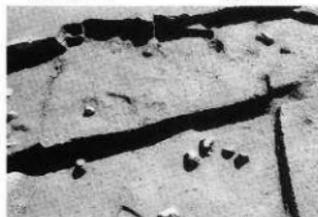
SI1 南西から



SI1 カマド 南西から



SI2 西から



SI2 西から



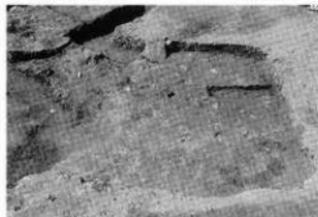
SI2 炉 西から



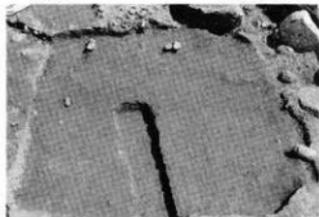
SI2 カマド 西から



SI3 南東から



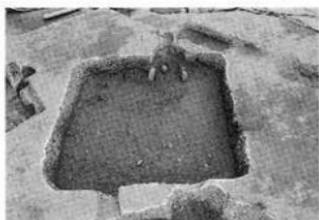
SI3 南東から



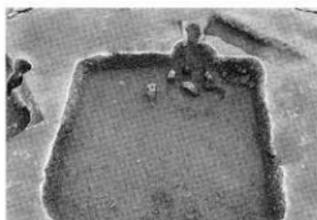
SI4 西から



SI4 カマド 西から



SI5 南西から



SI5 南西から



SI5 南西から



SI5 完掘状況 南西から



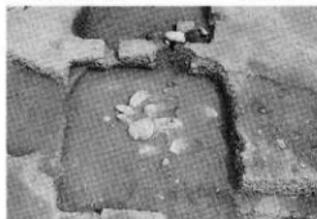
SI5 カマド 遺物出土状況 南西から



SI5 カマド 西から



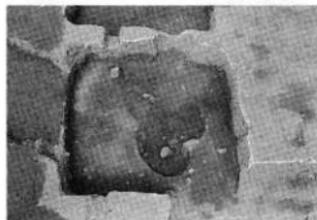
SI5 カマド 南西から



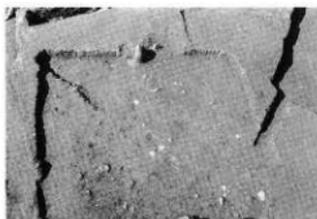
SI6 南西から



SI6 カマド 南西から



SI6 完掘状況 南西から



SI7 南から



SI7 カマド 南から



SI8 南東から



SI8 南西から



SI8 カマド 北東から



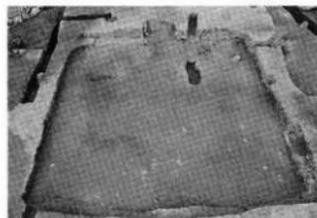
SI8 カマド 南東から



SI10 西から



SI10 南から



SI11 南から



SI11 南から



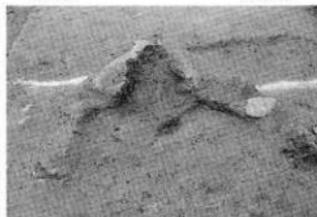
SI12 西から



SI12 北から



SI13 南から



SI13 カマド 南から



SI14 西から



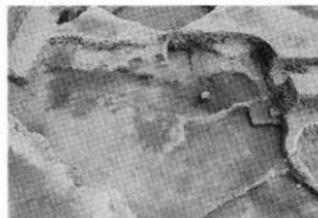
SI14 カマド 西から



SI15 西から



SI15 カマド 西から



SI15 西から



SI15 内SK 西から



SI17 南東から



SI17カマド確認状況 南東から



SI17 南東から



SI17 南東から



SI17 南西から



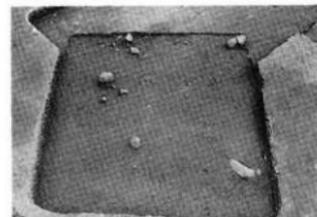
SI17 南西から



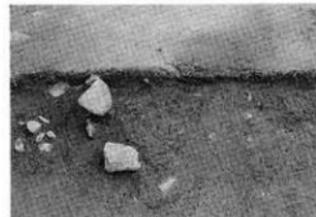
SI18 西から



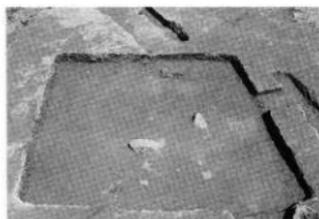
SI18完掘状況 西から



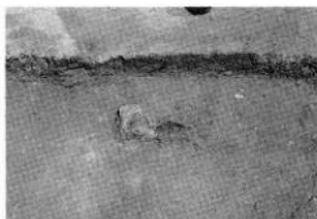
SI19 南から



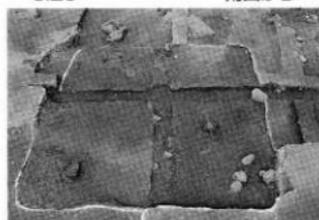
SI19カマド 南から



SI20 南西から



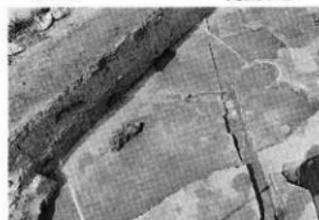
SI20 カマド 南西から



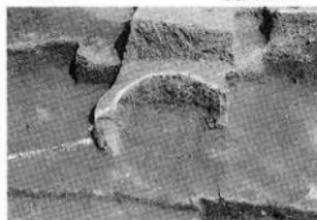
SI21 南西から



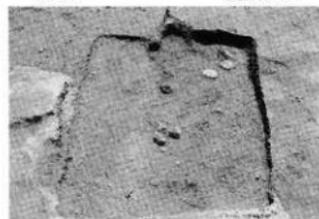
SI21 南西から



SI22 南西から



SI22 カマド 西から



SI23 西から



SI23 西から



SI24 南から



SI24 完掘状況 南から



SI25 北東から



SI25 完掘状況 北東から



SI25 カマド 北東から



SI13、SI26 重複状況 南から



SI26 南から



SI27 南東から



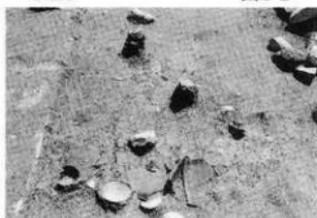
SI28 西から



SI28 西から



SI28 西から



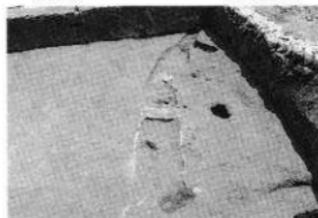
SI28 遺物出土状況 西から



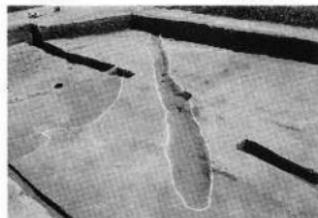
SI29 南東から



SI29 南東から



SD1 西から



SD2 南西から



SD3 南から



SD4 南から



SD8 南東から



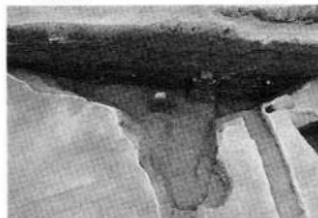
SD9 南から



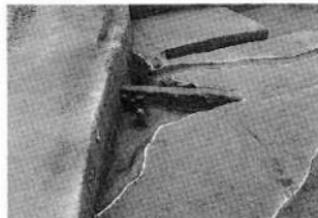
SD10 北から



SD10 東から



SD11 北から



SD11 東から



SD12 北西から



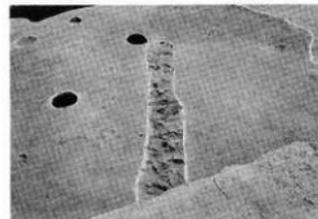
SD12 北東から



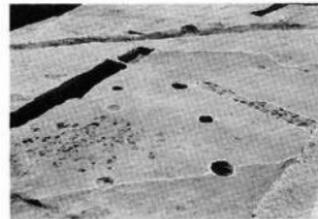
SD13 北西から



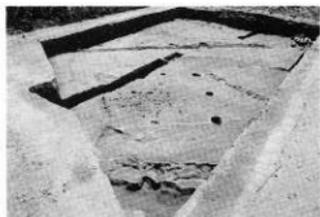
SD13 北東から



SD14 北西から



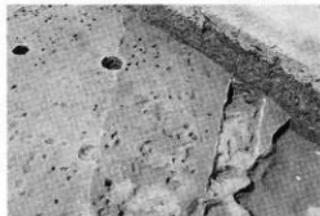
Pit群 北西から



調査区近景 北西から



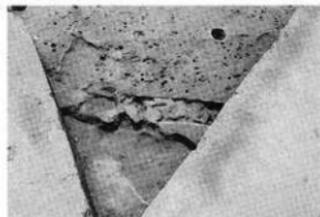
水田跡 南西から



水田跡 北東から



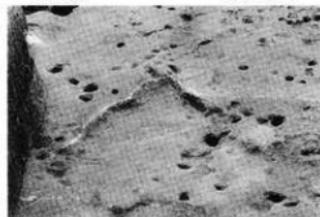
水田跡 北東から



水田跡 北西から



水田跡 南西から



水田跡 南から



道路跡 南西から



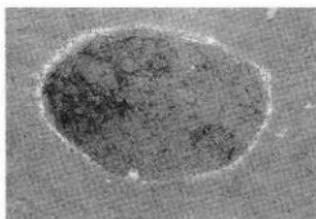
道路跡 南から



道路跡 北から



SK1 南東から



SK2 南東から



調査区近景 北西から



調査区近景 南東から



集石遺構 東から



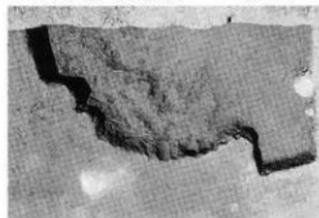
集石遺構 礫除去後 東から



集石遺構 確認状況 南から



集石遺構 集石確認状況 北から



集石遺構 完掘状況 東から



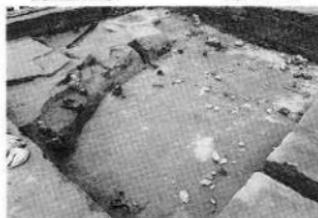
集石遺構 完掘状況 東から



調査区近景 南西から



埋没谷 南東から



埋没谷 南西から



埋没谷 南から



埋没谷 東から



埋没谷 東から



試掘調査状況 南から



試掘調査状況 南西から



試掘調査状況 南西から



試掘調査状況 南西から

PL14 車居遺跡(1次)



調査区近景① 東北から



調査区近景② 南東から



調査区近景③ 南東から



調査区近景④ 南西から



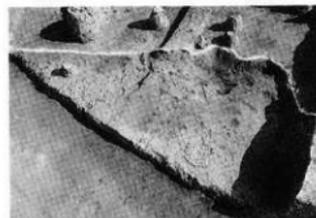
調査区近景⑤ 北から



S11 南から



S11 カマド 南から



S12 西から



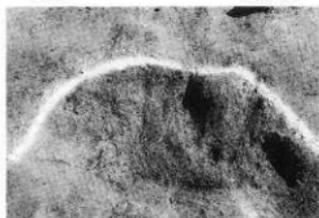
S12 カマド 西から



SI3 西から



SI3 完掘 西から



SI3 カマド 西から



SI4 西から



SI4 南から



SI4 カマド 南から



SI5 西から



SI5 西から



SI6 南から



SI6 カマド 南から



SI7 南から



SI7 南から



SI7 カマド 南から



SI8 東から



SI8 東から



SI8 カマド 北から



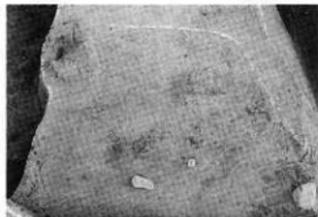
SI9 南から



SI9 西から



SI10 西から



SI10 西から



竪穴状遺構 西から



竪穴状遺構 北から



SD1 東から



SD1 南西から



SD1 西から



1・2号炉 西から



試掘調査 1Tr (SD1) 西から



試掘調査 2Tr (溝状遺構) 南から



試掘調査 3Tr (集石遺構) 東から



調査区西側 北から



調査区東側 北から



SI1~6 南から



SI1 南から



SI2 南西から



SI2 カマド 南西から



SI2 カマド(右) 南西から



SI2 カマド遺物(左) 南西から



SI2 カマド(右) 南西から



SI2 カマド 南西から



SI4 南東から



SI4 カマド 南東から



SI5 南から



SI5 西から



住居跡重複部近景 南西から



SI6 南西から



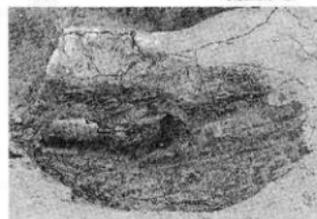
SI7 南東から



SI7 南西から



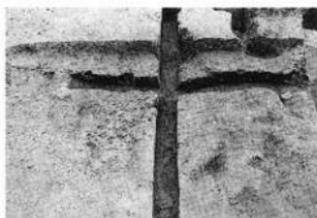
SI7 北から



SI7 北西から



SI8 西から



SI8 カマド 西から



SD1 南から



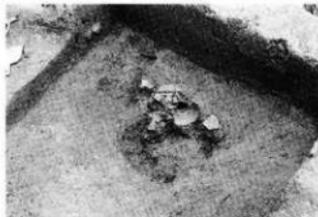
近景 南から



SD3 南西から



SD3 東北から



SD3 北西から



SD3 北から



近景 北東から



近景 南東から



SD8・9, S18 南東から



SD8・9, S18 北から



SK1 西から



SK1 西から



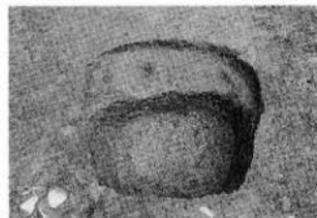
SK1 西から



SK2 南から



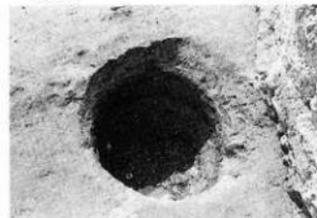
SK2 北西から



SK2 南から



SE1, SK3 北から



SE1 北から



SX1 北西から



SX1 掘り型 北西から



SX1 北西から



SX1 掘り型 北西から



SX1 南東から



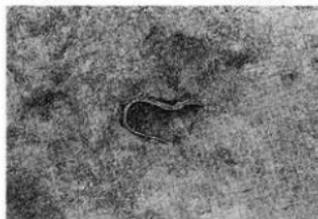
SX1 南東から



SX1 北東から



SX1 北東から



SX1 青銅製品



近景 北東から



SX1 南東から



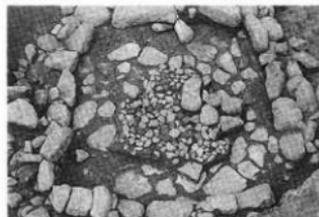
SX1 北から



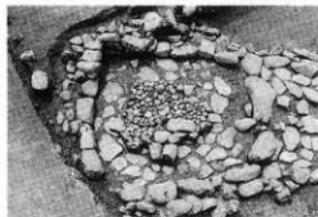
SX1 南東から



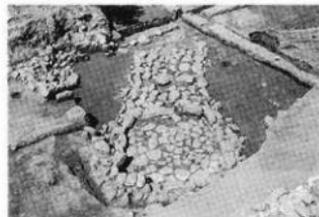
SX1 北から



SX1 南東から



SX1 北東から



SX1 南東から



SX1 北から



SX1 掘り型 南東から



SX1 掘り型 北から

笛吹市文化財調査報告書 第5集

今宮遺跡・車居遺跡

発行日 2007年3月30日

編集・発行 笛吹市教育委員会

印刷 (有)ナカガワ
山梨県笛吹市御坂町成田2811

The Report of
Archaeological Research of IMAMIYA and KURUMAI Sites

Archaeological Rescue Survey prior to the Bypass Construction of the Pref. Road,
Ichinokura-Yamanashi Route

March, 2007

Construction Department, Yamanashi Prefectural
Development Office of Kyoto Area
Fuefuki City Board of Education